

日本語・日本学研究 vol.4 (2014)

論文

《公募論文》

日本語のテクレルと中国語の「让你」
——説明文における無情物が主語の場合を中心に——

孫斐

現代の茶席の会話におけるポライトネス研究
——ディスコース・ポライトネス理論による形式的・
非形式的な言語行動の分析——

ツオイ・エカテリーナ

エジプト人日本語学習者の聞き取りの問題点
——母音前の撥音を中心に——

Hanan Rafik Mohamed

中国の大学日本語専攻教育における言語教育観と
その教育の再考
——日本語教師へのインタビューから——

葛茜

事理一致の政事
——『民間省要』の思想史的研究——

篠原将成

〈研究ノート〉

現代日本語における対応する動詞形のないV1+V2型
複合名詞——辞書に基づくリスト化——

鈴木智美

〈研究ノート〉

日本語教育の方法論を応用した初級沖縄語教科書について

花園悟

〈研究ノート〉

大藤信郎がアニメーションの海外への初期発信に
果たした役割
——1950,60年代の海外映画祭およびアニメーション
機関との書簡分析から——

臼井直也

《寄稿論文》

「国内外の高等教育機関における日本語教育事情調査」
データベース中間報告Ⅱ

①日本研究に関連した海外の大学院教育

谷口龍子・望月圭子

②韓国における日本関連大学院の現況及び展望

尹鎬淑

③イギリスにおける大学院教育の中の日本研究／日本語
教育——ロンドン大学SOASを中心に——

田中和美

ウクライナの高等教育機関における日本語教育・日本語
教員養成課程のコースデザインの改善への提案
——タラス・シェフチェンコ記念キエフ国立大学の場合——

ASADCHIH Oksana

e-Japanologyにおける情報発信プラットフォームの
試み

辻澤隆彦

〈2013年夏季セミナー院生発表会要旨〉

執筆者一覧

国際編集顧問一覧

編集後記

東京外国語大学国際日本研究センター『日本語・日本学研究』要項および編集・応募規程

発行の目的: 国際日本研究センターにおける研究や研究活動と関連を有する研究成果を公表することを通じて、日本研究の発展に寄与することを目的とする。

発行回数並びに発行時期: 年1回、1月(2010年度より開始)

編集規程:

- ・国際日本研究センターは『日本語・日本学研究』の発行のために編集委員会を置く。編集委員会はセンター長、副センター長、編集幹事および各部門から選出された教員により構成される。
- ・投稿論文について 『日本語・日本学研究』は、本センターの研究活動に関連した日本研究の諸論考を受け入れる。(本センターの研究活動については、本センターのホームページを参照のこと)
- ・査読 投稿された研究論文については、編集委員会の責任において査読者を選定し、査読審査をおこなう。査読は、委員会が依頼した2名の査読者が査読要領にもとづき審査し、採否の決定をする。その際、編集委員会は外部の査読者を依頼することができる。
- ・編集委員会は、東京外国語大学教員ならびにセンターの研究活動を積極的に参画した者、および必要に応じて外部の者に寄稿を求めることができる。
- ・その他、編集上の細則については編集委員会が適宜これを定める。

応募規程:

- ・日本の文化・社会・歴史並びに日本語・日本語教育に関する研

究論文(20ページ程度、400字×60枚)、海外の研究動向・研究潮流の紹介(20ページ程度)、研究ノート(10ページ程度)、書評(1ページ)

- ・原稿の書式 寄稿・投稿論文は日英いずれかの言語とする。日本語論文には、英語の概要(300語程度)、英語論文には日本語の概要(800字程度)をつける。
- ・投稿エントリーとエントリー締め切り: 論文の投稿を希望する場合は、指定の期日までに、下記編集委員会アドレスにEメールで投稿予定の旨を連絡すること。メール本文には、氏名・論文の題名(仮題でもよい)・所属機関名(該当者のみ)、および連絡先(住所・電話番号・メールアドレス)を明記すること。また、メールのSubject(件名)には「『日本語・日本学研究』投稿希望」と記入すること。

公開、複製、公衆送信に関する権利: 掲載された論文等の公開、複製、公衆送信の権利は、本センターに帰属する。本誌に発表されたものを転載する場合は、その旨を編集委員会に連絡して承認を得るとともに、当該論文等の初出を明示すること。

【連絡先】 東京外国語大学国際日本研究センター
『日本語・日本研究』編集委員会
〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1
電話 / FAX : 042-330-5794
E-mail : icjs-editorial@tufs.ac.jp
URL : <http://www.tufs.ac.jp/common/icjs/>

Call for papers and the information The Journal of the International Center for Japanese Studies, *Journal for Japanese Studies*

Editorial Policy and Guidelines of International Japanese Studies

Purpose :

To contribute to the development of Japanese Studies through publishing efforts and results pertaining to the research activities conducted at the International Center for Japanese Studies.

Publication Period and Frequency : Starting from the fiscal year of 2010, published annually.

Editorial Policies :

- ・Editorial Committee: For the publication of International Japanese Studies, the International Center for Japanese Studies will establish an editorial committee. The committee will be composed by the director of the Center, the associate director, a chief editor, and a staff member each from five divisions of the Center.
- ・Articles: The articles to be submitted for the Journal are selected considering their relations to the Japanese studies conducted by our center (please refer to the official website of the Center as below for details on our research areas and activities.)
- ・Reference: Two referees appointed by the editorial committee will review and select the submitted articles based on the selection guidelines. The editorial committee is permitted to request experts for referees from outside of Tokyo University of Foreign Studies (TUFS.) The editorial committee may request submission of articles from faculty members at TUFS, or other individuals who have actively contributed to the Center's research activities. The editorial committee will add or modify any other details as needed.

Submission Requirements:

Topics: Research article on Japanese culture, society, history, language, and language education (double space, approx. 20 pages,) international research trends (approx. 20 pages,) research report (approx. 10 pages,) book review (1 page.)
Format: The articles may be written in Japanese or English. For articles in Japanese, attach a summary in English (approx. 300 words,) and for articles in English, attach a summary in Japanese (approx. 800 letters.)

Policy Acknowledgement: All rights relating to the publication, reproduction, and public transmission of the articles published on the journal shall belong to the International Center for Japanese Studies. Any contents shall not be reproduced without showing the credit, first appearance of the article, nor the express written permission given by the editorial committee.

【For further information, please contact】

International Japan Studies Editorial Committee, International Center for Japanese Studies, Tokyo University of Foreign Studies

【Address】 3-11-1, Asahi-cho Fuchu-shi, Tokyo 183-8534 Japan
Telephone and Fax: +81 (0) 42-330-5794
E-mail : icjs-editorial@tufs.ac.jp
URL : <http://www.tufs.ac.jp/common/icjs/>

目 次

《公募論文》

日本語のテクレルと中国語の「让你」

——説明文における無情物が主語の場合を中心に——…………… 孫 斐 … 1

現代の茶席の会話におけるポライトネス研究

——ディスコース・ポライトネス理論による形式的・非形式的な言語行動の分析——
…………… ツオイ・エカテリーナ… 17

エジプト人日本語学習者の聞き取りの問題点

——母音前の撥音を中心に——…………… Hanan Rafik Mohamed… 39

中国の大学日本語専攻教育における言語教育観とその教育の再考

——日本語教師へのインタビューから——…………… 葛 茜… 53

事理一致の政事 ——『民間省要』の思想史的研究——…………… 篠原将成… 71

〈研究ノート〉現代日本語における対応する動詞形のない V1 + V2 型複合名詞

——辞書に基づくリスト化——…………… 鈴木智美… 95

〈研究ノート〉日本語教育の方法論を応用した初級沖縄語教科書について

——試案と課題——…………… 花蘭 悟… 111

〈研究ノート〉大藤信郎のアニメーションの海外への初期発信に果たした役割

——1950,60年代の海外映画祭およびアニメーション機関との書簡分析から——
…………… 白井直也… 131

《寄稿論文》

「国内外の高等教育機関における日本語教育事情調査」データベース中間報告Ⅱ

①日本研究に関連した海外の大学院教育…………… 谷口龍子・望月圭子… 147

②韓国における日本関連大学院の現況及び展望…………… 尹 鎬淑… 163

③イギリスにおける大学院教育の中の日本研究／日本語教育

——ロンドン大学 SOAS を中心に——…………… 田中和美… 181

ウクライナの高等教育機関における日本語教育・日本語教員養成課程のコースデザインの

改善への提案——タラス・シェフチェンコ記念キエフ国立大学の場合

…………… ASADCHIH Oksana… 189

e-Japanology における情報発信プラットフォームの試み…………… 辻澤隆彦… 199

〈2013年夏季セミナー院生発表会要旨〉…………… 211

執筆者一覧

国際編集顧問一覧

編集後記

美容ページにおけるテクレル文の特性

—中国語の「让你」との比較を兼ねて

孫斐(北京大学)

【キーワード】 美容ページ 間テキスト性 テクレル文 前景化

はじめに

益岡(2012)ではテクレルが授受表現で使用頻度が最も高いと指摘している。筆者も授受表現の使用率について調査したが、同じ傾向が見られた。一方、多くの論文の中で中国人学習者にとって、クレル系の習得が授受表現の中ではより難しいと結論づけられている¹。その中でも、無情物が主語のテクレル文は周辺的な使い方だが、説明文の中によく見かける。本論文は間テキスト性と前景化の概念を利用し、中国語の表現との比較を兼ねて、美容ページにおける無情物を主語とするテクレル文の特性を明らかにしたい。

1. 先行研究と問題点

テクレル文は動詞の主語に有情物と無情物の両方が立つ。無情物が主語の場合はより周辺的な用法だと考えられる。

原田(2005)は無情物が主語のテクレルについて次のように論じている。

「バラは手を掛けるだけ美しく咲いてくれる。」「庭の木々が疲れた心を癒してくれた。」

とは言えるが、「バラは手を掛けるだけ美しく咲いてあげる。」「庭の木々に疲れた心を癒してもらった。」とは言えない。

その原因は、話者が有生・無生のあらゆるものから恩恵を受ける対象であることを認知することはテクレルだけの特徴だと指摘している。

王・佟(2011)は「何ヶ月も雨が降ってなくて、困っている時、雨が降ってくれた。」のように、無情物が動詞の主語となる場合は、周辺的な用法で習得しにくいと指摘している²。

段(2012)は小説の対訳への考察に基づき、「中国語には話し手が、無情物または話し手の周りで起こる出来事について、プラスに捉え、表現する習慣はない」ため、無情物が主語の構文は「先行動詞だけを訳す場合が多い」と指摘している。

1 中崎(2001) 稲熊(2004) 楊、陳(2005) 井上(2005) 窪(2007) 菅生(2008)

2 さらに、このような文は「好几个月没下雨了，大家正发愁的时候，雨为我们下了。」とは翻訳できないと説明している。

王(2010)は「プラス評価のテクレル」³の主語には有情物(人間)と無情物がある。そして、「中国語にはプラス評価のテクレルに対応する文法的な表現法はない」と指摘している。

その中で、興味深いのは王(2010)では無情物が主語の例文として20例挙げられていることである。そのうち、9例はエッセイ、7例は説明文⁴、4例は小説の地の文から取られている。以下の例は王(2010)のものである。

(304) a 梅干が胃腸の働きを活発にし、しかも腸内の殺菌もしてくれるので、体の内側から綺麗になり、きっと肌のトラブルもおきません。(『梅干と梅料理200』主婦と生活社)

(304) d トマトの酸味はクエン酸やリンゴ酸、コハク酸などの有機酸によるものです。これらの有機酸は胃の調子をととのえて気分をすっきりさせ、また乳酸などの疲労物質を除去してくれます。(白鳥早奈英『食べ合わせ新百科』ブックマン社)

例(304)a、dは言葉遣いと出所から説明調のテキストだと判断できる。そして、王燕(2010)は「プラス評価のテクレルはあくまでも表現主体の事象に対するプラス的な捉え方を表すもので」省略できる。すなわち、例(304)a、dは「しかも腸内の殺菌もするので」「また乳酸などの疲労物質を除去します」に変えても非文ではないと指摘している。換言すれば、無情物が主題の説明文では客観的な述べ方が相応しいので、テクレルを使用する必要はないと推測できるだろう。

守屋(2002)は、「てくれるをつけない方が文体上望ましい場合」にもテクレルが使われることもあると指摘している。しかし、この場合でテクレルが用いられる原因は具体的に説明していないようだ。

先行研究からは次のことがわかる。

- ①無情物が動詞の主語となるテクレルはテクレルのより周辺的な用法である。
- ②無情物が主語のテクレルと対応する中国語の表現がない。

残されている問題点としては以下の2点があげられる。

- ①説明文ではテクレルの使用が文法上必要とされていないが、実際ではよく使われている。その理由についてはいまだに十分な説明が行われていない。
- ②無情物が主語のテクレルと対応する中国語がないと言われるが、果たしてそうであろうか。またこの不对応について、認知上のメカニズムはまだ明らかにされていない。

筆者は女性誌の美容ページの考察に基づき、テクレル及び中国語との対応について論じていく。

3 「プラス評価のテクレルは、表現主体が事象そのものをプラスに捉えて、恩恵的に受け止めることを表すのに用いられるテクレルを「プラス評価なテクレル」と呼ぶ」王(2010) P 180

4 テレビ番組からの例もあるが、説明調なので筆者は説明文だと認定する。たとえば、中国黒酢に含まれるメラノイジンは血液をさらさらしてくれる。(フジテレビ<あるある大辞典>2002. 9.30放送)(2010) P199-203

2. 研究対象

テクレル文にはいろいろなパターンがあるが、本論文では説明文におけるテクレル文を研究の対象とし、論文を執筆するにあたって、美容ページからデータを収集する原因を説明する。

2.1 説明文におけるテクレル文のパターン

まず王(2010)に挙げられた例を考察してみる。説明文からとられた7例はすべて「無情物が/は+意志動詞⁵+テクレル」という形になっている⁶。

そして、このようなテクレル文が女性誌の美容ページにたくさん使われている。たとえば、

(1) YSL ファンディは、透けるようなナチュラル感を演出し、欠点を隠すのではなく、長所を生かしてくれる。(『VOGUE』2010.4)

したがって、本研究では「無情物が/は+意志動詞+テクレル」構文を研究対象にする。

2.2 美容ページと説明文

説明文とは「ある事柄について客観的、論理的に説明した文。国語教育では、文学作品以外の実用的文章をいう。」(スーパー大辞林3.0)と定義されている。この定義にしたがうと、化粧品の説明書は説明文のひとつと考えられるだろう。

美容ページは女性誌の重要なパートとして化粧品を主題とし新製品を紹介するページである。美容ページは研究対象にふさわしいかどうかを確認するため、Bakhtin(1986) Maynard(2008)ジャンルの定義に基づいて、「内容」「言語表現上のスタイル」「全体の構成」⁷において、説明書と美容ページと比較してみる。

まず、商品の説明書は大体①化粧品の名称②化粧品の成分③化粧品の効用④化粧品に関する情報(価格、使用方法、使用注意事項)という基本的な構成を持っている。

5 意志動詞と非意志動詞の定義は仁田(1991)に従い、「自己制御性を持った動詞が、いわゆる意志動詞であり、自己制御性を持たない動詞が、いわゆる無意志動詞である。自己制御性とは、動きの発生、過程、達成を、動きの主体が自分の意志でもって制御できるといった性質である。」と認定する。

6 エッセイから取られた例文は、9例の中に「無情物が/は+意志動詞+テクレル」構文はただ2例で、ほかの7例は「無情物が/は+無意志動詞+テクレル」構文になる。

7 「発話はある条件に基づき、ある目的をもってなされるのだが、それには、内容、言語表現上のスタイル、全体の構成という三つの側面があり、これらが必然的に関連しながらある全体を作り出す。」と説明されている。それぞれの領域には「比較的安定したタイプ」をジャンルと認定されている。

たとえば、つぎのような説明書の例⁸をみてみよう。

- (2) ニベア クリーミィボディミルク ボディ用乳液①
 すーっと伸びてすばやくなじむ。高保湿で、とろけるようにクリーミィなミルク。③
 ほのかにやさしい、フローラルの香り④
 シアバター（天然保湿成分）配合 一日続く、つややかでなめらかな肌へ。②③
 シアバター（天然保湿成分）配合：ベールのようにうるおいを閉じ込めて、うるおい効果が続きます。②③
 イチヨウ葉エキス（保湿成分）配合：肌内部（角層）をうるおいで満たし、カサついた肌をやわらかくほぐしてキメを整えます。②③
 うるおい持続成分（タウリン）配合：乾燥などの外的環境から肌を守って、肌本来のうるおいを保ちます。②③
 使い方：適量を首筋、腕、足などの全身にお使いください。④

つぎに、美容ページの例を見てみよう。

- (3) スノー ホワイトニング UV ルースパウダー SPF15 PA++①
 ベースメイクの仕上げに必須 シミへも働きかける有能お粉③
 フルイドの後はこのルースパウダーで仕上げ。④
 サテンのようなベールで包み込み、メイクを整えてくれる。③
 新成分TECとビタミンCの優れた美白成分を同時に配合②。
 紫外線、余分な皮脂など、特に夏の外的環境ストレスからも肌を保護してくれる。③
 (『VOCE』2008.9)

以上の例からわかるように、化粧品の説明書と美容ページは、主に商品の情報が紹介されている。④の部分はテキストによって異なっているが、美容ページと化粧品の説明書とは基本的な構成が同じであると言える。したがって、美容ページは説明文と類似的なジャンルだと認められるだろう。しかし、説明書にはテクレルが使われていないのに対して、美容ページにはテクレルが多用されている。したがって、本論文の問題点を解明するには、美容ページはふさわしいデータであると考えられる。

8 1. hpクリーム 2. 花王株式会社 curelクリームF 3. 近江兄弟社メンタームシアハンドクリームS 4. ニベア クリーミィボディミルク ボディ用乳液 5. ライオン株式会社 ホワイトアンドホワイトCa 6. Dove ユニリーバ・ジャパン株式会社センシティブマイルド 7. PREXCEED プレクシード JENNOS ヘアクリーム 8. NATURIE ハトムギ化粧水 スキンコンディショナー 9. 花王 メリット リンスのいないシャンプー 10. ココブルクレンジング 11. Pigeon ベビークリーム 12. 資生堂 FITIT マスカラ下地 13. KANEBO メディア メイクアップベースS 化粧下地 14. 肌美精 うるおい浸透マスク 15. KANEBO フレッシュル ミネラルBBクリーム(モイスト) 16. KANEBO フレッシュル ミネラルBBクリーム(EX) 17. ROHTO 抗菌 目薬EX 18. ラサーナ 海藻 ヘアエッセンス 19. ラサーナ 海藻 ヘアシャンプー
 筆者は以上で示された説明書を調べた。本論文に出ていた説明書の例はすべて以上の例の中のものである。

2.3 考察の対象

本論文は日本の女性誌4冊(日本語『VOGUE』2010.4、『FUDGE』2010.6、『VOCE』2008.9、『GLAMOROUS』2010.10)と中国の女性誌4冊(中国語《VOGUE》2010.12、《瑞麗 时尚先锋》2012.11、《ELLE》2012.8、《瑞麗 服饰美容》2012.10)を考察する。そして、同じ編集者とライターの記事を重複して統計することを避けるため、なるべく種類と出版時期が異なったものを対象として考察を加える。

テクレル、テアゲル、テモラウという語彙のマーカースに従い、化粧品を主題とする文を例文として統計してみた。その結果を表1に示す。

表1 日本語美容ページにおけるテクレル文の用例数

	ページ数 (計)	テクレル	テアゲル	テモラウ
計	99P	63	0	0

本論文ではこれらの63例を研究対象として、論じていく。

3. 美容ページの間テキスト性

K・メイナード(2004)はBBSで使われる「たしかにいいドラマだった!!..... でもなんか足りない、みたいな⁹」というようなところは「話し言葉のような表現をもう一つの異なったレベルの書き言葉で導入し、主体の気持ちを描写する」ことで、間テキスト性を標識している表現であると指摘している。

K・メイナード(2008)は¹⁰、ジャンルは一次的ジャンルと二次的ジャンルに分けている。一次的ジャンルは、直接的な言語行為、たとえば日常会話を指す。二次的ジャンルは、小説、論文、ドラマ、批評などに代表される「高度に構造化された」書き言葉であると説明している。さらに、間テキスト性には異なったジャンル間の交錯も含まれると指摘している。たとえば、小説の会話部分は典型的な間テキスト性の表現の例として挙げられている。

間テキスト性は批判的談話分析の概念として進化しつつある。林(2008)で間テキスト性(intertextuality)は、引用や皮肉より一層複雑で、複数のジャンルやスタイルやが互いに絡み合い、生み出す現象だと指摘している。K・メイナード(2008)も「間テキスト性だけではなく、より広く間ジャンル性の現象として取らえるべきだ」と主張している。本稿はこの定義をうけて、例を分析してみる。

説明書と美容ページを比較してみた結果、両者の内容と構成は同じであるが、言語表現において、以下のような相違点が見られる。これらの相違点こそ美容ページは説明文と類似しているが、間テキスト性を持っていると考える。

9 下線は筆者による。

10 Bakhtin(1986)の基準にしたがっていると説明している。

3.1 書き言葉と話し言葉の間にある美容ページ

まず、化粧品の説明書の言語表現をみてみよう。

(4) Hp クリーム

保湿、抗炎症、血行促進作用を持つ「ヘパリン類似物質」が、ドライスキンに優れた保湿力を発揮し、皮膚を滑らかな状態にします。

ヘパリン類似物質「三つの特徴」

保湿作用

保湿することで、肌の防御機能を高め、異物の侵入を防ぎます。

抗炎症作用

炎症により見た目が気になる荒れた皮膚炎症を鎮め、正常な状態へ導きます。

血行促進作用

血流をよくすることで、皮膚の再生を促進します。

(5)

①ポンプを押すたびにパール粒からピンクのメイクアップベースが弾け、ジェルとブレンドされて出てくる仕組み。

②すーっとしたフレッシュな感触で肌をつるんとマットに明るく整えて、メイク持ちをぐ〜と高めてくれる。

ラン メテオリット ベルル30ml ¥9765 (『VOCE』2008.9)

説明書は「です・ます」体が多用されているが、美容ページは「だ」体が使われている。すなわち、説明書は読み手への配慮によって、丁寧な「です・ます」体を用いているが、美容ページは「だ」体を用いている。そのほかに、「つるんと」「ぐ〜と」のような表現も多用されている。さらにくだけて日常会話的なジャンルになり、まるで親しい親友の間での対話のようになっている。

佐竹(1995)はこのような文体を、若者を中心に用いられる「仲間に向かって話すように書く」文体だと説明している。このような文体は新言文一致体と呼ばれる。話すように書く文体は、美容ページにとどまらず、現在の書き言葉のジャンルに数多くみられる。斉藤(2002)はこの現象について、日本語の「文章のカジュアル化」が進んでいるからだと言っている。

このような書き方が取られている美容ページは、ただの説明書に比べ、より親しい感じを読み手に感じさせるほかに、気楽に読める文章になる。ポップカルチャーの代表としての女性誌にふさわしい表現であると言える。

3.2 客観的な表現と主観的な表現にある美容ページ

そして、もう一つの相違点は、筆者の調べた限りでは、説明書にはテクレルが使われていないが、美容ページにはテクレルが多用されている。

大江(1975) 奥津(1984) 牧野(1996) は、授受表現は主観的な表現形式だと指摘している。

そして、Thompson and Hopper (2001) 張 (2009) は「対話に使われやすい表現ほど主観性が高い表現である」(筆者訳)と指摘されている。筆者が異なったジャンルを統計した結果¹¹によると、対話体のジャンルの中でのテクレルの使用率はほかのジャンルの文章よりも明らかに高かった。すなわち、テクレル表現はより主観的な表現であると言える。

説明文は「侵入を防ぎます」と「正常な状態へ導きます」「しっとりした髪に仕上げます」というような客観的な述べ方で、「客観的、論理的」に事情を説明するという目的を達成している。美容ページは説明文と同じような表現をとっても「商品の情報を伝える」という目的に達することができるが、「侵入を防いでくれる」「正常な状態へ導いてくれる」「しっとりした髪に仕上げてください」というような表現がたくさん取られている。換言すれば、美容ページには客観的な表現と主観的な表現が同時に見られるということが言える。

以上で述べたように、美容ページは書き言葉であるが、話し言葉的な表現を用いている部分もある。そして、商品の情報を説明する目的を有しているが、客観的な述べ方に主観的な言い方が入っている。このようなジャンルの交錯と融合が間テキスト性の現象だと言えるだろう。そして、例で示されたように、間テキスト性を標識している語彙的マーカーの一つはまさにテクレルだと言えるであろう。

4. テクレルの「読み手を前景化する」機能

Maynard (2008) は間テキスト性の機能について、次のものがあると指摘している。

1. 異なる世界の導入
2. サプライズ効果
3. ひとつのジャンルで表現しにくいものの相互協力
4. 創造性発揮
5. 主体の提示

とくに「主体の提示」という機能について、「複数のジャンルを混合することによって私たちは複数の主体を表現することができる」と具体的に説明している。すなわち、テクレル文が「主体を表現する」という機能を有しているので、美容ページのライターは故意にテクレル文を選択している。

ここの「主体の提示」という機能について、認知言語学で使われた「前景化」という概念で説明してみる。前景化とは、「所有の対象、事態の一側面が注意、関心の焦点となって、描かれることである。」¹²

山梨 (2004) は図、地の反転の認知プロセスが日常言語のさまざまな側面に反映されていると指摘している。その説明として、つぎのような例があげられている。

(i) ここはどこですか。

11 本文末尾の表1、表2を参照のこと。

12 『認知キーワード事典』(2002)による。

(ii) Where am I?

このような日常生活に使われる典型的な疑問文には、前景化、背景化の観点から、日、英語の本質的な違いが見られる。(i)の場合は、場所を問う主体は背景化され、場所が問題の対象として、前景化された。(ii)の場合は、逆に問題を問う主体自身が前景化された。以下の図は(i)と(ii)の前景化のプロセスの違いを示したものである。



さらに、このプロセスは、ひとつの言語における表現の多様性を保証するだけでなく、異なる言語における発想の違いの背景にもなっていると指摘されている。

本論文では読み手の立場を外からテキストの内にクローズアップすることは読み手を前景化すると考える。その効果は、書き手は言語的な手段により、読み手にテキストの内に存在することをイメージさせることである。前景化する機能は書き手と読み手の協同作業によって完成される認知メカニズムだと考えられる。

美容ページの基本要素はテキストを創造した書き手、テキスト、読み手である。化粧品と目標物（肌、唇、目、自信、美女度など）がテキストの中にある。図1は美容ページの基本的な意味要素を示したものである。

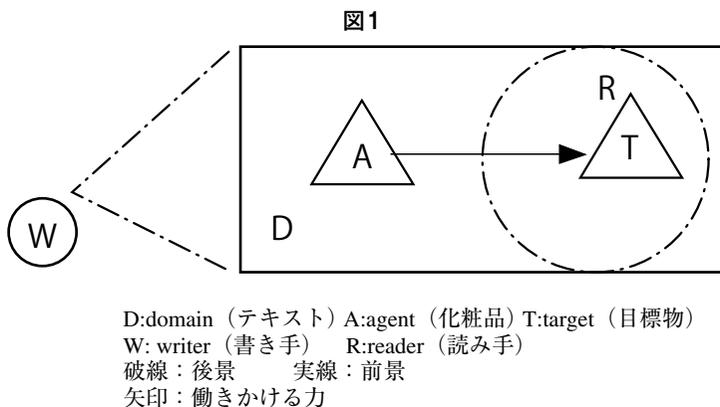


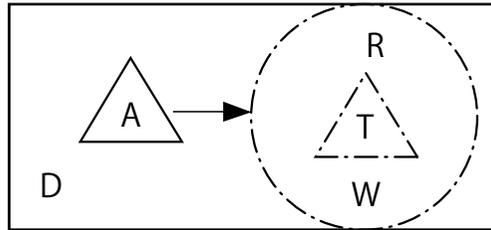
図1はテクレルが使われていない場合だと考える。この場合、化粧品が直接に目標物に働きかける。読み手は背景にある。

(10)ビタミンCの効果で 美白+皮脂抑制

1本使いきりサイズだから、ビタミンCが劣化せずに、つねに新鮮な状態で使える。美白効果はもちろん、皮脂抑制効果もあり、健やか美肌に導いてくれる。(『GLAMOROUS』2010.10)

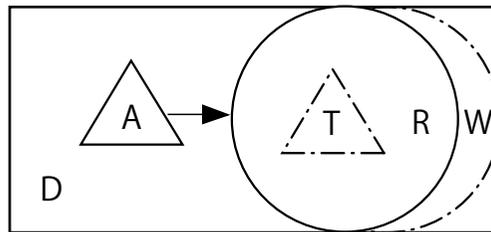
例(10)の場合は、「てくれる」の使用によって、読み手を前景化する過程が観察される。(図2参照)。

図2



書き手は読み手の立場に立ち、テクレルを使い、読み手と同一化する。このとき、読み手と書き手の境界がぼんやりする。続いて、図3をみてみよう。

図3



読み手がテキストに浮かび上がり、目標物が読み手に属している関係が明らかになる。すなわち、目標物は読み手「自身」の一部になる。この場合、化粧品と直接に関わる対象は目標物ではなく、読み手となる。それと同時に、書き手が背景に隠され、後景化されていると考えられる。

以上のことから、テクレルの「読み手を前景化する」機能は、美容ページの読み手たちに、美容ページが伝達したい情報をより身近なものとして受容させていることがわかる。関沢(2007)は女性誌は「それに接触するものに対して、多種多様な「自己像」を提供する源」であると、述べている。テクレルは読み手の立場を強調することによって、読み手を雑誌の世界に導入しようとしている。すなわち、ここでの「自己像」への導きにはテクレルが重要な役割を果たしていると思われる。

5. テクレル文と対応する中国語表現

日本語のテクレルと対応する中国語の語彙的マーカーはずっと複雑なようだ。徐（1982）、黄、孟（1998）、黄、池田（2008）、佟（2010）¹³は、テクレルに相当する中国語の語彙的マーカーは給、帮、替、为、让、令、使で、プラスの意味の他動詞などにまとめられている。

そして、普通の翻訳の原則としては、テクレルと「語彙的マーカー+我（わたし）」と対応すると考えられるが、考察の結果によって、語彙的マーカーの後に「我」のほかには「你（あなた）」も出ることがわかった。

表2は語彙的マーカーの後に「我」と「你」をそれぞれ分けて統計した結果を示したものである。

表2

	ページ数（計）	語彙的マーカー+我	語彙的マーカー+你
計	145P	5	69

表でしめされているように、「你」のほうが圧倒的に多い。そして、日本語のテクレルと中国語の「让你」はともに美容ページの「効用」という部分に出ているので、同じような意味を表す。このような理由から、「让你」¹⁴を日本語のテクレルと対応する中国語の表現と判断した。

テクレルには読み手を前景化する機能を有しているが、中国語のほうはどうだろう。

(6)苏菲娜 (sofina) 新推出的映美焕彩防晒控油粉饼 (SPF25PA++)。通过光感效果柔和地消除肌肤表层细微凹凸的阴影, 塑造多角度的年轻妆容。独特的控油成分让你的妆容在夏日也能长效持久。(《瑞丽 服饰美容》2012.10)

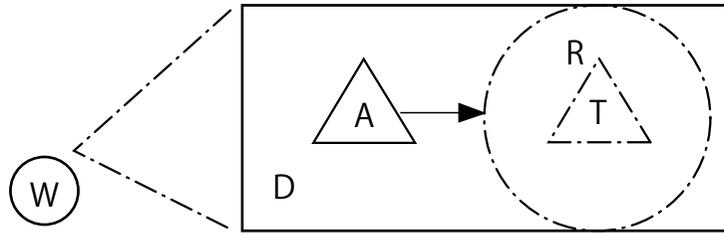
(Sofina の新作フェイスパウダーはライト効果で肌のデコボコをふんわり埋める。あなたを若々しい印象に仕上げる。独自のオイルコントロール成分が真夏でもあなたのメイクを長時間キープさせる。筆者直訳)

例(6)には読み手がテキストに前景化された過程が観察される。この過程を図4と図5に示す。

13 コーパスを統計した結果に基づいたものである。

14 表2の計74例は、語彙的マーカーの違いによってさらに統計したものである。「让」はテクレルに対応する中国語の語彙的マーカーで42例があり、使用率が最も高い。

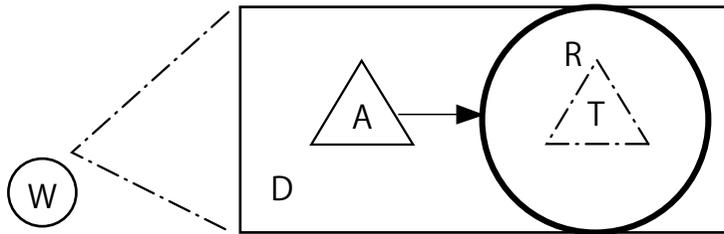
図4 (中国語)



「让你」の使用により、目標物より読み手が注意の焦点となる。すなわち、読み手が背景から浮かび上がってくる。

その結果、図5で示されているように、目標物が読み手に属している関係が明らかになり、読み手がテキストに前景化される。それと同時に、書き手は依然としてテキストの外に存在する。

図5 (中国語)



以上で解明したように、美容ページにおけるテクレルと「让你」は両方とも読み手を前景化する機能を有している。前景化する機能により、読み手が「この化粧品を使用したらどうなるか」という実感が喚起される。しかし、前景化の方法には相違がみられる。テクレルは書き手と読み手との同一化が見られるが、「让你」は書き手の客観的な立場が一貫としてみられる。

したがって、無情物が主語のテクレル文は中国語に翻訳できないのではなく、対応する方法が異なるだけである。筆者は今回の考察の結果、美容ページに限っては、中国語の「让你」が日本語のテクレル文に対応できるという結論に至った。

終わりに

以上、美容ページにおけるテクレル文の特性について論じてきたが、結論を以下のようにまとめたい。

- ① 書き言葉であるはずの美容ページは話し言葉的な表現をたくさん使っている。話し言葉的な表現は文章の主観性を強める要素で、美容ページに間テキスト性を持たせる。テクレル文はそのひとつの要素である。

- ② テクレルの使用によって、読み手を前景化することができる。中国語の「让你」は日本語と同じように読み手を前景化することができるが、前景化のプロセスが異なっている。そのため、日本語のテクレル文は中国語に翻訳できないのではなく、「让你」が対応していると言えよう。
- ③ テクレル文の使用によって、もともと客観的な文章に主観的な表現を入れ、読み手に親近感を感じさせる。そして、読み手の立場を強調し、積極的に読み手を美容ページに導入する効果を果たしている。

本論文では美容ページにおける無情物が主語のテクレル文及び中国語との対応について考察・分析したが、今後はテクレル文の機能と運用をさらに研究したい。

注 11

表 1

	ジャンル	題目	著者 / 出版社	出版 / 放映日付	総文字数 (字)
文字データ	小説	『キッチン』	吉本ばなな 角川文庫	1998年15版	約12,8000
		『天使の耳』	東野圭吾 講談社	2005年12月4日第39刷発行	約11,9409
	説明文	『日本社会の歴史』(中)	綱野善彦 岩波新書	2009年5月7日第24刷発行	約12,7260
	雑誌連載 記事	『AERA』週刊誌「はたらく夫婦 カンケイ」	朝日新聞社	2011.9-2012.2 20号	(合計) 約1,6800
	新聞記事	朝日新聞 日刊 14版 /1 トップ	朝日新聞社	2010.11.1-2010.11. 30	(合計) 約2,9000
	エッセー	「天声人語」	朝日新聞社	2010.11.1-2010.11. 30	(合計) 約2,1750
映像データ	テレビド ラマ	『派遣の品格』	J S T 水曜ドラマ	2007.1 - 2007.3 1回 -10回	(合計) 約11,5013
	ドキュメ ンタリー 映画	『上野樹里が行く! 桜前線大追 跡—ヒマラヤから日本列島5. 400キロの桜ロード』	TV-TOKYO	2012. 3.25 (全)	約1,5494
		『敦煌莫高窟 美の全貌』	NHK 特集		約1,4751字

さらに、独白体であるか対話体であるかによって、ジャンルを分けてみて、それぞれ、テクレルの用例数は統計して見た。結果は表2の通りである。

表 2

作品名	対話体		対話体+独白体			独白体			
	『派遣の品 格』	『はたらく夫 婦カンケイ』	『キッチン』	『天使の耳』	『桜前線』	『天声人語』	『敦煌莫高 窟』	『日本社会 の歴史』	朝日新聞
テクレル 用例数	70	24	30	69	15	1	2	0	1
/総文字数 (千字)	0.6‰	1.4‰	0.2‰	0.6‰	0.9‰	0.04‰	0.13‰	0	0.03‰

参考文献

＜日本語文献＞

- 稲熊美保(2004)「韓国人日本語学習者の授受表現の習得について——「もらう」系と「くれる」系を中心に」『国際開発研究フォーラム』26
- 井上優(2005)「学習者の母語を考慮した日本語教育文法」『コミュニケーションのための日本語教育文法』
- 大江三郎(1975)『日英語の比較研究 主観性をめぐって』南雲堂
- 奥津敬一郎(1984)「授受動詞文の構造——日本語・中国語対照研究の試み——」『金田一春彦博士古希記念論文集』第二卷三省堂
- 窪寿恵(2007)「中国語を母語とする日本語学習者の口頭表現にみられる授受表現の習得過程」修士論文
- 黄晓兵, 池田尚志(2008)『日本機械翻訳における授受表現「てくれる」構文の翻訳処理について』FIT2008(第7回情報科学技術フォーラム)
- 斉藤美奈子(2002)「文章読本さん江」筑摩書房
- 佐竹秀雄(1995)「若者ことばとレトリック」『日本語学』Vol14.11月号
- 菅生早千江(2008)「受益表現の誤用と訂正フィードバックに対する中上級日本語学習者の反応——リキャストと自己訂正を促す介入の比較」日本語教育第139号
- 関沢 英彦(2007)「広告における女性たち」『コミュニケーション科学』(25) 東京経済大学コミュニケーション学会編
- 段沢萌(2012)＜授受補助動詞「てくれる」に関する中日対照研究＞《日本语言文化研究丛书》(第1輯) 北京大学出版社
- 趙華敏(2011)＜日本語と中国語の「好まれる言い方」について＞『日本語研究と日本語教育』
- 辻幸夫(2002)『認知言語学キーワード事典』株式会社 研究社
- 中崎温子(2001)「授与動詞と異文化コミュニケーション——「くれる」系の非用分析を中心に」北陸大学紀要 第25号
- 仁田義雄(1991)『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版
- 原田登美(2005)「恩恵. 利益を表す＜授受表現＞と＜敬意表現＞の関わり——特に「てくれる」を中心として文法的側面と社会言語学的側面からみる」カナダ日本語教育振興会年次大会
- 古田香織(2008)「女性誌を読み解く2——女性たちのセミス」名古屋大学国際言語文化研究科言語文化論集 V30N1
- 牧野成一(1996)『ウチとソトの言語文化学 文法を文化で切る』アルク
- 益岡隆志(2012)「受動文と恩恵文が出会うとき——日本語研究から」《日语学习与研究》第1期 总158号
- メイナード・K・泉子(1999)『談話分析の可能性 理論・方法・日本語の表現性』くろしお出版
- _____ (2000) メイナード. 泉子. K. 2000 《情意の言語学：《場交渉論》と日本語表現のパトス》くろしお出版

守屋三千代 (2002) 「日本語の授受動詞と受益性～対照的な観点から～」 『日本語日本文学』第12号

_____ (2004a) 『恋するふたりの「感情ことば」 ドラマ表現の分析と日本語論』 くろしお出版

_____ (2004b) 『談話言語学 日本語のディスコースを創造する 構成・レトリック・ストラテジーの研究』 くろしお出版

_____ (2008) 『マルチジャンル談話論 間ジャンル性と意味の創造』 くろしお出版

山梨正明 (2004) 『ことばの認知空間』 開拓社

<英語文献>

Bakhtin.M.M (1986) *Speech Genres and Other Late Essays*.Ed.by C. Emerson and M. Holquist, trans. by V.W. McGee. Austin : The University of Texas Press.

Thompson, Sandra A. and Paul J. Hopper (2001) *Transitivity, Clause Structure, and Argument Structure: Evidence from Conversation. Frequency and the Emergence of Linguistic Structure*, Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

<中国語文献>

陈小英 (2005) < 带兼语的“使”与“让”之比较 > 《广西社会科学》第2期 总第116期

佟利功 (2010) < 日语授受关系句型与对应汉语表达的比较 (之二) ——关于日语てくれる句型 > 《中国校外教育》第4期

黄美华, 孟湘东 (1998) < 浅谈日语授受补助动词的汉译问题 > 《外语学刊(黑龙江大学学报)》第3期 总第93期

刘永耕 (2000) < 使令度和使令类动词的再分类 > 《语文研究》第2期

王红梅 (2008) < 第二人称代词“你”的临时指代功能 > 《汉语学习》第4期

王燕 (2010) 《从日语教学的角度看授受表达方式 日本語教育の立場から見た授受表現》中国社会科学出版社

王雪茹; 佟利功 (2010) < 认知原理在对照语言学中的应用——日语授受关系句型与汉语的表达 > 《外国问题研究》第2期

徐昌华 (1982) 「浅谈日语与汉语中授受动词的对应关系」《日语学习与研究》第2期

朱敏 (2012) 《汉语人称与语气选择性研究 语言教学与研究系列》世界图书出版公司

张伯江, 方梅 (1996) 《汉语功能语法研究》江西教育出版社

The characteristics of the *-te kureru* sentence
in the beauty magazine pages :
by comparing with “*rang ni*” in Chinese

Sung Fei

University of Peking, Doctoral Program

【Keywords】 the beauty magazine pages, intertextuality, *-te kureru* sentence,
foregrounding

According to the previous studies, it is peripheral feature that people use the inanimate subject in the *-te kureru* sentence. However, we know that this feature is very common in the beauty magazine pages.

It is possible, by using the spoken, such as *-te kureru* sentence in written pages and produce the effect of intertextuality of which increase the subjectivity of the sentence.

The “*rang ni*” in Chinese is translated into Japanese *-te kureru* sentence. Also “*rang ni*” in Chinese and *-te kureru* sentence in Japanese have the same function to provide foregrounding the reader, even though those methods are different.

Effect intertextuality and foregrounding occurs in the use of *-te kureru* sentence in Japanese emphasize the position of the reader, the reader would have a sense of closeness is born in the beauty magazine pages.

現代の茶席の会話におけるポライトネス研究

——ディスコース・ポライトネス理論による 形式的・非形式的な言語行動の分析——

ツオイ・エカテリーナ（東京外国語大学大学院博士後期課程）

【キーワード】 談話分析、言語行動、茶席の会話、社会的規範、
ポライトネス・ストラテジー

1. はじめに

1987年にブラウンとレビンソンがポライトネス理論を普遍的理論として提唱して以来、日本語におけるポライトネスについては、個人のストラテジーの余地のない社会的規範に沿った言語行動として捉えるもの（Ide 1989, 井出 2006等）と日本語においても社会的規範と個人によるストラテジーの双方があるとするもの（宇佐美 1993, 三牧 2002）として捉える議論がある。本稿は、ディスコース・ポライトネス理論（宇佐美 2001等）の観点から、茶道における茶席の会話の形式的・非形式的な言語行動を量的及び質的に分析したものである。

本研究の目的は、茶席の会話における社会的規範に従った行動と話者の方略的な行動の相互作用により生じるポライトネスとその働きを明らかにすることである。

茶席の会話においては参加者にそれぞれの役割が当てられている。特に亭主役と正客役を担う話者には、茶道により規定された役割（規範）がある。しかし、茶席における実際の会話では、形式から離脱した言語行動が頻繁に現れる。会話参加者は、規範を自分の言語行動の規準としつつ、生きたコミュニケーションを図るために個人によるストラテジーも用いているのである。

本研究は、分析データとして茶席の会話に注目し、これまでは分けて扱われることが多かった社会的規範と個人によるストラテジーとしての言語使用の相互作用を談話レベルで分析することによって、日本語におけるポライトネスの様相を実証的に明らかにしようとするものである。

2. 理論的背景

本章では、ポライトネス研究における主な理論を紹介し、ポライトネスとは何かを考察する。その後に本研究で扱うディスコース・ポライトネス理論について解説する。

2.1 ポライトネスとは

初期のポライトネス研究の代表的なものとしては Lakoff (1975) や Leech (1983) があげられる。Lakoff (1975) は女性言葉から言語使用におけるポライトネスの概念を見出し、

“politeness is developed by societies in order to reduce friction in personal interaction” (p.64) 「ポライトネスは、対人相互作用において摩擦を減らすために、社会によって作られている」(筆者訳)と述べ、形式尊重 (formality)、敬意 (deference)、仲間意識 (camaraderie) という3つのポライトネスの規則 (Rules of Politeness) を提唱した。

一方、Leech (1983) は “politeness concerns a relationship between two participants whom we may call *self* and *other*” (p.131) 「ポライトネスは、私たちが自己と他者と呼ぶ二人の参加者の関係に関連している」(筆者訳) という点に着目し、気配りの原則 (Tact Maxim)、寛大性の原則 (Generosity Maxim)、是認の原則 (Approbation Maxim)、謙遜の原則 (Modesty Maxim)、一致の原則 (Agreement Maxim)、共感の原則 (Sympathy Maxim) からなるポライトネスの原理を提唱した。

その後、Brown and Levinson (1987) は、ポライトネスをルールや原理としてではなく、対人コミュニケーションにおける個人の社会的欲求を満たすための戦略として捉え直した。

最近では、Holtgraves (2002) が、ポライトネスの概念について “[politeness] refers (roughly) to the way one puts things and the way one puts things is a result of a speaker’s cognitive assessment of the social context” (p.38) 「おおざっぱに言えば、ポライトネスは、人の物事の成し方を指しており、そして人がどのように物事を成しているかは話し手の社会的文脈についての認知的判断の結果である」(筆者訳) と指摘した。また、宇佐美 (2002) はポライトネスを「円滑な人間関係を確立・維持するための言語行動」(p.100) と定義した。

すなわち、ポライトネスは、円滑なコミュニケーションのための行動であり、社会における人間のインタラクションや認知的プロセス、言語使用などの中核的な概念であると言える。

2.2 ポライトネスの普遍理論

現在のポライトネス研究で、最も大きな枠組みとなっているのは Brown and Levinson (1987) のポライトネス普遍理論である。

ポライトネス普遍理論の中心にあるのは、人間の基本的な社会的欲求としての「フェイス」(face) の概念である。「フェイス」は二つの側面を持ち、一つは、他人に邪魔されたくないという欲求、「ネガティブ・フェイス」(negative face) である。もう一つは、誰かに認められたい、好まれたいという欲求、「ポジティブ・フェイス」(positive face) である。

コミュニケーションの過程で、会話参加者は互いのフェイスを侵害する行為 (face-threatening act, FTA) を行うことがある。FTA の侵害度は (weightiness of FTA, W_x)、話し手 (S) の聞き手 (H) に対する社会的距離 (distance, D)、聞き手の話し手に対する権力 (power, P)、ある特定の文化や社会における行為 x の絶対的負荷度 (rank of imposition, R_x) という3つの要因により規定されており、次のように定式化されている。

$$W_x = D(S, H) + P(H, S) + R_x$$

話し手は FTA の侵害度の大きさに応じて次の中から適切な戦略を選択しているとされる。

- ①フェイス保持行為を取らず、直接的且つ明確に話す (without redressive action, baldly)
- ②ポジティブ・ポライトネス (positive politeness)
- ③ネガティブ・ポライトネス (negative politeness)
- ④オフ・レコード (off record)
- ⑤FTAを行わない (don't do the FTA)

FTA 度が高いほど話し手のストラテジーの選択は①から⑤に動く。

Brown and Levinson (1987) は、上記の5つのストラテジーが普遍的にどの言語にもあるとしているが、日本語の研究においてはストラテジーとしての捉え方に対する批判が見られる。

Ide (1989) は、日本語における挨拶や決まり文句の選択は、個人の意志によるものではないとし、「わきまえ」の概念を提示した。井出 (2006) による「わきまえ」とは、「自分のフェイス、または相手のフェイスに対してポジティブ・ポライトネスあるいはネガティブ・ポライトネスのストラテジーを使って相手に「働きかけ」て話し手の意志によるポライトネスではなく、こういう場ではこのようにするものだという社会的に共通に認識されているものにしたがって使わねばならないものである」(p.73)。つまり、井出は、社会的規範に沿った言語行動を日本語におけるポライトネスだと主張した。

すなわち、Brown and Levinson (1987) が個人によるストラテジーとして捉えたのに対し、Ide (1989)、井出 (2006) は日本語の敬語や挨拶、決まり文句の例をあげ、社会的規範として捉えられるのだと反論したのである。

社会には共有している規範があり、それを認識しているかどうかにかかわらず、影響下にあることを否定することはできない。しかし、筆者は、話者が社会の一員としてどのように行動するかは話者個人の意志に関わる問題だと考えた。そこで本研究では、伝統や形によって明示的にも暗黙的にもより強い規範の下で営まれている茶道の茶席に注目し、規範と話者個人によるポライトネスを判別し、宇佐美 (2001,2002,2003,2008a,b) のディスコース・ポライトネス理論を用いることで、それらの相互作用により生じるポライトネスとその働きを検討する。

2.3 ディスコース・ポライトネス理論

Brown and Levinson (1987) のポライトネス理論が批判を受けている原因として、宇佐美 (2001) は、分析が文レベルに留まっていることを指摘し、ポライトネスを談話レベルで捉えるディスコース・ポライトネス理論を提唱した。宇佐美 (2008a) は、ポライトネスを「言語行動におけるいくつかの要素がもたらす機能のダイナミックスの総体」(p.17) として捉え、「ディスコース・ポライトネス」と名付けた。

宇佐美 (2001,2002,2003,2008a,b) は Brown and Levinson (1987) によるポライトネス理論の基本的な考え方を継承しながらも、ポライトネスを談話レベルで捉えられるよう、以下のような新概念を導入した。

1) 「基本状態」

ディスコース・ポライトネス理論における「基本状態」は、「それぞれの言語行動や談話展開パターンの基本状態」(宇佐美,2008a,p.18) を指す。宇佐美 (2008b,p.159) は「基本状態」を「談話の基本状態」と「談話要素の基本状態」の2種類に区別した。「談話の基本状態」は「特

定の「活動の型」における談話の「典型的な状態」を指し、「理論的な観点から想定するもので、談話内の諸要素を特定するものではない」(宇佐美,2008b,p.159)とされている。談話内の諸要素をすべて特定することは、不可能だからである。一方、「談話要素の基本状態」とは、「個々の研究において研究対象として設定した要素について、同定・算出するもの」である。「談話要素の基本状態」の指標としては、「典型的な状態の談話」における「主要な言語行動の平均的な構成比率(分布)」や「各々の要素の平均的な生起率」、「典型的な談話展開パターン」(Ibid.)などがある。

2) 「有標行動」と「無標行動」

「無標行動」とは、談話の「基本状態」を構成する要素としての言語行動のことである。

「有標行動」とは、「各々の要素の基本状態から離脱した言語行動(発話行為レベル)」, 或いは「基本状態とは異なる一連の行動(談話レベル)」(宇佐美,2008b,p.161)のことである。ディスコース・ポライトネス理論は、「各々の談話と、それを構成する諸要素の「基本状態」を基にして、そこからの有標行動の「動き」や「有標性(基本状態からの離脱度)」に着目」(宇佐美,2008b,p.161)することによりポライトネスを相対的に捉えている。

3) 「ポライトネス効果」

「有標行動」の「ポライトネス効果」は、話し手が実際に行った言語行動のフェイス侵害度について話し手と聞き手の「見積もり差」によって引き起こされる「聞き手側の認知」であり、「有標行動」の離脱の度合い(有標性)に応じて相対的に生じる効果である。

(De 値) ..	-1	$-\alpha$	0	$+\alpha$	+1
見積もり差 .. (De 値)の範囲 ..	$-1 \leq De < 0 - \alpha$..	$0 - \alpha \leq De \leq 0 + \alpha$..		$0 + \alpha \leq De \leq +1$..	
行動の適切性 ..	過少行動 .. (例: 粗野) ..	適切行動 .. (適切) ..		過剰行動 .. (例: 慇懃無礼) ..	
ポライトネス効果 ..	マイナス効果 .. (失礼、不快) ..	ニュートラル効果(中立) ..		プラス効果(快) ..	マイナス効果 .. (不快) ..

見積もり差 (Discrepancy in estimations: De 値) : $De = Se - He$

Se: 話し手 (Speaker) の「見積もり (estimation)」(以下の*参照) . 仮に、0から1の間の数値で話すものとする .

He: 聞き手 (Hearer) の「見積もり (estimation)」 . 仮に0から1の間の数値で話すものとする .

α : 許容できるずれ幅

* 「見積もり (estimation)」には、以下の3種がある .

- ① 「ある有標行動のフェイス侵害度」の見積もり
- ② 「談話の基本状態」が何であるかについての見積もり
- ③ 「フェイス侵害度に応じて選択されたポライトネス・ストラテジー」についての見積もり

図 1. 「見積もり差 (De 値)」、「行動の適切性」、「ポライトネス効果」(宇佐美,2008b,p.162)

「ポライトネス効果」は、話し手と聞き手の見積もり差の大きさや方向により「プラス効果」、「ニュートラル効果」、「マイナス効果」のいずれかになる。「プラス効果」と「マイナス効果」は、話し手の言語行動が聞き手にとって心地よいか、不愉快かというフェイス保持・侵害に関わる効果であり、「ニュートラル効果」は、心地良い、不愉快と感じるわけではなく、「言語的談話効果」(話題転換、注意喚起など)として生じるものである(図1)。

3. 研究方法

これまでのポライトネス研究の流れを踏まえ、本研究は、茶道の規範に従った形式的な行動と個人による非形式的な行動の相互作用を、ディスコース・ポライトネス理論の観点から談話レベルで分析する。

分析対象として茶席の自然会話を用いる。茶席の会話は「場」の要素が強く、会話参加者が場により設定される役割を担っている。それぞれの役割に基づく行動が形式として規定されているので、茶席の会話は、社会的規範に従った行動と戦略としての行動が明確であり、本研究の目的に適していると考えた。

3.1 茶席の会話について

茶席には、濃茶席や薄茶席など、異なる作法や目的を持つものがある。席には明確な開始と終了があり、複数の組み合わせでまとまりのある一つの茶会、或いは茶事を構成している。

1) 「茶事」と「茶会」

本研究では、茶席の場面として茶事と茶会を取り上げた。

茶事とは、特定の少人数の客を長時間(5~6時間)もてなす茶会のことである。茶事は、挨拶-懐石料理-初炭-濃茶-後炭-薄茶、あるいは、挨拶-初炭-懐石料理-濃茶-後炭-薄茶という流れで構成されている。ただし、後炭の席が省略されることがある。初炭の席及び後炭の席では炭が生まれ、懐石料理の席¹では食事が振舞われる。濃茶席及び薄茶席では抹茶が振舞われる。

茶会とは、いわゆる大寄せ茶会のことであり、『茶道大辞典』には、「大人数の客を招いて催す茶会のこと」と書かれている。茶会では、濃茶席や薄茶席などいくつかの席が個別に設けられ、同時に進行されることが多い。一席は20~30分程度である。

茶会は他流派や茶道の経験のない人でも誰でも参加でき、公に開かれたものとして行われる。一方で茶事は、亭主が特定の客を招き、内輪で行われる行事である。

2) 「薄茶席」と「濃茶席」

茶事において、濃茶席は薄茶席より先にあり、席中の雰囲気やや重く、格が高い席とされている。それに比べて薄茶席は多少にぎやかであり、席中の会話が活発である。濃茶席と薄茶席では違う抹茶が使用され、席中の作法も異なる。濃茶は、一つの茶碗で数人によって回し飲みされるが、薄茶は別々の茶碗で出される。

茶会では、必ずしも濃茶席に薄茶席が続くという決まりはない。

3) 茶席における会話参加者の役割

茶席における会話参加者は大きく「もてなす側」と「客側」に分けられる。

もてなす側は、茶事の場合、亭主と半東、あるいは亭主一人で、席中で点前をしながら客と会話をする。半東は亭主の補助役であり、亭主の立場は半東より上である。茶会の場合、席中をもてなす側には、点前をする亭主以外に客と会話をする「席主」がいる。茶会の亭主は点前係の役割を担い、客側とほとんど話をしない。席主は文字通りその席の主であり亭主

1 懐石料理の席は、亭主がほとんど席中にいないため分析対象としない。

より上の立場にある。茶会は、同時に複数の茶席が個別に設けられるため、それぞれの席で席主は異なっている。

客側でもっとも重要な役割は「正客」²にある。正客は、席中で最も上位の席に座り、他の連客の行動をまとめる役割を担う。茶事では、正客は亭主によってあらかじめ決められる。茶会では、席が始まる直前にその席の参加者の話し合いで決まる。

席中の会話は、茶事は亭主と正客、茶会は席主と正客を中心に行われる。

本稿では、用語の統一のため、茶会の席主も「亭主」と呼ぶ。

3.2 データ収集方法

分析データは、2011年8月から2012年5月に開催された4回の茶事及び4回の茶会において筆者が収録した自然会話データ（約7時間分）である。筆者はインフォーマントと同席し、ICレコーダで会話を録音した。会話の自然さを確保するために、筆者はインフォーマントの振る舞いや会話の進み方に関しては指示をせず、席の一員として行動した³。

インフォーマントは、裏千家及び表千家の流派に所属しており、7年以上の茶歴を持っている26名（30代:3名、40代:2名、50代:4名、60代:10名、70代:6名、80代:1名）の女性である。

音声データは宇佐美（2011）による「基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese: BTSJ）」に従い文字化した。

3.3 分析方法

本研究では、量的分析によって茶席の会話における形式的な発話及び非形式的な発話の出現率を計算し、会話参加者の新疎関係（亭主と正客が友人の場合と初対面の場合の比較）及び茶席における行動の自由度（薄茶席と濃茶席の比較）、という2つの要因による違いを検討した上で、宇佐美（2001,2002,2003,2008a,b）によるディスコース・ポライトネス理論の観点からの質的分析を行った。

まず、量的分析で計算の単位として用いる「発話文」および発話の分類について述べる。

1) 発話文の認定と改行の原則

BTSJでは、基本的な分析の単位は「発話文」である。

「発話文」は、「会話という相互作用の中における「文」（宇佐美, 2011, p.2）と定義されており、判断基準は以下の通りである。

基本的に、ひとりの話者による「文」を成していると捉えられるものを「1発話文」とする。しかし、自然会話では、いわゆる「1語文」や、述部が省略されているもの、あるいは、最後まで言い切られない「中途終了型発話」など、構造的に「文」が完結していない発話もある。そのような場合は、話者交替や間などを考慮した上で「1発話文」であるか否かを判断する。（宇佐美, 2011, p.2）

2 「主客」とも言う。

3 席が始まる前に、筆者はインフォーマントから会話の録音に関する同意書を得ている。

改行は、話者が交替する度に行われるが、同一話者が複数の発話文を続けて発する場合は、発話文ごとに改行する。

2) 茶席の会話における「形式」に基づく発話の分類

本会話データにおけるすべての発話を「茶道の形式」の観点から、「形式的な発話」、「形式から逸脱した発話」、「形式的な表現をアレンジした発話」、「雑談」、「作法の指導に関する発話」、に分類した。「形式的な発話」、「形式から逸脱した発話」、「形式的な表現をアレンジした発話」の分類基準は、三田(2003,2005)、阿部(2008)の茶席の会話集を基本モデルとした。

茶席における「形式的な発話」とは、どのタイミングで何を言うべきかを型として決められている決まり文句のことである(例1)。形式的な発話が一発話文になることが多い。

例1 「形式的な発話」

[茶事04初炭]

240 亭主05 ま、時分どきでございますので、粗飯みつくろって差し上げます。

241 正客04 ありがとうございます。

例1は茶事で行われる会話の一部である。亭主は炭手前を終え、懐石料理を振舞う前に、ライン240の形式的な挨拶をする。それに対して正客は、「ありがとうございます」と答えるが、これも形式的な挨拶である。

茶席における「形式から逸脱した発話」とは、茶席で「この場合このようなことを言う・する」という決まりがあるにも関わらず、話者が何らかの意図を持ち、敢えて形式とは異なる行為を取る際の発話である(例2)。

例2 「形式から逸脱した発話」

[茶会04濃茶席]

→52 正客08 もうねー、お濃茶席は、先生ね(え、え)、本来でしたら、一服点つまでは静粛にしなきゃいけませんけど(うん)、あの一、お時間もね(え、そうなんです)、皆様、大勢様お待ちですので(えっ) &,⁴

53 正客08 先生のお話をよろしゅうお願いいたします(<笑い>)。

濃茶席には、茶が出されるまでは席中で話をしてはいけないという決まりがある。しかし、例2のライン52は正客がその決まりを破っていることから「形式から逸脱した発話」と判断する。

茶席における「形式的な表現をアレンジした発話」は、席の趣向、道具類、花、菓子、茶などについての内容に関するもので、茶道の形式通りの言い方が見られない発話(例3)、または、話者が形式的な言い方を話者なりの言葉遣いでアレンジした発話(例4)である。こ

4 例2のライン52および53は一発話文を成すが、この場合は、発話文の前半(ライン52)は「形式からの逸脱」、後半(ライン53)は「形式的な発話」だけでなく複数の分類項目を含んでいる。この場合は、BTSJの原則では「&」を付け、便宜上改行することがある。

のような発話は、内容としては茶道のルールにあからさまな違反ではないため、「形式から逸脱した発話」とは判断できない。しかし「形式的な発話」とも異なり、特定の言語表現が使用されていないため「形式的な表現をアレンジした発話」と呼ぶ。

例3 「形式的な表現をアレンジした発話」：席の趣向、道具類、花、菓子、茶などについての内容に関するもので茶道の形式的な言い方が見られない場合

[茶事01挨拶]

- 84 正客01 また、あの、青磁のね、あの、花入に、こう、本当に、<こう>、こ
こら辺の、なんか、花を><{<}>。
- 85 亭主01 <行雲の空ですね、えっ、その辺で取りましたので><{><2人で笑
い>。
- 86 正客01 いえいえ、もう、ああいう、こう、見慣れたね（はい）、みっ、あの一、
道の花を見ると（はい）、ほっといたします。
- 87 亭主01 そう<ですねー><{<}>。
- 88 正客01 <青磁に良く><{>}<}>合って。
- 89 亭主01 あっ、ありがとう<ございます><{<}>。

例3は、正客と亭主は花及び道具（青磁の花入）についての会話をしている。これらには茶道の形式的な言い方が見られないため「形式的な表現をアレンジした発話」と判断する。

例4 「形式的な表現をアレンジした発話」：話者が形式的な言い方を話者なりの言葉遣いでアレンジした場合

[茶事04薄茶席]

- 163 正客04 何っていうもんですかー [甘えるような声で]。
- 164 亭主05 一応、それ<「作者02名」><{<}>。

例4では、正客は茶碗の作者について聞いている。道具の聞き方に関しては、三田（2003）では「～は」（「お茶碗は」、「お釜は」、「お水指は」など）、阿部（2008）では「～はどなたの（お作で）」という形式的な表現があげられている。ライン163では、正客04は形式的な表現を使わず、正客04なりの言葉遣いで道具について聞いているので、ライン163の発話を「形式的な表現をアレンジした発話」と判断する。

「雑談」とは、席に直接関わる内容以外の発話（例5）である。

例5 「雑談」

[茶事04濃茶席]

- 223 亭主05 <ご主人もねー、大事にしないとねー><{>}>。
- 224 正客04 そうなんですー<笑い>。
- 225 亭主05 ま、だから、あの、しっ、半分、ちょっと（えっ）<笑い><二人三
脚で（ええ）、<笑いながら><不自由に感じるけれど、調子合わせ

- ないとねー。
- 226 正客04 そうですね、一生懸命ゴマすって (<笑い>)、*“お昼ご飯自分で作ってね”*って、今日もね (<笑い>) 出て来ちゃいまして<笑い>。
- 227 正客04 鍋焼きうどんをぽっと置いてきまー<笑い>(あー)(<っ笑い>)、あのセット置いてきて。
- 228 亭主05 ま、その程度ならよろしいわね。

例5は、亭主と正客は、席に直接関わりのない家族について会話しているので「雑談」と判断する。

「作法の指導に関する発話」とは、席中の行動についての確認、質問、指示やそれに対する聞き手の返答を含む発話(例6)である。

例6 「作法の指導に関する発話」

[茶事01薄茶席]

- 700 正客01 あの、すみません、あの、私、あの、そのように返し方を教わってるんですけど、<良かったでしょうか>{<}。
- 701 亭主02 <あっ、すみません>{>}、私もよく存じませんので、はい。
- 702 正客01 [亭主01へ]先生、よろしかったですか。
- 703 亭主01 はい、いいです。

例6の会話は、正客が道具の並べ方について確認しているので「作法の指導に関する発話」と判断する。

上記の分類では、「形式的な発話」は、文字通り茶席においては形式的な言語行動である。「雑談」及び「形式から逸脱した発話」は非形式的な言語行動になる。「形式的な表現をアレンジした発話」は、「茶席では道具、茶、菓子、花について話すのだ」という点では、社会的規範に従うものであり、茶席における形式的な要素を含んでいると考えられるが、言語形式という点では、茶席で一般に用いられる特定の言語形式がないため、どちらかという話者個人の意向が反映された非形式的な言語行動と考えられる。

量的分析では、会話データにおける発話文の分類及びコーディングの信頼性を確認した上で、一発話文単位でコーディング項目の集計を行った。信頼性の確認方法としては2人のコーダーによるコーディングの評定者間信頼性係数(Cohen's Kappa)を算出した。各会話データの20発話文を測定した結果、発話文の認定は $\kappa > 0.90$ 、コーディングは $\kappa > 0.70$ であった。

4. 結果と考察

本章では、茶席の会話における形式的・非形式的な言語行動の全体傾向を表す量的分析の結果を提示する。そして、質的分析として具体的な談話例をあげつつ、ディスコース・ポライトネス理論の観点から形式的・非形式的な言語行動におけるポライトネスについて考察する。

4.1 量的分析の結果

本節では、全会話データにおける形式的・非形式的な言語行動の出現の傾向及び「亭主と正客の親疎関係」及び「茶席における行動の自由度」の各要素の程度による違いについて述べる。

全会話データの集計結果は図2の通りである。

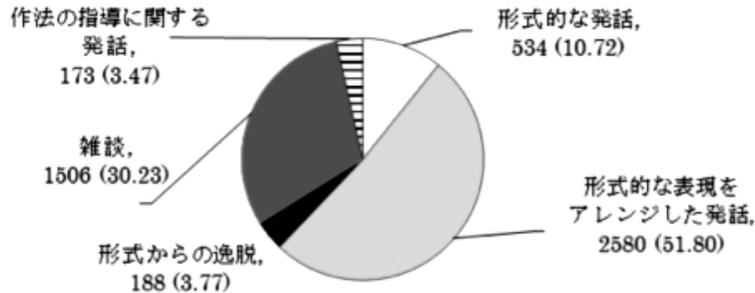


図2 全会話データにおける形式的・非形式的な言語行動の内訳 (%)

全体の傾向として、席の趣向、道具、菓子、茶についての会話を中心に「形式的な表現をアレンジした発話」が最も多く (51.80%)、「形式的な発話」は比較的少なく (10.72%)、「形式からの逸脱」も多少 (3.77%) 見られた。

席に直接関係のない内容の「雑談」が多かった (30.23%) ことは筆者の予想に反していた。形式に従った言語行動が求められている茶席という「場」では、話者は社会的規範に縛られていると予想されていたが、それに反して話者の方略的な言語行動が最も多くみられた。

1) 亭主と正客の親疎関係による差異

データを、亭主と正客が友人の会話と、亭主と正客が初対面の会話に分けて比較した結果、友人と初対面の会話の比率に有意差が見られ ($\chi^2=96.61$, $df=4$, $p<.001$)、亭主と正客の心的距離が大きいほど「形式的な発話」 ($\chi^2=13.47$, $df=1$, $p<.001$) 及び「形式的な表現をアレンジした発話」 ($\chi^2=25.20$, $df=1$, $p<.001$) が増え、「雑談」 ($\chi^2=92.09$, $df=1$, $p<.001$) が減ることが分かった (図3)。

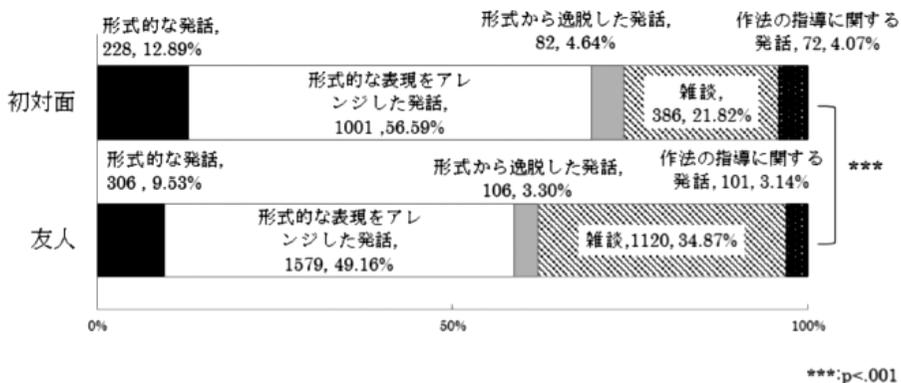


図3 亭主と正客の親疎関係による形式的・非形式的な言語行動の差異

茶席は客をもてなす場であり、料理や茶などを振舞うことの他に席中で会話をするのももてなしの手段の一つである。亭主が客と会話をすることによって参加者間の調和を保つのである。茶席の会話には大まかなアウトラインがあり、亭主と正客はそれに頼りつつ会話を進めることになっている。「形式的な発話」はこのような茶道の規範を固く守ったものである。しかし、本分析の結果では、初対面の場合も、友人の場合も「形式的な表現をアレンジした発話」が(初対面は56.59%、友人は49.16%)最も多かった。席中の調和を保つことを考えると、席の趣向や道具類などは共通の話題になりやすく、会話がスムーズに出来ることに役立つ。このように「形式的な表現をアレンジした発話」が最も多かったことは、話者は、茶道の規範を考慮しながらも、会話をスムーズにしようとして、Brown and Levinson (1987) のポライトネス理論におけるポジティブ・ポライトネス・ストラテジーの「v. 一致を求める (Seek agreement)」であげられている「無難な話題」(safe topics)を選択しながら、個人のストラテジーを駆使していることを表している。

「形式的な表現をアレンジした発話」以外に、茶席の会話でポジティブ・ポライトネスとして捉えられるものは「雑談」である。本分析では、話者間の距離 (D) も小さく、場面 (R) も低いほど「雑談」が増えることが分かった。友人同士の会話の場合は、亭主と正客の間に個人的な関係も存在するため、「vii. 共通基盤を主張する」ストラテジーとして「雑談」が初対面の場合より多くなると考えられる。

初対面のデータでは、それまでは会ったことのない亭主と正客の会話ではあるが、茶道界の者同士という点で社会的距離 (D) の値は一般的に考えられる「初対面」の場合よりやや小さいので、ポジティブ・ポライトネスが多く使用されたと考えられる。しかし、初対面と友人の会話の相違点は、「形式的な表現をアレンジした発話」(初対面は56.59%、友人は49.16%)と「雑談」(初対面は21.82%、友人は34.87%)の比率である。同じポジティブ・ポライトネスであっても、初対面の場合の方が多かった「形式的な表現をアレンジした発話」では茶道の規範が考慮されているのに対し、「雑談」では茶道の規範が見られない。つまり、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーがすべて一定したものではなく、社会的規範の関与の度合いが異なると考えられる。

ただし、「雑談」が増えた分、友人の会話では「形式的な表現をアレンジした発話」及び「形式的な発話」の割合が減ったので、初対面の方が「形式的な発話」及び「形式的な表現をアレンジした発話」が多く見えるということにも注意すべきである。

2) 茶席における行動の自由度による差異

濃茶席は薄茶席より席中の雰囲気やや重く、席としては格が高いとされている。濃茶席は薄茶席に比べ、客の振舞いを規定する形式が増え、行動の自由度が低い。薄茶席は多少にぎやかな席で、正客と亭主以外に連客も自由に席中の会話に参加することができ、行動の自由度が高い。

濃茶席と薄茶席の形式的・非形式的な行動の比率の差は有意 ($\chi^2=17.69$, $df=4$, $p<.001$) であり、茶席における行動の自由度が高い薄茶席ほど「形式的な発話」($\chi^2=12.56$, $df=1$, $p<.001$) が減り、「形式的な表現をアレンジした発話」($\chi^2=6.90$, $df=1$, $p<.01$) が増えていた (図4)。

茶道の規範による束縛が強い濃茶席においては、薄茶席では見られない形式的な問答があ

るため、「形式的な発話」が薄茶席の会話より多かったと考えられる。

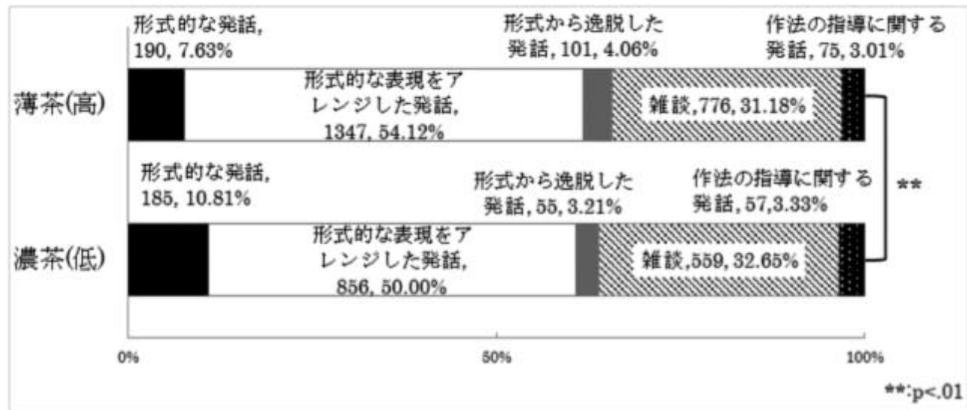


図4 茶席における行動の自由度による形式的・非形式的な言語行動の差異

以上の量的分析の結果から、茶道では規範に従う行動が求められているにも関わらず、茶席の実際の会話では「形式的な発話」が少なく、「形式的な表現をアレンジした発話」や「雑談」が多いことが分かった。また、亭主と正客の親疎関係及び茶席における行動の自由度におけるそれぞれの比較で形式的・非形式的な行動に有意差が見られた。

4.2 質的分析

本節では、談話の具体例をあげ、宇佐美 (2001,2002,2003,2008a,b) によるディスコース・ポライトネス理論の観点から形式的・非形式的な言語行動におけるポライトネスについて考察する。

まず、ディスコース・ポライトネス理論において分析の土台となる基本状態を決め、そこから離脱する言語行動のポライトネス・ストラテジーとしての機能およびポライトネス効果について考察する。

本研究では、基本状態として「特定の「活動の型」における談話の「典型的な状態」(宇佐美,2008b,p.159)である「談話の基本状態」を用いる(例7)。阿部(2008)、三田(2003,2005)であげられているパターンを茶席の会話における典型的な状態とみなす。

例7 茶席の会話における「基本状態」

[茶会03濃茶席]

- 149 正客06 美味しく頂戴いたしました。
- 150 正客06 ただいまのお茶銘は？。
- 151 その他26 『緑毛の昔』でございます。
- 152 正客06 『緑毛の昔』でございますね。
- 153 その他26 はい。
- 154 正客06 お詰めは？。
- 155 その他26 上林でございます。

- 156 正客06 上林。
 →157 正客06 前席で本当に美味しいお菓子頂戴いたしました。ご銘は？。

例7は席で出された抹茶や菓子についての典型的な問答のパターンであり、ライン149~151、154~155、157は「形式的な発話」である。これは茶席における規範に基づいた会話であるが、量的分析から分かったように、本データでは「形式的な発話」より「形式的な表現をアレンジした発話」や「雑談」の方が多かった。そこで、次に「形式的な表現をアレンジした発話」の談話例をあげる。

例8 濃茶についての会話の「基本状態」

[茶会03濃茶席]

- 144 その他26 《沈黙31秒》お服加減いかがでございましょうか。
 145 正客06 大変結構でございませう。

例9 濃茶についての問答の談話

[茶事03濃茶席]

- 7 亭主06 《沈黙13秒》あつ、いかがでしょうか。 ←形式的な言い方
 8 亭主06 《沈黙03秒》<どうですか>{<}。 ←言い直し
 9 正客03 <ちょっとこれは>{>}[独り言のように呟きながら姿勢を直す]。
 10 亭主06 <すいませーん>{<}。
 11 正客03 <美味しーい>{>}。 ←形式的な言い方の回避
 12 亭主06 <そうですか>{<}。
 13 正客03 <うーん>{>}、はい。

例8は亭主が正客に濃茶についての感想を聞く形式的な問答の例である。一方、例9では、亭主06がライン7で「形式的な発話」をした直後、ライン8で非形式的な言い方で聞き直す。それに対して、ライン11で正客03は「美味しーい」と非形式的な言語行動を取っている。

ディスコース・ポライトネス理論に基づき解釈すると、「形式的な発話」の言い換えとして表れた亭主06の「形式的な表現をアレンジした発話」は、茶席の会話の基本状態とは異なる有標行動として捉えられる。図1にあるように、有標行動のポライトネス効果は話し手と聞き手の「見積もり差 (De)」により決定される。見積もり差が $-a$ より小さい場合は失礼と感じるマイナス効果が生じる。また、見積もり差が $+a$ より大きい場合もマイナス効果が生じ、聞き手が慇懃無礼と感じるとされる。ライン11の正客03の発話を見ると、正客03は「大変けっこうでございます」といった「形式的な発話」をせず、亭主06のライン8の発話に合わせて「形式的な表現をアレンジした発話」をしている。ライン08の「形式的な表現をアレンジした発話」に対してライン11の「形式的な表現をアレンジした発話」がなされたことから、話し手と聞き手の見積もり差が0に近いと考えられる。従って、亭主03の言い換えは適切行動と認識され、プラス・ポライトネス効果をもたらされたとみなせる。

次に、「雑談」を含む談話例を検討する。

例10 席で使われた茶道具についての談話

〔茶会04濃茶席〕

- 100 亭主11 <で、あのー>{>}、ん、あの、お釜とお風炉ですけど、これは、私が嫁ぎました時に<笑いながら>嫁入り道具なんです。 ←形式的な表現をアレンジした発話
- 101 正客07 はー。
- 102 亭主11 <笑い>。
- 103 正客07 はー、そうですか。
- 104 亭主11 ええ、父親がね（ええ）、随分探しましたってゆっ、ましたね。
- 105 亭主11 <風呂敷>{<} 【。
- 106 正客07 】<ないころ>{>} でしたからね。
- 107 亭主11 そう、箱も何もなく、ですからね、風呂敷包んで、背負って帰ってきましたね。
- 〔中略〕
- 113 亭主11 <あの時分は箆笥>{>} から何から全部、全部…揃えてね、あの、お嫁さんの道具を全部皆に披露したんですよね。 } 雑談
- 114 亭主11 <で、その>{<} 【。
- 115 正客07 】<その前でね>{>},,
- 116 亭主11 うん、そうそうそう。
- 117 正客07 お家、あの、<お料理、皆様はねー>{<},,
- 118 亭主11 <そうーそうそうそう>{>}。
- 119 正客07 お席でいただいた<ようなことでしたからね>{<}。
- 120 亭主11 <そうですね>{>}。
- 121 亭主11 今は、簡単に結婚式場でねー。
- 122 正客07 そうですね。
- 123 正客07 お水差しも[→]。
- 124 亭主11 お水差しは(ね)、《少し間》ルネッ、あの、今のラリック、ラリックだった、ええ、フランス（えー）ですね。

例10の会話はライン10の席の茶道具についての「形式的な表現をアレンジした発話」から始まるが、徐々に席には直接関係のない個人的な経験を語る「雑談」（ライン104~122）に移行する。ライン104の発話により亭主11が「雑談」を始める。「雑談」は、茶席の会話の「典型的な談話状況」（基本状態）にはないため有標行動である。正客07は積極的に「雑談」を維持していることから、話し手と聞き手のフェイス侵害度の見積もりが一致しており、「雑談」によりプラス・ポライトネス効果が生じたと考えられる。

例9、10で取り上げた「形式的な表現をアレンジした発話」や「雑談」は茶道のルールの

あからさまな違反ではないので、基本状態からの離脱の度合い(有標性)が低く、ポライトネス効果はそれほど強くない。しかし、より長い談話を見ると、このような有標行動は、茶席の会話が円滑に進むための重要な行動であることが見えてくる。

茶道の形式を談話レベルで見ると、茶席の会話における形式的・非形式的な言語行動のサイクルが見えてくる。

例11ライン510,512の「形式的な発話」の前後に「形式的な表現をアレンジした発話」(ライン503~504, 511, 513~524)がある。「形式的な表現をアレンジした発話」(ライン513~524)の「茶杓に銘がない」という話題に関連して会話はライン525から「雑談」に移る。また、ライン533から「形式的な表現をアレンジした発話」により会話は「茶杓に銘がない」という話題に戻り、次の道具の話に移るための準備となる。

例11 談話レベルで見た形式的・非形式的な言語行動のサイクル

[茶事01濃茶席]

503 正客01 また、お茶灼が、あの(はい)景色、あって=。

504 亭主01 =ちょっと、面白いですね<笑い>。

形式的な表現をアレンジした発話

[中略]

510 正客01 あの、お作は?。

←形式的な発話

511 亭主01 あの、妙喜庵の(へっ)、えーと、「作者03姓」「作者03名」和尚様の(はー)作だということ。

←形式的な表現をアレンジした発話

512 正客01 はい、ご銘は?。

←形式的な発話

513 亭主01 あの、付いてないんですー<笑い>

[中略]

516 亭主01 それで、(あっ)っこれ、銘を付けてもらったからって言われたんですけど、いいえ、<そう、そう何でも出たらね><>。

形式的な表現をアレンジした発話

517 正客01 <いやっ、でも、あれですね><>、あの、やはり(はい)、あの“関、南北東西活路に通ず”で(はー)、ない方が無限に広がっていい<かもしれないですね><>。

[中略]

524 亭主01 いい<ですね><>。

525 正客01 <で、実は><>ね、変な話、うちの孫「孫01名」っていうんですよ、「漢字01」って書いて(はー)。

526 正客01 それを付けた時に、あのー、私の父が(はい)、“変な名前を付けて”って“いじめにあったらどうする”(はーい、はいはい)って言いましたら、息子は“「四字熟語」(はーい)あれでー、やっぱり、あの(はー)、無限にね、って(おー)無、って何もない、何もないけど、そこは(うん)無限にこれから広がってる”ってことを父に説明しまして(あー)<笑い>。

雑談

- 527 その他03 <すごい><<><笑い>。
 528 亭主01 <お父様>>>素晴らしい、息子さんですね<笑い>。
 529 正客01 <笑い>いや、それは、もう、口から<でまかせに、
 父を説得するのに><<>。

[中略]

- 533 正客01 何もないっていうのは(んー)、かえって、いい<こ
 となのかな><<>。

形式的な表現をアレンジした発話

- 534 亭主01 <可能性>>>がね。
 535 正客01 可能性が(はい)広がるっていうことで。
 536 亭主01 ありがとうございます<笑い>。
 537 正客01 いえいえ、で、今もねー、あの、連客様と話し(はい)
 でたんですけど、その<お仕覆、あの><<>,,
 538 亭主01 <お仕覆ですね>>>。

[中略]

- 542 亭主01 あの(そうですね)お裂地は?。

形式的な表現
をアレンジ
した発話

←形式的な発話

例11から分かるように、「形式的な発話」は茶席において会話の方向付けの機能を果たすが、「形式的な表現をアレンジした発話」及び「雑談」はポライトネス、つまり話し相手との「円滑な人間関係の確立・維持のための言語行動」(宇佐美 2002,p.100)となっている。茶席という場では、話者が茶道の規範を守ることを求められている一方、相手との友好的な関係作りが茶席の重要な側面の一つであるため、話者は「形式的な発話」から「形式的な表現をアレンジした発話」へ、そして「雑談」に移り、また「形式的な発話」に戻るというサイクルを繰り返しつつ、社会的規範と話者の方略的行動のバランスを取っているのである(図5)。



図5 茶席の会話における形式的・非形式的な言語行動のサイクル

社会的規範と個人のストラテジーの相互作用は例12-a,bにより明確に表れている。

例12-a 形式からの逸脱

[茶会04濃茶席]

- 53 正客07 もうねー、お濃茶席は、先生ね(え、え)、本来でしたら、一服点
 つまでは静肅にしなきゃいけませんけど(うん)、あの一、お時間

もね(え、そうなんです)、皆様、大勢様お待ちですので(えっ)、先生のお話をよろしゅうお願いいたします(<笑い>)。

[中略]

- 182 正客07 [連客全員に対して] 皆様、ごめんなさいね、お濃茶ってこうじゃないんですよ。
- 183 亭主11 あっはー<笑い>。
- 184 正客07 でもーね、もう、ね、あの時間にね、<制限が>{<}。
- 185 亭主11 <時間の>{>}節約で。
- 186 正客07 そうなんです。
- 187 亭主11 本当はー、お茶が出るまではね。
- 188 正客07 <はい、もう>{<}。
- 189 亭主11 <あのー>{>}、本当はおしゃべりなんかしちゃいけないそうなんですけど、今日は、時間の節約で。

正客07の発話から分かるように、濃茶席では、茶が出されるまでは静粛にしなければならないという決まりがある。あって当たり前行動は、ディスコース・ポライトネス理論では「無標行動」とされ、無標行動を取った方が無難であろう。しかし、大勢の客を対象に開かれる茶会では、次の席の客が外で待っているため、一席当たりの時間が限られている。正客07は、席が延長されないよう会話を進めたため、濃茶席の規範から逸脱することになってしまう。

茶会は改まり度が高いため、社会的距離(D)や形式からの逸脱の負担度(R)が大きい。ライン53の時点では聞き手と話し手の見積もり差は $-a$ より小さいと予測され、正客07は周りから非難される恐れがある。そのため、ライン53~189のやり取りでは、正客07はルールに従わなかった根拠を挙げ、聞き手との見積もり差を0にしようとしている。聞き手への働きかけとして、「お濃茶ってこうじゃないんですよ」(ライン182)では「不本意を示す」(indicate reluctance)、「大勢様お待ちですので」及び「時間にね、制限が」(ライン184)では「抵抗できない理由を示す」(give overwhelming reasons)、「皆様、ごめんなさいね」(ライン182)では「謝る」(beg forgiveness)、というネガティブ・ポライトネス・ストラテジーが使用されている。

さらに、その後のやり取りは例12-bのように展開される。

例 12-b

[茶会04濃茶席]

- 190 正客07 でもね、初釜に京都へ参りまして(うん)、あのー、先生がねー(ええ)、“もう時間には(うん)限度があるから、時は過ぎるから、お話しするよ”と(うーん)、おっしゃってね(そうですねー)。
- 191 正客07 だから、これ、この時だけは許される、普段のお稽古は皆様きちんとなさってくださいませ。
- 192 亭主11 <笑い>。

例12-bのライン190~191では、正客07はこの場面における逸脱は許容されることを主張し、再び聞き手とのフェイス侵害度の見積もり差の調節を試みている。

「形式的な発話」により表現される社会的規範は、話者がポライトネスを見積もるための基準となる会話の基本状態である。しかし、コミュニケーション参加者の人間関係の調整のために話し手は基本状態から離脱せざるを得ないことがある。例9~11で見てきた「形式的な表現をアレンジした発話」や「雑談」は基本状態から多少離脱する行動ではあるが、話し手と聞き手の見積もり差が聞き手の許容できる範囲内であると考えられる。例12のように話し手と聞き手のポライトネスの見積もり差が大きいと予測された場合は、話し手はポライトネス・ストラテジーを用い、聞き手との見積もり差が0になるよう働きかけることが観察された。

5. まとめ

本稿では、茶席の自然会話データを用い、宇佐美（2001,2002,2003,2008a,b）によるディスコース・ポライトネス理論の観点から形式的・非形式的な言語行動における社会的規範と話者個人によるストラテジーの相互作用を分析した。

量的分析では、「形式的な発話」より非形式的な言語行動である「形式的な表現をアレンジした発話」及び「雑談」が多いことが分かった。また、亭主と正客の親疎関係及び茶席における行動の自由度におけるそれぞれの比較分析からは次の2点が導かれた。

- ① 友人同士の会話より初対面の会話の方が、茶道の規範に従う「形式的な発話」が多かった。また、内輪であることを示す「雑談」は、初対面の会話より友人同士の会話の方が多く見られた。
- ② 茶席における行動の自由度が大きいほど非形式的な行動が増えていた。

茶席における会話は、料理や茶とともにもてなしの手段の一つであり、参加者間の調和確保の目的がある。「形式的な発話」は茶席の会話の「典型的な談話状況」（基本状態）に含まれている。茶席という場においては、「形式的な発話」によって茶道の規範を守ることが求められる。しかし、茶席の会話の目的を達成するために、「形式的な発話」のみでは不十分であり、「形式的な表現をアレンジした発話」や「雑談」、「形式からの逸脱」で見られる話者個人によるストラテジーも必要となる。結果として茶席の会話では「形式的な発話」—「形式的な表現をアレンジした発話」—「雑談」—「形式的な表現をアレンジした発話」—「形式的な発話」というサイクルが繰り返されている。

質的分析で検討したように、話者は有標行動としての「形式的な表現をアレンジした発話」により「形式的な発話」の回避や言い換えをし、「雑談」によるポジティブ・ポライトネスで相手との「共通基盤を主張」していた。「形式的な表現をアレンジした発話」及び「雑談」は、茶席のルールのみならずさまざまな違反ではないため基本状態からの離脱の度合いが大きくなり、聞き手との見積もり差も $-a \sim +a$ の範囲を超えないため、適切な行動と認識されやすい。しかし、明らかな逸脱の場合は、話し手と聞き手のフェイス侵害度の見積もり差が大きいため、話し手はポライトネスのストラテジーを用い、見積もり差を調節していた。ディス

コース・ポライトネス理論では、話し手と聞き手の見積もり差の大きさによりポライトネス効果が決まるとされている。しかし、本研究から、それは瞬時的な決定のみではなく、プラス・ポライトネス効果が求められる場合では、談話レベルで見積もり差を縮小しようとする調整が行われることがあるということが明らかになった。

これまで日本語のポライトネスには、社会的規範による規定が強く、個人によるストラテジーの入り込む余地がないとする主張もあったが、通常よりも形式的な決まりが多い茶席の会話においてさえ、個人のストラテジーによる言語行動が多かった。そして、談話レベルの分析によって、コミュニケーションの中で社会的規範と個人によるストラテジーが巧みに調節されているということが明らかになった。「形式的な発話」により表現される茶道の規範は、茶席の会話の基本状態をなし、話者がフェイス侵害度を見積もる基準となる。話し手と聞き手との見積もり差が大きい場合は、「形式的な表現をアレンジした発話」や「雑談」にみられる個人によるポライトネス・ストラテジーによってその差が縮小される。「形式的な表現をアレンジした発話」や「雑談」が「形式的な発話」より多く見られたことから、「型を守る」ことを重んじる茶道においても、型にはまらないストラテジー的な言語使用が頻繁に行われていることが明らかとなった。

本研究では、日本文化社会において特殊な場面である茶席の会話を用いたが、今後は、より一般的な場面のデータにおいても、本研究結果を検証していきたいと考える。

参考文献

- Brown, P., Levinson, S.C. 1987 *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge [Cambridgeshire]; New York: Cambridge University Press
- Holtgraves, T. 2002 *Language as social action: social psychology and language use*. Lawrence Erlbaum Associates
- Ide, S. 1989 Formal forms and discernment: two neglected aspects of universals of linguistic politeness. *Multilingua* 8 (2-3), 223-248
- Lakoff, R. 1975 *Language and woman's place*. Harper&Row, Publishers
- Leech, G. 1983 *Principles of pragmatics*. Longman
- Usami, M. 2002 *Discourse Politeness in Japanese Conversation. Some Implications for a Universal Theory of Politeness*. Hituzi Syobo.
- 阿部宗正 (2008) 『茶席の会話：裏千家茶道』、世界文化社
- 井出祥子 (2006) 『わかまへの語用論』、大修館
- 宇佐美まゆみ (1993) 「談話レベルから見た“politeness”：“politeness theory”の普遍理論確立のために」『ことば』14、現代日本語研究会、20-29
- _____ (2001) 「談話のポライトネス - ポライトネスの談話理論構想 -」『談話のポライトネス』(第7回国立国語研究所国際シンポジウム報告書)、国立国語研究所、9-58
- _____ (2002) 連載「ポライトネス理論の展開 (1-12)」『月刊言語』31 (1-13、6を除く)、大修館書店
- _____ (2003) 「異文化接触とポライトネス - ディスコース・ポライトネス理論の観点か

ら -」『国語学』54 (3)、国語学会、117-132

_____ (2008a) 「ポライトネス理論研究のフロンティア—ポライトネス理論研究の課題とディスコース・ポライトネス理論」『社会言語科学』11 (1) (特集「敬語研究のフロンティア」)、社会言語科学会、4-22

_____ (2008b) 「相互作用と学習—ディスコース・ポライトネス理論の観点から—」西原鈴子・西郡仁朗編『講座社会言語科学 第4巻 教育・学習』、ひつじ書房、150-181

_____ (2011) 「改訂版：基本的な文字化の原則 (BTSJ: Basic Transcription for Japanese) 2011 年版」

三牧陽子 (2002) 「待遇レベル管理からみた日本語母語話者間のポライトネス表示：初対面会話における「社会的規範」と「個人のストラテジー」を中心に」『社会言語科学』5 (1) (特集「言語の対人関係機能と敬語」)、社会言語科学会、56-74

三田富子 (2003) 『茶席の会話集 亭主の言葉・客の言葉』、淡交社

_____ (2005) 『茶席の会話集 言葉えらびと心くばり』、続、淡交社
『新版 茶道大辞典』、2010、筒井 絃一【編】、淡交社

A study of politeness in Japanese tea ceremony conversation:
An analysis of formal and informal linguistic behavior
from the point of view of Discourse Politeness Theory.

Ekaterina TSOY

Tokyo University of Foreign studies

【keywords】 discourse analysis, linguistic behavior, Japanese tea ceremony
conversation, social norm, politeness strategy

This paper concerns a matter of politeness in formal and informal linguistic behavior in Japanese tea ceremony conversation. The purpose of this study is to analyze a phenomenon of politeness as a result of interaction between social norms and speaker's individual strategies.

The reason for using Japanese tea ceremony conversation is that behavior of speakers is prescribed due to their roles in the ceremony and at the same time some deviation from the norms can also be observed. Thus in Japanese tea ceremony conversation both formal and informal linguistic behavior take place.

We analyzed the data both quantitatively as well as qualitatively.

The quantitative analysis showed that informal utterances as 'small talk' and 'utterances in which formal expressions are modified' were used more frequently than formal ones.

To analyze interaction between social norms and speaker's individual strategies in discourse level we used Discourse Politeness Theory by Usami (2002). In qualitative analysis rephrasing and avoidance of formal utterances were observed. This deviation from the Japanese tea ceremony norms is supposed to be a positive politeness that shortens psychological distance between the speakers. When the deviation is too high, the speaker has a tendency to use politeness strategies to justify his or her violation.

The findings show that in Japanese tea ceremony the speaker is supposed to follow norms, however the usage of politeness strategies is also necessary for establishing good relationship. Thus taking balance between formal and informal linguistic behavior the speaker forms a cycle from 'formulaic utterance' to 'utterances in which formal expressions are modified' and 'small talk', and back to 'utterances in which formal expressions are modified' and 'formulaic utterance'.

Social norms and strategic language usage based on speaker's volition are not contrary concepts. In terms of politeness language should be considered as dynamic system reflecting communication participants' relationship, not just a static form automatically produced by social norms.

エジプト人日本語学習者の聞き取りの問題点

——母音前の撥音を中心に——

Hanan Rafik Mohamed (Cairo University)

【キーワード】 母音前の撥音、拍、音節構造、音声指導、撥音脱落、
単語全体の誤用

1. はじめに

日本語学習者を対象にした第二言語習得に関する研究は、1990年代に入ると急速に進展した。それらの研究で明らかにされたことは、学習者は音声・音韻を習得する過程で母語の影響を最も顕著に受けるということである。(鮎澤1999、長友1995、戸田2001、2006)。

筆者は、アラビア語を母語とするエジプト人日本語学習者の日本語音声・音韻習得について、多岐にわたるさまざまな横断調査と縦断調査を実施し、その分析結果を Hanan (1988, 1999, 2005, 2006, 2008a, 2008b, 2008c) およびハナーン・鮎澤 (2004) で報告してきた。

そこで明らかになったエジプト人日本語学習者（以降は学習者と省略）の聞き取りと発音の問題点を列挙すると、①拗音と直音 (/i/+ や行音) の弁別、②「バ行音とバ行」の弁別、③母音「イとエ」、「ウとオ」の弁別、④長母音と短母音の弁別、⑤母音前の撥音、⑥促音と非促音の弁別、⑦破擦音と摩擦音の「ツとス」、「チとシ」の弁別の7点である。その他に、聞き取りに関しては、① /m/ と /n/、②語中・語末の /g/ と /n/ の二つが、発音に関しては /hi/ の問題があることが分かった。これらの学習者の日本語の聞き取り、および発音の問題の原因のほとんどは、表1で示すとおりアラビア語カイロ方言が影響していることがわかる。

表1 エジプト人日本語学習者の音声・音韻習得上の問題点と原因

	問題点	原因と考えられるアラビア語カイロ方言の特徴
聞き取りと発音	① 拗音と直音の弁別	カイロ方言では音節構造上の規則が許す限り、強勢アクセントを受けない語中の /i/ が削除され、一語の音節数が減る。このため「直音 (/i/+ や行音)」と「拗音」を混同する。例えば、規約 (きやく) → 客 (きゃく)
	② バ行音とバ行音の弁別	音素レベルでは /p/ が存在しない。
	③ 「イとエ」、「ウとオ」の弁別	短母音は音素レベルで「/a/、/i/、/u/」の3種類しかない。
	④ 長母音と短母音の弁別	カイロ方言では強勢アクセントを受けない長母音が短音化される。
	⑤ 母音前の撥音	音節構造と関わりがある。本論文で詳説する。
	⑥ 促音と非促音の弁別	同じ子音の連続は存在するが、音節構造によって語中の1音節内に子音結合が許されない。
	⑦ 「ツとス」、「チとシ」	音素レベルでは破擦音 (ツとチ) がない。

の聞き取り	/m/ と /n/	(原因は不明)
	語中・語末の /g/ と /n/	カイロ方言軟口蓋音 /g/ は、東京方言の軟口蓋音 /g/ とは違って、語中では鼻音化しない。
の発音	/hi/	カイロ方言の /hi/ は、日本語の [çi] (/hi/) のように口蓋音化しない。

本稿では、上記の調査結果の中の、とくに母音前の撥音の聞き取り問題に焦点をあて、①母音前の撥音の誤用、②（同じ単語に含まれている）語中と語末の撥音の難易度、③単語に撥音が一箇所含まれた場合と二箇所含まれた場合の難易度、④母音前の撥音を含む単語全体の誤用について説明する。その上で、「母音前の撥音」の問題点が、アラビア語音節構造に起因していることを示し、撥音の音声指導方法とその実施と成果について報告する。

2. 撥音の問題とその原因

学習者の聞き取りおよび発音について、特に撥音の問題点について指摘したのは Hanan (1988, 1999) のみであると思われる。撥音の問題について Hanan (1988, 1999) の調査で明らかにしたことは、学習者にとって、撥音が母音の前に来たときのみ問題になることである。撥音の拍と、その後の母音の拍が2拍ではなく、1拍になる傾向がある。

例 (1)

たんい (単位) → *たに
かんい (簡易) → *かに
れんあい (恋愛) → *れない

目標言語の音声・音韻上の問題の原因を探るには、音素の対照分析のみでは充分ではなく、音節の対照分析も極めて重要である (Briere, Cambell, and Soemarmo 1983)。Hanan (2008a, 2010) では学習者の、日本語の長母音の問題と「拗音」と「直音 (/i/ + や行音)」の混同の問題が、日本語とアラビア語で許容される音節構造の違いと深く関わっていることを述べた。母音前の撥音が習得困難な原因も、アラビア語カイロ方言の音節構造・音声と日本語音節構造・音声との対照分析から次のように説明できる。

アラビア語の音節の型は、CV、CVV、CVC、CVVC、CVCC がある (C = 子音、V = 母音)。このうち、CV、CVV、CVC は自由に現われるが、CVVC、CVCC は語末にしか現われない (Angoujiard 1990, Anis 1984, Higazy 1978, Husaam 2005, Manaaf 1998ほか)。日本語の音節は6種類である (Itoh 1986)。アラビア語と日本語の音節の種類とその現れ方は、表2のようにまとめることができる (Hanan 2007)。

表2 アラビア語と日本語の音節の種類

項目	アラビア語	日本語
音節の種類	CV, CVV, CVC, CVVC, CVCC	(C)V, (C)VV, (C)VC, (C)VVC, (C)VN, (C)VNC
その内、自由に現れる音節	CV, CVV, CVC	(C)V, (C)VV, (C)VC, (C)VVC, (C)VN, (C)VNC
その内、語の決まった位置に しか現れない音節	CVVC, CVCC	

(Hanan 2007 から再録)

アラビア語の音節は必ず子音で始まり、母音で始まることがない。それゆえ、日本語における撥音と母音の間には本来音節境界があるのだが(N+V)、アラビア語話者にとってはこの母音が音節頭位とは認め難い。加えて、学習者は日本語の拍の長さが習得できていないため、撥音の拍とその後の母音の拍が2拍ではなく、1拍になる誤りを起こしていると考えられる。(例(1)で示されている通りである。)

さらに、日本語では撥音の次に母音が来るとき、鼻母音になる。しかし、カイロ方言では子音または母音が鼻音化する習慣がないため、普段鼻音化を発音しようとするエジプト人は殆どいない。従って、学習者にとっても、鼻音化した母音の聞き取り及び発音の両方が困難となることが考えられる。そして、この習慣は学習者の撥音の聞き取り及び発音に影響を与えると思われる。

3. 撥音の音声指導

母音前の撥音の問題の解決方法として、次のような指導を行った。

1) 学習者に日本語の母音前の撥音について説明し、次のような例を使い、練習させる。

例 (2)

れんあい (恋愛)、てんいん (店員)、らんおう (卵黄) など

2) 学習者に母音前の撥音の誤りの典型的なパターンについて説明し、注意するように指示し、次のようなミニマル・ペアを使い、練習させる。

例 (3)

ぜんい (善意) ⇔ ぜに (銭)

しんあん (新案) ⇔ しなん (至難)

あんい (安易) ⇔ あに (兄) など

3) 日本語の拍について説明し、その長さを意識させるために次のようなミニマル・ペアを使い、練習させる。

例 (4)

ぶんか (文化) ⇔ ぶか (部下)
 おんどり (雄鶏) ⇔ おどり (踊り)
 きんいろ (金色) ⇔ きいろ (黄色) など

音声教育には、学習者の母語がどういった音声特徴を持っているかを把握することが重要である。その特徴を把握し、それを現場の指導に応用できる形で整理することは意味がある(赤木2005, 2006)。この方針から、さらに母音前の撥音の発音練習では、撥音の拍と後続の母音の拍との間に声門閉鎖音をおくように指示した。そのことを次のように表示する。

例 (5)

seN-o-ku → seN-ʔo-ku
 haN-i → haN-ʔi

声門閉鎖音を発音するように指導した理由は次のとおりである。

- 1) 学習者は声門閉鎖音を発音しても、日本語母語話者の耳に聞こえない。
- 2) 母音の拍と撥音の拍の間に声門閉鎖音をおくことによって、それらの2つの拍持続時間のバランスがとれて、日本語母語話者の耳に聞き取りやすい。
- 3) 学習者は鼻母音の発音がほとんどできない。入門期の学習者に、無理に日本語母語話者と同じように発音させると、別の誤りが生じ、日本語母語話者の耳に、話者の意図する語が聞き取れなくなる。母音の拍と撥音の拍の間に声門閉鎖音をおくことによって、多少不自然さがあるが、声門閉鎖音は日本語において弁別的機能を持たないため、日本語母語話者に誤解は生じない。その理由で、学習者に日本人母語話者の母音前の撥音の発音を真似しないように注意する。すなわち、学習者に、日本人母語話者に誤解を生じる誤りよりもコミュニケーション上問題の少ない誤りの方を選択するように指示する。

4. 調査

この節では上記に挙げた音声指導法の効果を明らかにするために、指導前（1回目テスト）と指導後（2回目テスト）を比較する調査を行った。即ち、調査は2回実施された。調査の詳細について以下に記す。

4.1 調査対象者と環境

調査対象者はカイロ大学文学部日本語日本文学科の2012、2013年度の1年生の23名（男性3名・女性20名）である。彼らの平均年齢は18歳で、同学科に入学する段階で、日本語の能

力はゼロである。学習者のほとんどはアラビア語カイロ方言話者である。ただし少数の地方出身者を含む。

調査はカイロ大学文学部日本語日本文学科のラボで行なった。学習者はこのラボで毎週授業を受けているため、その環境に慣れている。学習者に気楽に調査に協力してもらうために実施目的を説明し、調査は試験ではなく、成績に関係がないことを伝えた。

4.2 実験回数・時期とテスト項目

前述したように、調査は2回実施された。1回目(指導前)は、1学期が始まってから2ヶ月目(1学期の半ば)で、2回目(指導後)は3ヶ月目(1学科の終わりごろ)である。1回目と2回目の間は約6週間である。その6週間に「3節」で前述した音声指導などを行なった。

テスト項目は2グループから成っている。グループ1は5語の単語からなり、各単語に撥音が1つ含まれている。単語は「めんえき、ぜんあく、けんお、さんおく、だんあつ」である。グループ2は3語からなり、各単語に2つの撥音が含まれている。単語は「げんいん、しんあん、きんえん」である。

「1節」で前述したように、テスト項目の目的は①母音前の撥音の誤用、②(同じ単語に含まれている)語中と語末の撥音の難易度、③単語に撥音が一箇所含まれた場合と二箇所含まれた場合の難易度、④母音前の撥音が含まれている単語全体の誤用について明らかにすることである。

テスト方法は以下の通りである。各グループとも1回目のテスト(指導前)では、学習者に上述の各単語の発音の録音(CD)を4回聞かせて発音を聞き取らせ、それをひらがなでテスト用紙に書き取らせた。しかし、最後に学習者からもう一回テスト項目の全体を聞いた際の要望があったので、5回目を聞き取らせ修正させた。2回目(指導後)のテストでは、(1回目と違って)2回録音を流すだけで学習者にとっては充分であったと筆者は判断したが、1回目のテストの条件と合わせた。テスト項目の録音は男性の日本語母語話者によるものである。筆者は、各グループに書き取らせたテスト用紙をチェックし、正しくないものを誤用と判定した。

4.3 調査結果と考察

表3と表4はグループ1の語彙テストの結果を示したものである。表3は撥音が1つ含まれている5つの単語を学習者に5回聞き取らせた後に、その発音をテスト用紙にひらがなで書き取らせ、各単語に撥音脱落による誤用が学習者全員の中で何回現れたかを回数で示したものである。表4は同テストにおいて、撥音脱落を含む単語全体の聞き取りの誤用の内容とそれが学習者全員の中で何回現れたのかを回数で示したものである。

表3 グループ1の語彙の聞き取りテスト

撥音脱落の回数（総数：23名×5個の単語＝115回）

単語	1回目（指導前）	2回目（指導後）
めんえき	3回	0
ぜんあく	1回	0
けんお	1回	0
さんおく	3回	0
だんあつ	2回	0
合計	10回（11.5%）	0

表4 グループ1の語彙の聞き取りテスト

全体の誤用の内容とその回数（23名×5個の単語＝115）

単語	1回目（指導前）の誤用内容	回数	2回目（指導後）の誤用内容	回数
めんえき	めんやき（5回） めんげき（5回） みんやき（4回） むんやき、めんいえき、 みにあき、めなやき めんゆき（各1回）	19	めんやき（4回） めんげき（2回）	6
ぜんあく	ぜんがく（18回） ぜんなく（2回） ぜいがく（1回）	21	ぜんがく（7回） ぜんなく（2回）	9
けんお	けんご（12回） けんごう（4回） けっぐ（2回） きんご（1回）	20	けんご（4回） きんごう（2回） きんご（2回）	8
さんおく	さんもく（12回） さんごく（5回） さんのく、さんむく、さごく さもく、さつもく（各1回）	22	さんもく（4回） さんごく（3回） さんのく（1回）	8
だんあつ	だんがつ（13回） だんなつ（6回） だわつ（2回）	21	だんがつ（8回） だんなつ（1回）	9
合計		103 (89.56%)		40 (34.78%)

表3と表4から、次のことがわかる。

- 1) 1回目のテストでは母音前の撥音脱落が11.5%（10回）であったが、2回目のテストではこの問題が完全に改善されている。
- 2) 撥音が含まれている単語全体の撥音脱落率は、1回目のテストでは89.56%であったが、2回目では34.78%にまで下がっている。すなわち、実施された音声指導は有効であった。
- 3) 1回目のテストにおいて撥音が含まれている単語全体の誤用は次のように分析できる。
 - A) 撥音の拍とその後の母音の拍が2拍ではなく、1拍になる傾向がある。

- B) 撥音脱落や拍の数の誤用の問題が現れている。
 C) 撥音のところが促音になっている誤用もある。
 D) 撥音の後の母音が有声軟口蓋破裂音の [g] や有声両唇鼻音の [m] や有声歯茎鼻音の [n] になる傾向も現れている。
 E) 撥音の後の母音が有声硬口蓋音の [j] や有声両唇音の [w] になっている。つまり、撥音前の母音が半母音になる傾向も現れている。

- 4) 2回目のテストにおける撥音が含まれている単語全体の誤用では、撥音の後の母音が有声軟口蓋破裂音の [g] と有声両唇鼻音の [m] と有声歯茎鼻音の [n] になる傾向がみられる。

次に表5と表6は、各単語に2つの撥音が含まれているもので、実施されたグループ2の語彙テストの結果を示したものである。実施方法はグループ1と同様である。表5は撥音が2つ含まれている3つの単語を学習者に5回聞き取らせた後に、その発音をテスト用紙にひらがなで書き取らせ、各単語に撥音脱落による誤用が学習者全員の中で何回現れたかを回数で示したものである。表6は同テストにおいて、撥音脱落を含む単語全体の聞き取りの誤用の内容とそれが学習者全員の中で何回現れたのかを回数で示したものである。

表5 グループ2の語彙の聞き取りテスト

撥音脱落の回数 (23名×3個の単語=69回から)

単語	1回目 (指導前) の誤用の回数		2回目 (指導後) の誤用の回数	
	語中の撥音	語末の撥音	語中の撥音	語末の撥音
げんいん	18回	1回	1回	0
しんあん	5回	1回	1回	0
きんえん	6回	1回	0	0
合計	29回 (42.02%)	3回 (4.34%)	2回 (2.89%)	0

表6 グループ2の語彙の聞き取りテスト

全体の誤用の内容とその回数 (23名×3個の単語=69回から)

単語	1回目 (指導前) の誤用内容	回数	2回目 (指導後) の誤用内容	回数
げんいん	げにん (7回) げえにん (3回) げいん (2回) げぎん、げいに、げぬん、げいにん、げえいん、げんよん、ぎんやん、げんやん、げいねん、げっにん (各1回)	22	ぎんにん (8回) げにん (1回)	9
しんあん	しんがん (12回) しなん (3) しにがん (2回) しんや、しんがあん (各1回)	20	しんがん (6回) しんなん、しなん (各1回)	8
きんえん	きんぎん (5回) きんげん (5回) きげん (5回) きんやえん (2回) きんや、けっにえん、きんごいん (各1回)	20	きんげん (5回) きんむん (2回) けんねん (2回)	9
合計		62 (89.85%)		26 (37.68%)

表5と表6から次のことがいえる。

- 1) 単語に撥音が2箇所含まれる場合は、1箇所含まれる場合よりも学習者にとって困難である。2箇所含まれている方が1箇所よりも難易度が高い。母音前の撥音脱落の誤答率は42.02%であるのに対して、語末の方は4.34%であり、前者の方が後者よりもはるかに上回っているからである。即ち、学習者にとっては母音前の撥音の聞き取りの方が語末の撥音の聞き取りよりも困難なのである。しかし、図3に示すとおり単語全体の誤答率から判断すると、単語に含まれる撥音が1つでも、2つでも、学習者にとっては聞き取りの難易度がほぼ同じといえる。とにかく、母音前の撥音は語末の撥音よりも難しく、単語に母音前の撥音が含まれると、単語全体の聞き取りに影響をする。
- 2) 3つの単語の中で、「げんいん」の誤用数が他の単語と比べてはるかに多い。それは単語が有声軟口蓋破裂音の [g] で始まっていることに原因があるかもしれない。
- 3) グループ2に現れている誤用の傾向がグループ1とほぼ同様であることも明らかである。

そして、グループ1とグループ2の調査結果を合わせたのが、図1、図2、図3である。

図1

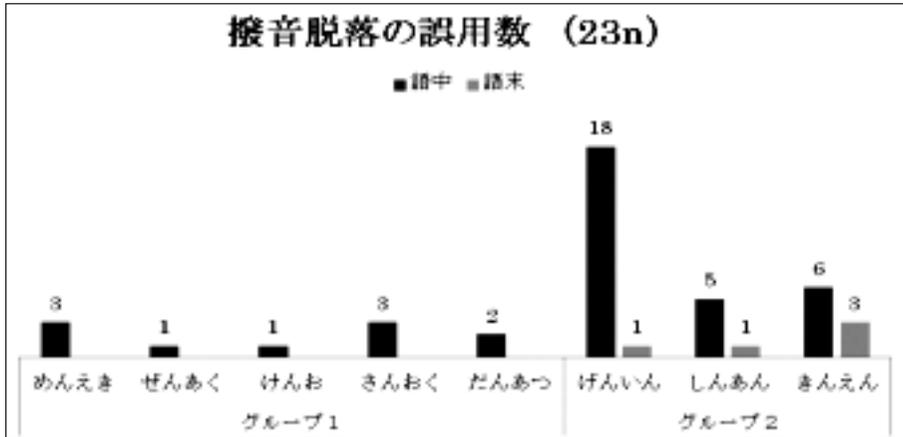


図2

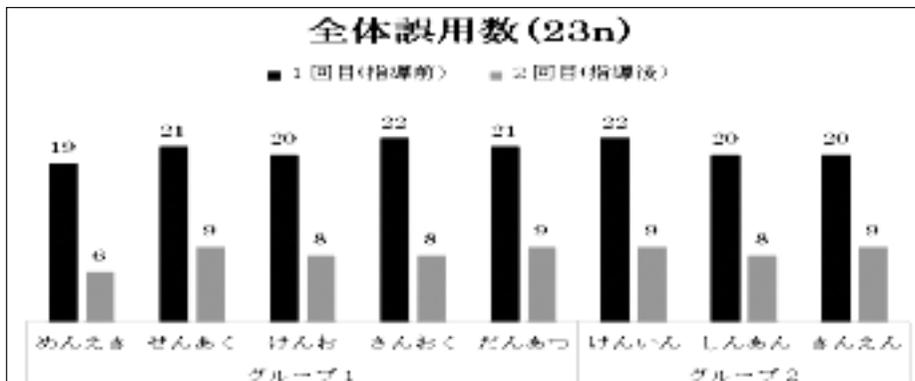
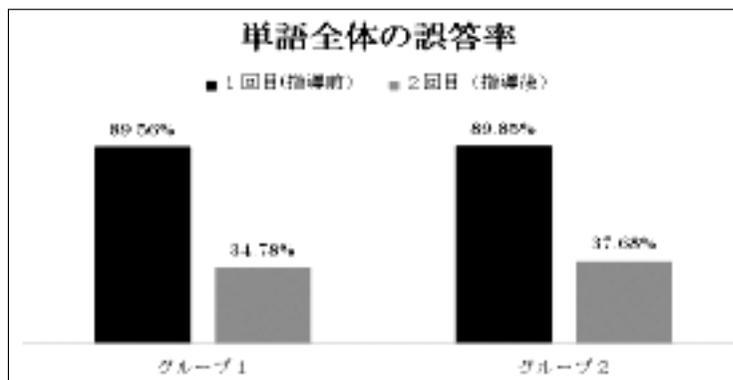


図3



3つの図と表3と表5から、単語に撥音が一箇所、あるいは二箇所含まれた場合の難易度について次のことがいえる。

- 1) 撥音脱落の問題が判明している。それは母音前と語末の脱落問題である。この問題については次のようにまとめられる。

- A) グループ1の各単語には母音前の撥音が一箇所含まれている。そして、1回目のテスト（指導前）における同グループの母音前の撥音脱落の誤答率は11.5%である。これに対してグループ2の各単語には撥音が2箇所含まれており、母音前の撥音脱落の誤答率は42.02%である。すなわち、グループ2の誤答率は前者よりはるかに上回っている。言い換えると、学習者にとって単語に撥音が二箇所含まれる場合は母音前の撥音脱落の問題が発生しやすくなると考えられる。
- B) グループ1とグループ2の母音前の撥音脱落の問題の誤答率は2回目のテスト（指導後）では大分減っている。グループ1はゼロで、グループ2は2.89%である。
- C) グループ2の語末の撥音脱落の誤答率は1回目では4.34%と少なく、2回目（指導後）では誤答がなくなっている。すなわち、学習者にとっては母音前の撥音脱落の問題の方が、語末の撥音の問題よりも困難である。
- 2) 母音前の撥音脱落の問題以外、撥音が一箇所含まれた場合も二箇所含まれた場合も、単語全体の誤用内容とその誤答率はほぼ同じである。
- 3) 2つのグループの2回目の調査において実施された音声指導の効果が現れ、この音声指導方法は有効であった。

5. 結論と今後の課題

日本語学習者の特殊拍の問題を取り扱っている研究は多い（内田 1994、村木・中岡 1990、室井幾 1995、杉藤 1989、助川 1993、戸田 2003など）。しかし、エジプト人日本語学習者の母音前の撥音の問題点はほとんど知られていない。

本研究の調査の結果から、母音前の撥音の聞き取りが単語全体の聞き取りに影響を与えていることが明らかになった。母音前の撥音が含まれている単語の誤用を次のようにまとめることができる。

- 1) 単語の拍数への悪影響。単語の拍数が少なくなる例があれば、多くなる例もある。この問題は学習者の母語の音節構造と関わりがあると考えられる。
- 2) 聞き取りでは、撥音の後の母音が有声軟口蓋破裂音の [g] や、有声両唇鼻音の [m]、そして歯茎鼻音の [n] や半母音になる傾向も現れている。
- 3) 母音前の撥音脱落の問題に関しては、単語に撥音が二箇所含まれた場合は、一箇所含まれた場合よりも学習者にとって困難である。二箇所の方が、一箇所より難易度が高いといえる。しかし、（この問題以外は）単語全体の誤答率から、単語に含まれる撥音が一つでも、二つでも、学習者にとっては聞き取りの難易度がほぼ同じといえる。とにかく、母音前の撥音は語末の撥音よりも難しく、単語に母音前の撥音が含まれると、単語全体の聞き取りに影響をする。
- 4) グループ2の「げんいん」の単語の全体の誤用数は他の単語と比べて多い。それは単語が有声軟口蓋破裂音の [g] の子音で始まっていることに原因がある可能性があるといえる。

5) 6週間にわたって行われた音声指導によって、撥音脱落の問題点と拍数の問題点がほぼ改善された。ただし、撥音後の母音が有声軟口蓋破裂音の [g] と有声両唇鼻音の [m] と有声歯茎鼻音の [n] になる例が少し残ってはいる。すなわち、学習者に対して行われた音声指導方法は有効であったといえる。

なお、2) については次のことが考えられる。2節で述べたように、カイロ方言では子音と母音の鼻音化は避けられるため、学習者の聞き取りではその習慣が撥音の後の母音に影響が出ていると思われる。

そして、4) については、母音前の撥音が含まれている単語の1拍目の子音も聞き取りに影響するかどうかを調べる必要があることが明らかになった。その件について詳しい調査が不可欠だろう。

最後に、5) に関しては次のことが考えられる。エジプト人日本語学習者の、母音前の撥音の問題に対する音声指導方法としては、①学習者が誤りをおかす傾向と、それについての注意点を示す、②拍を意識させて練習する、③撥音がある場合とない場合のさまざまなミニマルペアの例を多く集めて、比べさせて、学習者に違いを区別する練習をさせることが効果的である。

音声指導は学習者の日本語音声習得のために役立つだけでなく、文字教育にも必要なことである(本橋 2012)、Sojima, Shin (1997) はエジプト人日本語学習者にとってのカタカナの問題点についての論文において、カタカナ習得の問題は学習者の聞く力と発音に関係していると述べている(1997:179)。

'The result of our analysis of the errors in writing KATAKANA, for Arabic speaking learners, clearly shows that KATAKANA error are related to the pronunciation ability of learners. So we have to conclude that teaching KATAKANA should be done by combining hearing practice and pronunciation practice.'

今後の課題として、母音前の撥音が含まれている単語の、1拍目の子音も聞き取りに影響するかどうかに関する詳しい調査、文レベルの撥音の問題を調べ、この問題点が文字教育にどんな影響があるかを探る研究も必要である。

参考文献

- Angoujard, Jean-Pierre (1990) *Metrical structure of Arabic*. Foris Publication. Dordrecht-Holland
- Aniis, Ibrahim (1984) *il-aswat il-laghawiya*. Makatabit il-angolo il-misiriyia. Cairo
- 赤木浩文 (2005) 「日本語短期コース中級及び上級クラスにおける音声指導」『専修大学外国語教育論集』、第33号、83-96
- _____ (2006) 「タスクを利用したコミュニケーション的な日本語発音指導の学習効果について」『専修大学外国語教育論集』、第34号、99-115

- 鮎澤孝子 (1999) 「日本語学習者にとっての東京語アクセント」『月刊言語』1月号、70-75
- Briere Eugene J., Campbell Russell N., and Soemarmo. (1983) 'A need for the syllable in contrastive analyses'. *Second Language Learning Contrastive Analysis, Error Analysis, and Related Aspects*. The University of Michigan Press. 63-72
- Hanan, Rafik Mohamed (1988) 「エジプト人日本語学習者の日本語音の認知における難易度の測定」修士論文. 筑波大学
- _____ (1999) 「エジプトのカイロ方言話者による日本語音声の習得」博士論文、カイロ大学
- _____ (2005) 「アラビア語の音声と日本語音声習得上の問題点」『新版日本語教育辞典』(大修館書店)
- _____ (2006) 「エジプト人日本語学習者の東京語のアクセントとイントネーションに関する発音テストと分析」『地域文化研究』No. 4. 89-100
- _____ (2007) 「カイロ方言と東京方言の対照研究－音節の種類、音節構造、およびアクセントの観点から－」*Dar Elibdaa Lilsahaafa wi Elnashir wi Eltawziia* Vol. 40. 63-74, Cairo.
- _____ (2008a) 「エジプト人日本語学習者に対する音声教育－アラビア語カイロ方言の特徴と日本語母音の指導－」『日本語教育研究』、財法人言語文化研究所、第53号、46-64
- _____ (2008b) 「エジプト人日本語学習者に対する音声教育－アラビア語カイロ方言の特徴と日本語破裂音 /p/ の指導－」『東京外国語大学論集』Vol. 76. 241 - 250
- _____ (2008c) 「エジプト人日本語学習者に対する音声教育－アラビア語カイロ方言の特徴と日本語の破擦音の指導－」『日本語教育研究』、財法人言語文化研究所、第54号、42-54
- _____ (2010) 「エジプト人日本語学習者に対する音声教育－「拗音」と「直音 (i/ + や行音)」の混同の問題点とその指導－」『日本語教育研究』、長沼スクール、第56号、93-109
- ハナーン・ラフィック・モハメド・鮎澤 孝子 (2004年) 「エジプト人日本語学習者の東京語アクセント聞き取りテストの結果」*The Bulletin of The Faculty of Arts, Cairo University (Humanities & Social Sciences)* .Volume 64, Number 4, 7-29. (The Faculty of Arts, Cairo University Press)
- Higazy, Mahamud fahimy (1978) *Madikhal ila ilm il-lughah. Dar il-sakafah. Cairo*
- 本橋 美樹 (2012) 「日本語学習者による文字表記の誤用と音声知覚の関連性」『日本語教育論集22号』、関西外国語大学留学生別科、53-62
- Hussam, il-Bihnaaawii (2005) *Il-diraasaat il-sawitiyah inda il-ullamaa il-arab wiil-dars il-sawiti il-hadiis. Zaharaa il-sharq. Cairo*
- Manaaf Mahdi Mohamed (1998) *Ilim il-aswaat il-laghawiya. Word of Books, Bierut, Lebanon*
- 村木正武・中岡典子 (1990) 「撥音と促音－英語・中国語話者の発音」『講座日本語と日本語教育3 日本語の音声・音韻 (下)』明治書院、139-177
- 室井幾世子 (1995) 「英語話者の日本語の特殊拍の知覚と産出に於ける諸問題」『SOPHIA

LINGUISTICA』38、41-60.

Itoh, Junko (1986) Syllable theory in prosodic phonology. Ph.D dissertation. University of Massachusetts.

長友和彦 (1995) 「第2言語としての日本語の習得研究」遠藤織枝編『概説日本語教育』160-179

Sojima Kenji, Shin Kimie (1997) 'The writing problem in the process of learning Japanese for Arabic native speakers'. Bulletin Of The Faculty Of Arts 57. 151-181. Academic Publishing Unit. Cairo University.

杉藤美代子 (1989) 「音節か拍か—長音・撥音・促音」『講座日本語と日本語教育2 日本語の音声・音韻 (上)』、明治書院 154-177

助川泰彦 (1993) 「インドネシア人日本語学習者のアクセントにおける特殊拍の影響」『D 1 班研究発表論集』文部省重点領域研究「日本語音声」平成4年度研究成果報告書, 167-176.

戸田貴子 (2001) 「日本語音声習得研究の展望」『第二言語としての日本語の習得研究』第4号、150-169.

_____ (2003) 「外国人学習者の日本語特殊拍の習得」『音声研究』7巻2号, 日本音声学会 70-83

_____ (2006) 「日本語教育学とは何か—音声教育の視点から」早稲田大学日本語教育研究科博士課程完成記念シンポジウム (早稲田大学)

内田照久 (1994) 「外国人のための日本語音声教育における特殊拍の問題をめぐる基礎的研究の課題 - 音声科学に視座をおいた教育心理学からのアプローチ - 」Bulletin of the School of Education, Nagoya University (Educational Psychology) , Vol. 41, 87-102

Listening Problems of Egyptian Japanese Learners: With special emphasis on the issue of the moraic nasal before a vowel

Hanan Rafik Mohamed

Cairo University

【keywords】 The moraic nasal before a vowel, mora, syllable structure, phonetic guidance, the moraic nasal dropout

In this paper, I discuss the listening problems of Egyptian Japanese learners focusing on the issue of the moraic nasals before vowels. First, I introduce a contrastive phonetic analysis of Arabic and Japanese syllable structure. Second, I am showing that the problem of the moraic nasals before vowels depends on the interference of the mother tongue (Arabic) syllable structure of the learners. Following this, I report a suggestion and practice of the guidance that aims to conquer this problem.

In this paper, I also analyze learners' errors about the moraic nasals before vowels through listening investigations. The number of student is 23 persons who just started learning Japanese in Cairo University. I performed the investigation twice. The first time was in the middle of the first semester, and the second time was at the end of this semester. There is a 6 weeks gap between the first and second investigation. In these weeks, phonetic guidance has been made. The summary of learners' errors is as follows:

- 1) The number of moras in the word are not correct. They are more or less.
- 2) There is tendency that the vowel after moraic nasals turned to [n], [m], [g], [j], [w].
- 3) About the moraic nasal dropout errors, if the moraic nasal is included in two locations of the word, it is more difficult for learners than in the case of one place included. In another word, the two places of moraic nasal are a higher degree of difficulty than one place.
- 4) From the error rate of the whole word, I can say that the moraic nasal before a vowel in word-middle position is more difficult for learners than moraic nasal in word - final position.
- 5) By phonetic practice guidance that have been made over a period of 6 weeks, the problem of moras numbers and the moraic nasal dropout was improved. However, the problem of listening the vowel after moraic nasals as [n] and [g] still remains to some degree.

I conclude that the moraic nasal before vowels affect the listening of the whole word. But phonetic practice guidance of mora in various ways is a good strategy to improve this problem.

中国の大学日本語専攻教育における教師の 言語教育観とその教育の再考 — 四大学の日本語教師への調査をもとに

葛茜(福州大学)

【キーワード】 大学日本語専攻教育、言語教育観、「正しい日本語」観、
個体的能力観

1. はじめに

国際交流基金2009年の調査によれば、中国で日本語を学んでいる83万人の学習者のうち、約6割の53万人が大学機関で学んでおり、世界で最も多い(国際交流基金2010)。中国の大学機関における日本語教育は、専攻日本語教育と非専攻日本語教育に分類されるが、日本語専攻教育はこれまで数多くの日本語人材を輩出し、中国の日本語教育をリードしてきた。90年代の後半から急激に遂げられた中国の大学教育大衆化を背景に、日本語学科を設置する大学の数も、学習者の数も激増してきた。日中両国間の経済や交流がますます盛んになる中、日本語ができる人材へのニーズは今後も高まることが予想されるが、近年大学日本語専攻教育の存在意義に対して、疑問を投げかける声が聞こえてきている(修・李2011)。日本語専攻生の就職難の問題が顕著化し、個々の学習者にとっての、日本語を学ぶことの実利的な意味は薄れてきている。また、日中両国の間に横たわる歴史、政治、社会などの様々な課題が学習者の学習動機、学習意欲、学習効果に大きく影響を及ぼしている。激動する国際・国内社会に向けて、大学日本語専攻教育が担うべき役割や、そのあり方についての再考は喫緊の課題となってきている。

中国の大学日本語専攻教育が直面している現状を打破し、今後の発展に向ける道筋を示すには、これまでどのような教育指針、言語教育観のもとで行われてきたかを把握し、特徴と問題点を顕在化させることはその出発点だと考える。しかしながら、従来の研究は、中国の日本語教育の歴史的な変遷や概況、おおまかな傾向をまとめるものが多い。近年、言語教育政策の視点から大学日本語専攻教育の教育指針、言語教育観を考察した研究は増えている(冷2011、趙・林2011など)が、教師や学習者の視点に立って、実際の教育現場の事情を調査した研究はまだそれほど多くない。本研究は、大学日本語専攻教育を実施している個々の教師に注目し、彼らがどのような言語教育観を持っているかをインタビューで調査する。さらに、結果の特徴や傾向の描写に留まらず、その言語教育観の本質を言語教育政策と併せて考察し、今後の大学日本語専攻教育のあり方を検討するための基礎的知見を得ることを目的とする。

2. 先行研究

2.1 日本語教師が持つ言語教育観

教師の言語教育観とは、教師各自の中にある言語とはなにか、教育とはなにか、言語教育に関するすべての考え方、捉え方の総称である（八木2004）。日本語教育の分野では、教師の自己研修、自己成長の必要性を提起されている同時に、教師が持つ言語教育観も注目されてきた。教師が持つ言語教育観は教師のすべての教育の「はじまり」（細川2002）であって、また、教師の教育実践を自己評価する枠組みとして機能するので、「教師が自らの言語教育観を客観的に把握し、自己の教育実践とともに言語教育観をも検討し続ける重要性は強調されすぎることはない」（八木2004：50）。しかしながら、言語教育観は教師の中に実感とも言えるような形で立ち現れ、簡単に意識化、明確化、言語化できるものではない（武2006）。言い換えれば、言語教育観は教師の言語教育に関する深層的な信念や考え方であるため、表層に現れにくいものである。実際、言語教育観にはどのような枠組みが存在するかはまだ定かではない。その具現化したものとして、教師のビリーフや、教師の資質や、期待される教師像などの視点から調査・考察した研究が挙げられる。

ビリーフ研究はもともと学習者に注目してはじまったものである。例えば、Horwitz（1987）がBALLI（The Beliefs About Language Learning Inventory）という質問調査票を開発し、学習者の学習ビリーフを調査した。Wenden（1991）やCotterall（1995）は、学習ビリーフと自律性の関係や、学習ビリーフの変容などの視点から研究を展開した。その後、教師の教授行為を理解するために、研究の視点は教師にも向けられるようになった。久保田（2009:188）は、教師のビリーフを「教師の思考過程を形作る要素のうち、思考、決断、計画のようなその場での反応ではなく、それまでの経験や知識などの蓄積から形作られる考え方や信念の部分」と定義づけている。日本語教師のビリーフについて、久保田（2006）は、415名のノンネイティブ日本語教師を対象に質問紙調査を行い、構造に重きを置く「正確さ因子」と運用に重きを置く「豊かさ因子」を抽出した。実際の授業において、「正確さ因子」を持つ教師は、ことばの構造、文法説明、技能の訓練を重視することに対し、「豊かさ因子」を持つ教師は、文化教育、教養としての日本語学習を重視すると同時に、実践的なことばの学習も重視しているということである。久保田（2007）は、同様の調査を63名のネイティブ日本語教師を対象に行って比較した結果、ノンネイティブ教師のほうが上記の二つの志向が強く、日本での経験はビリーフの変容を促していることがわかった。さらに、久保田（2009）は、ビリーフに影響を与えるものを質的に調査し、ビリーフの形成と変容には、教師自身が受けてきた教育、自らの学習・生活経験、教師としての研修の経歴などは影響を及ぼしていることを明らかにした。

一方、良い日本語教師とはどんな教師なのか、学習者に期待される教師はどんな教師なのか、日本語教師の資質から調査・考察した研究がある。縫部（2001）は、学習者が教師に、「学習者への心配り」、「教職意識（教師としての自覚や職業意識）」、「教授法の知識と能力」、「日本語の専門知識」といったものを望んでいると述べた。小林他（2006）は、中国の大学の日本語学習者は、教師に高い専門性や指導力を求めるとともに、明るさや優しさといった「人間性」も重視していることがわかった。また、日本語学習者ではないが、上原（2008）は中

国の大学生を対象に「良い先生」について調査した。中国の大学生は「良い先生」を、専門分野の知識、最新の情報に精通するとともに、博識で、啓発的かつ明晰な教授能力を持ち、学生個人を理解・尊重して公正に扱い、ユーモアのセンスを持って友好的で、仕事に情熱的で責任感がある人望・風格に富む教師であると認識している(上原2008:85)。この調査結果は小林他(2006)の結果と共通する部分が多い。また、教師の視点から良い教師像を量的に調査した八木(2004)では、「授業技術」、「学習者支援」、「関係知識」、「授業への意欲」、「授業直結知識」といった五つの因子を抽出した。

前述した教師のビリーフや、学習者、教師の視点から調査した期待される教師像などの研究は、教師ビリーフ、理想的な教師像にはどのような枠組みが存在するのかを示したが、この枠組みの背後にどのような言語教育観が存在するのかということまでは、うかがい知ることが出来なかった。また、言語教育観の動的な姿を描きだすには、量的な研究手法には限界があることがわかった(武2006)。

2.2 言語能力観

前述したように、教師の言語教育観は教師の言語教育のあり方を決定する重要な概念でありながら、教師が持つ深層的な信念や考え方の部分なので、自覚されにくく表層から容易に把握するものではない。本研究は、教師の言語教育観を具現化し、その特徴と傾向を把握して本質を探るために、「教師が持つ言語能力についての考え方」という視点を導入する。なぜなら、「言語教育者のもつ言語能力観が、授業観(どのように教えるか)、テキスト観(どのような教科書で教えるか)、カリキュラム観(どのような授業設計を行うか)、評価観(どのような能力をどのような方法で評価するか)に影響を与える」(川上2005:5)と言われるように、言語教育を通してどんな言語能力を育成しようとするか、言語能力についての捉え方は言語教育のあり方を決定する。つまり、言語能力観と言語教育観は表裏一体のものである(武2006)。また、この言語能力観についての議論は、近年日本語教育は何をめざすべきか、グローバル化した世界における日本語教育の役割に対する再考から展開したものである(細川2011など)。これらの議論の立場は、本研究がめざす中国の大学日本語専攻教育の位置づけや担う役割への再考と合致するので、参考になるものが多いと考える。

では、日本語教育における言語能力についての捉え方はどのように転換してきただろうか。

周知のとおり、1960年代から80年代にかけて、日本語教育はオーディオ・リンガル・アプローチからコミュニケーション・アプローチへと転換してきた。教育の中心は「何を教える」から「どのように教えるか」に、教育の目的は日本語知識の獲得から、日本語によるコミュニケーション能力の獲得に転換してきた。このような言語教育観は客観主義的教育観とよばれ、日本語教育の第1のパラダイム転換と言われている(佐々木2006)。オーディオ・リンガル・アプローチでは、言語能力は言語技能、言語を操作する能力として捉えられたことに対し、コミュニケーション・アプローチでは、言語能力は言語を使って意思を伝達、運用する能力、いわば「コミュニケーション能力」と捉えられた。しかしながら、コミュニケーション能力とは何か、実は日本語教育の分野ではその概念が確立されておらず、日本語教育のめざすものが定まらない原因にもなっている(川上2005)。

1990年代半ばになると、第2のパラダイムへの転換、つまり客観主義的パラダイムから構

成主義的パラダイムへの転換がはじまった。この転換は、行動主義学習観、認知主義学習観から状況的学習観への転換（佐伯1995）と呼応するものである。行動主義学習観、認知主義学習観においては、能力は「状況から切り離すことができる個体に内在する実体」、「単独で精神現象において機能し、しかも理想的状態ではそのまま取り出すことができる」と考えられていた。この能力観は「裸の能力」観（石黒2001:73）、「個体的能力観」とも呼ばれている（樋口2010:56）。しかし、状況的学習観が強調しているように、学習は人が主体的に環境に関わって知識を構成していく過程であるため、個人の能力も具体的な物理的文脈、社会的文脈と深く関係している。つまり、能力と環境の関係性に注目する関係論的能力観への転換が提起された。

日本語教育の分野でも、日本語教育が育成する日本語能力とは何かを、この能力と環境との関係性の中で捉え直そうとする動きが見始めている。館岡（2011）は個体主義的な言語能力観を批判し、日本語能力を「他者と関係性を作りながら他者を理解し世界を理解し自分自身を理解していく」こと、さらに「自己発信することができる」こととしている（館岡2011:41）。川上（2009）は、日本語コミュニケーション能力は客観的普遍的で個人に還元するものではなく、常に変化するという「動態性」、場面や状況に応じて生起する「非均質性」、使用される目的や相手との関係性によって異なる「相互作用性」を有すると提唱している（川上2009:23）。このように、言語能力を静態的かつ個体的なものから、動態的かつ相互作用的な関係性の中で捉えようとする言語能力観のパラダイムシフトが起きていると言えよう。

このように、教師の言語教育観を明らかにするには、教師が言語教育を通して育成する言語能力についての考え方は、重要な参考意見になる。日本語教育における言語能力の捉え方は、言語教育観・学習観の転換を背景に、学習者が持つ静態的かつ個体的なものから、学習者が他者や場面や状況（環境）などと相互作用をする、動態的なものへと転換してきている。本研究では、教師が持つ言語教育観を明らかにするために、先行研究の枠組みを参照し、まず具現化したものとして教師の期待される教師像に対する認識を調べる。それから、言語教育観の本質を探るために、関係性の中の言語能力観の視点を導入し、教師の学習者、学習環境の関係に対する認識を焦点に調べる。

3. 調査

3.1 調査対象者

本研究は、日本語教師が持つ言語教育観について、中国の四つの大学（以下A校、B校、C校、D校と称す）で日本語専攻教育に携わっている日本人教師6名、中国人教師9名を対象に、インタビュー調査を行った。調査対象者のプロフィールは次の表1と表2で示す。便宜上、日本人教師はNT、中国人教師はNNTと表記する。なお、日本語教授歴はすべてインタビュー時点の記録である。調査は2012年の2月から6月にかけて行った。

表1：日本人教師のプロフィール

教師名	性別	年齢	滞中歴	日本語教授歴	所属校	専門	学歴
NT1	男	60代	8年	10年	A校	不明	学士
NT2	女	60代	8年	6年	A校	不明	学士
NT3	男	60代	7年	7年	C校	政治学	学士
NT4	女	40代	2年	2年	B校	教育学	修士
NT5	男	20代	3年	5年	D校	教育学	修士
NT6	女	20代	3年	1年	D校	教育学	修士

表2：中国人教師プロフィール

教師名	性別	年齢	滞日歴	日本語教授歴	所属校	専門	学歴
NNT1	男	30代	4年半	8年	A校	哲学	博士
NNT2	女	30代	半年	4年	B校	教育学	修士
NNT3	女	20代	半年	2年	B校	教育学	修士
NNT4	女	20代	半年	2年	C校	教育学	修士
NNT5	女	30代	10年	1年	B校	経済学	博士
NNT6	女	40代	不明	5年	D校	文学	博士
NNT7	女	30代	3ヶ月	2年	D校	言語学	修士
NNT8	女	30代	6年	2年	B校	教育学	博士
NNT9	女	30代	不明	3年	C校	言語学	修士

3.2 調査内容

上記の調査対象者の、意識化・明確化・言語化されにくい言語教育観を引き出すために、本研究では半構造化インタビュー（村岡2002）の手法を用いた。半構造化インタビューは、調査者があらかじめ質問項目を準備しているものの、調査対象者の意識の流れや内省を重視して、柔軟に対応していく調査手法とされる（村岡2002）。本研究で半構造化インタビュー法を採用した理由は、自然な会話の流れの中で、用意した質問項目をもとに、調査対象者の反応や場面を考慮しながら、言語教育に関する意識や信念などを回想、内省してもらえると考えたためである。

半構造化インタビューは調査対象者個別に1～2時間にわたって実施した。すべての調査対象者から了承を得て、インタビューを録音し、記録はすべて文字化して、質的に分析した。

半構造化インタビューは二つのカテゴリーから展開した。一つ目は、教師の期待される教師像についての認識を調べたものである。二つ目は、いまの日本語専攻教育の現場についての認識を調べたものである。教師は関係性の中の言語能力をどう考えているかを、学習者、学習環境、日本語教育の現場への評価といった三つの視点から探った。主な質問項目は次のとおりである。

(1) 期待されている教師像について

自分は学習者、勤務校に何を期待されているか。教師の役割についてどう思っているか。良い教師とはなにか。

(2) いまの日本語専攻教育の現場について

学習環境・学習者についてどう思うか。いまの日本語専攻教育現場の問題点はなにか。

インタビューは15名という少人数の教師に対して行ったため、ここから出された結論を直ちに一般化することはできないことを理解したうえで、本研究の課題に示唆を与える点をまとめる。

4. 調査結果

以下、調査対象者の特徴的な記述を引用しながら調査結果をまとめていく。

4.1 期待されている教師像について

まず、期待されている教師像についての認識を、日本人教師、中国人教師別に詳しくみていく。

4.1.1 日本人教師の認識

第一は、標準的な日本語で話すこと、わかりやすく説明できることを教師の専門性として認識している。これに関連して、例を取り上げて説明する。教師 NT6は、方言の影響で鼻濁音にならない時があるが、学習者に指摘されたことがあるので、注意してできるだけ正しい日本語の発音で話していた。また、日本語の文法知識や、日本の地理、歴史、文化、最新情報などを学習者の日本語のレベルに合わせて、わかりやすく説明することの重要性を強調した。教師 NT5も、標準な日本語で話すために、自分の方言の影響を避けようと、アクセントを事前に細かく調べて教授に臨んでいると述べた。

第二は、勤務校の日本、日本語に関する授業はすべて教えられるという期待への認識である。教師 NT6はこの期待に対し、率直に「迷惑」だと批判した。教師 NT2も、この「日本人だから全部担当できる」という勤務校側の認識を「日本人への神話」と称し、「事故に巻き込まれた」気持ちであるとまで述べた。つまり、このような日本人教師に対する「絶対的」な信頼は日本人教師に不安を与え、負担にもなっていると言えよう。

第三は、日本人性（平畑2009）への認識である。日本人教師は、学習者にとって、自分が「日本語のコミュニケーションの相手」、「日本についての情報源」、「日本人としてのモデル」の存在であると認識している。海外の日本語学習者は普段日本語を使用する機会が少ないので、日本人教師は、自分が学習者にとって最も重要な日本語のコミュニケーションの相手であることを認識している。また、日本人のモデルとして、日本の文化や、日本人の考え方や、アニメなどの大衆文化の知識を把握し、学習者に提供することの重要性を認識している。平畑（2009）で抽出された海外で活動する日本語教師の資質のうち、「日本人性」という因子がある。下位項目として、「日本人としての自覚／日本の文化や社会文化能力を教えられる／日本への貢献／日本語力／日本事情の知識」が挙げられた（平畑2009:22）。今回の調査は平畑（2009）の「日本人性」因子を裏付ける結果になった。

第四は、幅広く多様な能力や特技を持って、積極的にまわりの学習環境へ働きかけること

の重要性を認識している。教師 NT2、NT6の勤務校では、2009年から日本文化を体験・理解し、日々の学習成果を披露するという目的で「日本文化祭」という活動を毎年行っている。NT2とNT6二人は、文化祭の企画、進行および発表会まですべて熱心に関わり、生け花のような日本文化体験活動や、発表会などにおいて、学習者をリードした。二人の教師は生け花や剣道などの資格あるいは習得経験を持っているため、文化祭で大いに活躍し、学習者と勤務校から高く評価された。つまり、二人の教師は、日本語教育の専門性以外に、持っている特技と能力は大いに役に立ったと言える。また、教師 NT4の勤務校には日本の茶室が設けられおり、大学側は日本人教師を招聘する際、茶道の資格又は学習経験を有することを採用条件の一つとして挙げていることがわかった。また、調査対象者の日本人教師の全員は、できるだけ学習者に日本人のネットワークを紹介したり、日本から持参してきた書物を学習者に渡したり、また自らも現地の日本人ネットワークに参加したりして、学習環境に積極的に働きかけていることがわかった。

このように、調査対象者の日本人教師は教育現場において、自分は「日本語教師」という存在のほかに、「日本人」として、「母語話者」として、「教師」として、勤務校と学習者に多重な役割を期待されていることを自覚していると言えよう。

4.1.2 中国人教師の認識

第一は、高いレベルの日本語で授業ができることを教師の専門性として認識している。この「高いレベルの日本語」というものは、母語話者のような日本語ではなく、きれいな発音で、流暢で、日本人らしい日本語を操ることを意味している。例として、教師 NNT7は、自分が一年生の学習者に、「完璧な教師」としてわかりやすく日本語の文法や単語が説明できること、学習意欲を引き出せることなどを期待されていると述べた。また、日本語学習者としての自分の学習経験や、学習のリソースなどを学習者に分かち合い、学習者の学習支援ができることも学習者に期待されていると述べた。さらに、日本の文化、習慣、歴史などの知識に精通し、日中両国の文化の違いが説明できるといった、「日中両国についての幅広い知識を有する」ことも重要であると指摘した。教師 NNT8、NNT2も共通する認識を示した。

第二は、教師として豊かな「人間性」を持つべきだという認識である。先行研究小林他(2006)、上原(2008)の結果を裏づけに、教師の「人間性」を重視する中国人教師が多かった。例えば、教師 NNT2は、良い教師は「魅力のある教師」と意味すると述べた。教師の「人間性」は、「これまでの経歴が影響している」と指摘した。教師 NNT1は、良い教師について、個性を持って、学習者の能力を総合的に評価できる、常に教育の本来の目的を吟味する教師であると自らの考え方を示した。

第三は、教師は多様な役割を果たすべきだという認識である。これに関して、教師 NNT1は、教師という存在は、時に教師だったり、学習者の友達だったり、「多面性」を持つものであると言った。教師 NNT5は、教師は学生の「模範・手本」として、周到に授業の準備を行うべきだと述べ、日本語だけではなく、日本文化などの背景知識や、人生の生き方までも教えるべきだと認識している。つまり、教師は知識の教授者としての存在だけではなく、学生の人生を示唆し、正しい道へ導く「ファシリテーター」的な存在であるべきことを認識している。教師 NNT7は、これまでの詰め込み教育を反省し、知識を一方的に、画

一的に教え込むのではなく、啓発的な教授法で学習者の学習を支援・助言すべきだと自らの考えを示した。

以上、期待される教師像について、日本人教師と中国人教師は異なる認識を持っていることがわかった。日本人教師は標準な日本語で話すこと、わかりやすく説明できることを、日本語教師としての専門性を認識している。一方、勤務校の日本、日本語に関わる授業はすべて教えられるという期待に負担と困惑を感じる教師がいた。自分が日本人として、学習者にとって、「日本語でコミュニケーションをする重要な相手」、「日本についての情報源」、「日本人としてのモデル」であり、幅広く多様な能力と特技を持ちながら、学習環境に働きかけができるコーディネート能力も期待されていると自覚している。一方、中国人教師も教師としての専門性を認識しているが、その内容は高いレベルの日本語で授業ができることになっている。日本の文化、習慣、歴史などに精通し、中国文化との違いを説明できる幅広い知識を有することの重要性を認識している。また、教師として豊かな「人間性」を持つべきだと考えている。中国人教師の中で、これまでの詰め込み教育を反省し、習得した知識や技能を活用できる啓発的な教授法への転換を重視している人もいた。教師として、学習者に知識を伝授するだけでなく、学習者の学習を支援・助言すべきだと認識している人もいた。

4.2 いまの日本語専攻教育の現場について

この節では、いまの日本語専攻教育の現場に対する認識を、質問項目の主な内容に沿って、学習者、学習環境、現場の問題点の順にまとめていく。

4.2.1 学習者について

学習者について、日本人教師の中では、「勉強熱心」、「教師を尊重している」、「素直」、「まじめ」とプラス的に評価する人が多かった。一方、学習者の「学習動機の低下」、「自己中心的」、「学習目的の不在」といった問題点を指摘する中国人教師がいた。

例えば、教師 NNT5 は、学習者の学習スタイルは高校までの学習経験から受けた影響が強いと指摘した。

[NNT5]：高校までの教育の影響は大きすぎる。模範解答をほしがる。言葉の勉強は模範解答なんかありませんよと、言葉は変化するもので、日本人でも文法の説明がうまくできないと、いくら言っても彼らは模範解答をほしがる。文法重視だね。入門の聴解の授業でも、先生、文法の勉強がしたい、能力試験に受からないと。能力試験は文法中心だから。また、なんでも先生、教えて、教師依存的。

この発言からわかるように、学習者は中学校までの受身的な、教師主導の授業に慣れており、教師依存的、文法の学習は言語学習の最も重要な部分であると考えられる傾向が強い。教師 NNT3 も、学習者の学習スタイルの大きな特徴は、「ひとりで静かに、ひそかに独学すること、暗記暗唱が多用することを指摘した。

学習者の「能力」の問題を指摘する発言もあった。例えば、教師 NT2 は、日本人の学生と比べ、中国人学習者は自分で考え、問題を発見する「考える力」の欠如を指摘し、中国の

教育制度の影響だと分析した。中国人教師 NNT5 は、自分のクラスでグループ活動を実施したときの「つらさ」を述べた。やや長いが、引用する。

[NNT5]：(グループ活動) 私が無理やりにやった。最初学生はすごく反発していた。高校までの伝統的なやり方は、教師が教えるのは王道でしょう。学生からメールもあったよ、このようなやり方だと受け入れられないって。12年間の教育はずっとそうだったから、やはり先生教えてくださいって。(中略) 一人で静かに書きながら覚えることが大好きでね。そして、同じ寮に住んでいる四人を一つのグループにして、話し合いながら勉強する、楽しく勉強する、早く高校までの勉強のやり方から脱出するようにした。一ヵ月半を過ぎたら、学生の作文の中で、この学習の方法は記憶よりは印象深いと、いい評価をもらった。一番の問題は、先生は前に立って教える、学生は下でノートをとる、彼らはこのような授業の形式に慣れていることです。

このように、学習者はテストに合格するために一生懸命暗記・暗唱し、一人でひそかに独学するという学習スタイルが定着されていると言える。学習者同士が助け合う、教え合うような協働活動を導入するには、学習者の言語学習観を変容することが前提となるという示唆を得た。

4.2.2 学習環境について

90年代後半から始まった中国の大学教育拡大政策によって、在学する大学生が急増した。学生を収容するために、ほとんどの大学は郊外で新しいキャンパスを作り、そこに大学まるごと、あるいは一部の学部、学年ごとに遷移するように、「旧校区」(旧キャンパス)、「新校区」(新キャンパス)と称する二つのキャンパスを抱えている。新キャンパスは町から何十キロも離れた郊外にあって、周辺の設備や交通もそれほど整えていない場合が多い。教師は町に住居を構えているため、通勤に往復2時間以上もかかる人は少なくない。学生は基本的にキャンパス内で学習、生活している。

このような学習環境について、教師は日本語学習の立場からどう考えているだろうか。次に示す発言の例のように、学習環境の良し悪しよりも、学習者が積極的に学習環境に働きかけるかどうか重要であると認識している教師が多かった。

[NNT2]：確かにここの学習環境は、交通が不便で孤立的で言語学習には向いていないかもしれません。日本語でコミュニケーションをする機会も少ない。教師としていろいろな機会を作ろうと努力はしています。しかし、よく考えたら、別に町に住めば機会が増えるというわけではない。やはり学生は学習の意欲があるかどうか、つまり日本人と交流したい、話をかけてみたいという意欲があるかどうか重要です。

[NNT5]：日本語コーナーのような活動をやります。留学生を招いて、一緒に何か活動をするような。少ないけど、一応チャンスとして提供しています。問題は、ある学生が言ったように、留学生が来たら、ちょっとくらい交流ができて、すぐ沈黙になって、何をしゃ

べればいいかわからない。やはり自身の日本語の蓄積が足りないから。日本人とどうやってコミュニケーションをするか、またどうやって関係を維持して深めていくか、このようなコツは知らない。教師はチャンスを作るけど、学生もチャンスを探していると思うが、問題は知り合ったら、何を話せばいいかわからない、まず、自分で日本語能力を向上させることが重要だ。

つまり、現在の学習環境は日本語の学習にとって決して恵まれているとは言えないので、教師は、学習者に日本人と接触する機会を提供することはもちろん重要だが、学習者の日本語能力を向上させることが前提だと認識しているのである。日本語コーナーのような直接日本人と交流する機会を活かし、ネットワークを広げていくことは、学習者個人の日本語のレベル、積極性にゆだねられていると認識している。現状では、学習者は教師が提供した機会を十分に活かせたとはいえない。

4.2.3 教育現場の問題点について

調査対象者に、現在自分が携わっている日本語専攻教育現場の問題点について尋ねた。インタビューの回答から、連携が乏しいという指摘が最も目立った。以下、学校間の連携、学校内の連携、科目間の連携、教師間の連携に分けて詳しく述べていく。

まず、同じ日本語学科を設置する大学の間、情報の交換をはじめ、ほとんど交流していないことを、多くの教師に指摘された。

つぎに、同じ大学のなか、日本語専攻（学部）と他学部、他専攻の間に、連携が乏しいと指摘された。中国の日本語専攻教育の目的について、学習指導要領の『教学大綱』においては、堅実な日本語力による異文化コミュニケーション能力のほかに、社会の需要と就職に有利な法律や貿易や金融などの、実用的な専門知識を有する「複合型日本語人材」の育成を掲げられている。具体的に、日本語専攻のほかに、経済や貿易など他学部の講義を履修して単位を取得し、二つの専攻を取得する「複合専攻型」、従来の日本語学科の中に「国際ビジネス」や「経済貿易」などのような二つの専攻を開設する「専攻併設型」、日本語のほかに、もう一つの外国語（ほとんど英語）専攻を有する「双外国語型」、複専攻として経済貿易や金融などを履修する「副専攻型」がある（譚他2008）。しかしながら、この「複合型日本語人材」の内実や、また教育のあり方などについて、十分な議論をされないまま、大学が各自のニーズと状況で自主判断にゆだね、教育の現場では試行錯誤が繰り返されている現状である（皮2005）。教師 NNT1は、このような学校内の連携は学習者個人の自主判断に一任され、教師は「何もできない」と述べた。

科目間の連携の問題は、日本語専攻のカリキュラムの構造に関わる問題である。専攻日本語教育の科目として、「精読」、「会話」、「作文」などの科目が多く設けられているが、これらの科目の間、十分に融合しているとは言い難い。例えば、教師 NT4は、日本語の授業はバラバラに行われ、使用教材の間にも統一性がないと指摘した。自分が担当した「会話」の授業において、未学習の文法項目が多いため、授業の半分以上の時間を使って文法項目の説明に当てざるを得ないと述べた。つまり、「精読」、「会話」など技能別に科目を設置されているが、各授業がバラバラに授業目標を立てて進められていることが多く、科目と科目をど

う接続するかは明確ではないと言える。

日本人教師も中国人教師も、教師間の連携が乏しいと指摘した。例えば、日本人教師NT6は日本の大学院を卒業してすぐ中国の大学に就職した。新人教師の彼女は、熟練教師の授業を見学したいと希望していたが、実現できなかった。中国人同僚と学習者、教授活動についてもっと意見交換をしたかったと述べた。教師NNT7も同様に、教師間の連携の欠如を痛感し、この現状は重複作業、時間と学習リソースの浪費にも繋がっていると警告している。

このように、学習者について、日本人教師は「勉学熱心」、「教師を尊重している」、「素直」、「まじめ」などと、プラス的に評価していることに対し、中国人教師の中には、学習者の「学習動機の低下」、「自己中心的」、「学習目的の不在」などの問題点を指摘する人がいた。学習者は文法の学習は言語学習の最も重要な部分だと考える傾向が強い。学習者は高校までの受身的な教授法から脱出できず、教師主導の授業に慣れており、教師依存的であると教師に指摘された。郊外にある大学キャンパスの学習環境は、日本人との接触機会が少ないので、コミュニケーション能力の育成には決して恵まれていない。教師は日本語コーナーのような機会を設け、できるだけ学習者に日本人と接触する機会を作り出している。しかしながら、教師はあくまでこれらの機会を提供し、この機会を生かして日本人ネットワークを広げていくことは、学習者個人の問題であると認識している。現状では、学習者は学校、教師が提供した機会を十分に活かせたと言いがたい。その原因は学習者個人の積極性や、日本語能力の問題などがあると指摘する教師がいた。日本語専攻教育の現場にはいろいろな問題が存在しているが、連携が乏しいということが目立つ。日本語専攻や日本語学部を有する大学間の連携が乏しい。実際の日本語専攻教育のあり方、およびそれに伴う学校内の連携について、まだ議論を重ねている段階で結論に至っておらず、各大学が自主判断している状況である。また、「精読」、「会話」のような異なる授業目標を持つ科目を設けられているが、各科目の間をどう接続して相互作用を行うかは明確ではない。教師間の連携も欠如していることがわかった。

5. 考察

以上、中国の大学日本語専攻教育における教師の言語教育観を明らかにするために、教師の期待される教師像、いまの日本語専攻教育現場についての認識をインタビューで調査した。この節では、インタビューの内容からわかった教師が持つ言語教育観の本質を、先行研究の知見を参照しながら分析・考察していく。

結論を先に述べる形になるが、インタビューの内容から、日本語教師は、「正しい日本語」を追求する、日本語能力は訓練で獲得できる学習者個体の能力、といった二つの言語教育観を持っていると考えられる。

5.1 「正しい日本語」観

一つ目は、「正しい日本語」を追求するという言語教育観の存在である。

前述したように、中国の大学日本語専攻教育の現場においては、日本人教師は自分が日本

人のモデルとして、学習者に「正しい日本語」を求められていることを認識している。この日本人教師が「規範としての日本語」、「完全な日本語」のモデルとして望まれていることは、すでに多く指摘されている（平畑2008など）。日本人教師は、「会話」や「日本概況」のような専門性の高い授業をまかせられ、日本人なら日本、日本語に関するものすべてを教えられるはずだという「日本人信仰」さえも存在する。一方、中国人教師は、日本人教師のような完璧な日本語でなくても、きれいな発音で、流暢で、ネイティブに近いハイレベルの日本語で授業を行うことを、日本語教師の専門性の一つとして認識している。つまり、教師は「正しい日本語」で授業を行い、学習者に「正しい日本語」を伝授すべきだと認識している。教師が持つこの「正しい日本語」観は、学習者の学習観にも影響を及ぼしていると考えられる。教師 NNT5の、学習者が模範解答を求め、反復練習、暗記暗唱を多用するという発言は、その現われのひとつだろう。また、板井（1997）が中国の日本語専攻生37名を対象に行った調査でも、学習者は正確な日本語の獲得と使用を非常に意識していると指摘した。楊（2008）が中国の6大学の日本語専攻生を対象に行った調査でも、共通する結果が得られた。

しかしながら、この「正しい日本語」観は果たして問題はないだろうか。

「正しい日本語」とは「日本人のような正しい日本語」を意味する（牲川2006）。そもそも、日本人の日本語はなぜ「正しい日本語」とされてきたのだろうか。日本語を外国語の教科として教育する場合、体系的に把握することが必要とされ、自然に「日本人の国語」、「国語の体系性」が意識されたことが理由のひとつだと考えられている。日本で国語として教える際に使用する学校文法も、自然に教育上の権威、文法の規範とされることになった。この「日本人の国語」という意識を強めれば強めるほど、「正しい日本語」や文法規範は絶対的なものになっていくだろう。しかしながら、教室で「正しい日本語」を教える（学ぶ）ことは、「日本人こそが日本語の正統な話し手である」という特権意識に基づき、非日本人の日本語は逸脱として排除される」ことに繋がると指摘されている（牲川2006）。「正しい日本語」を追求するクラスは、「表面的には目標を持った真面目なクラスのように見えてもその内実は『正しい日本語』を最終目標とするカリキュラムに支配された死んだクラスになる」（佐藤2007：25-26）。教師は「正しい日本語」を絶対の真理として目標化すると、自らの教室理念を作り出すことができなくなる。この「正しい日本語」を追求する言語教育観は、教師／学習者を相互的に従属する主体として規定してしまい、「非母社会成員としての学習者に当該『社会』への同化、適応を強制する危険性が極めて高い」（佐藤2007：26）。三代・鄭（2006）も、「正しい日本語」を教えることは、常にネイティブスピーカー／ノン・ネイティブスピーカーという差異の構造を作り上げ、社会的不利益を被る可能性があり、コミュニケーションを阻害することも起きると指摘した。また、この言語教育観のもとで、規範モデルとしての教師が学習者に「規範」を教え、学習者の「規範」の把握度を評価することになり、教室での教師と学習者の「教える人対教えられる人」、「評価する人対評価される人」という関係性も助長していることになっている。

さらに、多くの教師が指摘したように、この「正しい日本語」を求めるために、学習者は暗記暗唱を多用している。言葉の習得において、正確さを求めるために暗記暗唱が多用することはどんな問題を生じるだろうか。横山他（2011）は、発音の化石化、応用力の欠如、過剰な正確志向、心理面の苦痛を生じると指摘している。暗記によるアウトプットは自由なア

ウトプットではないので、現実の言語使用場面に求められる即興的な産出力や、出会ったことのない場面を制御する応用力の養成には繋がらない。過剰な正確志向は、対人のコミュニケーションに臆病な学習者を育ててしまう可能性がある。また、インターアクションを伴わない暗記暗唱学習が応用力、流暢さの欠如に結びつき、「独話に強くて対話に弱い」学習者を生む可能性が高い(横山他2011:22)。今回の調査では、中国人教師は学習者のコミュニケーション能力の欠如を指摘したが、その原因はどこにあるかを言及しなかった。この暗記暗唱を多用することは大きな原因ではないかと考える。

5.2 「訓練で獲得できる学習者個体の日本語能力」観

二つ目は、日本語能力は訓練で獲得できる学習者個体の能力という言語教育観の存在である。

中国の日本語専攻教育の現場では、教師も学習者も努力して日本語能力を獲得することを重視している。しかしながら、この「努力」は学習効果の是非に関係しながらも、あくまで学習者個人のものとして捉えられている。インタビューであげた教師の、学校側、教師が提供した日本人ネットワーク作りの機会をどのように広げていくことは、あくまで学習者個人の問題であるという認識は、この個体的能力観を表していると考えられる。冷(2005)の調査でも同じ傾向がみられ、教師は言語知識の定着作業はあくまで学習者が授業外で行うことと認識しており、教師が伝授した知識を理解し、個人の運用能力に転換できるかどうかは学習者個人の問題であるとされている。

また、中国の大学日本語専攻教育の特徴を言語教育政策の視点から考察した先行研究では、学習指導要領の『教学大綱』においては、五技能(聴く・話す・読む・書く・訳す)の訓練の重要性、および教師の主導的な立場は強調されている(冷2011)。例えば、基礎段階(一年二年)の『教学大綱』では、「言語知識の伝授と基礎技能の訓練を重視すべきである」と記している(『基礎段階教学大綱』2001:7)。また、「理解能力を訓練することによって、学生の迅速に、独立的に思考する能力を育成することができる」(『基礎段階教学大綱』2001:6)と述べられ、「思考力」も訓練によって育成できるものと考えられている。実際の教育現場においては、教師は言語知識の伝授と言語技能の訓練に腐心し、学習者は模倣、繰り返し練習、暗記暗唱で言語知識の定着と技能の獲得に力を注いでいることも、多くの先行研究で指摘されている(冷2005など)。本研究で明らかになった、日本語能力は訓練で獲得できる学習者個人のものという教師の言語教育観は、言語教育政策から受けた影響が大きいのではないかと推察できる。

では、日本語能力は教師主導による訓練を実施すれば獲得できるものだろうか。日本語能力の獲得および効果の良し悪しは、学習者個人の「努力」にゆだねるという個体的能力観には問題が生じないだろうか。さらに言えば、日本語の授業は言語知識の伝授と技能の訓練に重点を置かれ、学習者は「正しい日本語」を求めるために暗記暗唱を多用することは、教育目標の異文化コミュニケーション能力が育成できるだろうか。周知のとおり、コミュニケーションというものは人と人のやりとりであって、事前に用意した内容をそのまま復唱して産出することはコミュニケーションとは言えない。また、川上(2009)で提唱したように、能力は「動態性」、「非均質性」、「相互作用性」を有している。つまり、日本語能力は個体から

切り離して独立に存在するものではないので、相手や場面や状況などとの関係性の中で捉えなければならない。教師は授業で言語知識の伝授、技能の訓練のみを重視し、既習知識の定着や融合などはすべて個人の努力に委ねること、学習者は授業外でどのような学習環境と関わっていることも個人個体のものとし、日本語能力の向上はあくまで個人一人の努力に帰すことには問題があるのではないだろうか。これは学習者を学習環境から切り取って学習者の日本語能力を評価することではないだろうか。教師は、日本語能力の育成を個人レベルで捉えるのではなく、学習者の日本語能力を関係性の中で捉え、さらにこの関係性の中で、日本語能力を育成するにはどのように支援すればいいかを考えるべきではないだろうか。もし言語の習得は教室内の知識の伝授、学習者個体の学習だけに単純化されてしまうと、異文化コミュニケーション能力を育成するどころか、学習方法の偏りによって、画一的な人を育成する結果になってしまう恐れが大きいと筆者は危惧する。

前述したように、教師が持つ言語教育観は、教師の教育のあり方を決定する存在である。本研究で明らかになった日本語教師が持つ二つの言語教育観は、中国の大学日本語専攻教育が直面している問題を解決し、今後の発展の道筋を模索するには再考する余地が大きいと考える。そのため、まず、日本人教師も中国人教師も自らの言語教育観を意識しなければならない。中国人教師は、自分自身の言語教育観はどのようなもので、なぜそれが形成されてきたのか、自らの教育実践にどんな影響を及ぼしているかを、自己、同僚などの他者と対話して、俎上に載せて議論をしていくことを望まれる。日本人教師は中国の現場にどんな言語教育観があるかを意識し、自分の言語教育観と中国人教師との違いに気づき、違いが生じた背後にある原因や背景などを探ることが必要だと考える。また、教師は、自らの言語教育観を学習者に明確に伝え、学習者が持つ言語学習観との間にズレがあるかどうかを確認し、自分の言語教育観と学習者の学習観との合意を形成することを目指すべきである。より効果的な教育実践を行い、学習者の学びを促進するには、このような教師と学習者の教育理念の整合性を図らなければならないと考える。

6. おわりに

本研究では、中国の大学日本語専攻教育における日本語教師の言語教育観を調査し、特徴と傾向をまとめ、その本質を考察・検討した。日本語教師は、「正しい日本語」を追求する、日本語能力は訓練で獲得できる学習者個体の能力、といった二つの言語教育観を持っていることが明らかになった。さらに、言語教育政策と併せて考察し、その問題点を指摘した。

教師の言語教育観は自覚されにくく、また、教師の過去の学習経験や教育現場の事情などから受ける影響が大きい。本研究は、期待される教師像と言語能力観に対する教師の認識を切り口に、教師が持つ言語教育観を調査・考察したことにとどまっている。今後は、教師が持つ言語教育観をより多角的に把握し、それに基づき実際の現場でどのような教育実践が行われているのかを調べ、中国の大学日本語専攻教育を改善するための可能性と方法を探っていきたい。

謝辞

調査を実施するにあたり、調査対象者の先生方から多大なるご協力をいただきました。また、査読委員の先生方から貴重なご助言をいただきました。記して感謝申し上げます。なお、本研究は、中国福建省教育厅社会科学研究一般项目「日语专业《教学大纲》及教师的教學理念的研究」(2013年、課題番号 A13059S、研究代表者：葛茜)の研究助成による成果の一部である。

参考文献

- Cotterall, S. M. (1995). "Readiness for autonomy: investigating learner beliefs." *System*, 23 (2), 195-205.
- 葛茜 (2012) 「中国の大学日本語専攻教育は何をめざしているか－『教学大綱』の分析から」『日本語・日本学研究』2 東京外国語大学国際日本研究センター pp.33-45
- 樋口太郎 (2010) 「能力を語ること－その歴史的、現代的形態」『新しい能力は教育を変えるか－学力・リテラシー・コンピテンシー』 松下佳代編著 シネルヴァ書房 pp.45-78
- 平畑奈美 (2007) 「海外で活動する日本人日本語教師に望まれる資質－グラウンデッド・セオリーによる分析から」『早稲田日本語教育学研究』第10号 早稲田大学大学院日本語教育研究科 pp.31-44
- _____ (2008) 「アジアにおける日本語母語話者教師の新たな役割－母語話者性と日本人性の視点から」『世界の日本語教育』18 国際交流基金 pp.1-19
- _____ (2009) 「海外で活動する日本人日本語教師に望まれる資質の構造化－海外教育経験を持つ日本人日本語教師への質問紙調査から」『早稲田日本語教育学』第5号 早稲田大学大学院日本語教育研究科 pp.15-29
- 細川英雄 (2002) 『日本語教育は何をめざすか－言語文化活動の理論と実践』明石書店
- _____ (2011) 「日本語教育は日本語能力を育成するためにあるのか－能力育成から人材育成へ・言語教育とアイデンティティを考える立場から」『早稲田日本語教育学』第9号 早稲田大学大学院日本語教育研究科 pp.21-25
- Horwitz, E. (1987). "Surveying Student Beliefs about Language Learning." In Rubin, J. & Wenden, A. (ed.) *Learner Strategies in Language Learning*. Prentice-Hall, 119-129.
- 石黒広昭 (2001) 「アーティファクトと活動システム」『実践のエスノグラフィ』 茂呂雄二編 金子書房 pp.59-95
- 板井美佐 (1997) 「言語学習についての中国人学習者の BELIFES - 上海復旦大学のアンケート調査より」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』12号 筑波大学留学生センター pp.63-68
- 川上郁雄 (2005) 「言語能力観から日本語教育のあり方を考える」『リテラシーズ』1 くろしお出版 pp.3-18
- _____ (2009) 『「移動する子どもたち」の考える力とリテラシー－主体性の年少者日本

語教育学』川上郁雄編著 明石書店

川野俊之・金田智子編著 (2009) 『日本語教育の過去・現在・未来－第2巻「教師」』凡人社

小林明子・中川良雄・馬場良二・鹿内馨・折坂貴美子・韋立新・王霜他 (2006) 「学習者が求める日本語教師の行動特性 (5)－中国の大学生の場合」『日本語教師に必要な特質、資質に関する国際調査』研究代表 縫部義憲

国際交流基金 (2010) 『海外の日本語教育の現状 日本語教育機関調査・2009年概要』国際交流基金

久保田美子 (2006) 「ノンネイティブ日本語教師のビリーフ－因子分析に見る『正確さ志向』と『豊かさ志向』－」『日本語教育』130号 日本語教育学会 pp.90-99

_____ (2007) 「ノンネイティブ日本語教師のビリーフの研究」2006年度明海大学応用言語学研究科博士論文

_____ (2009) 「ノンネイティブ日本語教師のビリーフの要因－インタビュー調査から共通要因を探る」『日本語教育をめぐる研究と実践』水谷信子監修 凡人社 pp.185-210

冷麗敏 (2005) 「中国の大学における「総合日本語 (精読)」に関する意識調査－学習者と教師の回答を比較して」『日本言語文化研究会』創刊号 政策研究大学院大学日本語言語文化研究会 pp.59-73

_____ (2011) 「关于高等学校外语教育理念的研究与探索—以《高等院校日语专业基础阶段教学大纲》为对象」『日语学习与研究』2011 (2) 『日语学习与研究』編集委員会 pp.99-106

三代純平・鄭京姫 (2006) 「「正しい日本語」を教えることの問題と「共生言語としての日本語」への展望」『言語文化教育研究』5 早稲田大学日本語教育研究センター 言語文化教育研究会 pp.80-93

村岡英裕 (2002) 「質問調査：インタビューとアンケート」『言語研究の方法』J.V. ネウストプニー・宮崎里司共編著 くろしお出版 pp.125-142

縫部義憲 (2001) 「日本語教師の成長プログラム」『大学日本語教員養成課程において必要とされる新たな教育内容と方法に関する調査研究報告書』日本語教員養成課程研究委員会 pp.21-28

縫部義憲・渡部倫子・佐藤礼子・小林明子・家根橋伸子・顔幸月 (2006) 「学習者が求める日本語教師の行動特性の構成概念」『日本語教員養成における実践能力の育成と教育実習の理念に関する調査研究 平成16年度～平成17年度科学研究費補助金基盤研究 (B) 研究成果報告書』(研究代表：中川良雄、課題番号：16320068)

_____ (2010) 「日本語教師が基本的に備えるべき力量・専門性とは何か」『日本語教育』144号 pp.4-14

皮細庚 (2005) 「学科建设和人才培养目标」『日语教育与日本学研究论丛』第二辑 北京師範大学編 民族出版社 pp.33-41

佐伯胖 (1995) 『「学ぶ」ということの意味』岩波書店

佐々木倫子 (2006) 「パラダイムシフト再考」『日本語教育の新たな文脈－学習環境、接触場面、コミュニケーションの多様性』国立国語研究所編 アルク pp.259-283

- 佐藤正則(2007)「教育=学びのための実践に向けて-「正しい日本語」観はどのような主体を構築しているか」『言語文化教育研究』6 早稲田大学日本語教育研究センター 言語文化教育研究会 pp.18-36
- 牲川波都季(2006)『「共生言語としての日本語」』という構想-地域の日本語支援をささえる戦略的使用のために』『「共生」の内実』三元社 pp.107-105
- 武一美(2006)「日本語教師の言語教育観とその意識化-大学院生を対象とした縦断的事例研究から」『早稲田大学日本語教育研究』第9号 早稲田大学大学院日本語教育研究科 pp.65-76
- 譚晶華・杨拙人・王建宜・陆留弟・杜凤刚(2008)「日语专业的发展」『高校外语专业教育发展报告1978-2008』pp.279-325
- 谷部弘子(1999)「中国の大学における日本語教育の質的变化-言語教育と専門性」『日本語教育』103号 日本語教育学会 pp.99-108
- 館岡洋子(2011)「協働による学びがはぐくむことばの力-「教室で読む」ということをめぐって」『早稲田日本語教育学』第9号 早稲田大学大学院日本語教育研究科 pp.41-49
- 上原麻子(2008)『中国人学生の授業観・教育観-国内学生と留日学生を対象に』広島大学高等教育研究開発センター
- Wenden, A. (1991). *Learner Strategies for Learner Autonomy*. Prentice Hall Europe.
- 修剛(2008)「中国高等学校日语教育的现状与展望-以专业日语教学为中心」『日语学习与研究』2008(5)『日语学习与研究』編集委員会 pp.1-5
- _____ (2011)「转型期的中国高校日语专业教育的几点思考」『日语学习与研究』2011(4)『日语学习与研究』編集委員会 pp.1-6
- 修剛・李運博(2011)『中国日本語教育概覧1』外語教学与研究出版社
- 八木公子(2004)「現職日本語教師の言語教育観-良い日本語教師像の分析をもとに」『日本語教育論集』20 国立国語研究所 pp.50-59
- 楊峻(2008)「グループワークの経験が中国人学習者の言語学習観に及ぼす影響-日本語専攻主幹科目の受講生を対象とする実証的研究」『世界の日本語教育』18 国際交流基金 pp.113-131
- 横山紀子(2005)「第2言語教育における教師教育研究の概観-非母語話者現職教師を対象とした研究に焦点を当てて」『国際交流基金日本語教育紀要』1 国際交流基金 pp.1-19
- 横山紀子・久保田美子・阿部洋子(2011)「暗記暗唱に働く認知プロセス-第2言語習得研究の観点からの考察」『日本言語文化研究会論集』第7号 政策研究大学院大学日本語言語文化研究会 pp.17-29
- 趙華敏・林洪(2011)「教学理念的变迁对中国大学日语教育的影响」『日语学习与研究』2011(4)『日语学习与研究』編集委員会 pp.64-73
- 中国教育部高等学校外語專業教学指導委員会日語組(2000)『高等院校日語專業高学年段階教学大綱』大連理工大学出版社
- 中国教育部高等学校外語專業教学指導委員会日語組(2001)『高等院校日語專業基礎段階教学大綱』大連理工大学出版社

The View of Language Education from Teachers for Japanese Major in Chinese Universities:

A Survey Based on the Interview and Investigation of Teachers
from Four Universities

Qian GE

Fuzhou University

【keywords】 Japanese Majors education, language education beliefs,
correct Japanese, individual competence

This paper intends to investigate the trends, characteristics and the essence of the language education beliefs of Japanese teachers who are working in Chinese universities. As its cutting point, a study was carried out on the view towards 'the image of expected teacher' and linguistic competence from 6 Japanese teachers and 9 Chinese teachers in 4 universities. Two language education viewpoints are found from the study. One is that the teachers are expected to pursue 'correct Japanese', and the other is linguistic competence, as learner's individual competence, can be obtained through training. Thus, this paper offers some basic knowledge for future examination of Japanese Majors education methodology in Chinese universities.

事理一致の政事

——『民間省要』の思想的研究——

篠原将成(国際基督教大学大学院博士後期課程)

【キーワード】 田中休愚、民間省要、事理一致、剣術、職分論

はじめに

田中休愚は享保七年(1722)に成島道筑を通じて幕府に上書『民間省要』¹(以下『省要』)を提出した。休愚はその中で民政の問題点を指摘し改善策を提示している。休愚によると、幕府による民政は「民間」の実情を把握しないままになされているために、効果的でないばかりか、それにより新たな問題も生じているという。「民間」とは、休愚が自身について「小子初民間に生まれまた民間に終る」²というように、休愚が生きた生活空間をすべてを含むものである。『省要』の議論は、主に「事」と「理」の二項対立により構築され、事とは地方の経験・知識と現状認識で、理とは政治や具体的な政策の理論や原理であるとひとまずいえるだろう。現状の民政は理のみにより行われているために、具体的な地方の次元においてきたときには種々の齟齬が生じている。今こそ事を民政に活かし、両者を合わせた「事理一致」の政治が実現されなければならない、というのが休愚の主張である。

このように、事を「ワザ」と読ませ、さらに理との「一致」を説く用法は、特徴的なものと思われる³。『省要』における事理一致に言及したものとして鎌田道隆の研究があるが、考察の中心に据えてはいない⁴。管見では、事を「ワザ」と読ませ、事理の兼備の主張が頻出するのは、近世の芸道書、その中でも武芸の剣術書であり、享保期以降には事理一致という語も散見されるようになる。そこで本論文は、田中休愚の『民間省要』における「事」・「理」・「事理一致」という語を芸道思想との関わりから捉え直したい。

-
- 1 本稿では田中休愚著、村上直校訂『新訂民間省要』(有隣堂、1996年)を使用する。
 - 2 『省要』198頁。宮崎安貞も『農業全書』「凡例」で「予立年の後ゆへ有りて致仕し、民間に隠居し農事を業とせり」とある(宮崎安貞『農業全書』岩波書店、1936年、25頁)。
 - 3 宮内庁書陵部本には事に「ワサ」のルビはふられていないが、『新訂民間省要』の底本である平川家本(川崎市市民ミュージアム所蔵)と『省要』序の下書きと思われる『見聞録序』(同所蔵)にはルビがふられている。村上は書陵部本を献上本としているがその根拠が示されておらず、書陵部本には「嵯峨支流渡辺文庫」(和泉伯太藩渡辺家)、「必読書蔵」(不明)の蔵書印が重ねて捺されており、いずれかが消印と考えられ、「必読書蔵」の印主が判明しない限り断定はできないだろう。(「はじめに—『民間省要』と田中休愚『省要』」)。
 - 4 鎌田は、事とは「一八世紀初頭における農村の現実である」とし、理とは「農政の理論・理屈」と理解できているが、この先で、理の内容は「得失損益上下ともに利有」ということでなければならないと解釈している(「近世日本の在野的農政思想—その基本理念の分析を中心に」『日本史研究』89号、1967年5月)48頁)。「得失損益上下ともに利有」とは、『省要』の序の言葉だが、この状況は事と理を合わせた「事理一致」の政治が達成されたときに結果としてもたらされるものであり、理自体の内容ではない。

『省要』を扱った先行研究では、主にその土地政策、定免制と田畑売買自由化が焦点として論じられてきた。一連の土地政策が上層農民に有利な提言だったのか、あるいは全百姓の利害を代弁したものだったのかが研究史上の争点となった。前者の評価に大石慎三郎⁵、鎌田⁶、佐藤常雄⁷らのものがあり、後者には林基⁸のものがある。高橋光二⁹や青木美智男¹⁰などは両者に対し、ともに一面的な評価であり、休愚は階層的に領主と下層農民の板挟みの状態にあり、その社会的位置に即して評価すべきであるとした。深谷克己¹¹は青木の評価を引きつつ、休愚の発言自体は全百姓の立場を代弁しようとしたものであったが、結果的には上層農民の利益となるものだったと、これらを整理した。

土地政策とならび研究者の関心を引いた休愚の主張に、一種の諮問会議設置要求がある。林は、享保期初期に一介の農民から「全国的全身分的な政治監察機構の構想」が提出されたのは「驚異にあたいする」として「議会制思想の先駆」と評価している¹²。宮沢誠一も「幕藩制国家の支配イデオロギーに対する、上層農民の立場よりする最初の、かつ体系的な批判」だとし¹³、同様に高橋も「農民の政治意識発達」をそこに見いだし¹⁴、深谷は絶対王政への一過程としての評価を与えている¹⁵。また、若尾政希は『太平記秘伝理尽鈔』などの読書による政治的言語の形成が『省要』のこうした議論を可能にしたと指摘しており、実際に休愚も同書へ言及している¹⁶。

本稿では事理一致の用例を芸道との関わりで検討していくが、これまでの職分論研究では芸道との関わりから職分を捉えてはいない。例えば、平石直昭は近世日本の職業観を〈生業〉型、〈職分〉型、〈天職〉型の三つに分類しているが、そうした視点は乏しい¹⁷。また、主に

-
- 5 大石は休愚を「寄生地主のイデオログ」としている（『封建的土地所有の解体過程』御茶の水書房、1958年）113～114頁。
 - 6 休愚が「作得る土地こそ農民の宝であるという立場から定免制を要求し、田畑売買における利を肯定して田畑の投資価値を失わせる年貢の増徴に反対しているのは、貧農層をも含めた農民層一般の利害というよりも、上層農民の利害の主張とみる方が妥当である」と述べている。（鎌田、50頁）。
 - 7 佐藤常雄『『民間省要』—地方役人の訓戒書』（大石慎三郎編『日本史小百科—〇農村』近藤出版社、1980年）。
 - 8 林は「勤労農民」の立場からの為政者批判と評価（『享保と寛政』〔『国民の歴史』16、文英堂、1976年〕175頁）。
 - 9 高橋光二「田中丘隅の思想の歴史的位置」（民衆史研究会・編『民衆史研究』第十九号、1981年）。
 - 10 青木美智男「第2編近世4 近世相武の農政家」（神奈川県県民部県史編集室編『神奈川県史 各論編3 文化』神奈川県、1980年）415～424頁。
 - 11 深谷克己『百姓成立』（塙書房、1993年）60頁。
 - 12 林、178頁。
 - 13 宮沢「幕藩制イデオロギーの成立と構造—初期藩政改革との関連を中心に」（『歴史学研究』別冊特集、1973年、114頁）。
 - 14 高橋、63頁。若尾政希は「民政構想—武士のみが治者であるという（身分制に起因する）常識を超越するような一をふくむ政治的提言が、民間の側からなされたのである」と評価している（若尾「享保～天明期の社会と文化」〔大石学編『享保改革と社会変容』日本の時代史16、吉川弘文館、2003年〕291頁。同「近世前期の社会思想」〔『政治社会思想史』新体系日本史4、山川出版社、2010年〕253頁）。
 - 15 深谷「田中丘隅」、167頁。この他に休愚の俳諧活動に近代性を見取りその経済思想を評価したものに小室政紀の評価がある（『草莽の経済思想—江戸時代における市場・道・権利』御茶の水書房、1999年）。
 - 16 若尾「享保～天明期の社会と文化」291頁。『省要』213頁。
 - 17 〈生業〉型とは「自己および自己が属する家族の生活手段を得る手立てとして、職業ないし一般に労働を理解する見方」である。〈職分〉型とは「官職体系のなかで自己に与えられた役割を通じた政治の上長への奉仕、あるいは一般に対世間的な義務の遂行という立場から、各自の職業を意味づける見方」で、「社会生活の再生産に必要な部分的機能の遂行」の意識が強い。〈天職〉型とは「普遍的な「天」の理念、ないし実質的にその内容をな

職分論研究で争点となってきたのは、平時における武士の存在意義と、商行為における利潤と商人の存在意義である。佐久間正は、職分論を新たに創出された兵農分離後の世襲的身分制を軸とした「泰平の御世」にふさわしい社会編成原理あるいは各身分の社会的存在意義の模索であると定義し、それには年貢収奪と幕藩制支配秩序を維持するための支配イデオロギーという側面と、「庶民の思想的自覚」の反映という側面があったと評価している¹⁸。このように思想史における職分論研究では近世の職を芸能・芸道との関わりから捉えようとする関心は薄い。

先行研究では休愚の階級や階層が問題となっていた。これから見るように「事理一致」に類似した用法は花道、茶道、剣術などの諸芸能の書に見られ、恐らく禅に由来するものである。ナジタ・テツオは『懐徳堂』でJ・G・A・ポーコックによりながら、言説における概念の活動について次のように述べている。

概念の活動は、見たところ関係のない文脈や舞台で新しい意味を形成する。社会的かつ地理的境界線を横切るような観念の運動あるいは「漏れ出し」によって、重なり合う概念上の空間が形成される。そのことは相互的な依存の可能性や、他の場合に考えられるよりもずっと広い社会的「参加」の可能性を示唆している¹⁹。

休愚は、農業や川崎宿の経営を生業とし、俳諧などを趣味とし、晩年は代官として奔走した人物である。そして『省要』を執筆した時点の休愚は、川崎宿の役職を退いた一回の百姓にすぎなかった。だからといって、休愚が使用した言語を、彼の身分・階級・階層に閉じ込めることはできないだろう。本稿では休愚の発言を武士／百姓・町人、支配者／被支配者、都会／地方といった既成の区分で区切ることはせずに、事理一致が「漏れ出し」、切り拓いた概念上の空間を描きたい。

本論に入る前に休愚の略歴と『省要』の構成を紹介したい²⁰。休愚は寛文二年(1662)に武蔵国多摩郡平沢村に武田家臣を先祖とするという百姓の窪島家に生まれた。農業の傍ら絹織物の行商を営み、やがて川崎宿の名主で本陣・問屋役も務める田中兵庫家に養子縁組された。その後、養父の跡を継ぎ本陣の当主となり、名主・問屋役も兼任した。この間には六郷川の渡船権を獲得したり遊女屋を設置するなどして川崎宿の財政を立て直した。正徳元年(1711)には役職を猶子に譲り自身は引退し、その後江戸に遊学して荻生徂徠や成島道筑の門に学んだ。享保五年(1720)になると『省要』執筆にとりかかり、翌年九月下旬頃に脱稿、さらにその翌年、将軍の奥坊主である道筑を通じて『省要』を公儀に献上した²¹。村上によ

す人民全体の利益の見地から、職業を意味づける立場」であり「各自の仕事は「天命」ないし「天職」だという理解、あるいは仕事を通じて「天」に奉仕するという目的観が支配的である」という(平石直昭「近世日本の〈職業〉観」〔東京大学社会科学研究所編『歴史的前提』現代日本社会4、東京大学出版会、1991年〕47～51頁)。

18 佐久間正「職分論の形成とその特質」(『徳川日本の思想形成と儒教』ペリカン社、2007年)472頁。

19 ナジタ・テツオ、子安宣邦訳『懐徳堂—18世紀日本の徳の諸相』(岩波書店、1992年)16～17頁。

20 休愚は『省要』の他にも『走庭記』『統夢評』『玉川堂稿』『治水要方』『冠帯筆記』などの著作を残している。『走庭記』(享保四年)は子孫へむけた自叙伝で、『統夢評』(同8年)は奢侈に流れた世評を論じたものである。『玉川堂稿』(同年)には歌会で詠まれた休愚の歌を取録している。

21 村上「はじめに」、青木「近世相武の農政家」、深谷克己「田中丘隅—地方功者の民政技術」(永原啓二他編『人物編近世』講座日本技術の社会史別巻1、日本評論社、1986年)。

ると、これには町奉行大岡越前守忠相の推挙もあったといい、提出は周到に準備されていたようである²²。休愚は『省要』提出の翌八年には川除御普請御用を命ぜられて十人扶持となり、十四年にはその功勞により支配勘定格に任じられ三十人扶持となり、いわゆる代官として三万石の領地を管轄した。しかし、そのわずか数ヶ月後に江戸の役宅で六八歳で没している。子の休藏も三万石の支配を任され、家はその後代々幕臣として仕えた²³。

『省要』は乾・坤の二部から構成され、それぞれ七巻、八巻の合計十五巻からなり、その内容は税制、治水、宿駅、普請、農業など多岐にわたる²⁴。乾之部では、巻之一と二は主に地方に関する百姓経営や税制、巻之三は普請、巻之四は村経営、巻之五は「百姓四季産」として百姓の一年を描き、巻之六と七では国家論と四民の役割について解説している。坤之部では、巻之一から四までは主に宿場に関する事柄、巻之五では再び普請について、巻之六では農村を訪れる鷹匠、巻之七では四民以外の者たち、最終巻である巻之八では仏教・神道、遊郭、天変地異などを扱い、巻後半部分では徳川氏による支配についての休愚の歴史認識が披露される。坤之部は『国家要伝』として別に伝えられていることから、実用書としてのその質の高さをうかがわせる。

第1節 『民間省要』における事理の用法

第1項 国家と職

まず、事理の考察に入る前に、事理論の前提となる「職」と「国家」の関係についてみたい。坤之部巻之一では主に社会の構成員として果たすべき「職」について語り、第一の「四民御治世の慎みの事」では社会の起源と現在の歴史的状況を描いている。休愚は軒袁などの中国の伝説上の皇帝に言及しながら、社会に文明がもたらされ発展していく様子を描いていく。上古はいまだ原始的な社会であるため仁義はいまだ存在せず、ただ道があるのみで、自他の区別もない。ものの所有という概念もないため、「慎ミ」や争いは生じていなかった。だがやがて「物ニ主有て後諍論始り、軍戦起ル」こととなり、是より人間、己を慎を以第一とす」る世の中となった。そしてこの軍戦を治めたのが「土」であったと言う。

当時士なくして豈ニ一日も国土の泰キ事有なんや。士ありて国治り、農有て国ニ耕ス。士農をはなれて何ぞ国家の名あらんや。工商其中に交りて互ニ国家を助け給ふ。能其慎ミを慎されハ、其国を失ひ、其家を破ル。万の罪、己より出て己ニ帰ス。古しへよりの格言なり²⁵。

今の時代には士なくして国家が安泰であることはないという。士がいてこそ国が治まり、農

22 村上直「田中休愚と『民間省要』の献上」（川崎市史編纂委員会編『川崎史研究』第六号、1995年3月）。

23 深谷、137頁。

24 この他には上中下の三編十五巻からなる一橋大学附属図書館蔵本、静岡県立図書館蔵本、川崎市森本家本などがある。

25 『省要』203頁。

がいて耕作をし人々を食べさせる。士農こそが「国家」の基本であり、工・商もそこに参加し国家を支える。士農工商それぞれの民に国家において果たすべき職が課せられている。休愚は、士農工商という四民を軸に国家を構想しており、この引用には休愚の世界観が端的に現れている。

「是より人間、己を慎を以第一とす」とは、士農工商それぞれの民が職に励みそれを果たすことといえるだろう。だが「万の罪、己より出て己ニ帰ス」とは、どういうことだろうか。前文の「能其慎ミを慎されハ、其国を失ひ、其家を破ル」とは、四民が職分を果たさない場合には国は滅び、個々の家も滅びるという意ととれるが、それにつづいて、自己が犯した罪は自己に帰すと述べている。己から出た罪が、国家の滅亡ではなく、自己(家)の破滅を招くと警鐘し、読者を戒めている。修身齐家治国平天下と説くものの、結局、重点は、国家ではなく、家のレベルに置かれている点は注意すべきだろう。

では、「職」はどのように遂行されるのだろうか。「四民猶能父の業を勉て身を治メ、齊_レ家、^(終カ)纒りを慎ム事の全キ人はすくなし」と現状を批判し、さらに「其職を慎、勤て国土の用具たるべき処に、其志何そ是ニ反するヤ」²⁶と嘆いている。ここで注目したいのは休愚の現状批判ではなく、「国土の用具」という箇所である。休愚は国家・社会運営の不可欠な一部として、個々人が職分を果たすことを求めている。つまり、職を果たすとは、具体的には「国家」にいかにして資するかということであり、休愚は社会的な有用性の観点から社会構造を理解しているといえよう。「職」の総体としての「国家」という社会観^{ワザ}が議論の前提に置かれているのである。国家を職の体系と捉え、その職の遂行の過程で事が析出される。このようにして取り出された事^{ワザ}は、政事の一般的な理解である理と統合されなければならない。これが基本的な休愚の主張である。

第2項 事理一致の用法

『省要』には以下のように「事理一致」の用例が四例見られる。(傍線筆者)

- ① 安貞か書、只百姓稼穡の損益に理を専ら書て、百姓朝夕の渡世に力不足、事^{ワザ}の不叶事を漏らす。千技万芸、事理一致ニ不_レ調和して、何そ其極ニ至へけんや。故ニ密ニ雖_レ下_レ筆、其事微にして国家の器とするに不足。稼の事ハ夫子すら不_レ如_レ老農ニ_レ。²⁷
- ② 「富士山の宝永噴火により諸大名に普請が命じられたが」金空しく商客の有となりて、御慈愛の御心、民中へ不届事こそ口惜けれ。此郡中大分ニ広キ間の事なれば、其中ニハ相応の智・仁・勇を兼、地利を察し、天の時を考へ、得失損益の道理・事理一致の弁へ有て、人を和せしむるの用ルニ足ル者も有なん。〔中略〕是能国を知て、いまた国の智を自由に執用ル事不能の時節といはん。²⁸

26 同書、202頁。

27 同書、2頁。

28 同書、80頁。

- ③ 聖慮従是巡見の法を改て、賓客をして揚ケ用ハ、事ハ賓客の外ニ諸国を巡ル見聞ニ委く、理ハ官吏の内ニ安座する智慧ニ祥(詳)に事理一致にして、何そ君道の美ならさる事あらん。²⁹
- ④ 上智ありといへと一人なり、下愚なりといへと千万人なり。上の命令は理なり。下の行ふ処は事なり。事理一致にあらすして何そ事毎ニ的中する事あらん。³⁰

まず①から見てみたい。休愚と思われる「桑門某」による「民間省要序」からの引用で、ここには『省要』執筆の目的が示されている。宮崎安貞『農業全書』には百姓の農業についての「理」しか説かれておらず、百姓の家の経営については不十分である。社会に「事」が活かされていないという事実が、描かれていないのだ。事理が一致しなければ、すべてのことがその極みに至ることはできない。したがって、安貞は『農業全書』を人知れず著わしたが、それは「国家の器」とするには不十分である。農業のことは孔子ですら老農にかなわないというのではないか。このように執筆の意図を述べている。老農の箇所はおそらく『論語』によっていると思われる。

樊遲、稼ぼんちを学ばんと請ふ。子曰く、吾老農に如かずと。圃かを為ることを学ばんと請ふ。曰く、吾老圃こうほに如かずと。樊遲出ず。子曰く、小人なる哉樊須や。(「子路第十三」)³¹

孔子は五穀を作ることに關しては老練な農夫には敵わないし、野菜を作ることに關しても老練な畑作りには敵わないという。為政者には為政者としての役割があり、自ら技術を学ぶのではなく、技術をもつ者を用いることを説いている。為政者に事の採用ワザを求める『省要』の内容とも合致するだろう。

②では、宝永四年(1707)の富士山噴火後大名に命じられた御手伝普請について述べた箇所である。普請は、商人が下請けとなり実施されたが「御慈愛の御心、民中へ不届事こそ口惜けれ」と公共事業の資金が民間にまで流れてこないことを批判している。さらに、請負人が普請先の在方の事情に通じていないために、有効な工事となっていないことを指摘し、「国の智」つまり在方の事情に詳しい人材を雇用することを求めている。「とかく其所の地方功者の官人を出シ、幾度も考へさせ、吟味熟しての上ニ其仕様を相極メ、其所へ定請負ニ言付て大成得益有事多し」と、その在地の「地方功者の官人」に普請を計画・実行させ、その在地の百姓を動員する³²。そうすることで、彼らが直接関わる地域のため、その分精を出すであろうし、現金収入ともなる。「国々難所の大普請、其所々の者の智恵・異見を執用て足らざる事有んにハ、功者の官人をして定役とし、十年も式拾も其年ニして事をなさんニ、丹練せすと言事あらし」と、民間の事を生かし役人にもその土地に通じることを求めている³³。

29 同書、194頁。

30 同書、455頁。

31 吉田賢抗『論語』新釈漢文大系1(明治書院、1960年)279頁。

32 『省要』86頁。

33 同書、93頁。

そして次のように述べている。

明君上ニ立時ハ賢良の臣、必下ニ出ル事、古今天地の常なれハ、山野ニ隱賢、無キしもあらし。³⁴

明君が統治すれば、良い家臣が必ず下に現れる。「隱賢、無キしもあらし」とは、つまり、休愚自身をも含めて述べているのだろう。もちろんこうした提言は、百姓として、本陣の主として、宿場の名主・問屋として活躍した休愚の実生活が要請したものであるだろう。

そして③は、諮問会議創設の提案に続く箇所である。

世に其身の一生涯を能治め、禄有て物を欲する心なく、智・仁あらましニ兼備し、万事ニ亘り且卑賤の事を知て、世上ニ望なく其志を遂ケ、国土の為に身命をなけうち、誠を尽して世に望なき人を四十人撰出して用へし。³⁵

公儀の直参から五人、大名の家臣から五人、僧侶から五人、農家より十五人、商家より十人を選出し、半数を全国へ巡検に回らせ、残り半分の者たちを公儀評定衆の常設の諮問会議とすることを提言している。士農工商から工は省かれ、僧侶が加えられている。国家の基本は士・農にあり、商品と貨幣を動かす商も国家運営に不可欠な重要な要素である。寺檀制度も統治と深く結びついている。そして「巡見の法」を改正し、有能で世間のために尽力を惜しまない人材を登用すれば、彼らの諸国巡見により事はより詳しく得られ、幕閣の知識である理と一体となることで、「事理一致」となり、理想的な治世—「君道之美」—が実現されるだろうと述べている。そもそも国家が、職や家職により明確に分業がなされ社会が機能するのなら、このような諮問会議は無用だろう。たえず変化する世の中に対応した政事が求められていたのだろう。

④では「上智ありといへと一人なり、下愚なりといへと千万人なり。上の命令は理なり。下の行ふ処は事なり」と、恐らくこの箇所も『論語』に拠っている。「上」の政策・制度は理であり、下が行うのが事である。したがって、上下、事理を一致させて政事に臨まなければ、治世は実現できないというのだ。上下が一体となり、事・理を兼備することではじめて「事理一致」という理想的な政治が実現されうる。休愚は、事のみでなく理の必要性も説いているが諮問会議の構成員について「万事ニ亘り且卑賤の事を知て」いることを要件に入れてるように、『省要』は主には「下」の事を「上」つまり為政者に知らせるために編まれたといえよう。

では、事とは具体的にどのようなものなのだろうか。「自序」にはこうある。

近世博識の人、所々ニ民間の書を残して世の器とすといへと、或ハ職位の勢・文才の力を頼、ひたすら理を専らにして下賤の事に不_レ亘、民間地方の沙汰に及てはあたらざる

34 同書、414頁。

35 同書、184頁。

説多し。譬ハ文民の道、千能万芸、唯理を先ニして事を後にするにひとし。豈に臨^テ其^ニ場^ニ能^ス弁^ス其^ノ用^ヲあらんや。此書ハ是一事不^レ執^シ-用他説^ニ、自手中の業、又ハ目前の事理を書者也。³⁶

近年、国家に貢献しようと民間のための書が多数著されたが、それらは理ばかりを説き「下賤の事」に通じていないため、実地には適用できない。どうして「其場」と対峙し「其用」を弁えないのかと休愚は訴える。休愚が卑下する「下賤の事」を「国家の器」とするために『省要』は書かれたのであり、『省要』で展開される事とは「下賤」つまり休愚が暮らす民間で得た「自手中の業」であるという。

では、理とはなんだろうか。「博識の人」が書いたものは、「職位の勢・文才の力を頼」み、「下賤の事」を欠く。これが理と呼ばれている。別の個所には、最近の税制は「一向ニ地方の事に粹からず、算筆・職位の威力ニまかせ青表紙の稽古ニ地方を売ルの客、唯理のミを専らにして民ニ偽りを教ルの根元と知るへし」とある³⁷。「青表紙」とは儒学の経書や浄瑠璃の稽古本を指し、つまりここでも、理とは、事を伴わない実践性を欠いた理論・論議だということができるだろう。

また『省要』において事との対比で理が言及されるとき、それは主に武士を批判する場合に用いられる。

生れながら高位大祿の人、国に政務をとれば皆以俗ニ言野暮と呼ぶ文字のこたく一生家ニ暮して他を見る事不能、万事ニわたらず、卑賤の事をしらすして卑賤の事を決断す。豈ニあたる事あらんや。³⁸

祿の高い武士の家に生まれ、「野暮」という言葉のように、一生を家に暮らし民間の実情に疎い。それにもかかわらず民間の行政を執り行う。これでは有効な政策を打ち出せるはずがないと批判している。さらに、そうした輩は「其理のミ明かなりとおもひて」³⁹ 現実の状況を顧みずに、身分の権力により自分の決断を押し通してしまうという。武士を「野暮」とまで罵っているように事の主張とは、武士への批判でもあるのだ。以上から、為政者である武士が所持するのが理で、「民間」の「卑賤」の者たちが所持するのが事であるという構図が浮かび上がる。主に事とは日々の渡世の中で体得していくものであり、論理的には職を遂行する者により占有されるものである。農に関して、士の者は理しか知りえず、事は農という職を営む者がその職の遂行の間にしか知り得ない。『省要』で述べられる事とは、それゆえに論拠となるのだ。

休愚は、奢侈に流れたいわゆる元祿文化の世と質素な同時代を比較することで、歴史的かつ複眼的な思考を養ったようである。彼によると近年武蔵野の開発が進んだという。徳川家

36 同書、4頁。

37 同書、38頁。

38 同書、194頁。

39 同書、194頁。

康の関東入国の折にはまだ武蔵野は「四面皆曠野たり」と聞いていたが、「予か年六十二して五十年の間見るが内ニも、江都の四面五六里か間の空地、家と成、田となりて今鎌を立るの透間なし」という状況になり、このため耕作に必要な稔の供給や、耕地に畔を立てるのに、支障が出ているという。また、休愚は「夫レ万物の理ハ一得一失なり」と語る。元禄の世のように社会に貨幣が潤沢に流通していれば、人心は浮つき驕るが、どのような飢饉が来ようとも餓死者が出ることはない。一方で、適切な流通量が維持されないのなら、比較的規模の小さな飢饉でも餓死者が発生する。「金銀と言物たにあれハ、縦如何様のき、んにも米穀ハ得易し」⁴⁰と持論を展開している。このように『省要』献策の時代背景には、近世中期の平和な時代の到来による開発・耕地の拡大・人口の増加、そして経済の発展があり、「一得一失」を見極めなければならぬ一筋縄ではいかなぬ状況が出現していたのだ⁴¹。周知のように荻生徂徠は江戸という「クルワ」の外に一旦出ることによって江戸の変化を見取ったが、一方で休愚は川崎宿からそれを見つめていた。川崎宿の名主、本陣・問屋の責任者として、否が応でも、貨幣や物価の相場など世相の変化に敏感にならざるを得なかったのだろう⁴²。

ところで、休愚自身が事理一致の政事の実現によって得られる取り分とはいかなるものだろうか。事理一致の政事とは、民間の実情や経験・知識を政事に生かそうとするものだが、一方で休愚は農村の自治も要求している。『省要』で展開される政事論とは「得失損益上下ニ利有の弁」であると述べていたように、現実的な争点が、この「上下」の利害対立と調整にあることは確かだろう。つまり、事の主張と理への批判とは、単なる問題点の指摘にとどまるのではなく、武士への牽制という意図をも備えているのだ。

第2節 芸能における事理の用法

第1項 芸能における事理

休愚は事理一致という政事のあるべき境地が実現されることを求めたが、こうした事理を合わせることである境地に達することができるとする用例は、近世の芸道書に散見される。そこで、まず芸道の特質について簡単に述べたい。「芸道というのは、芸を実践する道である」と西山松之助は端的に定義している。芸道とは、身体を使い文化的価値を創造する、そのはたらきのことを指すのであり、このはたらきにより創り出され、作品として完成し、演技者や作者から客体化した芸術作品は、ある意味で芸道とは無関係であるという。すなわち「それぞれの文化領域における具体的な実践法、それが道である」と西山は述べている。実践という行為自体が芸道なのだ。そして、実践にある法則性や規範性が生まれると、「型」として確立される。芸道の道とは、この型という先人の発明を通り、ある境地に達しようとするもので、この道程は「個人的な実践哲学」であるところに特徴があると西山は述べている⁴³。本稿では、芸道というものが、身体を用いた芸の「実践」であるという点を押さえておきたい。

実践の重視は次に見ていく事理の用法が共有するものである。まず『南方録』を見てみた

40 『省要』、107頁。

41 鬼頭宏の推定によると1600年頃1500～1600万人だった日本列島の人口は1721年（享保6）には3128万人に増加した（『文明としての江戸システム』日本の歴史19、講談社、2010年、65～70頁）。

42 乾之部の第四巻では物価の高騰や百姓の衣食住などの風俗の変化に言及している。

43 西山松之助「近世芸道思想の特質とその展開」（『近世芸道論』日本思想大系61、岩波書店、1972年、585～587頁）。

い。同書は、利休の高弟南方宗啓が師の侘茶をまとめたものを、福岡藩士立花実山が元禄三年（1690）に発見したものとされているが、現在では実山自身の編集・加筆により成ったと考えられており、成立は十七世紀後半のようだ⁴⁴。

実ハ事ト理ト別々ニアラズ。事熟スレバ心熟シ、心熟スレバワザ熟ス。ワザハ能スレドモ、心イマダ至ラズト云ハ、ワザモイマダ妙処ニ至ラザルユヘ也。心ハ熟シタレドモ、ワザ至ズト云モ、心イマダ妙ニ入ザルユヘ也。コレ仏ノ道ニモフカク了会ノ一段ト云々⁴⁵。

熊倉功夫は引用の冒頭の二文を「本質というものは技術と精神と別々につかめるものではなく、技術が身につくれば茶の心も成熟してくる。そうすると技術もそれにともなって熟達してくる」と現代語訳している⁴⁶。技術（「事」「ワザ」と精神（「理」）の両者を『南方録』の言葉でいえば「修行」によって高めることで、茶の湯の境地に達することができるという。したがってその境地に達した利休は「理ニ通ジ、ワザニカナヒ、大悟ノ茶人ナリ」⁴⁷ということになる。

次に花道について見てみたい。貞享五年（1688）に刊行され好評を博した富春軒仙溪『立華時勢粧』には事理と「事理不二」の用例が見られる⁴⁸。

初学の時は。事^{ワザ}を先にして理を後にすべし瓶数重ねば。おのつから。指合法度を除くべし。中比に至りては。事理兩輪のごとくすべし。上手に成ては。事を捨て。理を工夫すへし。然る時は。事理不二の境に至りて。花に自由を得べし⁴⁹

初学者はまず、理屈は後回しに数多く活けることで技を稽古しなければならない。そうすると徐々に師からの手直しも減っていく。そして中級者となれば、事^{ワザ}だけでなく理も考えながら、事理の二本立てで稽古していかななければならない。そして上級者は、技（事）を特に意識することなく、理屈をつめていけば、自ずと「事理不二」、つまり事理は相即不離となり、花道の「自由」の境地が得られるという⁵⁰。この用例では事については具体的な技術や実践といえそうだが、では、理についてはどうだろうか。別の個所では、花道には七つの生け方があり、それぞれに「七ツの理有事有」と述べている⁵¹。この用例からすると、理は普遍的なものではなく、個々の技術に対する基本的な生け方や理論と理解できるだろう。以上二例のみしか提示できなかったが、稽古・修行により事と理を一体化させることで、ある境地に達しようとする用例が共通してあったことがわかった。

44 「南方録」（『国史大辞典』第十巻、吉川弘文館、1989年）806頁。

45 「南方録」（『近世芸道論』）96頁。

46 熊倉功夫『現代語訳南方録』（中央公論新社、2009年）502頁

47 「南方録」（『近世芸道論』）130頁。

48 井上治「花道思想における修行に関する試論」（『人文学の正午』3号、2012年6月）。

49 富春軒仙溪「立華時勢粧」（『花道古書集成』第二巻）99頁。

50 この「事」「理」の解釈は井上前掲論文を参考にした。

51 「立華時勢粧」79頁。

また、測量の分野でも事と理の用例が見られた。村井昌弘の『量地指南』(享保十三年)にも「量地の作法に理と事と二様の差別あり。理は箇内に談じて日まなび窮むべし。事は野外に出て時にこゝろみ習ふべし」とある。ここでは、事理を「一致」すべきという主張はなく、理論と実践といった枠組みで使用されている。

第2項 剣術における事理

近世中期において、事理一致の用例が頻出するのが武芸の剣術書である。近世以前には、剣術が独立した武芸として存在していたわけではなく、長刀、槍、棒、捕縄、柔などとともに「兵法」の一部でしかなかった。それが近世に入ると兵学、射術、馬術、剣術、槍術、柔術、砲術などとして、それぞれ展開し、また、それぞれの術に様々な流派が興り、独自に理論化や体系化が行われ発達していった⁵²。中林信二によると、剣術の場合には、伝書の類は当初技の名を列挙した目録の体裁をなしたものであったが、次第にその精神や思想を語るようになったという。その画期として、沢庵『不動智』(寛永期頃)、柳生宗矩『兵法家伝書』(寛永九年)、宮本武蔵『五輪書』(正保期頃)の三書をあげている。なかでも事理論を明確な形で武芸にもたらし、その理論化に貢献したのが『不動智』であるという⁵³。

まず、事理の導入の端緒となったこの『不動智』を見てみたい⁵⁴。同書は寛永十三年(1635)九月に沢庵と柳生宗矩らが行った兵法談義を後日書にまとめ、家光に提出したものである。柳生新陰流だけでなく、小野派一刀流など近世の武芸に広範な影響を与えたとされる。さて、「理之修行、事の修行」という一節にはこうある。

理之修行、事の修行と云事あり。わざとは手足にてする事を云なり。初は兵法を習ひ稽古候時、身がまへ、太刀、三箇九箇などの色々様々の事を年月を重て能々稽古する、是を事の修行といふなり⁵⁵。

剣術の修行には理の修行と事の修行がある。「わざ」とは肢体により行うものである。剣術を習いはじめると、構え、太刀の振り方、「三箇九箇」(身構・手足・太刀と九つの太刀の技)などを時間をかけて繰り返し稽古する。これが事の修行である。つづいて理の修行について解説している。

又、理の修行と云は、一心の上の至極成所を能々可心得ための修行なり。事の修行計にては万の所作不至也⁵⁶。

52 渡辺二郎「兵法家伝書形成についての一試論」(『近世芸道論』)、西山「武家社会に成立した家元」(『家元の研究』西山松之助著作集第一巻、吉川弘文館、1982年)。

53 中林信二「剣道史」(『武道の歴史』日本武道大系第十巻、同朋舎出版、1982年)60頁。

54 本論では沢庵自筆本に近いとされる宮内序書陵部蔵『不動智』を底本とした佐藤鍊太郎『禅の思想と剣術』(日本武道館、2008年)から引用する。

55 佐藤、160頁。

56 同書、160頁。

理の修行とは心の「至極」の状態を会得するための修行であり、事の修行だけでは事理の極み達することはできない。さらにつづく。

又、理の修行計にても、事の修行なく候えば、手足も身も自由にははたらかず、太刀が自由につかはれ申まじく候。然ば事と理の車の両輪のごとく也。一心に能納て手足に稽古候えば相応いたすべきなり。⁵⁷

逆に理の修行ばかりでもいけない。理と事とは車の両輪のようなものであり、両者ともに稽古していかなければならないと説いている。源了圓は、沢庵により「『わざ』と『心法』とを共に磨くという剣法論の基本的パターンが成立した」⁵⁸と評価している。実際に『不動智』の書名は後世の武芸書に度々登場し、事理の用法と両輪の比喻は常套句となっていく。このように兵法の一部であった剣術は、近世に入ると禅の教説などを吸収しながら思弁化していったのだ。また、『兵法家伝書』をはじめとする新陰流の書では、世阿弥『風姿花伝』への言及も少なくない。技の名も『風姿花伝』からとられているものも多く、『兵法家伝書』が禅と能により理論的に整備されているのがわかる⁵⁹。

ただ、ここで注意したいのは『不動智』の理とは心であり、『省要』の用法とは異なる点である。事・理は技と心の関係にあり、沢庵は当代一流の武芸者に心法を説いており、技術について何か教えを与えているわけではない。

宗矩の長男三蔵の『月の抄』の「真の位の一理の事」にはこうある。

云、諸法万法天地之間のことはざ、理にもれたる事はなし。諸事万事は一理なり、理は一つ成により、一理也。沢庵和尚筆をくはへられしにより。此習心持出来るもの也。くはしく目録にあり。ことはりと云、理り字はことわざに付ての、りなり、誠の、りは心也。此心をしる事大切也。⁶⁰

「ことはざ」つまり事業・事態と「理」の関係が述べられており、事理が受け継がれているのが確認できる。万事は一理であり、理とは心であると述べているように、心としての理が継承されている。

では、新陰流と双壁をなした一刀流には、事理はどのように継承されたのだろうか。寛文四年の奥書の古藤田俊直『一刀斎先生剣法書』を見てみたい。「夫れ当流剣術の要は事也。事を行ふは、理也」と、まず事に習熟し、後に「其事敵に因て転化する所の理」を学ぶべきだという。ここでいわれる理とは、新陰流とは事なり、もはや心ではなく、敵によって変化するものである。「たとへ事に功ありと云ども、理を明に知らずんば勝利を得がたし」と勝

57 同書、160頁。

58 源了圓『型』（創文社、1989年）169頁。

59 宗矩の父宗蔵は能楽の金春家の金春氏勝に『新陰流兵法目録事』を与え極意を授けている。能楽から剣術へという一方通行ではなく、両者の交流が伺われる。こうした交流が、近世に入りどのように展開し、近世の言説とどのように関わるかについては今後の課題としたい（松岡心平「カマエの成立」〔『宴の身体—バサラから世阿弥へ』岩波書店、2004年〕）。

60 「月の抄」〔『剣術（一）』日本武道大系第一巻、同朋舎出版、1982年）180頁。

利の秘訣が説かれる。そして「事と理とは、車の両輪・鳥の両翅のごとし」とまとめている。そもそも沢庵により説かれた事理は、技芸を極めた武芸者に向けて書かれたものであり、彼らが事に習熟しているのは当然のことだった。したがって一刀流でも同様に、事ではなく理の説明に重点が置かれる。つづく箇所では「事は外にして、是形也。理は内にして、是心也」と、事は外面的なもので、それは「形」であり、理は内面的なもので「心」であると述べている。敵によって変化する理と、心としての理が、どのような関係にあるのかは不明である。理の意味内容が拡大しているのがわかる。さらに同書では、事理ともに熟練したものは「事理一物にして外の差別なし」という境地に達することができる、と説明している。以上、一刀流にも事・理が継承されており、新陰流に比べて事理の兼備が強調されており、「事理一致」という用法はないが、「事理一物」や「事理不偏」などの表現は見つけることができる⁶¹。

一刀流の流れをくむ唯心一刀流の『唯心一刀流太刀之巻』を次に見てみたい。これは享保七年(1722)に杉浦三衛門正森が弟子のために著したといわれるもので、その基本的な考え方は「夫当流兵法剣術者、要二中和一而変化応機也」とあるという。このように唯心一刀流では「中和の理」を極意とする。偏ったりしないことを「中」、時宜にかなうことを「和」とし、中は「体」であり、和は「用」とあるという。「此理を以て事も理もまなぶと云義也」、つまり「此理」(中和という極意)を体得することで、事理双方を身につけたことになるとしているが、「理」については詳述されておらず、その意味するところは明らかではない⁶²。

次に、休愚が没した享保十四年(1729)に書かれた寺田正浄の『登假集』を見てみたい。正浄は享保から宝暦にかけて京都に起倒柔術の道場を開いた人で、同書では『不動智』や新陰流の教えにも言及している⁶³。正浄は極意について次のように説明する。心は「虚霊神明」でしかも尊いものである。「本体」という第一巻を初学者に教える。この巻の要点は「中和」にあり、これは「道をさとす教にして、道の体、道の用、事理也。大極動いて陰陽を生じ、陰陽合して事理一致と成」と説明している⁶⁴。このように事理、事理一致の用法が見られるが、理については「文武兼備たる所、是を事理の妙合と云」、「理は一夜の間、又物に寄て悟る事有。事は頓に上ることなし。修行次第に因て尽るとなり」、「巧み求めてなすは、業になりて当流の本意ならず。唯自然の理に至るべし」⁶⁵などと説かれるように、理は融通無碍に使用されている。ただし、心としての理ではないことは確かだろう。

談義本作者として享保期から寛保期まで活躍した佚斎樗山は、剣術教養書ともいえるべき『猫の妙術』(『田舎莊子』所収、享保十二年)と『天狗芸術論』(享保十四年)を残した⁶⁶。以下では『天狗芸術論』の事理に言及した箇所を見てみたい。

事に熟せざれば、心剛なりといへども、其用に応ずることあたはず。事は心を以て修す。

61 「一刀斎先生剣法書」(『剣術(二)』日本武道大系第二巻、同朋舎出版、1982年)261頁。

62 同書、271頁。

63 「第二天の巻きといふは、天之一理を説。口伝多し。同不動智の事、可秘、口伝。」(『登假集』[『武芸随筆』日本武道大系第九巻、同朋舎出版、1982年]463頁)、「新陰流に、目で思ひ心で見るといふ教へも有り。」(同書、464頁)。

64 同書、462頁。

65 同書、460頁。

66 飯倉洋一「解題」(飯倉校訂『佚斎樗山集』叢書江戸文庫13、国書刊行会、1988年)。

気は心を載て形を使ふ者なり。故に気は生活して滞ることなく、剛健にして屈せざるを要とす。事の中に至理を含んで器の自然に叶ふ、事の熟するにしたがつて気融和し、其ふくむ所の理おのずからあらはれ、心に徹してうたがひなきときは、事理一致にして気取り、神定つて応用無碍なり。是いにしへの芸術修行の手段なり。故に芸術は修練を要とす。事熟せざれば気融和せざれば形したがはず、心と形と二つに成て自在をなすことあたはず。⁶⁷

心が強くなったところで^{わざ}事がともなわなければ役に立たず、事は心により修めるなければならない。気とは心を入れて「形」を操るものだ。したがって気とは普段生きていく上で制止することはなく「剛健」で何事にも屈しないことが肝要である。事に理が入ったときにこそ、「器」としての役割を果たすことができる。事の習熟とともに気は「融和」し、理は自然と現れ、心に迷いがなければ、「事理一致」となり気は収まり、何物にも妨げられない境地へと達する。これこそが芸術の修行の方法だ。事が熟達しなければ気は「融和」せず、型は形骸化し、心と型は分離し、自在な芸はくりだせない。このように修行の要諦について述べている。「形」と「器」とは恐らく身体的な要素を指しているのだろう。「事理一致」の用例も見えるが、本書を読み進めていくと「理」と「気」をいかに修めるかに論点があり、全体として心法論に傾いている印象がある。「事理一致」は言及されはするものの、それは修行の階梯としか理解されていない点に特徴がある。また「事の中に至理を含んで器の自然に叶ふ」という箇所には朱子学の「窮理」の方向性もあるように思われるが、その点は措く。

やや時代は下り寛保三年（1743）に書かれた大東良興の『剣術論』にも、事理一致の用法が見られる。「事と理と分れざる時は、随て行ひ安し。是を事理一致と云」⁶⁸とある。『剣術論』の場合にも、事は技術といえそうだが、理は心ではない。また「理は未生以前の理にして事は生後に生ずる物也」とここでも朱子学の影響が強いようにも思われる⁶⁹。

以上、近世前半期の剣術書における事理及び事理一致の用例を簡単に概観してきたが、事については一様に身体的な作法や技法といえそうだが、理の意味内容は著者により自由に意味づけがなされていた。これらの例からすると、事理を稽古・修行の理論的枠組みとして参照する方法が享保期頃には一般化し、事理一致も剣術を語る際の常套句の一つとして定着していったのではないだろうか。

第3項 事理の用法

ここまで『省要』と芸道における事理一致やそれに類似する用例を検討してきたが、ここで事理の意味内容について整理しておきたい。まず『省要』における^{ワザ}事とは、在地の知識と経験にもとづく現状認識と実践であった。理は、①農業などの理論、②（在地の個別性をもたない）武士の政治学・地方役人がもつ知識・方策である。茶道・花道・剣術の場合には、ワザ（事・業）は主に技術・身体技法、理は、①心・気、②技術に関する理論・原理、③万

67 「天狗芸術論」（『続剣道集義』東京商科大学剣道部、1925年）416頁。

68 「剣術論」（『剣術（二）』）334頁。

69 同書、327頁。他にも「天性とは天理の義なり。天に在ては理といひ、人に稟ては性といふ。性の感ずる所より事生ず」とある（同書、326頁）。

物の理とまとめられる。測量の場合には、事理の一致という世界観は見られず、実践と理論・方法論という枠組みにおさまるものだった。『省要』の事には剣術の実践だけでなく現状の認識も含まれ、理は享保期以降の多くの剣術書と同様に③技術に関する理論・原理の意に近く、剣術の①心・気の側面は完全に切り落とされ、心法論の側面はない。『量地指南』においても心法論の側面はなかった。事理の一致という語とその概念は流布するにつれ、理の意味内容は拡大していったといえよう。

さて、事理・事理不二・事理一致といったこれらの用法は何に由来するのだろうか。まず、剣術の場合には沢庵によって理論化されたように仏教、とくに禅の影響を受けている。また、『南方録』の「小座敷の茶の湯は第一仏法を以て修行得道する事也」⁷⁰や、『立華時勢粧』の「立花は第一の手向也と云は。釈氏の説也。」⁷¹の用例のように、茶道や花道でもやはり仏教の影響下にあるようだ。

事理とともに剣術書に頻出する用語に「体用」があり、同様に仏教に出自をもつ。『禅学大辞典』によると「體用(たいゆう)」とは「体と用。諸法の本性と作用の事。体性は不変の真理実相をいい、作用は現象としての具体的作用を指す」とある⁷²。柳生宗矩『兵法家伝書』には「大機大用。用を用とよむべし。物の躰用の時、用とよむべし。物ごとに躰用と云ふ事あり。躰あれば、用がある物也」⁷³とある。『一刀斎先生剣法書』にも「先に体用の二つ有り」、「業に発するを体といひ、心に用ふるを用といふ」⁷⁴と体用の用法が見られる。また『省要』においても「抑六芸の中は四民共ニ各体あり。用あり。士は六芸を以体とす。農工商の三民ハ六芸を以用とす」⁷⁵という用例がある。島田虔次は仏教の朱子学への影響のうちで確実なものとしてこの「体用」の概念をあげている。体用概念は清朝期から、仏教由来か、儒教本来のものであるかを巡って論争が交わされてきたが、体用の概念自体は中国的な思考になじみやすいもので、「中国思想はいわば本来的に、あるいは潜在的に、体用思想であったのではないか」と島田は指摘している⁷⁶。つまり、ある語彙の受容と拡散を考察する際には、その語彙の出自だけでなく受容の文脈と過程を考慮に入れなければならない。

「理」は、そもそも中国においては、玉の肌にある筋目を意味し、元来は個別的な物の形や性質が理と呼ばれていたが、仏教伝播後、華嚴経の解釈のなかで「理・事」という相関的概念として高められ、理を絶対的な真理、現象としての事に対する本体とする思想が宋明代の儒学に影響を与えたという⁷⁷。本論で見えてきた用例は、享保期以降、理の解釈に朱子学の影響が強まるように思われるが、『省要』やこれまでみた茶道・花道など理には、朱子学の理のようなすべてを貫く「普遍的条理性」⁷⁸といった側面はなく、個々の事物内にとどまる

70 「南方録」(『近世芸道論』) 10頁。

71 「立華時勢粧」 79頁。

72 『禅学大辞典』下巻(大修館書店、1978年) 818頁。

73 「兵法家伝書」(『剣術(一)』) 102頁。

74 「一刀斎先生剣法書」 265頁。

75 『省要』 219頁。

76 島田、5頁。

77 「理」(『中国思想文化事典』(東京大学出版会、2001年) 29頁。島田虔次『朱子学と陽明学』(岩波書店、1967年) 91~92頁。

78 溝口雄三『〈中国思想〉再発見』(左右社、2010年) 39頁。

個別的なものである。近世の儒学史では、林羅山に朱子学的理を受け継ぐ方向性があったようだが、以降は受け継がれず、伊藤仁斎や荻生徂徠になるとそれはより明確となった⁷⁹。「事専ら理に依って断決するときは、則ち残忍刻薄の心勝って、寛裕仁厚の心寡し」（仁斎『童子問』⁸⁰）や、「理なる者は、事物みな自然にこれあり」「理なる者は定準なきものなり」（徂徠『弁名』）⁸¹といった理に言及した箇所はよく知られている。したがって、客観的で普遍的な条理性を有す理という考え方は、日本近世には根付かなかったといえ、『省要』における理もこの流れのうちに位置づけられるだろう。

第3節 「芸術」としての「職」

第1項 事の文脈

まず、事という実践性の観点から『省要』献策の時代背景を見てみたい。マックス・ウェーバーは中国の官吏制度が西洋近代的な官僚制とならなかった原理的な理由として「貴人は器ならず、という孔子の根本原理、すなわち普遍的・個人的自己完成の倫理的理想は、西洋の没個人的な職業の思想とは根本的に対立するものであり、これが専門的訓練や専門的権限の成立を妨げ、その実現をたえずくり返し阻止したのである」⁸²と述べている。『論語』為政篇「子曰く、君子は器ならず」を引いて述べた箇所だ。この条を朱子学では君子は一芸一役の器物ではなく万能の器物とならなくてはならないと解釈し、一方、荻生徂徠は、君子は一芸一役の器物となるのではなく器物を用いる人間とならなくてはならないとしている⁸³。ウェーバーの解釈は徂徠のものに近く、近世の職分論で言えば武士を道德の啓蒙者としての役目を与えた山鹿素行らの職分論と軌を一にするものだろう。

休愚は先にあげた事理一致の用例の中で「稼の事は夫子すら老農にしかず」「上智ありといへど一人なり、下愚なりといへど千万人なり」と述べている。いずれも『論語』に拠ったものと思われる。後者は「子曰く、唯上知と下愚はとは移らず」、生まれながら上知の者は聖人であり、下愚の者とは困窮しても学ぼうとしない者である。上知でも下愚でもない人々は学び修養していかなければならない、という箇所である。休愚の場合、自らを「老農」「下愚」の立場に置いたように、ここに身分制の心性が表れているともいえそうだが、こうした立場を逆手にとり、職から得られた事をその立場に接合することで論拠としている。

ところで、源は芸道とのわざと手工業などの技術の関連を指摘している。平安末期から成立した芸道は、南北朝の田楽の興隆、室町時代の能の洗練などめざましい進歩をとげ、それぞれの芸能で「わざ」の向上が見られたが「それは室町時代における「技術」の発展とその底流においてつながるものがあると考へても差支えないであろう」と述べている⁸⁴。ここでい

79 溝口は次のように述べる。「結論的にいうと、日本の儒者たちは理の性格を知れば知るほど理への異和感を顕在化させ、彼らは朱子学よりはむしろその源流と目される孔子・孟子に回帰することを求めた」（前掲書、44頁）。相良亨「理」（『日本人論』相良亨著作集5、ベリかん社、1992年）217頁。

80 伊藤仁斎、清水茂校注『童子問』（岩波書店、1970年）156～157頁。

81 荻生徂徠、西田太郎校注「弁名」（『荻生徂徠』日本思想体系36、岩波書店、1973年）150頁。

82 マックス・ウェーバー、世良晃志郎訳『支配の社会学Ⅰ』（創文社、1960年）243頁。

83 吉田賢抗『論語』新釈漢文体系第一巻（明治書院、1960年）47頁。

84 源、62頁。

う「技術」の発展とは農業や手工業を含めた社会全般の技術の発達のことを指している。中世において職人には手工業者だけでなく芸能民も含まれ、場合によっては農民も含まれる場合もあったという⁸⁵。横田冬彦は『人倫訓蒙図彙』(元禄3年)を分析しながら、中世から近世にかけて社会的分業が進展し、「「芸能」的職種=社会的身分の発展がみられた」と指摘している⁸⁶。

農業の分野ではどのようなことが起きたのだろうか。近世初期に成立した『清良記』第七巻は日本最古の農書として知られているが、同書自体は戦国期の南伊予の一領主土井清良の伝記物語であり、第七巻は領主である清良の諮問に松浦宗案という人物が回答したという体裁をとっている。したがってその内容は、領内経営としての農政に主眼があり、農業技術だけでなく農村統治を含み、戦時体制を強く意識したものである。休愚は『農業全書』には事(百姓の家経営・再生産)について書かれていないとして同書を批判したが、むしろ近世の農書の流れからすると『清良記』以降の農書は農業に特化していく傾向にあった⁸⁷。元禄期前には、東海地方では『百姓伝記』(天和期頃)が、東北地方では『会津農書』本文(貞享元年)が成立している。両者とも未刊行ではあったがともに農業に特化したものである⁸⁸。そして元禄十年(1697)には初の刊本の農書である宮崎安貞著『農業全書』が出版された。同書はその後少なくとも享保・天明・文化・安政期に版を重ね、以降の農書で『農業全書』に言及しないものは無いと言えるほど絶大な影響を与えた⁸⁹。地域ごとに特化した農書が刊行されたことは、元禄期以降に農業技術の専門化と地域化が進展したことの証左でもあろう。

事理一致の提言とは、休愚の確かな事の自覚の上に成り立つものであった。したがって、近世における専門性の深化が、芸道思想受容の素地となっていたともいえるだろう。もちろん、この背景には近世的「家」の形成にともなう職の世襲がある程度固定化してきたことも見過ごせない。主な遊芸や専門技術が型を創出・継承し、家元を形成し、芸道として成立してくるようになり、社会的分業が進展し、それぞれの「職」において技術や経験が蓄積され地域性を打ち出し専門性を帯びていったのだ。時代背景として、職の地域・専門化による個別の実践性への時代の要求があったといえよう。

第2項 農と芸能

では、休愚は職を「芸」としてとらえていたが、はたして休愚のいう事理一致の政事を芸道と呼ぶことはできるのだろうか。芸道とは芸を实践する道であった。芸が芸として成立するためには、やみくもに演じればよいというものではなく、それぞれの芸の演じ方や作法といった具体的な実践法に則らなければならない。つまり、先人が考案し、伝承されてきた「型」に則り、習熟することで、芸のある到達点へ、素早く、無駄なく確実に至るための経路であ

85 網野善彦「II B 1 職人という言葉」(『日本中世の民衆像：平民と職人』岩波書店、1980年)。

86 横田冬彦「芸能・文化と<身分的周縁>」(塚田孝・横田冬彦・吉田伸之編『身分を問直す』シリーズ近世の身分的周縁6、吉川弘文館、2000年)39~40頁。

87 古島敏雄「日本農学史第一巻」(『古島敏雄著作集』第五巻、東京大学出版会、1975年)189~190頁、筑波常治『日本の農書』(中央公論社、1987年)24~26頁。

88 筑波「農書の発達」(前掲書)。

89 山田龍雄「商品生産への目ざめ」(古島敏雄編『農書の時代』農山漁村文化協会、1980年)。

る。そしてその先の究極的な芸の完成に、宗教的・精神的境地を見出していくのが芸道の進み方である⁹⁰。芸道の特徴とは、この型の存在と、稽古や修行を通して上達していくという道の思想にあるといえよう。では、事理一致の政事には、この型と道の思想が備わっているのだろうか。

まず、道の思想から見てみたい。『省要』の「千技万芸、事理一致ニ不_レ調和して、何そ其極ニ至へけんや」、あるいは「事理一致にして、何そ君道の美ならさる事あらん」といった表現は、事理一致の政事の境地を想起しているのだろう。先に見たように、自家の職に専心し全うすることが、修身齐家であり治国平天下への前提だった。『省要』の目的とは事理一致の政事の実現により、治国平天下を目指すものであり、ある理想—「君道の美」—をその先に抱くという点では、道の思想との共通点が感じられる。そもそも、道の思想というのがその成り立ちから専門性を重視するものであった⁹¹。その点において、休愚が職を芸道ととらえることは首肯できるだろう。

では、型はどうか。『省要』における事理一致の政事とは、諮問会議設置要求のように、事を吸い上げ意思決定に生かすための制度設計に主眼があり、『省要』を見る限り、休愚が型を想定したとは考えにくい。こうした制度設計自体を形と呼ぶことも可能かもしれないが、型とは稽古や修練により身体に覚え込ませるものであり、こうした知識を型と呼ぶことはできないだろう。それよりも、休愚は状況に応じた臨機応変な対応を為政者に求めていた。このことから、やはり事理一致に型の存在を読み取ることはできないだろう。むしろ型の観点からとらえられるのは、仁斎の立教や徂徠の礼楽だろう⁹²。したがって、休愚は基本的に理に対し事の重視をいうのみで、この点は、事理一致の政事と芸道の思想との相違でもあるが、実戦を重視した剣術との共通点でもある。

第3項 「芸術」としての職

西山は近世の芸道を三つの系譜に整理している。第一に貴族文化の伝統（平安時代以来の雅楽の管弦・蹴鞠・和歌・囲碁・将棋等、鎌倉・室町以来の能楽・狂言・茶道・花道等）、第二に武家文化の伝統（鎌倉時代に成立した弓術・馬術、戦国末の兵法・砲術、近世に兵法から細分化される剣術・槍術・柔術等）、第三に民衆文化の伝統（散楽・平家琵琶・太平記読み・傀儡子の人形芸・白拍子・田楽・猿楽等、近世の歌舞伎・人形瑠璃芝居等）に分類している。西山の分類で注目すべきなのはまず、第一の分類に書・画・工芸の職人芸も含めている点である。大工や仏像や仏画制作に携わった職人や、絵画・蒔絵・染織・鍛冶・彫金等の職人の芸を芸道に区分している。こうした職人の芸は貴族の遊芸に分類されるものではないが、こうした工芸品を製作する際の技術（わざ）は、芸であるという。「芸であるから、ここにも当然芸道が成立した」と述べている⁹³。さらに第二の武家文化の伝統に近世の治水

90 西山、585～587頁。

91 小西「『道』と中世的表現」（『日本文芸史』3、講談社、1985年）164頁。

92 相良、242頁。徂徠の礼楽を型との関係から考察したものに小島康敬「『礼』と型」（『儀礼と創造—美と芸術の原初』岩波講座日本の思想第七巻、岩波書店、2013年）がある。

93 西山、589～591頁。

や土木事業の測量術も含めている。

この西山の分類には農業は含まれていないが、休愚は自己の職を芸として捉えている。

四民其家の芸術に心を尽すを以、各其道を勤たる人とやいはん。是其身を修め、其家を齊、天下平なるの根本なり。⁹⁴

士農工商それぞれの民はその家の「芸術」に心を尽くし、職を全うしなければ、その「道」を務めたとはいえない。修身と齊家は平天下の基本であるという。内容自体は特筆すべきものではないが、家職を「芸術」と表現している。以下は二人の事理に精通した農業の「功者」の所作について述べた箇所である。

是芸能ニすく者のそれノ、に得手たる事ハ、細かに気を付て能其曲、其手を見取かことし。⁹⁵

優れた芸能者の謡や演技の所作には、すみずみまで気が張りつめているというように、休愚は職の熟練者、農の場合には功者の技術を、芸能者の演技に重ね合わせているのだ。農という職分を専門的な芸の一つとして捉えているのは確かだろう。

また以下では処世訓を述べている。人生は囲碁のようなもので上手は常に勝ち、下手は常に負けるといふ。

且又其術妙に粹キ人の打を見るに、まづ盤面ニ対して気をねり、心を静め、威儀を調べ、一念余事不_レ雑、身を天地と一体にして悉皆聖賢の治身正_レ心の道に不違、自をかへり見テ他を掠る事なく、多しといへと危キをとらず、小キといへと堅固成を不捨、一思一慮、理ニ不背して、直成を以元とす。奇術妙手、能其中より出ル。能是を守ル人は勝、是を背く人ハ負ル。⁹⁶

囲碁の盤に対し気を練り、心を静め、威儀を正すというのは、まさに剣術における心法論だろう。

さらに、実際の戦争の「理」もこれに似たようなものだ言う。「人々の身体、又軍戦ニ似て、一生の大事不_レ過之、一方怠事あれハ其所より危し。且兵法の其すき間を打る、かことし」⁹⁷と、一生の渡世で自己の身体以上に大切なものはない。心身に油断するところがあれば危うく、兵法の盲点や油断を突かれるようなものだという。渡世の場とは戦場であり、それに対し油断なく立ち向かっていかなければならないとしている。

以上から、事理一致が単なる修辭ではなく、生業という職の捉え方に関わるものであるこ

94 『省要』、233頁。

95 同書、214頁。

96 同書、213頁。

97 同書、213頁。

とがわかるだろう。職自体を芸道（ここでは能楽・剣術・兵学）の比喩によってとらえていたように、休愚の発言はこうした語彙に支えられていたのだ。

第4項 比喩としての事理一致

芸道とは、芸である以上、舞踏であれば踊れなければ、水泳であれば泳げなければ、音楽であれば演技・演奏できなければ意味をなさない。実践の最優先が芸道の特徴でもあるが、剣術の実践にはさらに別の要素が加わるようである。剣術の場合には、稽古によっていくら型に習熟したところで、相手に勝てなければ、実践としての意義を失う。

剣術は近世に入り思弁化していき、この過程でもっとも発達したのが心法論の側面である。ある専門的な実践を通して人間的完成や境地を目指そうとするのは芸道に特有の思想で、この点を推し進めたのが心法論である。一刀流においてその萌芽はすでに見られる。

若し勝たんと欲せば即負け、不_レ勝ば又負る所なし。自然の理と云も当然の事と云も不_レ然。事理の有無を滅却せずんば、誰か是に勝たん。⁹⁸

勝とうと思えば負けにつながり、相手に対し勝つ部分がなければ負ける部分もない。事理自体を「滅却」せずしてどうして勝とうというのだ、と言い放つ。先に見たように一刀流では事理双方に習熟することを説いていたが、その次の段階では勝利への欲自体の「滅却」を主張している。

夕雲流はこうした心法論の極致である。始祖針谷夕雲の兵法を弟子の小出切一雲がまとめた『夕雲流剣術書』（元禄期頃）を見てみたい。源は同流派を「心法至上主義」と名づけ、剣術とは基本的に相手に勝利することを目指すものだが、「夕雲のめざす剣法は、勝つことを求めない剣法であり、技の狡智性を否定する剣法である」とその特徴を指摘している⁹⁹。夕雲は他の流派を「畜生兵法」と呼び、それらの剣術では自分に劣れる者に勝ち、勝れる者に負け、同等の者とは相討ちとなり、これでは埒が明かないという。「畜生心」、つまり五常も知らず三毒（貪・瞋・癡）に侵された勝ちだけを求める心から離れなければならないという。そして遂に夕雲は「無住心剣術」を完成させた。それは「当流兵法の意地は、元来勝負に拘はらず」と勝負を度外視したもので、その奥義は「相ぬけ」というおよそ実践とは隔絶したものである。自分より勝れたものがないと思えば、他の者は皆自分には及ばず負けることはない。もし自分と同等の者がいれば「相ぬけ」となる。この両者が戦えば互いに生きるか、死ぬかしかない。著者の一雲も三度師の夕雲と戦い三度「相ぬけ」となり、印加を受けたのだ¹⁰⁰。このように夕雲流では勝負を度外視するところまで心法論が発達した。

こうした心法論は『登假集』にも見られる。同書が目指すのは、克己である。祖の正重は「己に勝、私に勝、人欲に勝て、我を放れ放るゝ道」を修得する工夫をし、五巻の書と十四

98 「一刀斎先生剣法書」268頁。

99 源、214頁。

100 「夕雲流剣術書」（『武芸随筆』日本武道大系第九巻、同朋舎出版、1982年）261頁。

の型を残したという¹⁰¹。欲を捨て、克己によりある境地に達しようとする思想は、樗山の『天狗芸術論』『猫の妙術』にもみられる。前者には「老仏、莊列、巢父、許由が徒も無我無欲の心體を見ることは一なり、故に一毫も私念心頭を係縛するものなし」¹⁰²と自己の欲を廃そうとする箇所がある。『猫の妙術』ではこのような無我の境地はさらに深化し、自然の秩序と同一化し何もせずとも秩序が保たれるという状態が語られている。これらの例からすると、心法論はある程度流行していたのではないだろうか。

大東良興は『剣術論』で、「高き事のみ弁論して、事を次にする人多し」という世になり、こうした状況をこれは俗に言う「口兵法」だと同時代の傾向を批判している。剣術者たちは理ばかりを説き、「事の精き所」をまったく教えない¹⁰³。教授の手順としてまずは理を教え、その後で直接事の実技指導に入れば、はじめは慣れないかもしれないが半年から一年で「事理整て無造作」となるだろうと述べている¹⁰⁴。『薫風雑話』(宝暦九年)にも「今の士大夫鎧製にのみ心を尽して、身の練習をするすべを知らず」¹⁰⁵、「下手の道具多らみと云諺実に戯言ならじ」¹⁰⁶と評している。唯心一刀流でも、「一片の理に泥して偏着し、事理ともに其正真を知るものまれ也」という有様だったが、古藤田都俊定は工夫をこらし弟子を導いたという¹⁰⁷。実践性を失った心法論からの揺戻しがあったことが見て取れる。

剣術の実践性に関し、源は興味深い指摘をしている。剣術と弓術を比較し、弓術は修練の目的が、的をいかにいるか、さらには「自分自身を的とするという非常に精神性の強いもの」に向かっていき次第に実践性が失われていったと指摘している¹⁰⁸。対して剣術の難しさとは、相手の存在によるという。弓術に比して剣術の場合には、相手となる敵の存在が、芸の実践上で比較的大きな構成要素となっているのである。『薫風雑話』もこの点を衝いている。弓馬や鉄砲には名人と言われる者が数多出たのに対しなぜ剣術はそうした者を排出できないのかと問いを立て、その理由を述べている。弓の場合には「弓は的といふ相手を設て、己が業が其道筋に叶へば必中り必貫き、道筋に叶はざれば中らず貫かぬ」。弓も馬術も同様に、道具を使用する生まれ持った才能によりどのようにでもその道を極めることができるが、剣や槍ではそうはいかないという。つまり、剣術における相手の存在というものが、自己の修養、ともすれば精神面に傾きすぎる傾向に一定の歯止めをかけたといえよう¹⁰⁹。

したがって、実戦技術として形骸化しつつあった当時の剣術を念頭に『省要』を読み進めるとき、比喩としての事理一致の性格が明らかとなるだろう。休愚は「上の命令は理なり。下の行ふ処は事なり。事理一致にあらすして何そ事毎ニ的中する事あらん」と述べていた¹¹⁰。剣術の場合には、理つまり理論や心法論が発達しても、それは現実に相手に対峙する場合に

101 「登假集」459頁。

102 「天狗芸術論」443頁。

103 「剣術論」329頁。

104 同書、325頁。

105 渋川時英『薫風雑話』(『日本随筆大成』第二期18、吉川弘文館、1974年)53頁。

106 同上、54頁。

107 「唯心一刀流太刀之巻」(『剣術(二)』)270頁。

108 源、196頁。

109 前林清和『近世日本武芸思想の研究』(人文書院、2006年)138～140頁。

110 『省要』455頁。

はそれは良興の言う「口兵法」にすぎず、実戦では役に立たない。同様に休愚は、「上」にいくら知識や頭脳が揃おうと、「下」の実践的な経験や技術を欠いては的確な政事を行えないと批判していた。さらに、先に述べたように事による理への批判が、農村の自治を守るための武士への牽制となっていた。ところが、同時代の事理一致の文脈を検討してみると、『省要』の議論以前に、事理一致という語彙に事の理に対する優位が書き込まれていたのである。それゆえ、事理一致という語を政治的議論に使用することは、その語がはらむ一連の概念も議論に持ち込まれるとことになろう。まさに休愚が『省要』の議論によって切り開いた場とは、この意味で複数の概念が重なりあう場所だったのである。

おわりに

本稿は『省要』における事理一致という用法を芸道書の用法と比較することでその特質を明らかにした。まず、『省要』における理とは一般的な政事の理論であり、事とは排他的に在方の職の従事者により所有される個別的な経験や知識だった。休愚はこの事・理を合わせた「事理一致」の政事の実施を提言した。具体的には在地の者の登用や諮問機関を創設することで事を為政者側に吸い上げ民政に活かすことを求めている。他方で、この事と理の用法は芸道書に広くみられる用法であり、事理一致の場合には享保期以降の剣術書に頻出するものだった。そこで剣術の事理の用法と『省要』の事理を比較することで、事理一致の政事の政策としての動態的な側面を明らかにした。

また芸道とは第一に実践の美学であった。その点で事理一致の政事も「君道の美」となるものであった。『省要』における職の遂行者の実践・経験・知識（事）を重視するという考え方は、実践を重視する芸道と通底し、休愚の提言はこうした芸道一般の語彙場を前提として可能となったといえよう。他方で、自己の職を「芸術」と捉えたこと背景には、中世から近世にかけての社会の発展、人口の増加、分業の進展、農業の場合には地域・専門化があった。こうした時代状況を背景に横田の言う「芸能」的職種＝社会身分という職の理解が可能となる。

休愚は、以上見てきたように、事理一致という語を比喩にしながら『省要』をまとめあげたが、個々の職の完成にある境地を置くことと、国家全体で事理一致の政事が達成されたときに理想の治世が実現されるというのでは、位相が異なるだろう。この点は、整理して叙述されてはいない。事理一致という比喩による発言の戦略を積極的に評価するなら、それは言説内に新たな議論の場を切り拓いたことにあるだろう。しかし、別の見方をするのなら、政治的議論に芸道の用語が援用されたというより、むしろ、言説内において芸道という基盤が確固としたものとして存在していたとも理解できるだろう。芸道に関する用語やそれにまつわる概念が、政治的議論の場に漏れ出したというのではなく、職という観念と分かちがたく結びついた諸芸能の概念が政治的議論の土台の一部を形成していたといえるのだ。身体を用いて演じるという芸道の実践という本質は、時代が移ったとしても変わるものではないだろう。事とは、生業の日々の実践やそこで培われた非常に経験や知識であり、それは非常に個別的な性格を有し、普遍的なものへの翻訳を許さないものである。それゆえに、身体や実践

という契機を職分論研究に持ち込むことで、近世独自の政治的議論の特質の一端を明らかにできるのではないだろうか。この点は課題としたい。

The Politics of *Jiri-itchi*

Masanari SHINOHARA

International Cristian University, Doctoral Program

【keywords】 Kyugu Tanaka, Minkan Seiyo, *jiri-itchi*, martial arts,
social duties

This paper deals with the term *jiri-itchi* as it appears in *Minkan seiyo*, a text written by Tanaka Kyugu in 1721. Kyugu insisted that the shogun should not carry out government solely on the basis of political theory or principle (*ri*). To govern better, local knowledge or matters from below (*waza*) should be known to those above. He assumed that proper administration could and should be realized by a combination of *waza* and *ri* and often used the term *jiri-itchi* or “unity of principle and practice.” He also proposed the establishment of an advisory panel in order to give the Shogun the best possible advice about how to govern the country. His argument was not unique, but the term he used was conspicuous because at that time political theory and debate were dominated by Confucian scholars who championed universal principles over local or transitory phenomena. Nonetheless, while absent from philosophical texts, the term *jiri-itchi* could easily be found in books on martial arts, especially in texts relating to fencing. It is unclear whether Kyugu practiced fencing, but it is important to note his use of popular political vocabulary in his attempt to convey the “observations of the people” to the upper echelons of the bakufu.

Previous studies about social duties (*shokubun*) have not taken into account the practice of commoners. Kyugu’s *waza* was derived from his practical involvement with agriculture and his duties as a head (*nanusi*) of the Kawasaki post-station. *Waza*, which placed importance on actual practice, can be understood within the context of medieval and early modern popular society.

〈研究ノート〉

現代日本語における 対応する動詞形のない V1 + V2型複合名詞 —辞書に基づくリスト化—

鈴木 智美 (東京外国語大学)

【キーワード】 V1 + V2型複合名詞、対応する複合動詞、品詞の転成、
辞書、リスト化

1. 本稿の目的

本稿の目的は、「動詞 (V1) + 動詞 (V2)」の形をとる複合名詞 (以下、「V1 + V2型複合名詞」とする) のうち、現代日本語において対応する複合動詞の形が用いられないタイプのものに、どのような語があるのかを網羅的にリスト化して示すことである。

「動詞 (V1) + 動詞 (V2)」の構成を持つ複合名詞は、対応する複合動詞の有無から見ると、以下の (1) と (2) のような2つのタイプに分けられる。

- (1) 話し合い、申し込み、受け付け、締め切り、生き残り、追い越し、呼びかけ、取り違え、開き直り、突き当たり、行き詰まり など
- (2) 読み書き、乗り降り、立ち読み、押し売り、飛ばし読み、思い出し笑い¹ など

(1)(2)の複合名詞は、いずれも「動詞 (V1) + 動詞 (V2)」の構成を持つ。前項動詞 (V1) と後項動詞 (V2) は、いずれも連用形の形をとり、品詞の転成により、全体として複合名詞を形成している。しかし、(1) に挙げた複合名詞が、「話し合う」「申し込む」「受け付ける」など、対応する複合動詞の形が存在するのに対し、(2) の複合名詞については、それらに対応する「*読み書く」「*乗り降りる」「*立ち読む」「*押し売る」「*飛ばし読む」「*思い出し笑う」のような複合動詞の形は、通常用いられない。

「動詞 (V1) + 動詞 (V2)」型の複合名詞に、上記の (2) のタイプのものであることは、従来指摘されている点である²。しかし、対応する複合動詞を持たないこのようなタイプの「V1 + V2型複合名詞」には、現代日本語において、どのようなものがどれぐらい存在するのだ

1 「思い出し笑い」は、前項動詞 (V1) がさらに「思い出す」という複合動詞の形をとる。本稿で対象とする「V1 + V2型複合名詞」には、前項動詞 (V1) あるいは後項動詞 (V2) がさらに複合動詞の形をとっているものも含めて考える。

2 複合動詞の構造について論じた長嶋 (1976:103) は、複合動詞の中には、同じ動詞を後項動詞としていても、複合名詞を作ることのできるもの (「呼び出す」→「呼び出し」、「座り込む」→「座り込み」など) と、できないもの (「思い出す」→「*思い出し」、「考え込む」→「*考え込み」など) があることを指摘しており、逆に「立ち食い」「立ち読み」という名詞形には、対応する「*立ち食う」「*立ち読む」などの動詞形がないということについても触れている。

ろうか。先行研究においては、このような複合名詞の存在については指摘されているものの³、その網羅的なリストは示されておらず、このタイプの複合名詞にどのようなものがあるのか、その全体像を参照することのできる資料は見られない。

2. 先行研究

このようなタイプの複合名詞について、それをリスト化して示すという本稿の目的に沿って見れば、関連する先行研究としては以下の2つが挙げられる。

まず、このようなタイプの複合名詞を取り上げ、その前項動詞と後項動詞の意味的關係について詳細な検討を行ったものに、石井（2007）がある。3種の辞書⁴を調べた結果、このようなタイプの複合名詞が461語抽出できたとされているのだが、その461語は一覧としては示されていない。

また、鈴木（2013）は、辞書をもとに、「あ行」（あ～お）の見出し語の中から、このタイプの複合名詞を抽出する試みを行っている。該当する語は93語見つかったとされるが、そのうち現代語として日常的に使用されると思われる語は28語で、他は使用される分野が限定されているか、古語の性格の強いものと思われるとしている。また、語源的に見れば対応する動詞形を持つのだが、現代日本語としてはそれが自然に用いられるとは思われないというのが、別に8語観察されたという結果を述べている。

本稿では、上記の鈴木（2013）と基本的に同様の手順を踏み、辞書に基づき、すべての見出し語の中からこのタイプの複合名詞を抽出し、リスト化を行う。

3. リスト化の方法

本稿では、総合的な国語辞書として、約23万8千項目を収録するとされる『大辞林 第三版』（2006年）⁵を資料とし、その見出し語の中から、動詞の対応形を持たないと見られる「V1 + V2型複合名詞」を網羅的に抽出し、リスト化を行う。抽出の際には、前項動詞と後項動詞とがどのような関係で結びついているかについては、特に分類等は行わない。

現代語の感覚からは、もはや動詞の対応形を持つかどうか判断がつきにくくなっている場合があるため、抽出されたリストについては、さらに『日本国語大辞典 第二版』にあたって、対応する動詞形について記載があるかどうかを確認する⁶こととする⁷。

3 西尾（1961）、長嶋（1976）、国立国語研究所（1985）など。

4 『学研国語大辞典』『岩波国語辞典 第二版』『新明解国語辞典 第三版』を用いたとのことである。

5 初版の序に、「現代語の記述に重点を置きつつ、古語や百科語をも含めた総合的な国語辞典をめざしたもの」とある。

6 『大辞林 第三版』において対応する動詞形が項目として取り上げられていなくても、『日本国語大辞典 第二版』にあたってみると、対応する動詞形が記載されているというものは、相当数（196語）観察された。

7 現代日本語の母語話者の感覚では、対応する動詞形が「ない」のではないかと感じられるものの中には、実は辞書にあたって確認すれば対応する動詞形が記載されているというものは相当数あるということが言える。例えば、

リスト化を行うにあたっては、「V1+V2」の形をとってはいるものの、語構成の観点から見て、構成要素の一方が名詞として用いられていると思われる語、および構成要素の一方が接辞化していると考えられる語については除くこととした。前者については25語⁸、後者については37語⁹観察された。

次に、使用分野が特定されていると考えられるものには、「金融・取引用語」「住宅・建築用語」「芸能用語」など、本稿における分類用語を付して区別することとし、古語の性格が強いなど、現代語として日常的に用いられるとは思われないものについても、別リストとする。現代語として用いられる語かどうかの判断には、比較的新しく、かつ項目数も絞られている3種の辞書(『明鏡国語辞典 第二版』(2010年、項目数約7万)、『岩波国語辞典 第七版新版』(2011年、項目数約6万5千)、『新明解国語辞典 第七版』(2012年、項目数約63,500)を参照し、その見出し項目として取り上げられているかも参考として判断した。

リスト化の結果およびリスト化の作業を通じて浮かび上がった注意点については、以下の第4節および第5節で順に述べる。第4節では、対応する動詞形を持たない「V1+V2型複合名詞」としてどのようなものが抽出されたか、その結果を、上記の手順にしたがい、「使用分野が特定されるもの」「現代語として日常的に用いられにくいもの」については別リストとし、計3つのリストに分けて示す。

また、第5節では、対応する動詞は持つのだが、現代日本語の観点からは注意が必要だと思われる語について述べる。その1つは、上記の手順にしたがい確認すれば、確かに対応する動詞形は持つのだが、現代日本語としてそれが自然に用いられるとは思われない「V1+V2型複合名詞」である。このようなものが少なからず観察されたため、これについて第5節で別途取り上げることにする。また、数は少ないが、現代語における活用形が古語と一致していないために、現代日本語においてその対応する複合動詞の形を正しく想起することが難しいと考えられるものについても、ここで述べる。最後に、辞書からは対応する動詞形の存在は確認されなかったものの、現代日本語においては、「V1+V2型複合名詞」から逆にそれに対応する動詞形が生み出され、使用され始めているのではないかとと思われる語があることについて指摘する。

本稿の投稿にあたり査読者より「駆け落ち」「狂い咲き」「炊き出し」「立ち振る舞い」「泣き笑い」「抜け駆け」「飲み食い」「巡り合わせ」「もらい泣き」などの語も、対応する動詞形を持たないもののリストに含まれるのではないかと指摘を受けたが、それらの語はここでの手順にしたがって確認すれば、いずれも対応する動詞形(「駆け落ちる」「狂い咲く」「炊き出す」「立ち振る舞う」「泣き笑う」「抜け駆ける」「飲み食う」「巡り合わせる」「もらい泣く」)が辞書に記載されているものである。したがって、本稿で抽出した対応する動詞形を持たない「V1+V2型複合名詞」のリストには、それらの語は含まれていない。ただし、5.1節で述べるが、対応する動詞形が「ある」とされるものの中にも、それが現代日本語として一般的に用いられるものかどうかという点について、検討の余地が残されるものが含まれる。(5.1節の表4にそのような「V1+V2型複合名詞」を挙げているが、例えば上記の「駆け落ち」や「飲み食い」はそこに含まれている。)

- 8 例えば「受け狙い」という複合名詞は、『受け』(観客や聴衆に笑ってもらうこと、あるいは多くの人に支持されること)を狙うこと、即ち『受け』を獲得することを目標とし、それを意図して行うこと」という意味の複合名詞であり、「名詞『受け』+動詞『狙う』」の構成を持つ複合名詞と考えられる。このようなものには、他に「痛み止め」「祝い返し」「極め付き」「継ぎ当て」「酔い醒まし」などがあつた。
- 9 例えば「下ろし立て」「書き初め」「話し振り」「遣りっ放し」などは、下線部分の構成要素は接辞化していると考えられる。

4. 対応する動詞形を持たない「V1 + V2型複合名詞」

対応する動詞形を持たない「V1 + V2型複合名詞」としてどのようなものが抽出されたか、その結果を3つのリストに分け、以下4.1～4.3節にて、順に示す。

まず、『大辞林 第三版』の見出し項目に基づき、『日本国語大辞典 第二版』にもあたって確認した結果、対応する動詞形を持たないと考えられる「V1 + V2型複合名詞」は、全499語抽出できた。また、『大辞林 第三版』には見出し項目としての記載はなかったものの、本稿では、現代日本語として既に使用され始めていると考えられる「V1 + V2型複合名詞」を2語、これに付け加えることとした。したがって、リストとしては、最終的に501語が示されることとなった。付け加えた2語については、以下の4.1節で示す。

この全501語のうち、以下の4.1節で示すように、166語が現代語として分野の偏りなく一般的に用いられるのではないかとと思われるものである。その他には、特定の分野で使用されられると思われる語が4.2節で示すように250語、古語の性格が強いなど、現代語としては日常的に用いられるとは考えにくいものが、4.3節で示すように85語と分類できた¹⁰。

4.1 対応する動詞形を持たない「V1 + V2型複合名詞」：現代日本語として一般的に用いられるもの

対応する動詞形を持たないと考えられる「V1 + V2型複合名詞」は501語（うち2語は本稿において付加したもの）抽出できたが、そのうち、現代語として分野の偏りなく用いられるだろうと思われる語は、以下の表1で示すように、166語が該当するのではないかと考えられる¹¹。

表1 現代日本語において対応する動詞形を持たない「V1 + V2型複合名詞」：

現代語として一般的に用いられるもの

逢い引き	上がり下がり	飽き飽き	上げ下げ	開け閉め
開け閉め	当たり障り	当たり外れ	誂え向き	当て逃げ
言い成り	生き写し	生き埋め	行き来	行きずり
浮き彫り	歌い回し	討ち死に	恨み死に	売り食い
追い炊き／焚き	起き抜け	置き引き	押し売り	踊り／躍り食い
覚え書き	思出し笑い	降り乗り	買い食い	返し縫い

10 本稿では、『大辞林 第三版』をもとに抽出した499語について、それらの特徴を大きくとらえ、このように3つのリストに分類して示すことにしている。ただし、使用分野や使用頻度というのは連続的な性質を持つものと考えられるため、これらの語が必ずしも截然と3つのグループに分かれるということを主張するものではない。

11 本稿では、これらの166語の「V1 + V2型複合名詞」について、個々に使用頻度などの調査は行っていない。ここでの手順をより正確に言えば、辞書から抽出された499語のうち、特定の分野で使用されられると思われるもの（4.2節の表2に挙げる250語）、および古語の性格が強いなど、現代語として日常的に用いられるとは考えにくいもの（4.3節の表3の85語）を順に“除いた”ものが、結果的にこの表1として収められることになったと言える。表1に挙げる166語（対応する動詞形を持たない「V1 + V2型複合名詞」のうち、現代語として一般的に用いられると思われるもの）の1つ1つについて、使用頻度などの観点から、それぞれが現代日本語としてどの程度自然に用いられるものであるかを検証することは、次の段階の課題としたい。

隠し立て	隠し撮り	掛け捨て	掛け流し	駆け引き
重ね切り	重ね刷り	貸し借り	貸し剥がし	勝ち負け
考え違い	聞き納め	聞き書き	聞き応え	着倒れ
着痩せ	切り張り／貼り	切り封じ	切り盛り	切れ切れ
極め書き	食い倒れ	食い逃げ	崩し書き	暮らし向き
下げ戻し	敷き写し	忍び笑い	吸い飲み／呑み	好き嫌い
透き見	添い寝	添え書き	焚き落とし	抱き寝
出し抜け	立ち歩き	立ち売り	立ち泳ぎ	立ち食い
立ち飲み	立ち読み	建て売り	食べ盛り	試し書き*
戯れ書き	使い歩き	使い走り	掴み洗い	作り泣き
作り笑い	続け書き	勤め向き	摘み洗い	摘み食い
照り降り	照れ笑い	通り掛け	届け済み	飛ばし読み*
泊まり明け	泊まり掛け	留め立て	流し撮り	慰み書き
殴り書き	投げ売り	なぞり書き	煮炊き	縫いぐるみ
抜き打ち	抜き写し	抜き書き	抜き差し	抜き刷り
盗み食い	盗み撮り	盗み読み	盗み笑い	寝押し
寝泊まり	寝巻き／寝間着	退き引き	上り下り	飲み捨て
飲み逃げ	乗り降り	乗り詰め	乗り逃げ	這い這い
量り／計り売り	量り減り	走り競べ	走り使い	走り読み
働き盛り	離れ離れ	流行り廃り	控え書き	挽き売り
轆き逃げ	吹き溜まり	臥し起き	不貞寝	振り洗い
紛れ当たり	負け惜しみ	負け嫌い	回し蹴り	回し飲み
回り合わせ	見込み違い	見立て違い	見立て直し	満ち欠け
結び切り	持ち腐れ	持ち逃げ	揉み洗い	貰い笑い
焼き討ち／打ち	焼き増し	焼け太り	雇い止め	破れかぶれ
病み煩い	遣り取り	行き摺り	寄せ書き	読み書き
読み応え	選り好み	別れ別れ	忘れ咲き	割り書き
割り増し				

『大辞林 第三版』には見出し項目としての記載はなかったものの、本稿において、付け加えたのは、上記の表1のうち「試し書き」と「飛ばし読み」の2語である（表中に*印を付している）。このうち「試し書き」については『日本国語大辞典 第二版』には見出し項目として取り上げられている。いずれも現代日本語として耳にはする語ではあるが、参考とした3種の辞書（『明鏡国語辞典 第二版』、『岩波国語辞典 第七版新版』、『新明解国語辞典 第七版』）には、見出し項目として採録されていなかった。

「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(BCCWJ) (国立国語研究所) では、検索対象のメディア・ジャンルおよび期間を指定せず、「試し書き」「飛ばし読み」ともにそれぞれ4件のみのヒットがある。一方、ウェブ上のブログ記事検索¹²では、「試し書き」が2005年から2013年のブログ記事に約2,500件、「飛ばし読み」が同じく2005年から2013年のブログ記事に約2,400件見られた（2013年9月30日現在）。本稿では、なるべく現代日本語の実態に即したりスト

12 「Yahoo! ブログ検索」(<http://blog.search.yahoo.co.jp/advanced>) を使用。

を作成したいと考えるため、この2語については、辞書の見出し項目として安定して記載されるには至っていないかとは考えられるものの、既に使われ始めている「V1 + V2型複合名詞」ではないかと考え、表に含めることとした¹³。

4.2 対応する動詞形を持たない「V1 + V2型複合名詞」：使用分野が特定されるもの

抽出された501語の中には、以下の表2に示すように、その使用される分野が限定されているのではないと思われる語が相当数含まれる。使用される特定の分野について、「金融・取引用語」「住宅・建築用語」「芸能用語」など、本稿における分類用語を付して分類した結果、このような「V1+V2型複合名詞」は全250語となった。

表2 対応する動詞形を持たない「V1 + V2型複合名詞」：使用分野が特定されと思われるもの

＜工芸用語＞				
合わせ吹き	浮き上げ彫り	浮き織り	受け貼り	起き揚げ
織り締め	織り付け	織り留め	掻い練り	重ね焼き
変わり塗り	括し染め	括り染め	絞り放し	透かし織り
透かし彫り	透き織り	鋤き彫り	摺り染め	染め入れ
取り染め	流し漉き	縫い絞り	抜き染め	練り付け
練り貫	練り減り	延べ打ち	延べ磨り	嵌め合い
引き染め	暈し染め	暈し繻 <small>ぬい</small>	彫り塗り	曲がり差し
巻き絞り	巻き染め	交ぜ織り	乱れ焼き	振り織り
焼き締め				
＜芸能用語＞				
合い／相引き	当て振り	居語り	活け殺し	置き生け
書き割り	歌舞伎踊り	考え落ち	切り語り	迫り下ろし
立ち語り	付け合い	脱ぎ下げ	舞働き	見立て付け
向かい付け				
＜武芸用語＞				
射向け	落とし差し	飛び切り		
＜茶道・香道用語＞				
焚き合わせ	たて点だし	迎え付け		
＜文法用語＞				
返り読み	係り結び			

13 「試し書き」と同様に「試し」を前項に持つ「V1 + V2型複合名詞」として「試し撮り／録り」という語もあると思われるが、この「試し撮り／録り」は、『大辞林 第三版』および『日本国語大辞典 第二版』のいずれでも見出し項目としては採録されていない。参考とした3種の辞書(『明鏡国語辞典 第二版』、『岩波国語辞典 第七版新版』、『新明解国語辞典 第七版』)でも取り上げられていない。また、ここでリストに加えた「試し書き」に対し、この「試し撮り／録り」については使用される分野がカメラ用語として特定されるのではないと思われるため、今回はこれをリストに加えていない。「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(BCCWJ)(国立国語研究所)では、検索対象のメディア・ジャンルおよび期間を指定せず、「試し／ためし撮り」が15件ヒットするが、雑誌のうち「趣味」および「児童」に1件ずつ見られる他は、全てブログ記事となっている。辞書に採録されている見出し項目以外に、既に一般に使用されていると思われる語として何をリストに付け加えるかについては、今後さらに検討したい。

＜宴席用語＞				
置き注ぎ	付け差し			
＜習俗・儀礼用語＞				
上げ書き	揚巻	上げ優り	上げ劣り	還り遊び
隠し結び	競い狩り	薫き掛け	付け祭り	問い切り
と 串い／問い上げ	串い上げ	茸き籠り	抜け参り	
＜宗教・信仰用語＞				
行き触れ	生け剥ぎ	忌み明け	忌み違え	踏み合わせ
焼き刺し				
＜住宅・建築用語＞				
欠き打ち	切り欠き	崩れ積み	さく ぼ 決り食み	下げ振り
縛り抜き	透き構え	殺ぎ継ぎ	削ぎ茸き	建て入れ
出組み	通し貫	流れ造り	練り積み	伸し茸き
煽り止め	落とし閉て	落とし積み	折り上げ	嵌め殺し
招き造り	持ち放し	寄せ敷き	呼び塗り	笑い積み
＜航海・船舶用語＞				
もや かか 舳い繋り	開き走り			
＜園芸・造園用語＞				
揚げ接ぎ	合わせ接ぎ	重ね落ち	寄せ植え	寄せ接ぎ
呼び接ぎ	割り接ぎ			
＜裁縫・被服用語＞				
洗い張り	返し留め	隠し縫い	掛け接ぎ	重ね継ぎ
重ね縫い	飾り縫い	組み縫い	刺し継ぎ	刺し縫い
指貫	透かし編み	掬い留め	裁ち上がり	裁ち売り
裁ち下ろし	裁ち着け	立て刺し	付け下げ	つま 撮み縫い
挟み結び	張り返し	伏せ組み	伏せ縫い	まつ く 纏り紵け
纏り縫い				
＜料理用語＞				
合い挽き	和え作り	揚げ出し	揚げ煮	揚げ浸し
合わせ焼き	生き／生け作り	活け締め	炒め煮	落とし焼き
卸し和え	欠き割り	飾り切り	切り干し	食い積み／摘み
梳き引き	す 播り流し	削ぎ切り	染め卸し	炊き合わせ
捏ね揚げ	捏ね焼き	付け焼き	包み焼き	煮崩れ
煮浸し	練り／煉り切り	挽きぐるみ	回し切り	焼き結び
撫で切り				
＜囲碁・将棋用語＞				
指し込み	指し分け	読み勝ち		
＜釣り用語＞				
入れ食い	掛け釣り	消し込み	転がし釣り	すれ釣り
投げ釣り				

<狩猟用語>				
狩り込み	巻狩り	焼き狩り		
<競馬用語>				
追い切り				
<柔道用語>				
背負い投げ				
<相撲用語>				
浴びせ倒し	掛け反り	掛け投げ	掛け <small>もた</small> 靠れ	極め倒し
搦い投げ	出し投げ	吊り落とし		
<野球用語>				
流し打ち	振り逃げ			
<体育用語>				
蹴上がり	蹴伸び	反り跳び		
<出版・印刷用語>				
追い刷り	被せ彫り	組み付け		
<林業用語>				
狩り払い	透かし切り	付け売り	巻き立て	
<鉄鋼用語>				
焼き入れ	焼き <small>なら</small> 準し	焼き割れ		
<金融・取引用語>				
煽り買い	浮き貸し	請け書き	受け払い	売り浴びせ
売り掛け	売り据え	売り持ち	買い掛け	買い建て
買い継ぎ	買い繋ぎ	掛け買い	掛け乞い	掛け倒れ
掛け繋ぎ	掛け取り	掛け払い	貸し売り	支払い渡し
占め売り	占め買い	捨て売り	競り売り	競り買い
付け落ち	積み増し	積もり書き	出直り	抜け売り
延べ売り	延べ買い	延べ払い	延べ渡し	踏み上げ

4.3 対応する動詞形を持たない「V1 + V2型複合名詞」：日常的に用いられにくいもの

また、抽出された501語の中には、以下の表3に示すように、古語の性格が強いなど、現代語として日常的に用いられるとは考えにくいものも、85語観察された。

表3 対応する動詞形を持たない「V1 + V2型複合名詞」：日常的に用いられにくいもの

上げ <small>くだ</small> 下し	当て仕舞	宛て書き	洗い替え	生き腐れ
行き立て	凍て解け	入り繰り	入り取り	入れ立て
打ち交い	打ち交え	生まれ立ち	老い入れ	追い書き
押し送り	押し競べ	折り据え	思い寝	隠れ遊び
掛け踊り	掛け減り	掛け向かい	借上 <small>かしあげ</small>	貸し上げ
切り溜め	切り遣い	食い返し	搔い詰め	搔い掘り
替え劣り	替え優り	書き止め	懸け守り	掠り取り

暮れ暮れ	削り回し	沈め折り	済み済み	咳き病み
責め塞ぎ	抱き守り	出し置き	叩き／敲き放し	敲き払い
立ち構え	立て明かし	立て入り	立て分け	食べ余し
食べ立ち	試し斬り／切り	戯れ遊び	掴み差し	継ぎ送り
搦き減り	作り倒れ	作り取り	付け立て	続き合い
出越し	出遣い	出流れ	留め書き	取り読み
泣き寄り	練り踊り	上り商い	乗り打ち	吐き下し
引き明け	踏み継ぎ	踏み寄せ	守り付け	まろ 転び寝
見入れ	見醒め	見せ消ち	見立て替え	召し下ろし
召し次ぎ／継ぎ	病み返し	行き成り	読み売り	割り替え

5. 対応する動詞形を持つ「V1 + V2型複合名詞」：現代日本語として注意が必要なもの

第4節で示したように、対応する動詞形を持たない「V1 + V2型複合名詞」としては、全501語がリストとして抽出された。一方、辞書（『大辞林 第三版』および『日本国語大辞典 第二版』）に基づき確認すれば、確かに対応する動詞形は持つとされるのだが、そのような「V1 + V2型複合名詞」の中には、現代日本語としては注意が必要だと思われるものが少なからず観察される。第5節ではこのような「V1 + V2型複合名詞」について述べる。

5.1 対応する動詞形が用いられにくいと思われる「V1 + V2型複合名詞」

その1つは、対応する動詞形が、現代日本語として自然に用いられるとは考えにくい「V1 + V2型複合名詞」である。以下の表4で示すように、このような「V1 + V2型複合名詞」は20語観察された。これらの20語は、第4節で示した対応する動詞形が「ない」もののリストには含めることはできない。しかし、その複合動詞形を一般的によく用いられるものと考えてよいのかについては、検討を要すると思われるものである。

表4 対応する動詞形が用いられにくいと思われる「V1 + V2型複合名詞」

行き帰り	行き止まり	居眠り	飢え死に	浮き沈み
売り買い	上げ下ろし	起き伏し／臥し	送り迎え	押し引き
駆け落ち	重ね着	着太り	飛び入り	取り引き
伸び盛り	上り下り	飲み食い	走り書き	病み上がり

辞書により確認すれば、上記の20語には、その対応する動詞形（「生き帰る」「行き止まる」「居眠る」「飢え死ぬ」「浮き沈む」「売り買う」「上げ下ろす」「起き伏す／臥す」「送り迎える」「押し引く」「駆け落ちる」「重ね着る」「着太る」「飛び入る」「取り引く」「伸び盛る」「上り下る」「飲み食う」「走り書く」「病み上がる」）が記載されており、対応する動詞形の“ある”「V1 + V2型複合名詞」であると言える。しかしながら、その複合動詞形が一般的に使用されるものかどうかには、注釈を要すると思われる。

例えば、上記の表のうち「居眠り」は、動詞「する」を伴い「居眠りする」というサ変動詞を構成する。このようなサ変動詞を構成するタイプのものは、対応する複合動詞（「居眠る」）と比べた場合、どちらが一般的に用いられるのだろうか。

辞書の記載を確認すると、上記の表4のうち「行き止まり」「押し引き」「伸び盛り」「病み上がり」の4語以外は、いずれも「する」を伴いサ変動詞を構成することのできる複合名詞である。試みに、このタイプのものから3語（「居眠り」「走り書き」「着太り」）を取り上げ、サ変動詞と、対応する複合動詞との使用状況の違いを探ってみる。

まず、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」を検索してみると、検索対象のメディア・ジャンルおよび期間を指定せず、サ変動詞「居眠りする」は82件見られるのに対し、動詞「居眠る」は2件（メディア・ジャンルは書籍のうち「歴史」および「芸術・美術」）のみであった。「走り書き」については、同様にサ変動詞が33件に対し、動詞「走り書く」はヒットしなかった。

「着太り」については上記コーパスではヒット数がほとんどなかったため、ウェブ上のブログ記事検索¹⁴を行ったところ、サ変動詞「着太りする」は2005年から2013年のブログ記事で198件見られたのに対し、動詞「着太る」は2010年から2013年のブログ記事に29件であった¹⁵（2013年9月30日現在）。ただし、「着太る」のヒット数29件については、ほぼ同一のブログにて日を変えて観察されたものであり、様々な使用者がそこに観察されたわけではない。

また、サ変動詞を形成しないタイプのものからも2語（「伸び盛り」「病み上がる」）について、その使用状況を見てみると、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」ではこれらの動詞はヒットしない。ウェブ上のブログ記事検索では、「伸び盛り」が2007年から2013年のブログ記事に25件、「病み上がる」が2008年から2013年のブログ記事に187件見られた（2013年9月30日現在）。

いずれも大まかな数を見たに過ぎないが、これらの対応する動詞形については、現代日本語において広く定着して使用されているとまでは言えないのではないだろうか。

また、上記の20語の中には、その「V1+ V2型複合名詞」の原義に対しては対応する動詞は確かにあると言えるものの、その多義的別義のすべてに対して、それが対応関係にあるとは言にくいのではないかというタイプのものも含まれる。

例えば、「飛び入り」に対しては、「飛び入る」という複合動詞の存在が確認できる。しかし、辞書の記載内容に基づけば、これは「飛び込む」と同じ意の動詞であり、複合名詞「飛び入り」において表される「予定していた以外の者が不意に参加すること」（『大辞林 第三版』）という多義的別義については、この動詞がその意味においても対応していると言ってよいかについて検討の余地があると思われる。

また、「取り引き」に対しても、「取り引く」という対応する動詞はある。しかし、これも「とらえて引っ張る」の意であり、いわゆる「取引」（商業行為や売買の行為、あるいは互い

14 4.1節と同様に「Yahoo! ブログ検索」（<http://blog.search.yahoo.co.jp/advanced>）を使用。

15 見られた実例を部分的に示すと、例えば「隠そうとすればするほど着太る法則」（<http://ameblo.jp/jewel-style/entry-11574730197.html>）、「[骨格タイプが] ストレートの人が着ると着太ったり、オバちゃんほくなるので気を付けて選んでね〜」（<http://ameblo.jp/charmant-fleur/entry-11027632580.html>）、「フワフワしてるものは似合わないらしい うん確かにコロコロに着太る」（<http://ameblo.jp/handmade-days/entry-11527668670.html>）（いずれも下線は引用者、[]は引用者が補足）というようなものである。

の利益のために双方の主張を取り入れ合って妥協すること)、『大辞林 第三版』の意味に着目すれば、動詞「取り引く」がそれに対応すると言ってよいかは疑問が残る。

このような例は、「V1+ V2型複合名詞」に、対応する複合動詞には見られない多義が生じ、その意味において日常的に用いられるようになっている事例があることを示していると思われる。

5.2 対応する動詞形を想起しにくい「V1+ V2型複合名詞」

また、数は少ないが、現代語における活用形が古語と一致していないために、その対応する複合動詞の形を正しく想起することが難しいと考えられる「V1+ V2型複合名詞」として、以下の表5に示す2語が観察された。

表5 対応する動詞形が想起しにくい「V1+ V2型複合名詞」

思い出	巻き添え
-----	------

複合名詞「思い出」は、動詞「思ひづ」または「思ひいづ」(ダ行下二段活用)の連用形から生じたとされ、対応する動詞形を持つとされるものである。しかし、現代語の動詞の活用規則に従って考える限り、後項動詞の「出」を連用形として持つ動詞については、現代日本語においては「出る」が想定される。したがって、「思い出」に対応する複合動詞を現代日本語の枠組みの中で想起した場合には、「*思い出る」という形が生じてしまうことになる。辞書には対応する動詞(「思ひづ」「思ひいづ」)についての記載が確かにあるものの、現代日本語としては、「*思い出る」という複合動詞は用いられないため、辞書からの語源的な情報とは食い違いが生じる。

また、複合名詞「巻き添え」は、動詞「巻き添ふ」(ハ行下二段活用、後にヤ行にも活用)の連用形から生じたとされ、対応する動詞形を持つものである。しかし、これも現代語の枠内で考えれば、後項動詞「添え」を連用形として持つ動詞として考えられるのは、「添える」であり、対応する動詞としては「*巻き添える」という形が想起されることになる。しかしながら、「*巻き添える」という複合動詞は現代日本語にはないため、語源的な成り立ちを問題とせず現代日本語の中で単純に対応関係を探った場合には、対応する動詞の形はないものとして扱われることになってしまう。

この2語も、対応する動詞形が「ない」もののリストには含めることはできないが、現代日本語を対象として考える場合には、注意が必要なものである。

5.3 対応する動詞が生み出されつつある「V1+ V2型複合名詞」

最後に、リスト化の作業を進める過程において、辞書からは対応する動詞形の存在は確認されなかったものの、現代日本語においては、「V1+ V2型複合名詞」から逆に対応する動詞形が生み出され、使用され始めているのではないかと考えられる語として、「着回し」と

いう「V1+ V2型複合名詞」が1語観察された。

「着回し」とは、「組み合わせを替えて、一組みの服をいろいろな装いに使うこと」（『大辞林 第三版』）であるが、いずれの辞書からも対応する複合動詞の形は確認することができない。上記のリスト化の手順に従えば、対応する動詞形のないものとして含めてもよいことになるかもしれないが、これについては、「着回す」という複合動詞の形が現代日本語として使用され始めているのではないかということが確認できる。

「現代日本語書き言葉均衡コーパス」では、動詞「着回す」は2001年以降の雑誌等の記事に17件見られるにとどまる。一方、ウェブ上のブログ記事検索では、2005年から2013年のブログ記事において約3,000件のヒットが見られた（2013年9月30日現在）。これらのブログ記事には服飾の通信販売を目的としたページも含まれるが、特に販売を目的としない雑記帳形式のブログ記事などにも使用が見られるため、この語の使用は一般にも広がりつつあるのではないかと思われる。よって、本稿では辞書にその記載はないものの、対応する動詞形が用いられる「V1+ V2型複合名詞」の1つとして、これを扱うこととしている。

同じようなタイプのものには、「下げ止まり」という「V1+ V2型複合名詞」もある。「下げ止まり」とは、「物価、相場など、景気の動向を示す指数がこれ以上下がらない状態にまで達すること」（『大辞林 第三版』）であり、本稿での分類で言えば金融・取引用語として、使用される分野が特定される語の1つである。『大辞林 第三版』および『日本国語大辞典 第二版』からは、これに対応する「下げ止まる」という複合動詞の形は確認することができないが、『明鏡国語辞典 第二版』（2010年）、『新明解国語辞典 第七版』（2012年）では見出し項目として「下げ止まる」が採録されている。したがって、本稿ではこれに対応する動詞形の用いられるものとして扱っている¹⁶。ちなみに、版の古い『新明解国語辞典 第四版』（1995年）や『明鏡国語辞典 初版』（2002年）では、「下げ止まる」という見出し項目は採録されていない。時代とともに金融・取引用語としてその動詞形が使用されるようになってきたのではないかと考えられる¹⁷。

16 使用されるメディア・ジャンルに限定はあるかと思われる。「現代日本語書き言葉均衡コーパス」では雑誌・ブログ・白書を中心に30件見られるにとどまる。検出された最も古い使用は、1978年の各種白書におけるもので、例えば「51年度に大幅に減少した土木工事は着工工事費（名目）で前年度比7.3%増と下げ止まった」というものである（下線は引用者）。その他1987年の白書でも「卸売物価は次第に下げ止まりつつあるだけに〔以下略〕」（下線は引用者）というような例が見られる。一方、ウェブ上のブログ記事を検索すると、9,000件以上（2005年～2013年）ヒットする（2013年9月30日現在）。使用されるのは、主に金融・相場に関するトピックではあるが、中には「水俣湾の汚染度が下げ止まったようにみえます。」（2013年9月29日 <http://blogs.yahoo.co.jp/kensetukan/32226280.html>）、「昨夜も体重を量りました。13.2kgとまた100g減ってました。下げ止まったかと思ってたけど、まだわからない状態でした。」（2013年9月26日 <http://plaza.rakuten.co.jp/milkoka/diary/201309260000/>）、「おっと、10000アクセス迎りのアクセス数が前回より若干増えている。マジで下げ止まったか?」（2013年9月24日 <http://plaza.rakuten.co.jp/inakakayoushi/diary/201309240000/>）（いずれも下線は引用者）のように、金融・取引に関わらず、数値の増減という形で示される何らかの事象について、この複合動詞が用いられ始めているようすがうかがわれる。

17 このタイプに近いと思われるものとして、他にも「下げ戻し」という「V1+ V2型複合名詞」が観察される。「下げ戻し」とは、本来「政府・役所などに差し出した書類などをそのまま本人に返すこと」（『大辞林 第三版』）の意である。「*下げ戻す」という複合動詞の形は確認されないため、本稿では対応する動詞形のないもののリストに含めている。ただし、「下げ戻し」については、辞書における記載はないものの、金融・相場用語として、これが用いられる場合があるようである。この金融・相場用語においては、「下げ戻す」という動詞形がウェブ

6. まとめと今後の課題

本稿では、「V1+V2型複合名詞」のうち、現代日本語において対応する複合動詞の形が用いられないタイプのを、総合的な国語辞書『大辞林 第三版』(2006年)を資料として、網羅的にリスト化して示した。対応する動詞形の有無については『日本国語大辞典 第二版』も参照し、確認した。

結果、該当する語は本稿で採用追加した2語も含め、501語が抽出された。このうち、現代語として分野の偏りなく用いられると思われる「V1+V2型複合名詞」は、166語(表1)であった。他に、特定の分野で使用されると思われるものが250語(表2)、古語の性格が強いなど、現代語として日常的に用いられるとは考えにくいものが85語(表3)観察された。

また、リスト化の作業を通じて、「V1+V2型複合名詞」とその対応する動詞との関係を考える際に、注意すべきいくつかの点が浮かび上がってきた。

その1つは、対応する動詞形の中には、現代日本語として自然に用いられるとは思われないものが少なからず含まれるということである。このような「V1+V2型複合名詞」は20語見られた(表4)。その中には、「居眠る」「着太る」のように、「複合名詞+スル」の形(「居眠りする」「着太りする」)のほうが使用頻度が高いと思われるもの、また「飛び入り」「取り引き」のように、その原義においては対応する動詞形(「飛び入る」「取り引く」)があると言えるものの、その名詞が現代日本語において一般的に用いられる意味においては、その動詞がその意味に対応していると言えるかどうか、検討の余地が残されるものが含まれる。

また、現代語における活用形が古語と一致していないために、現代日本語においてその対応する複合動詞の形を正しく想起することが難しいと考えられる「V1+V2型複合名詞」が2語観察された(表5)。

さらに、辞書には対応する動詞形の記載はないものの、現代日本語においては、「V1+V2型複合名詞」から逆に対応する動詞形が生み出され、使用され始めているのではないかと考えられる「V1+V2型複合名詞」が1語観察された。

今後は、本稿で抽出したリストをもとに、語源的に動詞の対応形を持つかどうかという点だけでなく、やはり現代日本語としてその動詞形が自然に用いられるかという点について、使用頻度調査などに基づき検証することを含め、さらに考察を進めていきたい。

上の記事などにわずかながら観察される。ただし、ヒット数は20件(2005年~2013年)ほどであり、さらに書き言葉としてはこの意味の動詞は定着していないと思われ、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」では1件もヒットしない。

引用文献

- 石井正彦 (2007) 『現代日本語の複合語形成論』 (ひつじ研究叢書<言語編>第49巻) ひつじ書房
- 国立国語研究所 (1985) 『語彙の研究と教育 (下)』 (日本語教育指導参考書13)
- 鈴木智美 (2013) 「対応する動詞形のない V1 + V2型複合名詞について—辞書からのリストアップの試み」 『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』 第39号 pp.83-91
- 長嶋善郎 (1976) 「複合動詞の構造」 『日本語講座4 日本語の語彙と表現』 大修館書店 pp.63-104
- 西尾寅弥 (1961) 「動詞連用形の名詞化に関する一考察」 『国語学』 第43集 pp.60-81

辞書

- 北原保雄 (編) (2010) 『明鏡国語辞典 第二版』 大修館書店
- 西尾 実・岩淵悦太郎・水谷静夫 (編) (2011) 『岩波国語辞典 第七版新版』 岩波書店
- 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部 (編) (2000-2002) 『日本国語大辞典 第二版』 第1巻～第13巻 小学館
- 松村明 (編) (2006) 『大辞林 第三版』 三省堂
- 山田忠雄・柴田 武他 (編) (2012) 『新明解国語辞典 第七版』 三省堂

コーパス・ウェブ検索

- 「現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)」 (国立国語研究所)
http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/
- 「Yahoo! ブログ検索」
<http://blog.search.yahoo.co.jp/advanced>

“Verb1+Verb2” Types of Compound Nouns Lacking Corresponding Verbs in Modern Japanese: The Wordlisting of Based on Dictionaries

Tomomi SUZUKI

Tokyo University of Foreign Studies

【keywords】 “Verb1+Verb2” Type of Compound Noun, Corresponding
Compound Verb, Conversion, Dictionary, Wordlist

The purpose of this paper is to build up a list of “Verb1+Verb2” type Compound Nouns for which no verb correspondences exist in the modern Japanese language. Such Compound Nouns include “yomi-kaki”, “nori-ori”, “tachi-yomi”, “oshi-uri”, “tobashi-yomi”, and “omoidashi-warai”. These Compound Nouns do not have corresponding verb forms, for example “*yomi-kaku”, “*tachi-yomu”, or “*omoidashi-warau”.

Although previous studies have pointed out that these types of Compound Nouns were observed, no study provides a list of those words. Thus, it is impossible to grasp how many and which Compound Nouns in fact have no verb correspondents.

In this paper I examined the header entries of a modern encyclopedic Japanese dictionary while referring to other dictionaries or a corpus. I found 501 Compound Nouns of this type, including the following:

- (a) 166 Compound Nouns that are used in modern Japanese generally
- (b) 250 words that might be used in specific fields
- (c) 85 non-modern, or non-frequently-used Japanese words

Furthermore, aside from this 501, it was observed that

- (d) 20 Compound Nouns actually had corresponding verbs, but those verbs are not considered in general use: for example, “i-nemuru”, “ki-buturu”, “hashiri-kaku”, “nobi-zakaru”.
- (e) 2 words were difficult to presume correspondent to the verb because the conjugation of the verbs had been changed, e.g. “omoi-de”, “maki-zoe”.
- (f) 1 corresponding verb has been newly derived from a Compound Noun, i.e. “ki-mawasu” from “ki-mawashi”.

〈研究ノート〉

日本語教育の方法論を応用した 初級沖縄語教科書について

花 蘭 悟 (東京外国語大学)

【キーワード】 沖縄方言、琉球語、危機言語、第二言語

1. はじめに

ユネスコ(国連教育科学文化機関)が2009年2月に発表した“世界消滅言語地図”には世界の言語のうちの3000語が「消滅の危機に瀕した言語」として挙げられているが、この中に日本国内に存在する言語であるアイヌ語(北海道)、沖縄語、国頭語、宮古語、八重山語、与那国語(以上沖縄県)、奄美語(鹿児島)、八丈語(東京都)が含まれている。県内に5つもの「危機言語」をもつ沖縄県もこの事態には以前から気づいており、既に2006年3月に「しまくとぅば(「島言葉」=各地域にみられる方言)の日に関する条例」を制定し、方言¹(琉球諸語)の保存に積極的な姿勢を示している。

ただし、地方自治体によるこのような「しまくとぅばの日」の制定、また国際機関であるユネスコからの危機言語としての認定以前から、琉球諸方言は共通語との異なりの大きさにより若い世代に「しまくとぅば」が継承されていなくなっていることから、方言継承への取り組みは「本土」の他の地域にくらべて盛んに行われているようである。

たとえば、小学校でクラブ活動として「しまくとぅば」教室が行われているところが多いし、公民館や博物館などにおける方言の講座もしばしば開講されている。カルチャーセンターの講座などでも沖縄語のコース²が開催されている。沖縄県の地方新聞である『琉球新報』などを見ても、各地で組踊が上演されたり「しまくとぅば」スピーチ大会が開催されたことがしばしば報じられている。NPO法人「沖縄語普及協議会」など民間の沖縄語継承のための団体も複数存在し、沖縄語講座の講師養成講にも力を入れているようである。

しかし、実際に那覇市内の小学校のクラブ活動に入って指導されている方から話を伺ったことがあるが、「しまくとぅば」教室といっても、クラブ活動の時間で一回50分、年10回程度であり、いわゆる“言語学習の臨界期”前の小学生の児童であるとはいえ、その程度で沖

1 方言と言語を分ける言語学的基準は存在しないと考えられるため、本稿では便宜的に「沖縄語」と呼ぶが、「沖縄方言」という呼称を排除するものではない。

2 2013年夏、商業ベースで行われているところは那覇市にある『桜坂市民大学』の「おじーおばーのウチナーグチ講座」のみである。かつては那覇市内では「ウェル・カルチャースクール」、「琉球新報カルチャースクール」でもウチナーグチ講座があったようではあるが。

沖縄語³がききとれ、さらに自分の言いたいことが言えるようなレベルに達することを目標とはできないという。たとえばスピーチ大会の様子が地方テレビで放映されることがあり、子どもたちが非常に流暢に沖縄語を話しているように見えるのだが、これは教師によって添削された原稿を暗記している場合が多いらしい。

また、これは筆者自身の経験でもあるのだが、いわゆる“言語学習の臨界期”をすぎた成人が外国語（あるいは第二言語）として沖縄語を学ぼうとする際、いろいろな壁にぶつかることが多いようである。沖縄県外で沖縄語を学ぼうしても公民館などの講座でこの言語の講座が設けられることはまれであり⁴、国内でおそらく商業ベースで沖縄語の講座が開講されている唯一の教育機関（東京都内にある「大学書林語学アカデミー」）においても、沖縄語のグループ・レッスンはこの数年開講されていないようである。また独学しようとしても学習書などの教材が十分に整備されているとはいえない。

本稿はこのような状況を考えて、筆者の携わってきた日本語教育の方法論を応用した沖縄語学習・教育を構想しているのだが、その一部として作成中の沖縄語の教科書について現段階までの経過を述べながら、の中で生じてきた問題について考えたい。全体の構成としては、上に述べた事情を踏まえ、次章で比較的近年出版された沖縄語の学習書3冊と琉球諸語のひとつをとりあげた継承教育についての論文を検討する。つづく3章で沖縄語と日本語との類似性を確認した後で、初級日本語教育においてどのように文型がたてられているかを紹介し、それを参考にした初級沖縄語教育の文型案を示す。4章でそこで見えてきた課題について、いくつかの問題を考察し、最後に全体をまとめる。

2. 最近の「沖縄語」学習書・琉球諸語の継承教育の研究について

まず本稿の執筆時点で入手が比較的容易な沖縄語の学習書や琉球諸語の継承教育の研究について見てみることにしよう。

2.1. 「沖縄語」学習書

①吉屋松金1999『実践うちなあぐち教本』南謡出版

「例文・解説編」（文法解説）と「散文編」（沖縄語と日本語の対訳テキスト）からなり、「例文・解説編」では40章にわたって沖縄語の文法が例文とともに述べられている⁵。「例文・解説編」のはじめの10章を見ると、以下のようにになっている。

第1章 品詞／第2章 存在動詞概説／第3章 存在文およびヤ系係助詞／第4章 形容詞概説／第5章 形容文／第6章 動詞概説／第7章 助動詞概説／第8章 動詞文と自動

3 本稿では、奄美～八重山で話されている言語を「琉球諸語」とし、沖縄本島中南部において話されている「沖縄中南部方言」（cf. 亀井孝・河野六郎・千野栄一編1992『言語学大辞典 下-2』三省堂）を「沖縄語」と呼ぶ。なおここでいう「日本語」とは日本記号・音声学において「共通語」「標準語」「東京方言」といわれるものをさす。

4 確認し得た範囲では東京都品川区に「沖縄語を話す会」が1987年から存在し、現在でも月2回の活動を続けている。

5 発音についてはごく簡単に触れられているだけである。

文／第9章 他動文と目的語「-を～する」等／第10章 変成文「-になる」／

名詞述語文を作る接辞である「やん・やいびーん（「だ・です」）」を“存在動詞”とし、テ形に相当するものを“補助連用形”とするなど独自の用語法が使われているものの、章立ては品詞別（さらに表現別）の編成であり、それらはいわゆる学校文法のものに近い。2.2でも触れるが、学校文法はその言語を第一言語として身につけたものが（標準的な）書き言葉を習得するためのもの（あるいは古典語の文法を学ぶための基礎として勉強するもの）であるため、外国語あるいは第二言語として言葉を学ぶものがこのような目次編成のもので学習しようとするには無理を伴うのではないだろうか。冒頭にある「はじめに」の「小著の読み方」をみると、著者の意図としては入門書としての使用をも想定しているようだが、沖縄語の初学者がこの書物をあたまから読む“入門書”として用いるのはあまり適切ではないし、困難が多いだろうと思われる。

とはいえ、独特の用語法に慣れる必要はあるにせよ、多くの例文があげられていることから学習者が参考にする“参照文法”的に使用するなら便利なものであろう⁶。

②西岡敏・仲原譲2006『沖縄語の入門—たのしいウチナーグチー（CDつき改訂版）』（白水社）

2000年に発刊され、2006年にCD付で改訂版が刊行された本書は、すぐれた琉球諸語研究者である著者たちが、言語学者ならびに首里方言を母語とする話者の協力を得て作られたものであり、現在流通している沖縄語の入門書としては最も広く読まれているものである。

日本語の「アイウエオ」が沖縄語では「アイウイウ」となるという三母音の原則や、語頭の声門破裂音などの音韻論的な特徴、助詞やさまざまな接辞の用法などに加え、不規則動詞の活用などについても解説されている。

ただし、“教科書”として見た場合、問題がないわけではない。たとえば、2課で動詞の禁止形・命令形・否定形が導入されているが以下のような説明となっている（否定形で示す）

⑥動詞の否定形

否定形は、共通語の「～ない」を「～ん」にすると覚えてください。

この「～ん」は西日本でよく使われる否定形と同じですね。

カカン kakaN <書かない>	タタン tataN <立たない>
シナン sinaN <死なない>	ユマン yumaN <読まない>
フサン husaN <干さない>	トゥラン turaN <取らない>

（西岡敏・仲原譲2006:23）

ここでは沖縄語の動詞否定形を日本語の否定形から類推させており、おそらく初学者の負

6 ただし、この書物には首里方言の文法概説（国立国語研究所1963所収のものなど）に示されるものとはあきらかに異なった語形（吉屋松金1999ではたとえば過去の質問形がティ形+“i”の“-tii”ではなく、taNの尾略形に-miを付与した“-tami”とされている）などが含まれている。沖縄語中南部方言内部での地域差であろうか。

担をなるべく少なくしようという方針だろうと推測されるが、例として挙げられているのは日本語から類推可能な動詞のみである。4.1でのべるように禁止・否定・命令を作る基となる基本語幹は日本語の否定語幹とよく似ている場合が多いが、常に一致するものではない。たとえば、タシキーン（助ける）、イリーン（入れる）の否定は「助けない」「入れない」から類推される×タシキナン、×イリナンではなく、タシキラン、イリランであるし、カンジュン（かぶる）、イチャイン（会う）など日本語に対応する形がない動詞では語形の作りようがない。なお、沖縄語の動詞を活用させ、さまざまな語形を作るためには、動詞の活用のタイプ（ラ行動詞、カ行動詞など何行動詞であるか）が重要であるのだが、これについてはあまり明確に言及されていないようである。また、一般的に“外国語”の入門書では名詞文から入るのが一般的であるのだが、重要事項であるはずの名詞文の否定の形が文法項目としては立てられていない（形容詞文の否定の形の解説はあるし、名詞文の否定もダイアログの中には出てくるのではあるが）。

以上のように、動詞の語形のつくり方の説明や文法項目のたて方を見る限りにおいては、この教科書はこれだけで沖縄語の文法をシステムティックに学べる教科書とはいえない。とはいえ、ダイアログ（その内容自体が沖縄文化の紹介となっているものも多い）は興味深く覚えやすいものであるし、また第3部は琉歌から民謡、歌劇、組踊、「おもろさうし」まで沖縄の伝統芸能や文学が紹介されていて、さらに随所のコラムなどで言語学的知識（希望の接尾辞「-な」が同種の意味をあらわす古代語日本語の残存ではないか、など）も興味深く学べる工夫がなされている。付属のCDで本書の例文やダイアログが聞けることはもちろん、紹介されている沖縄文化のさまざまな音源に触れることもできることもこの本の価値を高めているだろう。今後も入門書として長く読み継がれていくものと思われる。

③船津好明2010『沖縄語さびら』（琉球新報社）

この書物は著者の船津氏が公務員として沖縄に赴任していた2年ほどの間に、沖縄語に興味を持ってこの言葉に短時間で習熟し、さらに従来からあるカナを用いた表記法では沖縄語を適切に表示できないとしていわゆる合字である「沖縄文字」を考案し、全面的に使用した教科書である。

この本においても「著者まえがき」において「沖縄語の今後の大衆的発展」がうたわれており、沖縄語の入門書・学習書として書かれたという意図は明らかなのだが、独自に創案された沖縄文字の導入・練習にかなりの紙幅を費やしているため、導入されている文法項目は限定されているし、提出順序なども考慮されていないようである。たとえば、1章で名詞文が提出されているにもかかわらず、続いて提出されるべき名詞文の否定形は21課、名詞文の質問文は37章となっているところなどは、学習書として大きな問題であろう。

2.2. 他の琉球諸語の継承教育の研究・教材について

沖縄語をあつかったものではないが、教材案の例示までおよんでいるものとして徳永希恵2011をとりあげる⁷。この論文は（南琉球）多良間島方言の継承の実態について調査したアンケート結果などを示しつつ、多良間島方言の教育について考察した論文であり、方言継承の実態についておこなったアンケート調査の結果を示しながら、この言語の危機的な状態を

指摘する。また発音と文法についての教材案を一部ながら示している。そのなかの「多良間方言の文法」内容一例は以下のようにになっている。

◆名詞の格

○ガ格

ガ格をとまなう名詞は、文のなかで主語としてはたります。標準語の「～が」と語形が対応します。標準語では「～が」と訳します。

タローガ ミナカン アスピー ブリ°。

[taro:ga minakaN asubi: buL]

(太郎が 庭で 遊んで いる。)

キング カーラキイ°。

[kiMga ka:rakɪ]

(着物が 乾く。)

また、ガ格の名詞は、あとにつづくべつの名詞とくみあわさって、お互いの関係性を規定するはたらしきもあります。このとき標準語では「～の」と訳します。

アンナガ トゥビイ° キンユ ミツイ°キタリーユ。

[aNnaga tubi kɪMju mic:kitari:ju.]

(お母さんの 飛び 着物を 見つけました。) * 「飛び着物」 = 「天の羽衣」のこと

クレー ダーガ ムーヌ。

[kure: ta:ga mu:nu.]

(これは 誰の 物か。)

提示されている教材はごく一部であり、文法について目次案が書かれているわけではないので上に示された例だけから判断するのはあまり適切ではないかもしれないのだが、著者自身が上記の「内容例」を「作成にあたって…参考にした」としている明星学園・国語部1965、1968(『にっぽんご3の上』、『にっぽんご4の上⁸』)は既に母語(第一言語)として「日本語」を身につけている児童・生徒が書き言葉としての標準語を学ぶためのものであり、徳永希恵2011が全体の構成においてもそれと類似するものを構想していたとしたら、多良間島方言を外国語(第二言語)として学ぶための教科書としてはあまり適切なものではないのではないかと思われる。

以上のように、沖縄語あるいは琉球諸語において教科書や学習書が書かれてきたが、管見

7 同じ研究室からの沖縄語のテキスト作成の試みとしては琉球大学法文学部琉球方言研究室編2011(『平安座島の方言』)がある。2008年8月から2010年12月にわたっておこなわれた平安座島の現地調査に基づくものであるが、発音の解説が大部分であり、語彙については少し提示があるが、文法についての解説はない。

8 『にっぽんご』シリーズは、1960年代から70年代にかけて、かなり広くもちいられた児童・生徒のための日本語の教科書である。

の限りでは日本語母語話者のための国語教育で用いられているものに依拠するものが多く、外国語教授法の成果を取り入れているものは見られないようである。

3. 沖縄語教育への初級日本語教育の方法の適用

3.1. 日本語と沖縄語の類似性

さて、琉球諸語は日本語と系統関係が証明されている唯一の言語であり（Chamberlain (1895)、服部四郎1959など）、それに属する沖縄語と日本語は基礎語彙の多くは共通あるいは規則的な音変化をしているためよく似ているし、語順も基本的にはほぼ一致する（修飾語の位置など細部の検討は必要だと思われるが）。

- (1) 目：ミー 口：クチ 歯：ハー 鼻：ハナ 手：ティー 葉：ファー 木：キー
- (2) ワンネー シートゥ ヤイビーン．（私は学生です）
私+は 学生 繫辞・丁寧体・非過去
- (3) ヤマダ-サノー ナーファ-ヌ マチ-ンカイ 'ンジャン．（山田さんは那覇の町に行く）
山田 さん+は 那覇-の 町 -に 行く．普通体．完成相．過去．叙述法
- (4) チヌー サーターアングギー カマビタン．（昨日、サーターアングギーを食べました）
昨日．はだか格 サーターアングギー．はだか格 食べる．丁寧体．完成相．過去．叙述法

品詞も日本語のものと同様のものがたてられ（動詞、形容詞、名詞、副詞、連体詞、接続詞、感動詞）、格助辞やとりたて助辞などの助辞（助詞）の体系、用言の文法的カテゴリー（切れ続き、ヴォイス、テンス、アスペクト、ムード）や敬語体系、指示語の体系も日本語と同様のものが存在する（もちろんそれぞれ形式の意味・用法は、場合により大きな異なりを見せる）。

上のことは日本語と琉球諸語とが祖語を同じくすることからすれば当然のことであるのだが、だとすれば、戦前からの長い歴史があり研究のすすんでいる日本語教育の方法論を応用することにより、体系的な沖縄語教育の教授法・教材作成が可能であり、学習の効率を高めることが出来るのではないかということが考えられる。

3.2. 初級日本語教育の文型の配置

たとえば、初級日本語教育で広く用いられている文型シラバスの教科書『みんなの日本語』『新文化初級日本語』『初級日本語』では文型は以下の表1のように配置されている（最初の数課をあげる）⁹。これらの教科書は、1970年代から（改訂を重ねた結果、当初の書名と異なっている）、いわゆる文型シラバスの初級日本語教科書として広く使われているものである。これらの教科書において共通に見られることは、簡単な構造の文から初めて既習の知識を使いながらだんだんと文型を積み上げていくことであり、いくらかの異同はあるにせよ（たとえば、形容詞を先に導入するか動詞文をまず紹介するか、はじめて動詞を導入する際に補

9 教科書の課の数が違うので、扱う分液の紹介は冒頭からの大体全体の1/5とした。

語を必要としないものから導入するか否か、文法項目として動詞の自他对立を教えていないものがある、など) 大勢としては初級日本語教育において導入すべき項目や提出順序に大きな共通点があることが見て取れるだろう。

みんなの日本語 (全50課)		新文化初級日本語 (全36課)		初級日本語 (全27課)	
課	文型	課	文型	課	文型
1	NはNです NはNじゃ(では)ありません NはNですか NもNです NはNのNです NはN歳です	1	Nですか・はい、Nです 何時ですか。 NからNまで NのN N月N日 いつですか NとN	1	NはNです、NはNですか、NのN、これ/それ/あれ この/その/あのN N1ですかN2ですか なんですか だれですか だれのNですか Nも~です Nはどれですか Nはこれ/それ/あれですか どのNですか NとN
2	これはNです、これはNのNです、これはNのNです、このNはNのNです	2	何ですか Nじゃありません N1のN2⇒N1の これ/それ/あれ Nも	2	ここはN[場所]です N[場所]はどこですか Nはいくらですか NはAiいです Aiくないです AiいN どんなNですか …。そして~ 今何時ですか
3	ここはNです Nはあそこです 国/会社はNです NはNのNです NはN円です	3	この/その/あの AiいN どれですか AiいN⇒Aiの	3	NをVます/Vません 何をVますか NをVましたきのうNをVました NをVませんでした N[場所]でVます どこでVますかきのうN[場所]でなにをVましたか N1はNをVます。N2もNをVます NはN1をVます。N2もVます。 NはあしたNをVます。あさってもNをVます。まいにちVます 日よう日にVます …。そして、… N1のN2⇒N1の Aiい
4	N時N分です NはN時からN時までです NはN曜日とN曜日です NからNまでNます N時にNます Nます/ません/ました/ませんでした 電話番号はNです	4	Aiです/Aiくありません Anaです/Anaじゃありません AnaなN	4	N1はN2でした N1はN2ではありませんでした N[場所]へ行きます N[場所]から来ます いつ どの国の人ですか N1とN2のNは同じです N1はN2で、N3はN4です (いっしょに) Vましょう
5	場所へ行きます 乗り物でいきます 人と行きます 日時に行きます 誕生日はN月N日です	5	N[場所]にNがあります N[場所]にNがいます NやN(など)何が/誰が Nはどこにありますか/どこですか	5	N[時間]からN[時間]までいつからいつまでですか 時間の言い方(時分秒) Nぐらい Nは何しゅうかんぐらいですか N[場所]からN[場所]まで N[乗り物]で行きます 何時間ぐらいかかりますか NはAiかったです NはAiくなかったです Nはどうですか とてもAiい たくさんV あまり+Neg …。しかし、… それから、… N1N2(N3) など
6	NをNます 場所でNます いっしょにNませんか Nましょう	6	NをVます Nへ行きます NでVます N[時間]にVます/朝Vます Vますか/Vません NではVません NかNよくVます/あまりVません NはNが好きです どんなN (辞書形の作り方)	6	N[道具・言語・手段]でNます 私は人に物をあげます わたしは人に物をもらいます もうNました/まだです
7	N[道具・言語・手段]でNます 私は人に物をあげます わたしは人に物をもらいます もうNました/まだです	7	Vました/Vませんでした …。それから… 何か/どこかで/どこかへVましたか …。でも … (時の言い方) AiくてAiい AnaでAnaな Nだけ	7	Nはな形容詞です/じゃありません Nはい形容詞です/くないです Nはな形容詞な名詞です Nはい形容詞名詞です
8	Nはな形容詞です/じゃありません Nはい形容詞です/くないです Nはな形容詞な名詞です Nはい形容詞名詞です	8	何日間/どのくらい Aiかったです/ Aiくありませんでした Anaでした/じゃありませんでした Nでした/Nじゃありませんでした …が … Nは…が Nは… AiくてAi	8	NはNが好きです NはNが上手です NはNがわかります NはNがあります Nから N(理由)
9	NはNが好きです NはNが上手です NはNがわかります NはNがあります Nから N(理由)	9	N[場所]にNがいます/あります NはNにいます/あります	9	N[時間]からN[時間]までいつからいつまでですか 時間の言い方(時分秒) Nぐらい Nは何しゅうかんぐらいですか N[場所]からN[場所]まで N[乗り物]で行きます 何時間ぐらいかかりますか NはAiかったです NはAiくなかったです Nはどうですか とてもAiい たくさんV あまり+Neg …。しかし、… それから、… N1N2(N3) など
10	N[場所]にNがいます/あります NはNにいます/あります	10	N[場所]にNがいます/あります NはNにいます/あります	10	N[時間]からN[時間]までいつからいつまでですか 時間の言い方(時分秒) Nぐらい Nは何しゅうかんぐらいですか N[場所]からN[場所]まで N[乗り物]で行きます 何時間ぐらいかかりますか NはAiかったです NはAiくなかったです Nはどうですか とてもAiい たくさんV あまり+Neg …。しかし、… それから、… N1N2(N3) など

表1

表1を見てもわかるように、文型シラバスを用いた初級日本語教科書では、「わたしはやまだです。(どうぞ よろしく)」というような「N(名詞)はNです」という名詞文から始まり、身につけやすいものから複雑なものへと、既習の学習項目の上に積み上げていく形で文法事項を学習する。表1を見ても3つの教科書すべてが「NはNです」から始まっており、形容詞文や動詞文の前に名詞文という流れは共通しているし、後半の方に出てくるた

め表1には載っていないのだが、ヴォイス（受け身・使役）や待遇表現（敬語）は最後の方で教えられるということも共通の点である。

また、これらの文型表の中に長年にわたって行われてきた日本語教育の成果の反映を見ることができる。たとえば、これらの初級日本語教科書で、文は丁寧体（「～ます」の形）を基調として導入され、しばらく後で辞書形やテ形を学ぶまでは丁寧体のみが用いられることが多い¹⁰。のだが、丁寧体基調であれば年長者や見知らぬ人に話しかける場合に失礼にならないということとともに、学習の初期段階で活用の種類（いわゆる五段、一段、サ変・カ変）の区別をしなくてすむという利点もある。

また、これも後半の教授項目であるため表1には出てきていないが、類義の形式が存在するものについては（たとえば根拠をもとにした推量「(し) そうだ」「ようだ」「らしい」「(する) そうだ」）はひとつずつ提出し、それが定着したところに次のものを出すようになっている。さらに、条件節（「～と」「～ば」「～たら」「なら」）をともなう複文は主文が非過去形のもののみを扱う、「のだ」など日常的によく使われる形式であってもすぐには身につけにくいものは項目の紹介を中心にしてあまり深く教えない（「上手に隠す」）、「は」と「が」の使い分けも文法的に明確に区別されるところ以外は学習者に必要以上に意識させないなど、文型の選定や提出提出にはさまざまな工夫がなされているといえる。

3.1. で見たように日本語と沖縄語が文法的にかなりの共通性をもつならば、上のような日本語教育で長年工夫・改良が重ねられてきた文型を参考にした初級沖縄語の学習書・教科書が作れるのではないだろうかと思われる。

3.3. 日本語教科書（初級）を参考にした「沖縄語」の文型配置案

そこで、3.2でみたような初級日本語教育をいくつか参考にしながら、初級沖縄語教科書の文型一覧を作成してみた。対象と目標は以下のとおりである。

- ・対象：日本語母語話者の大学生（大学の授業で用いることを想定）
- ・時間数：90分×15コマ×2〔春・秋学期〕、第一回はオリエンテーション、2回の試験をのぞいて27課分）
- ・目標：日本語教育N4レベルに相当する文型と語彙力を身につけ、日常的な場面で、ややゆっくりと話される会話であれば内容が聞いて理解でき、また自分の伝えたいことを沖縄語で話すことができる。

以下は、各課で提示する例文を文法解説を書きながら作成したものにもとづいた文型一覧である（「初級沖縄語教育のための教科書文型試案」、以下「試案」と略す）¹¹。

10 ただし、坂野永理ほか1999のように動詞は最初から辞書形を提示して、辞書形からマス形を作らせるものもある。

11 沖縄語の表記に関しては巻末に示した。なお、一部で必要にかぎりにおいてローマを併用したところがある。

初級沖縄語教育のための教科書文型試案 (左端の「回」は授業回)

回	課	文法項目 (日本語)	具体的な文型
1	0	沖縄語の発音と表記 (注意すべきものはいくつかのほかの課であつかう)、数字 (1~10)	母音と子音。長音、撥音、促音、数字 (1~10)。「三母音の原則」(具体例を出す)、(あいざつ)、数字
2	1	人称代名詞/名詞文/「の」/肯否質問文・応答/指示語1 (ウレー、アレー) / 疑問詞疑問文/年齢の聞き方	ワンネー Nヤイビーン/NヌN/ウンジョー Nヤイビーミ/ウー・ウーウー/ウレー・アレー Nヤイビーン・ミ/ウレー・アレー ヌーヤイビーガ/ウンジョー イクチ ヤイビーガ
3	2	主題の形の作り方/形容詞文/名詞文の否定の形/指示語2 (クリ/ウリ) / 形容詞文の否定/も/場所の言い方・場所のたずね方	ウリ→ウレー…、/ウレー アカサイビーン/ワンネー ヤマトンチョー アイビラン/ウンジョー ウチナンチョー アイビラニ/クレー・ウレー ワー ムヌ ヤイビーン/ウレー マギコー ネーン/クマ・ウマ・アマー 教室 ヤイビーン/ウンジュヌ 'ヤーヤ マーヤイビーガ
4	3	動詞文叙述文 [非過去] / 動詞文 (対格) / 動詞の否定/肯否質問文・疑問詞疑問文/叙述文 [過去] / 動作の場所/時の言い方	ヤマダサノー メーナチ ルクジニ ウキヤビーン/ワンネー スムチユマビーン/ウンジョー ラジオ チチャビーミ/ウンジョー スーカマビーガ/ワンネー 図書館 'ウティ 勉強サビーン/アチャ・日曜日ニ・メーナチ
5	4	移動動詞/NからNまで/形容詞の過去/形容詞の否定過去/名詞文過去/名詞文否定過去/時間名詞の使い方/いつ	ウチナンカイ イチャビーン・チャービーン・ケーヤビーン/Nンカイ イチャビーン/チヌーヤ イチュナサビータン/チヌーヤ アチコー ネーヤビランタン/チヌーヤ カヨウビ ヤイビタン/アレーガクセーヤ アイビランタン/タルーヤ アチャ エイガ 'ンージャビーン/ウンジョー イチ アヌ エイガ 'ンージャビীগ
6	5	到着・出発の動詞/手段の言い方/期間/Nはどうですか/程度の表現/上下左右前後(位置をあらわす名詞)など/終助辞①	ワンネー モノレールンカイヌイビーン・アヌ ッチョー バスφウリヤビーン/エンピツツシ ジー カチャビーン/チヌーヤ 2ジカン(グレー) ベンチョー サビタン/ウヌ スムチュー チャー ヤイビーガ/ウヌ エイガー アンスカ ウムサコー ネーヤビランタン/a:スムチュー マー ヤイビーガ b:ツクエヌ ウィー ヤイビーン
7	6	存在動詞(あいびーん・ういびーん) / なにか・だれか/いくつ・何人の聞き方/存在文の否定(ねーやびらん)	ツクエヌ ウィーンカイ スムチヌ アイビーン/ヌーガナ アイビーミ/ウンジュヌ トウジュー マーンカイ 'ウイビーガ/ウヌ アツマインカエー ガクセーヤ ミッタイ チャービーン/ヘヤヌ ナーカンカイ チュヌ イクタイ 'ウイビーガ/マジュン ウチナンカイ イチャビラ
8	7	形容詞の連体形と辞書形/様子の聞き方(チャヌヨーナ) / N・Aク ナイビーン (~に/く なります) / もう・まだ/主格 [ヒト・代名詞] の「ヌ・ガ」 / 全否定の形①	カナサイビーン→カナサン、カナサル ウィナグワラベー/A:フジサノー チャヌヨーナ ヤマ ヤイビーガ B:タカサル ヤマ ヤイビーン/アレー プロ野球選手φ ナイビーン/ナツヤスマיעー ナーダ ウワイビラン/アヌ チョガ ガッコーンカイ イチャビーン。/サイフヌ ナーカンカイ イチエンヌン ネーヤビラン
9	8	動詞の辞書形/日本語と似ている動詞/Vン(ディ)チ ヤイビーン (Vつもりです) / 空間化の手つづき/全否定②/過去の質問文	チューヤ ディズニールンカイ イチュンドー/アン(ある) 'ウン(いる)カチュン(書く)サチュン(咲く)…/チューヤ ユクユンディチ ヤイビーン/ナマカラ 'ウバマー トウクルンカイ イチャビーン/チヌー ワンネー スーン カマビランタン/'ヤーヤ チヌー アヌ テレビ ンーチー
10	9	動詞の連体形/動詞の連体用法/推量(ハジヤイビーン) / N(場所)ウトーティN(出来事)ヌ アイビー/理由の表現 (~ク トウ) / 「Nヤ」と「Nヌ/ガ」の使い分け	トウイス トウバビーン→トウイス トウブン/フィージャーヤ クサカムル イチムン ヤイビーン/アチャー アミヌ フリエル ハジヤイーン/チューヤ アミヌ フィクトウ、カサ ムッチイカ/ウチナーウーテエー ルクグワチニ アミヌ ウフォーク フィビーン・ターガチャービタガ
11	10	動詞の否定の形/しななければならない/Vnegの質問文/ワンとワー、ワッター/Nンカイ・トゥV	シマビーン→シマン/シートウヌチャーヤ ガッコウンカイ イカンドレーナイビラン/タルーヤ ガッコーンカイ イカニ/ワームン・ワーガ…/チヌー ワンネー ドウシグワートウ イチャビタン
12	11	~が…(~シガ…) / N1は~が、Nは~と(引用の助辞) / Nφ/経路をあらわす助辞/否定質問文とその答え	ワンネー ウチナンチュー ヤシガ、アンスカ スパー カマビラン/ウヌ ワラバヤ 「アガッ」ンディ アビヤビタン/シバサル ミチアッチャビーン
13	12	動詞のティ形/Vてください/Vてしまう / N1というN2 / Nは Nが 多い・少ない	ササビーン→サチ/マース トウティ クイミソーレー/クワッチャーヤ ナー カディ ネーヤビラン/タナカ サンディ 'ユル ッチュ/トーキョーヤ ッチュヌ ウフサイビーン

14	13	V オーン (動詞の継続相) のつくり方/V オーン形の意味・用法/V してから/N は N が上手です・下手です/一日に五回	kamuN → kadi → kadooN…/ストウミテイカラ アミヌ フトイビーン・ソーリダイジンガ ウチナーンカイ チチョーイビーン/ティアー アラテイカラ ムノー カマビーン/アヌ チョー ウドゥイヌ ジョージ ヤイビーン/クス クスエー フィッチーナカイ ミケーン スミミシエービレー
15		前期試験	
16	14	ほしいです/V したいです)・動詞の連用形/好き嫌いのいいかた/V することが好きです/～の中で	タルーヤ ジン フサン ディ イチョーイビーン/yumabiiN → yumi → yumi + busaibiiN ワンネー フィーサイビーン。ヌーガナ カミフサイビーン/ワンネー ウチナー イッペー シチャイビーン/タルーヤ エイガ 'ンージュール クトウ シチャビーン
17	15	V ても・A くても・N でも いいです/V ては いけません/V なくても・A なくとも・N でなくとも いいです/V1ル・タ時、V2/Aク (変化)	ナー ケーティン シマビーン/クマ'ウティ アシデー ナイビラン/サーターヤ イリランティン シマビーン/ウチナーンカイ チュール トウチャー、ミチトーゲッシ トウキョーババナ コーティッチ クイ ミソール/マギク スン
18	16	能力可能/V ルようになります/条件の形①/N1というのはN2のことで/N [時間] で (1時間で)	ウス ワラペー ナー ドウーチュエイ ッシ チノー チューサビーン/ゴーヤー カミユースル グトウ ナイビタン/'ンミブシヌ ハナシ シーネエ シーサ ウビンジャチ チンペーヌ 'ワチュン/ハツモーデ 'ユシエー ソーガチニ ジンジャンカイ イチュル クトウ ヤイビーン/サンジュップン ッシ トウジミティ クイミシエーミ
19	17	N が見えます・聞こえます/におい・味・音がします/動詞の自他/V ていきます・てきます①/V しながら	クマカラ クダガジマス ミーユン/クス ハナー イイー カジャヌ サビーン/チチュン-チキーン チワメイン-チワミーン…/クマンカイ ニムチ ウチ イチャピラ/スムチ ユマガチー アッチョーイビーン
20	18	N1はN2がA / (体調をあらわす言葉) / N1はN2より～/ N1はN2ほど/N1とN2[と]ではどちらが～か/	ゾーヤ ハナヌ ナガサイビーン/ワンネー ドウーヌ ダルサイビーン/ゾーヤ ウシヤカ マギサイビーン/オオシロサノー ナカマサン アタイ フェーク ハーエーシ ユーサビラン/タルートウ ジルートオー ジルガ フドゥヌ タカサイビーミ/
21	19	V たことがあります/一度も (～ない) /ガ (推量) /N1ではN2が一番～/～のようです	フィージャー カダルクトウス アイビーミ。ウー、チュケーン アイビーン。/ワンネー ヒコーキンカイ チュケーン スダル クトーネーヤピラン/ 'ヤー チュイ ヤラチ、クサカイシミーネー、イチガ ナイラ ワカラン クトウヤー/ウチナー 'ウテュー ナーファヌ イッチン マギサル マチ ヤイビーン/シグトウス アトゥ、ビール スミーネー、イチゲール グトーイビーン
22	20	条件可能/V1ために、V2/V1でV2 [様態] /V1ないで、V2	アミヌ フトールクトウ、フカンカイ インジラリラン/ダイガクンカイ イールタミネー チパティ ベンキョーサンダレーナイビラン/ガッコンカイ ハーエーッシ イチャビーン/アレー ガッコーヤ イカン (グトウ)、パチンコピケンドウ ソール
23	21	エー条件① [動詞] /エー条件形② (名詞・形容詞) /V ても、～/例示のグトーン	語形のつくり方 トゥラー シネー、カー スクサビーン/ウス ミチヌ ウカーコー ネーランドレー、トゥーイビーン/アミヌ フリティン、コクサイドーリンカイ イチャビーン/ナーファヌ グトール マギサル マチ
24	22	ラー条件形 (V なら) /フィッチー・ニンジュー/「まで」と「までに」/A (い) -く V/V すればばいい	A:「ライシエー、トーキョーンカイ イチュンドー」 B:「トーキョーンカイ イチュラー、スカイツリー ンーチ クーワヤー」/チューヤ フィッチー イチュナサイビーン/クス スムチ アチャ マディニ ユドーティ クイミシエービレー/クチマギク アキティ ヌーディヌ ウク ミシティ クイミシエービレー/チャー セー シムガ
25	23	V ておく/ようだ (推量) /経路をあらわすカラ/連体詞	ライシエウ、シケンヌ アクトウ、ウフオーク ベンキョー ソーケーヤー/アチャー アミヌ フィル グトーイビーン/ゴジューハチゴセーカラ イチャビーン/'イー・'ユヌ ムン
26	24	受け身/A・Vren そうだ/シヨッタ形/強調構文	シートウヤ シンシーンカイ フミラリーン/チューヤ シダギサル チン チチョーイビーン ヤー/アレー ケーキ カムタンドー/ウス マドゥ ワタシエー シエー ター ヤガ
27	25	使役の形/まだ V ていません/～ように (目的)	センセーヤ タルー トーキョーンカイ イカスン/ナーダ ユデー ウイビラン/アトゥデ カマリールグトウ、レーゾーコンカイ イリトーティ トウラシエー
28	26	V テーン形/N がいます/否定質問文とその答え/尊敬語	ウサラス カランカイ ナトーン。タルーヤ カマンディ イチャルムヌ、カデー/ユスグニンカイ イチュル パスネー、パスポートヌ イリヤビーン/ウンジュン イチュナサイビラミ? ウーウー、ワンニン イチュナサイビラン/センセーヤ チヌー プール ウトーティ ウイージミソーチン
29	27	謙譲語/V ていく・くる (アスペクト的用法) /終助辞②	カチョーヌ ヤーンカイ ユシリヤビタン/カガコー ナママデ ススディ チャービタン/ (終助辞)
30		後期試験	

試案は先に記したようにいくつかの日本語初級教科書を参考にしたものであるが、3.1でのべたように日本語と沖縄語は祖語を共通とするものであり、基礎語彙や語順、文法カテゴリーはほぼ一致し、対応する形を考えれば理解できるものがある一方、それぞれの言語は長年の変化で大きな変化を遂げたため、意思疎通が不可能なほど異なっているところが多い。そのため、文型の選定や提出順序、また説明の仕方も独自の工夫が必要になってくる。ふたつほど例をあげてみよう。

- a. たとえば、表1の各教科書では第1課で名詞文の形「NはNです」が提出されるが、日本語の場合、名詞(相当)のものに「は」をつければ主題の形になる。一方、沖縄語の場合、名詞の主題の形(「～は」に相当するもの)は以下のように名詞の語末の音によって語形が異なり、やや複雑である。

(1)チラ [顔] cir \bar{a} → cir $\bar{a}a$ チラー [顔は] (- \bar{a} → - $\bar{a}a$) ア段でおわる音 → 「アー」
(2)アリ [あれ] ?ar \bar{i} → ?aree アレー [あれは] (- \bar{i} → ee) イ段でおわる音 → エ段の長音
(3)ツチュ [人] Qc \bar{u} → Qc $\bar{o}o$ ツチョー [人は] (- \bar{u} → oo) ウ段でおわる音 → オ段の長音
(4)チュー [今日] c $\bar{u}u$ → cuu- $\bar{y}a$ チューヤ [きょうは] (- \bar{u} → - $\bar{y}a$)
(5)～サン [～さん] ～ sa \bar{N} → ～ sanoo ヤマダサノー [山田さんは] (- \bar{N} → noo)
例外: ワン [私] wa \bar{N} → wa $\bar{N}nee$ ワンネー [私は]

試案の第1課では「NはNです」「NのN」「NはNですか」「Nは何ですか」などの文型を導入するが、教授事項が多くなり過ぎないように上の(1)～(5)は教えず、主語になるものは「わたしは:ワンネー」「あなたは:ウンジョー」「これは:ウレー」「あれは:アレー」のみを主題の形として提示し(訳語も「わたしは」「あなたは」…のように全体で示す)、主題の形のつくり方は2課で取り上げることにした。主題の形は日本語の「～では(じゃ)ありません」のように否定の形にも関係してくるため、名詞文の否定(表1の『みんなの日本語』『初級日本語』では第1課の項目)「私は学生ではありません:ワンネー シートー アイビラン」も試案では第2課で導入することとした。

- b. 表1でみた日本語教科書ではまず動詞は丁寧体(「～ます」)で導入され辞書形・否定形とテ形(音便語幹)を後に学ぶようになっている。日本語の辞書形・否定形などは活用のタイプ(五段動詞か一段動詞かサ・カ変動詞か)を覚えれば規則的に作ることができるが、テ形の場合、五段動詞は行によって語尾が異なっており複雑である。

さて、沖縄語では動詞に辞書形を作る連用語幹のほかに基本語幹(否定形などを作る)、音便語幹(テ形に相当する形を作る)の三つの語幹が存在するため、事情はさらに複雑である。試案では丁寧体(ビーン体)を基調とし、丁寧体から否定形を作るための次のような説明を試みた。

・動詞の否定形

① ビーンの前が「ナ・マ・サ・バ」：ビーン→ン

ビーンの前が「ナ・マ・サ・バ」の時はビーンを次の形に変えれば否定の形が出来ます。

シナビーン (死にます) ユマビーン (読みます) ササビーン (刺します)

トゥバビーン (飛びます)

→シナン (死なない：ナ行) →ユマン (読まない：マ行) →ササン (刺さない：サ行) →トゥ
バン (飛ばない：バ行)

② ビーンの前が「ヤ・イ」：イビーン→ラン

ビーンの前が「ヤ・イ」の時はビーンをランに変えれば否定の形が出来ます。これらはラ行動詞です。

トゥイビーン (取ります) コーイビーン (買います) カキヤビーン (掛けます)

→トゥラン (取らない：ラ行) →コーラン (買わない：ラ行) →カキラン (掛けない：ラ行)

③ ビーンの前が「チャ」：a. チャビーン→カン b. チャビーン→タン

ビーンの前が「チャ」の場合は2つのタイプがあります。

a. カチャビーン (書きます) ナチャビーン (泣きます) フチャビーン

→カカン (書かない：カ行動詞)

b. カチャビーン (勝ちます) タチャビーン (立ちます) ウチャビーン (打ちます)

→カタン (勝たない：タ行動詞) →タタン (立たない) →ウタン (打たない)

※ - チャビーンがaかbかは日本語から類推できます。書きます→書かない 勝ちます→勝たない

④ ビーンの前が「ジャ」：a. ジャビーン→ガン b. ジャビーン→ダン

a. ウィージャビーン (泳ぎます) ヌジャビーン (脱ぎます)

→ウィーガン (泳がない) →ヌガン

b. ニンジャビーン (寝ます) カンジュン (かぶります)

→ニンダン (寝ない：ダ行動詞) →カンダン (被らない) →ンーダン

a. は日本語から予測できます。またbは初級では2つだけです。数が少ないので覚えてください。

不規則変化動詞は次のように変化します。

サビーン (します) →サン

チャービーン (来ます) →ッチ

ヤビーン (いいます) →イチ

イチャビーン →ンジ (行きます) 'ンジ

日本語のテ形にあたる音便語幹の形(「ティ形」)も同じくらいの紙幅を使って説明する必要がある(試案ではこれらはそれぞれ10課と12課で扱った)。初級沖縄語教育では初級日本語文法の“山場”であるテ形に相当する形が、2回出てくるということになる。

4. 課題

3に示したような文型の配置案を作成済みであるが、現在は例文と本文会話を検討し、ま

というか。また、(14)のように漢語であらわされる抽象的な概念を、そのままにするか翻訳的にあらわすということも、頭を悩まされる問題である。

(14) a. ユーメーナ スムチ (有名な本)

有名-ナ 本

b. ナーダカサル スムチ (名高い=有名な本)

名 高い.連体 本

日本語同様、積極的に漢語や外来語を使うこと(吉屋松金1999)を進める立場もある。ラジオ沖縄で放送されている「方言ニュース」は沖縄で発行されている新聞を沖縄語に訳して放送する番組であるが、その書き起こしを見ても、漢語・外来語は「改修工事」「展示」「オープン」「コーナー」など無理に沖縄語にするとかえってわかりにくそうになるものは、そのまま使っているところも多い。沖縄語が第一言語である高齢の方と会話をしたいのか、会話するとしても沖縄語学習者同士とするのかという状況によってどこまで漢語・外来語を使用するかということが変わってくるのではないと思われる。

③さらに、よく話題にされることだが、沖縄語にはもともと定型のあいさつがなく(儀間進1987など)、「おはようございます」というあいさつなら、家の中では目上に対しては、

(15)ウーキ ミシェービティー (お起きになりましたか)

丁寧接頭辞-おきる.連用形 丁寧動詞.過去.質問

と言い、同様に家の外で立っている人に対しては、

(16)ウタチ ミシェービティー (お立ちになりましたか)

丁寧接頭辞--立つ.連用形 丁寧動詞.過去.質問

などと場面によって使い分ける、あるいは状況に応じて考えなければならないといわれるのだが、それでは不便だからと新しいあいさつ言葉を提案している団体もある。しかし、それに対して日本語の直訳では沖縄の伝統的な文化を伝えていくことにはならないという意見もあるという。これは何が沖縄語的か、さらには「伝統」とは何かという問題につながっていく。

今回の教科書作成については、上記の点についてはまだ方針が定めきれていない状況であり、会話文作成を進めていく中で、暫定的にせよ方針を決めていく予定である。

5. おわりに

本稿では、冒頭に述べたように、現在比較的入手可能な沖縄語学習の不備を指摘し、初級日本語教育の文型を参考にした文型一覧の試案を提示し、その際に問題となったいくつかの

点について述べた。比較的研究が進んでいる沖縄語でも、辞書の編さんにくらべて文法の研究などは遅れているのが現状であり、包括的な記述文法書（参照文法）はまだ書かれていない。このように基礎研究の十分でない言語の教科書作成はかなり困難なものであることが予想される課題は多い。

筆者は現代日本語の文法を専門領域とするものであり、動詞の終止形のムードの多様さにひかれて沖縄語の学習を始めたのであるが、日頃携わっている日本語研究と日本語教育の関係を考えてみても日本語教育の実践に伴って文法や語彙記述のテーマが見いだされ、結果として日本語の研究自体も進展してきたということは衆目の一致するところであろう（その代表的な成果としては寺村秀夫1982～1991『日本語のシンタクスと意味Ⅰ～Ⅲ』くろしお出版、森田良行1989『基礎日本語辞典』角川書店、などがある）。上で述べた日本語教育と日本語研究の関係のように、沖縄語教育のための教科書作成により、これまでの沖縄語研究に何が欠けていたのか、どのような研究が体系的な文法記述や語彙の記述に必要なかという示唆を与えることが可能であると思われる。初級沖縄語教科書の作成をすすめていくことで、自らも学びつつ研究を進め、沖縄語の文法や語彙の研究に新たな一石を投じることができたと考えている。

参考文献

- かりまたしげひさ2012～13「はじめての人のためのシマクゥバの文法（1）～（4）」
シマクトゥバ・プロジェクト「シマクトゥバを知る」連続講義資料（於 沖縄県立博物館）
2013「方言の継承教育に必要な教材と参考資料」
『危機的な状況にある言語・方言の保存・記録に係る取組等の実態に関する調査研究事業』
琉球大学
- 荻野千砂子2009「琉球八重山方言の指示詞について」
『中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要』41号
- 儀間 進1987『うちなあぐちフィーリング』沖縄タイムス社
- 工藤真由美・高江洲頼子・八亀裕美「首里方言のテンス・アスペクト・エヴィデンシャル
ティー」2007『大阪大学大学院文学研究科紀要47』大阪大学
- 砂辺祥子2009「読谷村字座喜味方言のおしはかり表現」琉球大学卒業論文（『琉球語研究3』
に所収）
- スリーエー・ネットワーク編1998『みんなの日本語』スリーエー・ネットワーク
- 田代竜也2011「沖縄中南部方言における与格の名詞と動詞とのくみあわせ」
琉球大学卒業論文（要約版『琉球語研究3』に所収）
- 津波古敏子1992「沖縄語中南部方言」河野六郎・亀井孝・千野栄一編1992『言語学大辞典』
三省堂、所収
- 徳永希恵2011「多良間方言の教育方法とその教材研究」琉球大学卒業論文（『琉球語研究3』
所収の要約版による）
- 西岡敏・仲原讓2006『沖縄語の入門 たのしいウチナーグチ—CD付改訂版—』白水社

坂野永理ほか2011『初級日本語 げんき 第二版』ジャパン・タイムズ

船津好明2010『沖縄口さびら』琉球新報社

明星学園・国語部1965『にっぽんご 3の上』むぎ書房

_____1968『にっぽんご 4の上』むぎ書房

吉屋松金1999『実践うちなあぐち教本』南謡出版

Chamberlain, B. H. (1895) *Essay in Aid of Grammar and Dictionary of the Luchuan Language*. (山

口栄鉄訳2005『琉球語の文法と辞典』琉球新報社)

文字と発音

・下段左は本稿、右は『沖縄語辞典』（国立国語研究所 1963）のアルファベット表記

ア a ʔa	イ i ʔi	ウ u ʔu	エ e ʔe	オ o ʔo
カ ka ka	キ ki ki	ク ku ku	ケ ke ko	コ ko ko
サ sa sa	スイ si ši	ス su su	セ se še	ソ so so
タ ta ta	テイ ti ti	トゥ tu tu	テ te te	ト to to
ナ na na	ニ ni ni	ヌ nu nu	ネ ne ne	ノ no no
ハ ha ha	ヒ hi hi	フ hu hu	ヘ he he	ホ ho ho
マ ma ma	ミ mi mi	ム mu mu	メ me me	モ mo mo
ヤ ya ʔja		ユ yu ʔju		ヨ yo ʔjo
ラ Ra	リ ri ri	ル ru ru	レ re re	ロ ro ro
ワ wa ʔwa	ウィ wi ʔwi		ウェ we ʔwe	

ガ ga ga	ギ gi gi	グ gu gu	ゲ ge go	ゴ go go
ザ za za	ズイ zi zj	ズ zu zu	ゼ ze ze	ゾ zo zo
ダ da da	デイ di di	ドゥ du du	デ de de	ド do do
バ ba ba	ビ bi bi	ブ bu bu	ベ be be	ボ bo bo
パ pa pa	ピ pi pi	プ pu pu	ペ pe pe	ポ po po

キヤ kya (なし)		キユ kyu (なし)		キョ kyo (なし)
シャ sha sja	シ shi si	シュ shu sju	シェ she se	ショ sho sjo
ツァ tsa ʔa	ツイ tsi ʔi	ツ tsu ʔu	ツエ tse ʔe	ツォ tso ʔo
チャ cha ca	チ chi ci	チュ chu cu	チェ che ce	チョ cho co
ニヤ nya nja		ニユ nyu nju		ニョ nyo (なし)
ヒヤ hya (なし)		ヒユ hyu (なし)		ヒョ hyo (なし)
ミヤ mya mja		ミユ myu mju		ミョ myo mjo
リヤ rya rja		リュ ryu rju		リョ ryo rjo

ギャ gya gja		ギユ gyu gju		ギョ gyo gjo
ジャ ja za	ジ ji zi	ジュ ju zu	ジェ je ze	ジョ jo zo
ビヤ bya bja		ビユ byu bju		ビョ byo bjo
ピヤ pya pja		ピユ pyu pju		ピョ pyo pjo

クワ kwa kwa	クイ kwi kwi		クエ kwe kwo	クォ kwo kwo
グワ gwa gwa	グイ gwi gwi		グエ gwe gwe	グォ gwo (なし)
ファ hwa hwa	ファイ hwi hwi		フェ hwe hwe	フォ hwo hwo

・ヤ ʔa ʔja		・ユ ʔu ʔju		・ヨ ʔo ʔjo
・ワ ʔwa ʔwa	・ウィ ʔwi ʔwi		・ウェ ʔwe ʔwe	
(・ア ʔa [なし])	・イ i i	・ウ u u	・エ e e	・オ o o
・ン ʔN ʔN	(・メ me ʔme)			

ン N ʔN	ツ Q Q
-----------	----------

・母音以外の声門破裂は“ʔ”（引用符閉じ）、母音・Nの声門破裂無しは“ʔ”（引用符開き）であらわす。

・それぞれ有標のものとかんがえられるものに印をつける。（声門破裂なしの・アは内間直仁・野原三義 2006、声門破裂ありの・メは（国立国語研究所 1963 に ‘meNsheeN’ の土族的発音としての記載があるので（ ）付きで掲載しておいた。

〔付記〕 筆者が沖縄御学習を始めてから、いろいろなサポートを惜しみなく与えてくださっている（今回は「試案」のチェックをしていただきました）国吉朝政氏（沖縄語普及協議会）に感謝いたします。なお、本稿は2013～14年度 科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究「危機言語教育に対する日本語教育の方法の適用」補助金番号25580088）による研究成果の一部である。

An essay of developing an elementary Okinawan textbook adapting the methodology of Japanese pedagogy

Satoru HANAZONO

Tokyo University of Foreign studies

【keywords】 Okinawan language, Ryukyuan languages, endangered languages
second language education

The Okinawan, one of the Ryukyuan languages, is mentioned by UNESCO as "an endangered language" in 2009. Okinawa Prefecture also enacts "the day of the Ryukyuan" and tries to preserve these languages.

Although the feeling of the Okinawa language revival is increasing, difficulties in learning and education of the Okinawa have not so much improved. It is especially because a good reference grammar doesn't yet exist, and textbooks in this field are not fully developed.

The author came up with an idea to adapt the method of Japanese language education for education and learning of Okinawa because they have the same protolanguage and therefore have many similar things in grammar and vocabulary. Until now, sentence patterns and their grammatical notes for basic course of Okinawan have already been written, and now making dialogues and exercises of grammar is in progress.

And it also came to be clear to give some suggestion for the description of grammar and vocabulary of Okinawa by making textbooks for the pedagogy of this language.

〈研究ノート〉

大藤信郎が日本アニメーションの海外への 初期発信に果たした役割

—1950, 60年代の海外映画祭および
アニメーション機関との書簡分析から—

臼井直也(東京外国語大学大学院博士後期課程)

【キーワード】 大藤信郎、アニメーション、海外発信、1950,60年代、
書簡分析

1 はじめに

大藤信郎(1900-1961)は、国産アニメーション開拓者の一人である幸内純一に師事し、独立後に和紙の一種である千代紙を用いたアニメーションや影絵アニメーション、セルアニメーションを数多く制作した初期のアニメーション作家である。毎日新聞主催の毎日映画コンクールで贈られる「大藤信郎賞」でその名が見られる人物であり、日本アニメーション史における大藤は「海外においていち早く評価されたアニメーション作家」と位置付けられることが多い。その作品に関しては、1953年に『くじら』(1952)がカンヌ国際映画祭に出品、1956年に『幽霊船』(1956)がヴェネツィア国際映画祭に出品され高い評価を得たといわれているが、一方でその作品の特殊さから国内では長い間評価されておらず、研究も十分行われているとは言えない人物である。

作品の海外への発信を例に挙げても、渡辺・山口(1978)、津堅(2004a)などの文献、公益社団法人映像文化製作者連盟のウェブサイトにおける大久保正氏の評伝、『芸術新潮』61巻8月号の大藤を紹介する記事などその多くで「カンヌ国際映画祭短編部門2位」、「ヴェネツィア国際映画祭特別賞」、さらに『くじら』に関しては「ピカソが作品を激賞」といった記述をされることが多い。一方で、大藤を紹介する当時の雑誌記事を見ると、永井(1961:16)では『幽霊船』が「ベネチア映画祭で最優秀賞をもらった」という記述が、飯沢(1956:10)では『くじら』について「惜しくも第二位となり、グラン・プリは与えられなかったが、ル・モンド紙は当然『くじら』が入賞すべきだと論じた」という記述が見られ、その評価は日本で様々な形で紹介されていることが分かる。

これらの評価、特に『くじら』に関しては、1953年4月29日付の読売新聞に「『鯨』を絶賛するピカソ」という見出しのもと、「『鯨』にについてはピカソなどはいきなり日本人席に来て『この映画の色の美しさは今までのどの映画にもないものだ』と握手を求め、ルネ・クレールは『全く新しい構想で成功している』と評していた」という記事が載ったこと、また、日本アニメーション史研究における大著である渡辺・山口(1978:243)において「1958年カンヌ映画祭短編部門2位入賞」と紹介されていることに端を発することが指摘されている。

1 公益社団法人映像文化製作者連盟「大藤信郎像の〈明〉と〈暗〉—短い評伝」
http://www.eibunren.or.jp/wordpress/?page_id=1187 (2013/09/23)

しかし、次章で詳しく触れるが、津堅（2010）が指摘するように、実際はカンヌ国際映画祭における『くじら』の評価は不明である。また、『幽霊船』についても筆者がヴェネツィア映画祭の公式サイトを確認したところ、“Menzione per i film sperimentali（実験映画賞）”という賞を得ていることが確認できたが、これは上述の「最優秀賞」とは異なる賞である。

以上のように、大藤信郎作品の海外発信に関しては、これまで作品の受賞歴という基本的な情報さえも十分な調査がなされていないのが現状である。

そうした状況の中、2010年、東京国立近代美術館フィルムセンターにおいて「アニメーションの先駆者 大藤信郎」という企画展が開催され、それにあわせ大藤の姉・八重氏が同センターに寄贈した多数の資料が整理され、一般公開された。本研究は、それらの資料の中で、特に1950,60年代、大藤が海外の映画祭、映画関連のイベント、アニメーション関連機関、メディア関連会社と交わした書簡を分析し、大藤信郎および彼の作品の海外における受容の実態を明らかにし、大藤が日本のアニメーションの海外への初期発信に果たした役割を探ることを目的とする。

2 先行研究

大藤信郎に関する先行研究は、大きく作品分析研究と作家研究とに分類される。前者は佐野（2005）、呉（2010）、田中（2013）などが、後者は津堅（2004）、そして2010年6月に東京国立近代美術館フィルムセンターで開催された「アニメーションの先駆者 大藤信郎」という企画展に関連した諸報告が中心である。

大藤の作品分析研究に関しては、佐野（2005）は大藤の『蛙三勇士』（1933）を当時流行した「三勇士美談」という戦争映画・プロパガンダ映画史的な観点ではなく、欧米志向のモダン文化という観点で論じ、「モガの表象」、「小唄映画の形式」、「アメリカのトーキー漫画の形式」に着目した分析から、『蛙三勇士』を覆う明るい軽さが軍国美談を覆い隠していると結論づけている。また、呉（2010）はこれまでの大藤研究は作家の経歴や国内外での評価の紹介の域を出ていないとし、大藤のアニメーション制作における意図を論じたうえで、大藤作品20作品の分析を行っている。呉（2010）は、大藤の作品を千代紙を用いた作品、影絵を用いた作品、セルを用いた作品にわけ、それぞれの作品のキャラクター描写における省略と誇張、感情の表現、合体と変形の描写そして背景描写の特徴について分析している。分析の結果、「初期の作品にはリピートしたものが多く、背景もそれほど描写されなかったものが多いが、後期の作品には、動きそのものが物語を進行させる上で計算されより自然な動きで表現しており、背景も色々な工夫で大きな見所へと描かれていた」（呉2010: 34）とその特徴をまとめている。田中（2013）では、大藤の『古事記物語』シリーズを対象に分析し、大藤がなぜ古事記に関心を持ったのか、『古事記物語』にどのような特徴があるのか、神社本庁の作品制作の関係、そして大藤の日本神話への関心などについて論じている。

2 1956年11月に大藤のもとにヴェネツィア国際映画祭から届いた書簡の中では、「第7回の映画祭で特別名誉賞を受賞した『幽霊船』」という文言があるが、この賞と「実験映画賞」の関連性は不明である。

次に、作家研究についてだが、これまでは渡辺・山口(1978)など、アニメーション史の流れの中で一作家として大藤を取り上げるものがほとんどであった。渡辺・山口(1978)では同時代のアニメーション作家と並列に扱い、大藤の海外での評価を交えながら人物像、作品歴などの記述を行っている。こうした扱い方とは異なり、大藤に焦点を当て、アニメーション作家としての大藤の業績を再評価しようとする研究は、津堅(2004a)が嚆矢となっている。津堅(2004a)では、大藤の作品歴、海外での評価、そして「日本アニメーションの父」である政岡憲三との作家性に関する比較が行われている。また、津堅(2004b)では大藤の人物像、作品制作及び技術歴、そして大藤の評価の変遷と日本アニメーション映画史における位置づけが論じられており、さらに補完作品、未完作品、共同制作作品を含め57作品が一覧にまとめられている。津堅は、大藤は個人制作によるアニメーション作家性を示した最初の作家であると位置づけ、これまで「アウトサイダー」というレッテルを付されてきた大藤の、日本アニメーション史、日本映画史全般からの再評価が望まれるとしている。以上のように、アニメーション作家・大藤を対象とした研究は津堅(2004a・2004b)から本格的に始まっている。

津堅の一連の研究以降、大藤信郎に注目が集まったのは前述の企画展が開催され、大藤の未整理の遺品の調査、整理が行われたことがきっかけである。特に、大藤の海外における受容・評価についての研究は、同企画展に関連して徐々にその数が増え、津堅(2010)、大藤(2010)、木村(2010)などがある。

津堅(2010)は同企画展の遺品全般について解説したものであるが、その中で特筆すべきはこれまで国内で通説とされていた大藤の海外での受賞について疑問を呈したことである。津堅(2010:6)では、

大藤の足跡には、現在も多くの謎がある。(中略)大藤作品の海外での受賞歴、例えば『くじら』が「1953年カンヌ映画祭短編部門2位」で、「コクトーやピカソが激賞した」とは伝えられているのだが、当のカンヌ映画祭の公式サイトを見ても、受賞記録が出てこないのである。海外受賞歴については、『幽霊船』のヴェネツィアでの受賞を含めて、その情報源、日本への伝達経路、またそれらが報道機関による誇張なのか、明瞭な事実なのかどうか、検証性・客観性に全く乏しい。

とあるが、前章でも述べたとおり、これまでの大藤の海外における評価は前述の読売新聞など各新聞・雑誌の記事、渡辺・山口(1978)などに端を発するものであり、その検証性・客観性は津堅が指摘するように疑わしい。

こうした状況の中で、企画展開催を機に整理、調査された一次資料を基に、大藤の海外受容の客観的な分析が徐々にではあるが行われている。同じく津堅(2010)では、外務省情報文化局第三課(当時)がまとめた「第六回カンヌ国際映画祭に関する在仏日本大使館よりの報告」の小冊子、そして1961年、国際アニメーションフィルム協会(ASIFA)が大藤の死後、姉の八重氏に送付した書簡について論じている。また、遺品整理の報告である木村(2010:9)では各国語の書簡について「カンヌやヴェネツィアをはじめとする映画祭や、各国の配給業者と連絡を取り合ったものが多々見られ、受賞記念品と並んで、国際的な交流の事実を証明

する、貴重な資料と言える」と報告している。

さらに、大藤（2010）では、1950年代当時の、日本におけるアニメーション映画史の概略、日本の主要な製作所、各社の作品傾向・その他経済的財政的状况について報告されているが、大藤から海外へ発信した文書が残っているという点において極めて貴重な資料であるといえる。

以上のように、先行研究においては、これまで大藤の作品分析が中心となっており、津堅（2004a・2004b・2010）の一連の研究を中心として作家研究についても分析が行われているが、特に大藤作品の海外への発信については断片的な記述にとどまっているものが多い。そこで本研究では、大藤作品の海外発信が盛んであった1950、60年代を中心に、大藤が海外の映画祭関係者、アニメーション関係者などと交わした書簡を分析しその実態を明らかにし、大藤が日本のアニメーションの初期発信において果たした役割を論じる。

3 分析

本研究では、東京国立近代美術館フィルムセンター所蔵の書簡の中から39点を対象に分析を行う。なお、書簡の文書は特に断りのない限り筆者及び研究協力者による翻訳であり、下線は筆者によるものである。また、各表の「書簡内容」の欄にある括弧内のアルファベットは書簡が何語で書かれているかを示したものであり、「FR」はフランス語、「EN」は英語、「IT」はイタリア語、「DE」はドイツ語、「JP」は日本語を表している。

3.1 海外の各映画祭、映画関連イベントからの書簡分析

海外の各映画祭、映画関連イベントからの書簡一覧を表1に挙げる。なお、「映画祭」の欄の「(仏)」、「(独)」、「(伊)」は映画祭が開催された国を示したものである。

表1 海外の各映画祭、映画関連イベントからの書簡一覧

No	年	月	映画祭・映画関連イベント	書簡内容
1	1956	3	第1回国際アニメーション映画祭・国際アニメーション週間 (仏)	『くじら』出品依頼 (FR)
2		6	フランス映画普及協会・ジュルネ・デュ・シネマ	第1回国際アニメーション映画祭参加への感謝 (FR)
3		10	ヴェネツィア国際映画祭	『幽霊船』の永久寄託の依頼 (EN)
4		11	ヴェネツィア国際映画祭	『幽霊船』の送付への感謝 (EN)
5		不明	ヴェネツィア国際映画祭	『幽霊船』出品証 (IT)
6	1957	1	フランス映画普及協会・ジュルネ・デュ・シネマ	グリーティングカード (FR)
7		2	フランス映画普及協会・ジュルネ・デュ・シネマ	第2回国際アニメーション映画祭への参加案内 (FR)

3 大藤（2010）となっているのは、大藤信郎が1956年、フランスのカンヌで開催された国際会議「世界のアニメーション映画」に送付した報告書原文の形式をとっているためである。なお、日本には原文は残っておらず、フランス側の会議報告書をアニメーション研究家のイラン・グエン氏が翻訳したものである。

8		2	フランス映画普及協会・ ジュルネ・デュ・シネマ	第2回国際アニメーション映画祭への 参加案内 (EN)
9		2	フランス映画普及協会・ ジュルネ・デュ・シネマ	第2回国際アニメーション映画祭への 招待状 (FR)
10	1957	不明	イギリス国際アニメーション映画祭	『幽霊船』フィルム出品証 (EN)
11	1958	2	第2回国際アニメーション映画祭 (仏)	参加規則 (EN)
12		3	メルボルン映画祭	『八岐の大蛇退治』の出品申込みの締 切延長 (EN)
13		3	メルボルン映画祭	『八岐の大蛇退治』出品申込みの受領 (EN)
14		7	メルボルン映画祭	『八岐の大蛇退治』上映証明 (EN)
15	1959	1	ジュルネ・デュ・シネマ	グリーティングカード (FR)
16		12	ジュルネ・デュ・シネマ	1960年のグリーティングカード (FR)
17	1960	3	国際アニメーション週間 (JICA)	第3回国際アニメーション映画祭 (ア ヌシー国際アニメーション映画祭) からの出品依頼 (EN)
18		5	国際アニメーション週間 (JICA)	「アニメーション映画作家国際会議」 への出席依頼 (EN)
19		5	国際アニメーション週間 (JICA)	アヌシー展覧会への資料提供依頼 (EN)
20		7	トゥール国際短編映画祭 (仏)	参加案内 (EN)
21		9	トゥール国際短編映画祭 (仏)	新作品依頼 (EN)
22		10	国際アニメーション週間 (JICA)	アヌシー展覧会カタログ送付 (FR)
23		10	フランス映画普及協会・ ジュルネ・デュ・シネマ	『くじら』の梗概 (EN)
24		不明	オーバーハウゼン短編映画祭 (独)	『幽霊船』出品証 (DE)
25	1961	3	サンフランシスコ国際映画祭	参加案内 (EN)
26		5	フランス映画普及協会・ ジュルネ・デュ・シネマ	輸送途中に紛失した『八岐の大蛇退 治』の送料支払いについて (EN)
27	1962	4	ポーポリ映画祭 (伊)	参加案内 (EN)

表1から、ヴェネツィア国際映画祭 (No.5)、イギリス国際アニメーション映画祭 (No.10)、メルボルン映画祭 (No.14)、オーバーハウゼン短編映画祭 (No.24) の4つの映画祭への出品証および上映証明が確認できる。また、1956年3月の国際アニメーション映画祭についても大藤から同映画祭に『くじら』を出品する旨の書簡の控え (No.1) が残っており、さらにフランス映画普及協会より大藤の同映画祭への参加に感謝する旨の書簡 (No.2) が届いており、『くじら』が出品されたと考えられる。さらに、1958年の第2回国際アニメーション映画祭についてだが、1960年に大藤のもとに届いた「第3回国際アニメーション映画祭からの出品依頼」(No.17) の書簡中に、大藤が第1回、第2回の同映画祭に出品をしたことが記されていることから、何らかの作品を出品したことが確認できた。

さらに、トゥール国際短編映画祭と大藤のやり取り (No.20,21) に注目すると、1960年7月に映画祭から大藤のもとに参加案内 (No.20) が届いているが、同書簡の封筒には翌8月に大藤が記した返信書簡の原稿も残されており、以下のように記されている。

御案内に応じまして、私は当映画会に、もし貴君のお許しがあれば、作品を出品したく

思っております。作品と申しますのは、「幽霊船」というフィルムで1956年にヴェニスの映画会で受賞したものでございます。

この出品申し込みに対し、翌9月には映画祭側から新作の出品依頼（No.21）が届いているが、そこには「我々は『幽霊船』を1957年の映画祭で発表いたしましたので、新しい作品を発表できればと思っております」とある。映画祭からの公式な書簡であることから、1957年のツール国際短編映画祭で『幽霊船』が上映されたとみて良いだろう。

以上のように、特定できていない映画祭もあるものの、大藤の作品は少なくとも5か国、8の映画祭に出品、上映されたことが確認できる（表2）。

表2 大藤の海外映画祭出品歴

年	国・地域	映画祭	出品作品
1953	フランス	第6回カンヌ国際映画祭	『くじら』
1956	フランス	第1回国際アニメーション映画祭	『くじら』
	イタリア	第17回ヴェネツィア国際映画祭	『幽霊船』
1957	イギリス	イギリス国際アニメーション映画祭	『幽霊船』
	フランス	ツール国際短編映画祭	『幽霊船』
1958	オーストラリア	メルボルン映画祭	『八岐の大蛇退治』
	フランス	第2回国際アニメーション映画祭	不明
1960	ドイツ	オーバーハウゼン短編映画祭	『幽霊船』

これまでは1953年のカンヌ国際映画祭、1956年のヴェネツィア国際映画祭への出品に関してしか言及されていなかった大藤だが、書簡の記録から、1950、60年代にヨーロッパを中心として数多くの映画祭に出品していたことが明らかとなった。

3.2 海外の各アニメーション機関からの書簡分析

次に、海外の各アニメーション機関から大藤のもとに届いた書簡の分析を行う。表3は、同じくフィルムセンター所蔵の資料をもとに作成した一覧である。

表3 海外の各アニメーション機関からの書簡一覧

No	年	月	アニメーション機関	書簡内容
28	1957	5	IDHEC（高等映画学院）	1956年4月の「世界のアニメーション映画に関する会議 ⁴ 」の報告書送付（FR）
29	1958	1	フランス映画普及協会	グリーティングカード（FR）
30	1959	12	Pierre BARBIN ⁵	JICA（国際アニメーション週間）の後援委員会への参加の可否について（EN）

4 1956年にカンヌで開催されたこの会議で大藤は日本のアニメーション映画について報告をしている。大藤（2010）は会議資料の和訳であるが、大藤の報告の詳細が記されている。

5 No.30は Pierre BARBIN 氏からの電報である。Pierre BARBIN 氏は JICA や ASIFA などの機関で秘書を務めていた人物であることから、この電報もアニメーション関連機関から大藤のもとに送られたものであると判断した。

31	1961	1	IDHEC (高等映画学院)	グリーティングカード (FR)
32		2	国際アニメーションフィルム協会 (ASIFA)	ASIFA による送料支払いについて (EN)
33		3	国際アニメーションフィルム協会 (ASIFA)	国際アニメーションフィルム協会 (ASIFA) の創立案内 (EN)
34		9	国際アニメーションフィルム協会 (ASIFA)	大藤信郎死去への追悼および今後の連絡先について (大藤八重宛) (FR)

以上の各書簡であるが、大藤とやり取りのあった中心的な機関は以下の3つの機関である。

- ① フランス映画普及協会 (ASSOCIATION FRANÇAISE POUR LA DIFFUSION DU CINÉMA)
- ② IDHEC (INSTITUT DES HAUTES ÉTUDS CINÉMATOGRAPHIQUES: 高等映画学院)
- ③ 国際アニメーションフィルム協会 (Association Internationale du Film d'Animation: ASIFA)

それぞれの機関についてだが、一つ目のフランス映画普及協会は各アニメーション映画祭、アニメーション関連行事の運営、そして事務局の役割を果たしていた機関である。大藤のもとに届いた1950年代、60年代の書簡の多くはフランス映画普及協会のものである。二つ目のIDHECはフランス・パリにあった映画を専門とする教育機関である。現在のFémisの前身にあたり、多くの映画人を輩出した機関として知られている。大藤とIDHECは後述の「世界のアニメーション映画に関する会議」で接点を持ち、その後大藤のもとに同機関からの書簡が届いている。三つ目の「国際アニメーションフィルム協会 (ASIFA)」はフランス、アヌシー国際アニメーション映画祭の運営団体でもあり、61年以降の書簡はASIFAからのものが目立つ。この協会は当時のアニメーション界の第一線で活躍していたアニメーターたちが結成した機関であり、設立にはノーマン・マクラレン、イワン・イワノフ・ワノ、ポール・グリモーなど欧米を中心とした多くのアニメーターが関わっている。

次に、それぞれの資料の中で、大藤の海外における認知、受容に関わる資料を取り上げ分析したい。

まず、大藤の当時のアニメーション界における位置づけを表す資料がPierre BARBIN氏からの電報 (No.30) である。この電報にはJICAの後援委員会への参加の可否を問う内容が記されている⁶。この後援委員会に関してはJICAからの書簡 (表1:No.18) にそのメンバーが一部挙げられているが、アレクサンドル・アレクセイエフ (フランス)、ステーヴン・ボサストウ (アメリカ)、マックス・フライシャー (アメリカ)、ポール・グリモー (フランス)、ノーマン・マクラレン (カナダ)、イジー・トルンカ (チェコスロバキア)、イワン・イワノフ・ワノ (ソ連) という当時のアニメーション界の第一線にいた巨匠たちである。この書簡に対する大藤の返答については資料が残っておらず、大藤が後援委員会は入ったかどうかは不明である。

6 本文の下には「アネッセイで行われる国際アニメーション週間に出品されたいという10月7日付の手紙の返事を下さい」という和訳が記されているが、英文とは一致せず、誤訳であると考えられる。

さらに、同書簡では「アニメーション映画作家国際会議」への出席依頼が届いており、その中には「あなたは日本のアニメーション映画についてスピーチをするのに適任である」という内容がある。これは大藤が1956年の「世界のアニメーション映画に関する会議」で日本のアニメーション事情を詳細に報告している経緯を踏まえたものであると考えられるが、上述の後援委員会への依頼とあわせて大藤が日本のアニメーション作家の代表であったことが裏付けられる。

さらに、当時のアニメーション界における大藤の位置を特徴づける資料が、大藤の死去を知った国際アニメーションフィルム協会 (ASIFA) からの大藤信郎の姉・八重宛の書簡 (No.34) である。書簡には追悼の辞が記されているが、後半に以下の一節がある。

私たちはとりわけ日本での連絡相手を見つけないかと思っております。お名前を教えてください。いただいた3名のアニメーターのうちの1人をお願いすることができるとお考えでしょうか。

アニメーションを制作する一作家へ ASIFA からこのような追悼の書簡が届くこと自体、当時の ASIFA を中心とした海外アニメーション界において大藤が重要な作家の一人であったことを示しているが、この一節で、「日本での連絡相手を見つけないかと思っております」とあることに注目したい。ASIFA が日本のアニメーション界にどれほど通じていたかは現存資料からは分からないが、この文面からは、大藤以外のアニメーション作家、アニメーション制作会社と書簡のやり取りを行っていなかった可能性が浮かび上がる。仮に ASIFA と日本のアニメーション関係者とのつながりが大藤だけであった場合、ASIFA にとって大藤は正しく日本を代表するアニメーション作家であったといえるだろう。

以上のように、大藤と海外の各アニメーション機関との書簡から、大藤は単に作品を海外の映画祭に出品するアニメーターにとどまらず、日本のアニメーション界と海外のアニメーション界をつなぐという大きな役割を担っていたことが分かる。

3.3 海外の各メディア関連会社からの書簡分析

次に、映画会社やテレビ局から届いた書簡について分析を行う。表3は各メディア関連会社から大藤のもとに届いた書簡の一覧である。

表4 海外の各メディア関連会社からの書簡一覧

No.	年	月	メディア関連会社	書簡内容
35	1956	7	コンボル・フィルム・サービス (イスラエル)	資料送付の依頼 (EN)
36	1957	10	暁星映画 (韓国)	資料送付の依頼 (EN・JP)
37		12	ヴァーノン・バックナー・プロダクション (アメリカ)	作品の配給希望 (EN)
38	1960	10	シェンカー社 (フランス)	輸送料の請求 (FR)
39		10	フランス国営放送 (RTF)	テレビ放映のためのフィルム送付依頼 (FR)

表からもわかるように、大藤のもとには複数の地域から作品の購入や配給を希望する書簡が届いている。これまで大藤信郎を紹介する際には1953年のカンヌ国際映画祭、1956年のヴェネツィア映画祭への出品が取り上げられることが多かったが、こうした映画祭では一部の関係者や鑑賞者の目に留まるだけであり、一般の市民の認知へはつながりにくい。この傾向は劇映画ではないアニメーションの場合一層強くなるだろう。大藤作品の海外での認知、受容を論じる上では海外メディアで大藤作品がどのように受容されたかを無視することはできない。

表4の中で第一に注目すべき点はイスラエルのコンボル・フィルム・サービスからの書簡(No.35)、そして韓国の暁星映画からの資料送付の依頼(No.36)である。これまでの大藤研究においては大藤の受容と関連の強い地域はフランス、イタリアなどのヨーロッパ地域が中心であり、そのほかにはオーストラリアなど映画祭に単発的な出品を行った地域であった。こうした中で、イスラエルと韓国という、ヨーロッパ地域から文化的に離れた地域から資料送付の依頼が届いていることから、大藤の作品が中東、アジアの一部地域においても認知されていたことが確認できる。

イスラエルの映画会社からの書簡は、プレスシートなどを含む作品一覧の送付を依頼したものである。1956年7月の日付であるので、ヴェネツィア映画祭への出品によって大藤が認知された可能性もあるが、コンボル・フィルム・サービスがどのように大藤信郎、そして彼の作品を認知したか、また、大藤がこの映画会社に作品のリストを送ったかなどは不明である。

次に韓国の暁星映画からの書簡だが、こちらは宛先が「千代紙映画社」となっており、大藤個人宛ではなく大藤のスタジオへ送ったものであることが分かる。内容はコンボル・フィルム同様に作品一覧の送付の依頼であるが、文書には、暁星映画は創立間もない会社であり、学術、文化、教育、ニュース映画の製作、配給、輸入、映写機などの機器類の製造、輸入を業務とする会社を創設したこと、韓国では斯界での最初の会社であり、各製作所が整備されるまでは海外からの輸入に頼らなければいけないとあり、9つの商品(①撮影機・映写機及び付属品、②映画製作に必要な感光材料、③各種スライド映写機及び付属品、④テープ、レコーダー、ラジオ、テレビ及び付属品、⑤学術・文化・教育・ニュース・漫画・線画・映画の目録、⑥スライド映写画及び幻燈画の目録、⑦現像・焼付・プリント・録音・撮影・縮写・編集料、⑧スライド・映写フィルム・幻燈画の製作料、⑨その他撮影・映写用品、資機材、機器、付属品)に関するカタログの送付を依頼している。これらの一覧には作品の目録以外に撮影機や撮影に用いる付属品などが含まれていることから、暁星映画は大藤のもとだけでなく、日本国内の映画制作会社や映画の関連企業などに書簡を送っているものと思われる。しかし、コンボル・フィルムと同様に大藤が暁星映画に資料を送付したのか、もしくはその後作品の販売などがなされたのかは不明である。

次に、より直接的に大藤に作品の配給、放映許可を求めた例を挙げる。アメリカの映画会社、ヴァーノン・ベッカー・プロダクション⁷からの配給希望(No.37)、そして、フランス国営

7 『喜劇王チャップリン』などの脚本で知られるヴァーノン・P・ベッカーの映画会社。

放送からのテレビ放映のためのフィルム送付依頼（No.39）である。ヴァーノン・ベッカー・プロダクションから大藤宛に届いた書簡の内容を以下に記す。

貴社が所有しているカラー、白黒の全作品のタイトルと説明の一覧を送付いただければ幸いです。弊社は西半球における全頒布権を目的とし、7年間のリースを希望いたします。弊社では、弊社の販売目的にあなたの所有している作品が適していれば、あなたが所有する作品のリースを最大限購入する予定であり、金額についてはヨーロッパ地域における同様の作品への支払い金額と同額を、全作品現金で購入いたします。

つきましては、マスターの写真プリント、音楽及び効果音、そして英語訳のスク립トの送付を希望いたします。これらは全てアメリカ合衆国内でダビングする予定です。

作品のリースに際しての条件には、7年の更新料金とオプションを含みます。頒布権とは、35ミリ、16ミリ（TV）、8ミリの作品を指し、サウンドトラックの音楽の録音権も同様に含まれるものとします。

上映プリントを送付いただける場合、上映プリントの送料及び保証代金は弊社が負担いたします。

お返事をお待ちしております。

以上の文書だが、コンボル・フィルム、暁星映画と比較して単に作品リストの送付だけでなく、積極的な作品購入の意欲があらわれていることが見て取れる。また、「ヨーロッパ地域と同額」という点も大藤の作品を当時のアニメーションの中心であった欧米と同様に扱うという意味のあらわれであると考えられる。この書簡に関しても大藤が返信したのかどうか、そして最終的に作品の売買が行われたのかの記録は残っていない。

次に、フランス国営放送（RTF）からの書簡であるが、これもヴァーノン・ベッカー・プロダクションからの書簡同様に大藤宛てに送られたものである。RTFからの書簡の内容は以下のとおりである。

フランス国営放送ではアニメーション映画に関するシリーズ番組の制作を考えております。

これらの映画の放送の目的は、フランスの視聴者に貴国できわめて重要な位置を占めているであろうアートの一つの形を紹介することです。

この番組の枠のなかで、各国の1つあるいは複数の作品を紹介することができる予定です。

優れた映画の中からセクションを行うために、35m/m、16m/m いずれかの場合もコピーをいくつか我々にお送りいただく事の同意をお願い致します。これらの作品のフィルムは使用後直ちに返却いたします。

我々の番組のアイデアがパリにある貴国の大使館の商業代表者に好意的に受け入れられ、あなたが我々の番組に協力してくださることを願います。

我々はこのコンペティションは各国の参加者のステータスとなると考えております。良いお返事をお持ちしております。

これまでの書簡同様、大藤がこの依頼に対しどのような返答をしたのかは国内には資料が残っておらず定かではないが、これまで本研究で概観した資料が映画祭関係者、アニメーション関係者であったのに対し、国営放送からの書簡が大藤に直接届いている点は注目に値する。1950年代後半からフランスを中心としてアニメーション関係者には認知されつつあった大藤だが、国営放送のアニメーション担当部門においてもその存在が知られていたことが分かる。

以上のように、各メディア関連会社からの書簡の概観から、これまでヨーロッパを中心とした地域とのやり取りだけでなく、アジア、中東地域の一部でも大藤のアニメーションが認知されていたことが指摘できる。さらに、当時のアニメーション界の中心であり、大藤の作品が早くから評価されているフランス、アメリカからはより積極的な大藤の作品への関心が確認できた。

4 考察

本章では、これまでの分析をもとに、大藤信郎及び彼の作品が日本のアニメーションの初期発信に果たした役割を考える。

4.1 日本映画の海外発信と大藤作品の海外発信の関係性

まず、当時の海外への日本映画発信の状況の中で大藤作品の位置づけを考えたい。日本の劇映画、アニメーションは、「国際的な文化交流の見地からは日本映画の海外進出ということが、種々いわれてもいた」（池田1951:15）とあるように、戦前から海外に発信されていた。例えば劇映画では田坂具隆の『五人の斥候兵』が1938年のヴェネツィア国際映画祭に出品、アニメーションでは北山清太郎の『桃太郎』が1917年にフランスに輸出されたという記録が残されている。しかし、これらは当時では特殊な例であり、特にアニメーションでは戦前の海外発信の例はごく僅かである。

一方、大藤が作品を発信した1950年、60年代は、1952年にサンフランシスコ講和条約が発効となり、日本の主権が回復してから間もない時期と重なっている。当時の邦画界では、1951年に黒澤明の『羅生門』が非公式招待ながらヴェネツィア国際映画祭のグランプリを獲得したことにより、映画の海外発信、特に輸出産業が活発化していく。当時の関連記事を見ても、「産業体制の確立と輸出振興—映画産業白書によせて」（池田1951）、「日本映画・輸出産業のホープとなる」（黒田他1953）など、映画の輸出に関するものが目立ち、そこでは、

映画の輸出は、諸外国との文化の交流、友好関係の緊密化等を促進するため、独立後間もないわが国としては国際的地位の向上等の観点から映画の輸出振興を重要視する必要があるが、他面映画の輸出が国際収支の改善、輸出商品の市場開拓等に大きな役割を併せもっている点を看過することができない。（経団連事務局1954:53）

と、主権回復間もない日本の国際的地位の向上とともに、輸出産業に果たす役割について論じられている。このように日本が積極的に映画を海外に発信しようとした時期と重なるように大藤信郎のアニメーションが海外へ発信されたこともまた看過することができないだろう。なぜなら、その発信の初期においては、大藤作品も日本を代表する作品として、国際映画祭に出品された、当時の各国の映画関係者に日本のアニメーションの存在を伝えているからである。このように、日本の映像作品の海外発信という観点から見ると、大藤作品は実写映画と同等の役割を果たしているといえるだろう。

4.2 日本のアニメーションの初期発信に大藤が果たした役割

前節で述べたように、日本のアニメーションは戦前、単発的な発信があったものの、その数は極めて少ないものであり、日本のアニメーションの存在は海外ではあまり周知されていなかったと考えられる。そうした状況の中で、大藤は「映画祭への出品」そして「アニメーション関連機関との交流」という二点において大きな役割を果たした。

前章で概観したように、大藤はヴェネツィア国際映画祭やカンヌ国際映画祭などの権威ある映画祭を含む5か国、8の映画祭に出品し、日本アニメーションの存在を各国の関係者に周知させ、その結果として欧米だけでなく中東やアジアの一部の地域においてはアニメーション関係者がその存在を認知するに至っている。1960年代以降のアニメーション発信を牽引する東映動画（現・東映アニメーション）が初めて『白蛇伝』をヴェネツィア国際映画祭に出品したのが1958年、大藤と同じく日本のアニメーション発信の第一人者の一人である久里洋二の『人間動物園』がヴェネツィア国際映画祭に出品されたのが1961年であることを考えると、1950年代はじめからアニメを欧米の映画祭に出品したことは、日本アニメーションの最初期の発信を行うという大きな役割であったといえるだろう。

次に、各アニメーション機関との書簡のやり取りから、大藤が1950年代後半から1960年代にかけて ASIFA をはじめとした当時のアニメーション界の中心機関とやりとりを行っていたことが明らかになったが、特に大藤が徐々に「日本を代表するアニメーション作家」になっていったこと、そして大藤が単なるアニメーションの制作者ではなく、日本のアニメーションに関する情報を海外に発信する役割を担っていたという点に着目したい。1959年には ASIFA の前身である JICA から大藤のもとに後援委員会への参加の可否を問う書簡が届き、また、大藤の死後には ASIFA から姉の八重氏のもとに日本のアニメーターの紹介を依頼する書簡も届いている。大藤は欧米を中心とした当時のアニメーション界において、日本のアニメーション関係者の代表のような位置づけになっていたと考えられる。また、1957年の「世界のアニメーション映画に関する会議」での報告、1960年の「アニメーション映画作家国際会議」への出席依頼に関する書簡に書かれている、大藤が日本のアニメーションについてスピーチするのに適任だという文言を考慮すると、大藤は「海外においていち早く評価されたアニメーション作家」ととどまらず、日本のアニメーション事情の専門家として海外へ国内事情を発信するという極めて大きな役割を担っており、日本アニメーション史においても重要な役割を果たしたと言えるだろう。

5 おわりに

以上、国内に現存する一次資料分析であり推測の域を出ない箇所も多いが、大藤信郎の1950、1960年代における海外への作品発信について分析を行い、大藤が日本のアニメーションの初期発信に果たした役割の一端を明らかにすることができた。これまで、大藤信郎に関する言説は新聞、雑誌などの各メディアやアニメーション史の一部の研究において存在してきたが、その詳細は不明な点が多く、本稿は大藤信郎作品の海外発信およびその受容に関する基礎研究となると考えられる。しかし、本研究で分析対象とした国内の一次資料を用いても未だに明らかになっていない点も多い。今後は特に以下の二点について研究を行っていききたい。

まずは、大藤作品の海外における評価の詳細である。日本に残っている資料は津堅氏が指摘するように「検証性・客観性に全く乏しい」ものであり、大藤の評価を正しく述べたものではない可能性が高い。今後は現地、特に大藤の作品が出品された映画祭、各国のアニメーション機関、大藤の作品の配給、放映を希望した各地域における一次資料の収集および分析を行っていききたい。

また、本稿では当時の実写映画の発信と関連付け大藤が果たした役割について考察を行ったが、この点についても今後、流通・評価・配給のルートとプロセスなどをさらに調査、分析し、大藤作品の発信の特性を明らかにしていきたい。

大藤信郎に関する研究はまだ国内では俎上に載ったばかりである。今後更なる研究を行い、海外でいち早く評価された「アニメーションの先駆者」である大藤信郎についてその作品の発信及び評価、日本アニメーションの海外への初期発信に果たした役割を明らかにしていきたい。

謝辞

本稿の執筆にあたり、貴重な一次資料を提供いただきました東京国立近代美術館フィルムセンター、文献翻訳の協力をいただいた半崎博之氏に心より感謝申し上げます。

参考文献

- 飯沢匡(1956)「ピカソ、コクトオをうならせた グラン・プリをねらう奇人—セロハン映画の大藤信郎氏」『週刊読売臨時増刊 現代奇人怪物読本』9-15, 読売新聞社
- 池田義信(1951)「産業体制の確立と輸出振興—映画産業白書によせて」『映画新報』(21), 14-15, 映画新報社
- 大藤信郎(1956)「影絵映画三十年—芸術外交・私のウッペン—」『芸術新潮』7(7), 232-235, 新潮社
- _____ (2010)「日本のアニメーション映画の現況報告」『NFC ニュースレター』92, 13-14, 東京国立近代美術館フィルムセンター
- 木村智哉(2010)「フィルムセンター所蔵 大藤信郎関係資料 整理報告」『NFC ニュー

- ズレター』91, 9, 東京国立近代美術館フィルムセンター
- 黒田豊治 (1953) 「日本映画・輸出産業のホープとなる (座談会)」『キネマ旬報』(68), 75-81, キネマ旬報社
- 経団連事務局 (1954) 「映画輸出振興上の問題点」『経団連月報』2 (2), 105-107, 経済団体連合会
- 呉恵京 (2010) 「大藤信郎における漫画映画の表現分析」徳間記念アニメーション文化財団編『財団法人徳間記念アニメーション文化財団年報2009-2010別冊 平成20年度アニメーション文化調査研究活動助成制度 研究成果発表』10-48, 財団法人徳間記念アニメーション文化財団
- 佐野明子 (2005) 「大藤信郎『蛙三勇士』(1933)におけるモダン文化と「軍国美談」の相克」大阪大学大学院言語文化研究科編『言語文化共同研究プロジェクト2004 表象と文化』77-86, 大阪大学大学院言語文化研究科
- 田中千晶 (2013) 「日本神話のアニメーション化—大藤信郎の『古事記物語』をめぐって—」『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』49, 25-34, 甲南女子大学
- 津堅信之 (2004a) 『日本アニメーションの力—85年の歴史を貫く2つの軸』NTT 出版
- _____ (2004b) 「大藤信郎 その業績と評価」『NFC ニューズレター』56, 3-5, 東京国立近代美術館フィルムセンター
- _____ (2010) 「無邪気で一途なアニメーション作家—遺品からみえる大藤信郎の新たな人間像—」『NFC ニューズレター』91, 6-8, 東京国立近代美術館フィルムセンター
- 永井萌二 (1961) 「小さな“動画の王様”の死—故大藤信郎さんとその姉—」『週刊朝日8月25日号』2199, 16-20, 朝日新聞社
- 渡辺泰・山口且訓 (1978) 『日本アニメーション映画史』有文社

参考資料

- 「art news 千代紙・影絵・色セロファン 変幻自在のアニメーション作家大藤信郎」(2010)『芸術新潮』61 (8), 119-121, 新潮社
- 「カンヌの日本映画『鯨』を絶賛するピカソ 大賞候補『原爆の子』」読売新聞 1953年28年4月29日朝刊

参考 URL

- 公益社団法人映像文化製作者連盟「大藤信郎像の〈明〉と〈暗〉—短い評伝」
http://www.eibunren.or.jp/wordpress/?page_id=1187 (2013/09/23)
- 神戸映画資料館「『新発掘！大藤アニメーション！』によせて」
http://www.kobe-eiga.net/event/report/2013/08/post_15.php (2013/09/23)

A Study on the Role of Noburo Ofuji in the Early Transmissions of Japanese Animation to Foreign Countries : An Analysis based on the Letters from Overseas in the 1950s and 1960s

Naoya USUI

Tokyo University of Foreign studies

【keywords】 Noburo Ofuji, Animation, Foreign Transmission,
1950s and 1960s, Analysis of letters

The purpose of this study is to investigate the transmission and evaluation of animation films of Noburo Ofuji through analyzing letters sent from overseas.

Noburo Ofuji (1900-1961) is an animator in the early stages of Japanese animation, and he is well-known as the first animator to be recognized and highly regarded among foreign countries. In preceding studies, some deal with an analysis of his films, some deal with his place in the history of Japanese animation. However, little has been reported on detailed transmissions and the evaluation of his films. In this study the author surveyed 39 letters from 1956 to 1962 which were sent from overseas film festivals, animation-related organizations and media-related companies to Ofuji, and revealed the following three points.

Ofuji's films were screened at least at 8 film festivals in 5 countries (France, Italy, the United Kingdom, Australia and Germany). Although evaluations at these film festival are unclear, it can be considered that the screening of his works has played a certain role in the foreign recognition of Ofuji.

Ofuji exchanged letters with leading animation-related organizations in the 1950s, 60s like IDHEC (L'Institut des hautes études cinématographiques) and ASIFA (Association Internationale du Film d'Animation). Furthermore, it became clear that in these organizations, the position of Ofuji had changed gradually into 'the leading animator in Japan'.

Ofuji received letters from not only European, but also Asian and Middle Eastern media-related companies. So far, it was considered that the reception of his films was mainly limited to Europe, these letters from Asian and the Middle Eastern media-related companies suggest his films were recognized by a much wider international audience.

Based on these 3 points, this study considers the role Ofuji's films played in Japan's early transmissions. In 1950s, 60s, Japan's film industry began actively exporting Japanese films. Considering the above, in view of the fact that Ofuji's animations were transmitting in the same way overseas, his role for early transmission of Japanese animation can be considered to be very important because he had a leading role in the spreading of Japanese animation overseas.

In result, this study has shed some light on the role of Ofuji's films being transmitted and evaluated abroad during the early stages of Japan's early transmissions abroad. However, this study has been based entirely on materials existing in Japan, thus further study using local primary sources are necessary for a more accurate conclusion.

「国内外の高等教育機関における日本語教育事情調査」 データベース中間報告Ⅱ

－ 日本研究に関連した海外の大学院教育－

谷口龍子（東京外国語大学）、望月圭子（東京外国語大学）

【キーワード】 日本研究、大学院教育、コース・ワーク、研究領域、
大学院間の連携、学位取得後の進路

0 はじめに

本稿は、「国内外の高等教育機関における日本語教育事情調査¹」（東京外国語大学国際日本研究センター）に基づき、日本研究に関連した海外の大学院教育の現況についてまとめたものである。本調査は、日本研究に関連した海外の大学院教育の構成（組織、教員数、学生数）、コースやカリキュラムの特徴（コースワーク、単位制度、論文の資格審査等）、担当教員の専門や研究の方向性（日本学、日本語学、日本語教育学他）、研究テーマ、学位授与、学位取得後の進路等）について聞き取り調査あるいはアンケート調査を行っている。調査結果は、国内外の研究者間、あるいは大学院生間の研究交流のための情報提供、さらに国際的協働ネットワーク構築への寄与を願って、ウェブ上で公開している。これまでに協力が得られた49校（23カ国・地域）²のうち、大学院において日本関連（日本学、日本語学、日本語教育学他）のコースを置いている組織は44校であった。

本稿は、これらの調査から得られた情報に、国際日本研究センター主催のシンポジウムや研究会や大学院教育関係者による座談会³での情報を加え、日本研究に関連した海外の大学

1 調査全体の趣旨や調査データの詳細は、<http://www.tufs.ac.jp/common/icjs/jp/6100.html> で公開されているので参照されたい。

2 2014年3月15日現在、データが公開されている大学は、以下のとおりである。＜アメリカ＞ハーバード大学東アジア言語文明学科、プリンガム・ヤング大学、＜イギリス＞リーズ大学、マンチェスター大学、オックスフォード・ブルックス大学、ロンドン大学東洋アフリカ学院、＜ウクライナ＞キエフ国立言語大学、＜エジプト＞アインシャムス大学、カイロ大学、＜オーストリア＞ウィーン大学、＜オランダ＞ライデン大学、＜カナダ＞アルバータ大学、ブリティッシュ・コロンビア大学、モントリオール大学東アジア研究所、トロント大学人文学部東アジア学科、ビクトリア大学、＜カンボジア＞プノンペン大学、＜スイス＞ジュネーヴ大学、＜スペイン＞マドリッド自治大学、＜大韓民国＞韓国外国語大学校、＜タイ＞タマサート大学、＜中国＞北京大学日本語文化学部、北京語言大学、大連外国語学院日本語学院、大連民族学院、復旦大学、上海外国語大学、＜香港＞香港中文大学、香港大学、＜台湾＞台湾大学文学院日本語文学科、淡江大学、中国文化大学、東呉大学日本語文学科、元智大学、高雄第一科技大学、＜ドイツ＞ボン大学、フリードリッヒ・アレクサンダー大学エアランゲン・ニュルンベルク、＜フィリピン＞フィリピン大学ディリマン校＜フィンランド＞ヘルシンキ大学、＜フランス＞グルノーブルスタンダール第三大学、パリ・ディドロ（パリ第七）大学日本語科、フランス国立東洋言語文化大学、リール第三大学ロマンス・スラブ東洋学部日本語教育セクション、プロバンス大学、＜ベトナム＞ハノイ国家大学外国語大学、＜マレーシア＞マレーシア国民大学、＜モンゴル＞モンゴル国立大学、＜ラオス＞ラオス国立大学＜ロシア＞モスクワ大学

3 座談会（2013年8月1日）の出席者は次の通り。徐一平氏（北京外国語大学教授）、趙華敏氏（北京大学教授）、陳明姿氏（台湾大学教授）、金鍾徳氏（韓国外国語大学教授）、ユン・ホスク氏（韓国外国語大学教授）ほか、本学教員（望月圭子、小林幸江、鈴木美加、谷口龍子）

院教育の現況について、コース・ワーク、研究領域、大学院間の連携や学位取得後の進路などを中心に報告する⁴。

1 日本研究に関連した海外の大学院教育の概況

谷口・坂本（2013）では、日本研究関連の専門を有する大学は、日本研究を英語あるいは現地の言語で行う欧米型と、日本語を習得した後に日本研究に進むアジア型に大きく二つに分かれることを指摘した。大学院での専門分野も、基本はこれらのフレームの延長にある。ヨーロッパの伝統校では歴史学、社会学、文化論、日本文学などの日本研究が多く、研究成果の発表は英語や現地の言語で行われることが多く、アジアでは、日本語学、日本文学、日本語教育など言語、言語教育あるいは日本文学のコースが置かれているところが多い。しかしながら、日本との文化、経済交流による需要の変化や国内あるいは国を越えた言語・教育政策の影響により、学部と同様に大学院においてもコースの改編などの変化が見られる。

ヨーロッパでは、ボローニャ・プロセスの影響等から、ドイツやオーストリアで日本学研究が東アジア研究所に統合されるなど、従来の日本研究の組織が縮小されたり、一部の伝統校に研究の拠点が集約されるところがある⁵。しかしその一方で、フランスなどでは、通訳・翻訳などの実学的なコースの増設や国際貿易コースなどでの日本語需要の増加も見られる。

アジアでも、中国、韓国、香港などの地域で、従来の日本語学、日本文学などのコースに加えて通訳・翻訳などの実学的コースの増設が見られる。また、その一方で、台湾では、日本の歴史、社会、経済などを中心とした日本研究センターが設立され、大学院教育との連携が行われている。

教育や研究の実際は、学内の日本関連の研究センターと大学院が連携する体制で進められているところが多い。また、一国内あるいは国を越えて、複数の大学院が合同で研究発表や院生間の交流を行う動きが増えつつある。北京大学、中国人民大学、筑波大学の3大学間院生交流、北京外国語大学（中国）、高麗大学（韓国）、政治大学（台湾）における語学、文学、文化、社会の共同ゼミなどである。このような活動は、新たな領域や学際的研究における研究者を育てるためにも有効な方策であると思われる。

学位取得に関しては、学部において日本語以外に経済やマスコミなどを専攻するダブルメジャーの傾向が台湾や中国などで見られたが、大学院においても日本語学、日本学研究所の学位の外に経済など別の分野で学位を取得したり、複数の大学院で学位を取得するダブルディグリーも増えつつある。その背景には学位取得後の就職難がある⁶。

4 調査期間は2010年～2013年と年度が異なるため、正確な比較はできないが、組織の規模の目安がわかるように、在籍数などは調査時の実数を記述した。

5 ドメーニグ（2010）、山口（2011）等による。

6 徐一平（北京外国語大学教授）の話では、中国では、文学修士に加えて、経済学修士を取得することが就職に最大の利点となるということである。

2. 各国の状況

本章では、各国の状況について概観する。

2.1 ヨーロッパ

前述したように、ヨーロッパでは、ボローニャ・プロセスの影響等による組織の統廃合により、従来のディシプリン重視の日本学研究が縮小傾向にある一方で、通訳や国際貿易など実学的なコースにおける日本語の需要が増えている。

2.1.1 イギリス

イギリスおよびロンドン大学(SOAS)の概況については本書に掲載されている田中和美氏の報告を参照されたい。ここでは、田中氏の報告書による全体の概況とSOAS以外の状況について述べる。イギリスで日本関係の学位を取得できる大学院は、修士課程6校、博士課程3校であるが、それ以外にもオックスフォード大学、オックスフォード・ブルックス大学など主に社会人類学の領域で日本研究が行われているところもある。学制は、学士課程3年制、修士課程1年制が多い。

マンチェスター大学には、日本学と東アジア学の2つのコースがあり、日本学には毎年3名、東アジア学には2,3名入学する。両コースとも博士課程まで進むことができる⁷。

リーズ大学には、日本学コースのほかに、ビジネス・スクールと連携したジャパニーズ・ビジネスコース、通訳・翻訳コースがある。通訳・翻訳コース以外では日本語教育ができない学生も受け入れるが、その際は интенシブ・ジャパーニーズが受講できる。修士号取得者はジェット・プログラムにより日本で教員になる者や外務省のキャリアなどがある。博士課程の指導教員の専門は、文学とキリスト教、文学と映画、日中関係、アジア・アフリカ関係、経営・経済学である。博士号取得者は毎年若干名いる⁸。

2.1.2 フランス

フランスの大学院では古典や日本文化等を中心に日本学研究が行われてきたが、近年は大学院において通訳や通訳あるいは国際関係、国際貿易におけるコースに日本語が専攻されるところも増えている。

フランスには、15の大学院に日本研究関連の修士課程があり、そのうち5校で博士号が取得できる⁹。修士課程は1年と2年で、それぞれ修了審査があるところが多い。日本学(日本語学、社会学-パリ・ディデロ(パリ第七)大学、日本文化-リール第三大学)、地域研究(ア

7 2011年7月のデータ。

8 2010年3月のデータ。

9 INALCO、パリ第七大学、高等実習研究院(EPHE)、高等社会科学研究院(EHESS)、エクス・マルセイユ大学、ボルドー第三大学、グルノーブル・スタンダール第三大学、リール第三大学、リヨン第三大学、ストラスブール第二大学、オルレアン大学、リヨン政治学研究院(IEP)、レンヌ第一大学、ストラスブール第二大学、トゥールーズ第二大学)である。INALCOとパリ第七大学は修士課程において、語学以外のカリキュラムを共同で行っている。博士課程は5校(INALCO、パリ第七大学、EPHE、EHESS、リヨン第三大学)である。フランス日本研究会(SFEJ) <http://sfej.asso.fr/site/Centres%20d%27enseignement.html> による。

ジア研究)の一領域として位置づけられたり、さらに近年増えつつある国際貿易ネゴシエーターコース(グルノーブル・スタンダール第三大学、ボルドー第三大学)や通訳・翻訳コース(トゥールーズ第二大学)において日本語が専攻されている。修士課程2年を修了した者は高等教育資格試験(Agrégation)の受験が可能となる。全国で日本研究の博士号取得者は毎年1~3名いる。

フランスで最も長い日本語教育の歴史を持つフランス国立東洋言語文化大学 Institut National des Langues et Civilisations Orientales、通称 INALCO)は、「歴史と人文科学」、「経済と日本現代社会」、「言語学」、「文学」の4つのコースに分かれる。修士1年の必修科目は、語学、読解、翻訳、研究方法論、日本研究関係のゼミ(ゼミは年間284~323時間)、日本研究以外のゼミを履修し、修士課程1年修了後に論文を提出する。修士課程2年目は、研究方法論、日本学研究所などの各種ゼミ(ゼミは年間122~180時間)を履修し、修士課程2年修了時に論文を提出する。修士課程2年を修了した学生は、書類審査を経て、博士課程に進学できる。博士課程は原則3年制であるが、実際には4~5年かかる場合が多い。博士課程の学生は、INALCOの日本研究所(CEJ)に所属し、CEJの研究会や研究発表会に参加する必要がある。実際には多くの学生が在籍中に日本の大学に留学する。これらのコースの外に、修士課程のみの職業研修コースがあり、論文に代えて、企業などで研修を受けた後、報告書を提出する。修士課程2年を修了した後は、不定期に実施される高等教育資格試験を受験する者もいる¹⁰。

パリ・ディドロ(パリ第7)大学は、日本関連の修士課程1年の学生が30名~40名在籍している。研究分野は社会学(テーマ:失業、部落問題、ニート、格差社会、ポップ・カルチャーなど)が多い。日本語学専攻者は6名である。ほとんどの博士課程の学生と修士課程の学生5名ぐらいが日本に留学する。修士号を取得した場合は、学部卒と比べて日本関係の仕事に就ける可能性が高くなる¹¹。

グルノーブル・スタンダール第三大学には、国際貿易における3カ国語ネゴシエーター養成コース、多言語専門翻訳家養成コースにおいて、日本語が専攻できる。修士課程1年目はビジネス研修レポートの提出と口頭審査(フランス語使用可)、修士課程2年目はより専門的な研修とそのレポートの提出と3カ国語(フランス語の使用不可)の口頭審査が行われる。両コースに加えて翻訳コースも2010年度から開講されている¹²。

リール大学は日本語学、日本文化、日本史、社会学、日本文学などの領域で研究指導が行われている。2010年~2011年は修士課程1年の修了者が4名、修士課程2年の修了者は1名である。修士課程修了後は、博士課程への進学、留学、企業への就職、教員養成課程を経て教員になる者もいる¹³。

プロバンス大学(現エクス・マルセイユ大学)のマスター・プロフェッショナルコースでは、口頭表現、文法、翻訳などの実学面を重視した科目が置かれ、翻訳では、雑誌『世界』の翻

10 2011年3月のデータ

11 2011年3月データ更新。

12 2011年3月データ更新。

13 2011年7月データ更新。

訳作業が行われる。2010年度の修士課程1年生は13名、修士課程2年生は5～6名である。

2.1.3 ドイツ、ウィーン、スイス、オランダ

ドイツでは14の大学院において日本学研究が行われている¹⁴。日本学専攻は、非ヨーロッパ言語・文学領域で最大であるが、組織は全体的に縮小傾向にあるという。ボン大学では、それまでの東アジア学研究所東洋アジア言語部門日本語科が2012年アジア学研究所日本学・韓国学部門に改編されている。学位は、翻訳学修士で、それまで必修科目であった日本語以外の第二言語教育が撤廃され、日独あるいは独日翻訳が中心の授業科目となっている。

ウィーン大学は、オーストリアで唯一日本学研究が行われている大学であり、社会学、文学、ジェンダー、メディア関係の研究が盛んである。修士課程で71名、博士課程は8名の学生が在籍している¹⁵。学位取得後は、在欧の日本企業や在日の欧州企業への就職、通訳・翻訳業、教員、研究職などに就く。

ジュネーブ大学には、日本学修士課程とアジア専門修士課程（マスター・アジア）の2種類のコースが設置され、いずれも博士課程まで有している。マスター・アジアは、日本だけでなく、韓国、中国などを含むアジア全体を専門とする人材の育成を目的とする。学生の専門領域は、文学、歴史学などの人文科学が中心で、博士号取得者は年間約3名程度である。学位取得後は研究者としての道を歩む者が多い¹⁶。

ライデン大学ではアジア研究の中の日本研究（Japan studies）という位置づけで日本研究が行われ、22名～3名が在籍している。2年制コースでは、入学半年後からの1年間日本留学が義務づけられている。1年制コースには、学部の専門は問わず、日本語が全くできなくても卒業する学生もいる¹⁷。

2.1.4 ロシア、ウクライナ

ロシアの学位システムは、マスター（2年）、キャンディディット（Candidat：3年）と大学院在籍は問わないドクター（Doctor）となっている。ロシア全体の言語学（文学研究）キャンディディットは近年で3名出ている。

モスクワ大学における修士（博士）課程は3年制、その他に通信教育（4年制）と大学院とは別に2年制の学士課程（大学院准コース）がある。理論コースとゼミナール（日本文学、日本語、日本語文法論、語彙論、日本語史、文体論、日露翻訳法の理論、日本語慣用句論、方言論等）が必修であり、日本語学科の教員が指導する。主に研究チームの各々の研究に関わるゼミナールが行われ、外国語、日本語論（文学論）等を学び、研究指導を受けながら、テ

14 谷（2011）によると、ドイツの大学院での日本学専攻は次の通り。ハイデルベルグ大学（日本学、会議翻訳 MA）、チュービンゲン大学（日本学 MA）、エアランゲン大学（日本学 MA）、ミュンヘン大学（日本学 MA）、FU ベルリン大学（日本学 MA）、ハンブルグ大学（日本学 MA）、ボーフム大学（日本学 MA）、フランクフルト大学（日本学 MA）、ボン大学（日本地域学 MA）、デュイスブルグ大学（現代東アジア研究 MA）、デュッセルドルフ大学（現代日本 MA）、ケルン大学（日本学 MA）、ライプチヒ大学（日本学 MA）、ハレ・ビッテンベルグ大学（日本学、異文化間日本研究 MA）

15 2013年9月データ更新。

16 2011年11月データ更新。

17 2012年2月データ更新。

マに沿った形で研究を遂行する。研究分野は、日本語学（文法論、語彙論、文体など）や日本文学が多い。言語学（文学研究）の修士号取得者は、毎年2名～5名おり、キャンディディト取得者は、大学の教員や研究職に就く¹⁸。

ウクライナでは、修士課程までが学部、それ以上が大学院の位置づけとなる。キエフ国立言語大学では、言語学学科、教授法の学科、教育学科、文学科で日本や日本語の研究を行うことができる。大学院は3年間で博士候補資格試験（哲学、英語、専門科目）に合格し、論文審査に合格すると、博士候補生（candidate）になることができる。日本語関係でこれまでの博士候補取得者（candidate）は1名（キエフ言語大学の教員）のみである。修士号を取得しても留学経験がなければ日本語に関わる仕事に就くことはほとんどない¹⁹。

2.1.5 フィンランド

ヘルシンキ大学の文学部世界文化学科では、東アジア研究を主専攻とする日本コースに、修士課程約30名、博士課程約15名が在籍している。専攻は、日本語学、日本文学、日本文化、日本語教育、日本史、日本政治学などで、修士課程は必修単位数が120単位（修士論文を含む）、博士課程は60単位と博士論文である。学位取得後は、政府機関、教育機関、企業などに就職するほか、ポスドク研究者として研究活動に従事している²⁰。

2.2 北米

2.2.1 カナダ

ほとんどの大学では、地域研究として日本研究や日本語教育が行われている（ブリティッシュ・コロンビア大学、トロント大学、ビクトリア大学等）。通常、修士課程は2年、博士課程は3年で修了する。

ブリティッシュ・コロンビア大学は、現代文学、古典文学、思想、歴史などの授業科目が開講され、言語以外の日本学研究が主流である。日本語の修士課程は約7名、博士課程は約8名が在籍²¹、毎年博士号取得者を輩出している。博士号取得後は、カナダ、アメリカ、アジア各地域の大学教員となっている。

アルバータ大学では、1992年に日本語関連の修士課程が設立され、2010年までの修士課程修了者は7名、そのうち言語学が6名、文学が1名である。研究科の組織が非常に大きく、様々な科目を履修することができ、コースワークはない。修士課程修了後の進路は、アルバータ大学の教員（フルタイム2名、非常勤2名）、文科省のリサーチ・フェロー、他大学の博士課程への進学などである²²。

ビクトリア大学には太平洋アジア研究コースがあり、社会科学系の科目が必修である。コースワークはない。近年の研究テーマは「言論」「リサーチ」「日本における英語教育」「安部公房」

18 2011年3月データ更新。

19 2012年3月データ更新。

20 2012年4月データ更新。

21 2011年4月データ更新。

22 2010年12月データ更新。

「魯迅」などである²³。

2.2.2 アメリカ

ハーバード大学では、日本の宗教学、歴史学、社会学、政治学、人類学、法学、文学、美術史、日本語学などの研究が行われており、東アジア言語文明学科他がエドウィン・O・ライシャワー日本研究所と連携して大学院における教育や研究を進めている²⁴。

アメリカで2番目に多い日本語学習者を抱えるプリンガム・ヤング大学は、修士課程の言語習得プログラムに日本語関連の科目がある。試験等はあるが、試験の点数で学位授与の有無が決まるわけではなく、業績や論文の内容が重要となる。受講者は日本在住経験が2年程度の帰還宣教師が多く、毎年平均25名程度が日本語関連で修士課程を修了する²⁵。

2.3 アジア

前述したように、アジアにおける多くの日本研究は、日本語学習から日本研究へというプロセスを経ていることもあり、大学院においても日本語学、日本文学、日本語教育など言語関係のコースが置かれているところが多い。この傾向は、日本で学位を取得して帰国した教員の専門分野とも関係があると思われる。中国、韓国、香港などは、一部のヨーロッパ地域と同様に、通訳、翻訳や日本語教師養成など実学的なコースが増加している。

2.3.1 韓国

韓国における日本関連の大学院教育については本書に尹鎬淑氏の報告が掲載されているので、ここでは概況にとどめる。尹氏によると、韓国には、一つの大学に一般大学、教育大学院、地域学大学院があり、全国で56の大学に89か所の修士課程と40か所の博士課程が置かれている。博士論文のテーマは2,000年以降は、日本語と日本語教育が中心であり、日本語と韓国語の通訳コースや翻訳大学院の受験者が増加する傾向にあるという。

2.3.2 中国

社会全体の高学歴志向により、大学院進学希望者が急増し、ここ数年大学院の設置が相次いでいる。日本語・日本文学研究科だけでなく、外国語・外国文学研究科で日本語関連の研究を行う機関も増加している。日本語・日本文学関連の研究ができる大学は修士課程では100機関以上、博士課程は15機関以上ある。日本語非専攻の修士・博士課程でも必修の第一・第二外国語科目として日本語を開設するところが多い²⁶。伝統校では、以前として日本語学、日本文学中心だが、通訳、翻訳等の実学コースも開講され、人気を呼んでいる。

北京大学では、日本語学、日本文学、日本文化という三つの研究分野（教育研究室）に分かれる。修士課程は3年制、博士課程は4年制で、必要単位は修士課程が37単位、博士課程

23 2010年12月データ更新。

24 2011年4月データ更新。

25 2011年7月データ更新。

26 国際交流基金 <http://www.jpff.go.jp/> による。

が15単位で、文学修士あるいは文学博士の学位が取得できる。博士課程では、必要単位取得後に、筆記あるいは口頭試問による総合試験が行われ、合格者は卒業論文のテーマについて報告を行い、指導委員会の審査を受ける。論文を2本正式に発表した後に卒業論文を提出し、審査を受ける。修士課程ならびに博士課程の在籍者は各30名程度である²⁷。修士課程修了後は就職、または、国内か日本の大学の博士課程に進学する。博士課程を修了した者は大半が大学の教員となる。前述のように北京大学では、5、6年前から中国人民大学、筑波大学との3校による院生や研究者間の交流が行われており、持ち回りで言語、文化、文学の3セッションに分かれたシンポジウムが行われている。日本の東北大学との合同による院生研究発表会も3年ほど前から行われている。北京外国語大学北京日本学研究センターは、日本語関係の大学院教育を担う共同利用機関としての性格を持っており、日本語学、日本語教育学、日本文学、日本文化、日本社会・経済の5専攻の大学院修士課程が設置されている。2013年9月までにセンターで養成された学生数は大学院修士課程29期生まで724名、(うち修士学位取得者26期生まで566名)、国費留学博士課程22期生まで79名、北京日本学研究センター博士課程14期生まで76名(うち博士学位取得者26名)である²⁸。韓国の高麗大学日本研究センター、台湾政治大学と4年前から合同ゼミを行っている。開催地は持ち回りで各大学の院生10名、教員1、2名が集まり、語学、文学、文化、社会のセッションに分かれて研究発表を行っている。また、3年前より日本経済コースの学生を対象に、神戸大学経済経営研究科とのダブルディグリー制度が設けられている。

復旦大学には、「外文学院」(外国言語文学学院)の「日語語言文学専攻」(日本語言語文学専攻)に、大学院のコースがあり、研究領域は、日本文学、日本語学、日中文化文学比較研究、翻訳学の4つである。在籍する大学院生は、3年間で36単位を取得すると修了できる。英語、学術活動、教育実習などの教養科目以外に、必要な単位数は20(学位基礎単位6単位、学位専門単位6単位、学位選択単位8単位)である。ほとんどの大学院生は修了した時点で修士号を授与される。修士号取得後は、大学の日本語教員、あるいは政府関係の役所や日系企業に就職する。近年は博士課程に進学するケースも増えている²⁹。

大連外国語学院は、大学院生のうち3分の2が日本語学と日本文学のコースに所属、3分の1の大学院生が日中通訳、日中翻訳のコースに在籍しているが、通訳、翻訳などの実用系のコースは定員数が増える傾向にある。修士論文の提出は必須であり、修士課程学位取得者は毎年60名、文学修士が授与される。修士号取得者は、公務員、研究機関、出版社等に就職する。博士号取得者は大学教員になる者が多い。近年は修士号のみでは、大学教員の職に就くことは難しくなっている³⁰。

上海外国語大学では、修士課程は毎年45名、博士課程は毎年6名募集している。

専門は日本語学と日本文学で、修士課程は2年半で32単位。博士課程は3年間で22単位。全ての博士論文と修士論文のうち優秀なものは、ウェブ上に公開される。修士課程では毎年

27 2011年5月データ更新。

28 国際交流基金 <http://www.jpj.go.jp/j/intel/index.html> による。

29 2011年5月データ更新。

30 2011年3月データ更新。

45名、博士課程では5-6名が卒業する。専門は語学、文学が多いが、経済、文化を専門とする者も少数いる。修士号取得者の多くは、ビジネス界に進出し、地方の大学の教員になる者もいる。博士号取得者は大学教員になる³¹。

北京語言大学には、40名程度大学院生が在籍している。同時通訳コースは中国初で10年の歴史がある。博士課程も開講される予定である。言語学(日本語学)の専門教員が多く、同時通訳、日本文学、日本語教育も指導している。多くの院生が同時通訳の授業も履修する。修士論文は、報告会を開き、提出論文には匿名審査があり、口頭諮問も行われる。修士論文は日本語による執筆が要求される。博士課程の開講も計画されている。修士号取得後は、公務員、日本企業、マスコミ関係への就職、フリーの通訳になる者が多い³²。

2.3.3 香港

香港大学の大学院では、社会学、文化人類学、日本文学、日本語学、翻訳(日中、日英)などの研究が行われている。Research Postgraduate Programにおける修士候補・博士候補の院生は学位申請論文を提出後、論文審査及び口答試験の両方に合格した者に対して修士号あるいは博士号が授与される。2011年度の修士課程(M.Phil)、博士課程(Ph.D)学位取得者は合計14名でそれまでに34名がM.Phil、11名がPh.Dを取得している。学位取得後は、企業、公務員、教育分野などの職に就いている³³。

香港中文大学では、修士課程(Mphil)、日本語学および日本語教育学修士課程(MA)、日本研究修士課程(MA)が開講され、定員は毎年約30名である。修士課程(Mphil)では、言語学、人類学、歴史、映画研究、社会学、国際関係の専門分野が開講され、通常2年で修了、必要単位数を取得し、修士論文の審査に合格した者にMphilを授与する。日本語学および日本語教育学修士課程(MA)は主に日本語教員の養成を目指し、1年または2年で修了する。必要単位数を取得した者にMAを授与する。講義は夜間に行われるので、社会人も通学が可能である。Mphil取得後は、香港および海外の博士課程に進学、あるいは企業に就職する。日本語教育学修士課程のMA取得後は、日本語教育機関あるいは一般企業に就職する者が多い³⁴。

2.3.4 台湾

台湾で日本関係の修士課程を有する大学は、18校である³⁵。修士課程は3年制で卒業単位数が32~36程度のところが多く、修士論文が課せられる。日本語関係の博士課程を有する大学院は東呉大学のみである。全体において、日本語教育、日本語学、文学に関する研究が多く、

31 2011年3月データ更新。

32 2012年8月データ更新。

33 2012年6月データ更新。

34 2011年8月データ更新。

35 于乃明(2012)による。国立台湾大学(32)、国立政治大学(32)、中国文化大学(32)、東呉大学、輔仁大学、淡江大学、銘伝大学(44) 国立高雄第一科技大学(36)、元智大学(37)、開南大学(36) 東海大学(32) 靜宜大学(38) 国立台中科技大学(34) 大葉大学(36) 南台科技大学(32) 長栄大学(36) 義守大学(36) 慈濟大学(32)。()内は単位数。

于（2012）によると、台湾における日本語文学系大学院修士論文（1998年～2011年）863本のうち、分野別本数は、文学186、語学158、歴史・文化・思想141、商学119、日本語教育73、法律49、政治35、その他102であり³⁶、語学、文学に関する論文数が多いことがわかる。かつては台湾大学、輔仁大学は文学、政治大学は歴史、社会、淡江大学、中国文化大学は政治、経済、文化を専門に学ぶ院生が多かったが、教員の世代交代が進み、近年はいずれの大学も専門の多様化が見られる³⁷。

国立台湾大学は、日本語学（日本語教育を含む）、日本文学（文化を含む）における専門領域の研究指導者が多い。修士課程は2003年に設立され、修士号取得者は、言語学（教育）26人、文学（文化）27人である³⁸。修士号取得後は、教育研究機関、日本語教育機関、翻訳業などに従事する者が多い。在学中に法律、政治、貿易、経済、企業管理、会計、金融などの科目を履修し、卒業後は外交、国際関係、国際貿易などの方面で活躍する者もいる。

国立政治大学では2010年に日本研究碩士（＝修士）課程學程が開設された。学内にある日本研究センター、国際関係研究センターとも連携して日本研究や大学院教育が行われている³⁹。

東呉大学の修士課程は、日本語学研究、日本文学研究、日本文化研究、日本語教育学研究の4つのコースに分かれる。修士課程1年目は、一般言語学の基本知識（特に、日本語の発音、文字、語彙、文法、談話、敬語、方言等）を学ぶことを重視している。修士課程2年目は、応用言語学（言語分析、対照研究、言語資料収集、コーパス処理、言語の原則と規則性の研究等）に関する授業を開講している。台湾で唯一、日本語関連の博士課程を有しており、日本語学・日本語教育学の専門家・研究者養成を行っている。2013年度までに27名が博士号を取得している。修士号取得後は、各大学で開設されている夜間の市民講座などの日本語教員となるほかに、一般企業に就職する者もいる。博士課程では、もともと教職に就いており、学位取得後は教職に戻る者が多い⁴⁰。

中国文化大学は、台湾で初めて設立された日本研究教育機関（日本研究所は1964年設立）である。近年の教育の方向及び研究領域は、日本語学（日本語教育を含む）、日本文学、日本文化が中心に行われている。1970年から2012年までの修了生は383人である。修士号取得後は、日系商社、航空会社、出版社、旅行会社への就職、観光ガイド業、翻訳業、留学、博士課程進学などに進む⁴¹。

輔仁大学の大学院は、以前は日本文学の専攻が中心であったが、近年は政治、経済や文化など他分野の科目も充実させている。また、同大学には翻訳学大学院もあり、日本語と中国語の通訳・翻訳に関する実技指導や研究が行われている。

淡江大学は、文学、語学、文化、翻訳のコースに分かれている。同大学が中心となり、近

36 台湾大学、政治大学、輔仁大学、東呉大学、文化大学、淡江大学、東海大学など代表的な大学の修士論文を集計したもの。

37 台湾の日本研究に関連した主な大学院における授業科目については、于（2012）<http://www.tufs.ac.jp/common/icjs/nl/sym0002.pdf> p29-49を参照されたい。

38 2012年2月現在

39 政治大学の大学院教育については、于乃明（2012）を参照されたい。

40 2011年9月データ更新。

41 2013年5月データ更新。

年は複数の大学院による院生の合同研究発表会が開催され、院生間の交流も活発である⁴²。

国立高雄第一科技大学は、語学応用組、日本研究組に分かれ、在籍者は25名、27名である⁴³。卒業後は、学術的教育研究、日本語教師、翻訳者、通訳者関係の仕事に従事する者が多い。

元智大学応用外語系大学院には、修士課程と在職者修士課程に2つのコースがある。必須科目は、日本語教育言語学、日本近代文学研究、日本文学と文化、日本語学術論文執筆である⁴⁴。

2.3.5 タイ

タイで日本語関連専攻の修士課程を開講している高等教育機関は、チュラーロンコーン大学文学部日本語専攻(日本語学コース、文学コース)修士課程、タマサート大学大学院日本研究科修士課程、チュラーロンコーン大学外国語としての日本語(日本語教師養成プログラム)修士課程、ナレースワン大学大学院修士課程日本研究科であり、日本語関連専攻の博士課程を開講している高等教育機関は、チュラーロンコーン大学文学部文学・比較文学学科博士課程のみである⁴⁵。

タマサート大学は、日本語研究(誤用研究、日タイ対照研究、通訳、日本語教育(読解、漢字、慣用句)と日本研究(日本企業の外国人雇用、日本の観光振興策など)に大きく分かれる。在籍者は25名(日本語教育16名、日本研究名9名)である⁴⁶。1997年設立以来2012年4月までの履修者数118名のうち、終了者数は74名で、研究テーマは日本語研究が39名、日本研究が35名の割合である。リカレント教育としての役割を果たしており、学位取得後は元の職場(教員養成大学(ラシャパット)や地方の大学職)に戻る。民間企業を退職して在籍していた者は、民間企業への再就職、あるいは大学職に就く場合が多い⁴⁷。

2.3.6 ベトナム

ハノイ国家大学外国語大学には、日本語学修士の課程がある。修士号を取得するためには以下の科目から51単位を取得する必要がある(共通科目:11単位、基礎科目・専門科目:25単位、論文:15単位)。論文は論文提出と口頭発表が課せられる。修士号取得後は、日本語を使用する教育機関、研究所などに就職する⁴⁸。

2.3.7 フィリピン

日本関係の研究は、フィリピン唯一の地域研究専門機関であるフィリピン大学アジア・センターで行われている。アジア研究(フィリピン研究を含む)に特化した大学院レベルの学際的な学術プログラムを提供している。日本関係では、アジア研究修士課程のうち、北東ア

42 2013年9月データ更新。

43 2012年7月現在。

44 2012年3月データ更新。

45 国際交流基金 <http://www.jpff.go.jp/j/japanese/survey/country/2011/thailand.html> による。

46 2012年4月現在。

47 2012年4月データ更新。

48 2012年12月データ更新。

アジア専攻において、日本、中国、韓国／北朝鮮から一つを重点国として選択する。日本語の授業（初級レベルと中級レベル）も行われている。学位を取得した者は、政府関係、国際機関、マスコミ関係、研究職、教育職などで活躍している⁴⁹。

2.3.8 モンゴル

モンゴル国立大学は、日本語教育・言語関係と、歴史・文学など日本研究の2つの専攻に分かれている。学生は修士課程17名、博士課程10名⁵⁰、両専攻の学生数はほぼ同数であり、他大学卒業の学生や日本留学帰国後の学生も在籍している。言語関係の研究テーマは、対照研究、教授法などがある（論文テーマの例：慣用句、漢字の学習法、非漢字圏における文字教育、比較翻訳、日本文化、日本語とモンゴル語の対照文法など）。論文を含め、修了単位は60単位程度（論文は30単位程度、中間発表や学会発表も単位に換算される）。在学期間は修士課程が1年半～2年。博士課程が3年～5年。これまでの修士号取得者は約50人。修士を修了すれば大学で教えることができるが、大学院で教えるには博士号が必要である。研究者にならずに起業する学生もいる。

2.4 エジプト（その他の地域）

エジプトにおいて大学院で日本研究が行われている大学は、カイロ大学とアインシャムス大学の2校である。

カイロ大学の大学院は1994年に設立され、修士課程は2年、博士課程は3年で修了する。2010年までは大学院進学予備コース（1年間）があったが、廃止された。在籍者は修士課程3名、博士課程は2名である⁵¹。修士号取得後は、博士課程への進学、大学の助手、日本留学のほかに、大学で非常勤講師として日本語を教える場合もある。民間企業で通訳、翻訳の職に就いたり、日系企業への就職、観光ガイド業、ホテルや御土産屋などに従事する者もいる⁵²。

アインシャムス大学には言語コース（応用言語学、歴史言語学、比較言語学、辞書学、文体論、意味論、リサーチ・メソッド）と文学文化コース（日本文学、比較文学、文学批評、文学理論、リサーチ・メソッド）の2種類のコースがある。いずれのコースも2年間の予備課程を経た後に入学できる。大学の助手を経た場合は、予備課程修了後、3年以内に修士論文が提出できるが、助手を経ない場合は、予備課程修了後、8年以内の提出となる。修士号取得後は、一般企業への就職、博士課程への進学あるいは大学の助手になることが多い⁵³。

49 2013年7月データ更新。

50 2011年9月現在。

51 修士課程の授業科目：1年前期－方法論、日本文学研究、日本史、日本文学講読、一般言語学、1年後期－日本文学研究、日本語研究、日本民族文化研究、応用言語学、文学評論、修士論文、授業時間はいずれも週3時間（修士論文以外）。

博士課程の授業科目：1年前期－日本思想研究、日本文学研究、日本語学研究、1年後期－日本比較文化研究、日本芸術研究史、比較文学研究、比較言語学授業時間はいずれも週3時間（博士論文以外）。

52 2011年10月データ更新。

53 2011年10月データ更新。

3. おわりに (まとめ)

ヨーロッパでは、日本研究組織の統廃合により、従来の歴史、文学などの日本研究機関が縮小されたり、特定の機関への一極集中の傾向が見られる一方、通訳・翻訳あるいは国際関係、国際貿易等実学的なコースが拡充しつつある。アジアではこれまでの日本語学、日本文学、日本語教育など言語中心のコースに加え、通訳・翻訳などのより実学的科目やコースが増える方向にある。その一方で、台湾などでは政治、経済、社会などの日本研究センターも増えている。いずれの地域においても日本研究者の専門性が多様化しているということが言える。このことにより、各地域の教員の専門性とコースの要求や学生の研究テーマとのズレが生じつつある。ボローニャ・プロセスにおける欧州単位相互認定制度(ECTS)、国内あるいは日本、中国、韓国間など国を越えて行われている院生・教員間の研究交流は、この問題の緩和にもつながり、近年の学際的、複合領域的研究にも適った方法であると言えよう。また、日本の外の組織が国を越えて日本研究を合同で行うことは、外から見た日本研究として、日本人による日本国内の研究との区別化や日本研究の新しい視点として日本研究の各方面における化学反応も期待される。いずれの地域においても、研究領域を問わず日本に関連する研究組織あるいは研究者間の相互の連携により、より有機的な研究や研究教育指導を行うことが期待される⁵⁴。

本報告書は、東京外国語大学の交流協定校を中心とした機関における調査にすぎず、全ての大学院教育の実情を網羅したものではないが、一定の傾向を掴むことはできたと思われる。

謝辞

本調査にあたり、学内外の日本研究、日本語教育関係の多くの方々に御協力いただきました。心から感謝申し上げます。

参考文献

- ローランド・ドメーニグ(2010)「オーストリアにおける日本学」『世界の日本語・日本学～教育・研究の現状と課題～国際シンポジウム報告集』東京外国語大学国際日本研究センター
- 田中和美(2014)「イギリスにおける大学院教育の中の日本研究/日本語教育—ロンドン大学 SOAS を中心に—」『日本語・日本学研究』第4号、東京外国語大学国際日本研究センター
- 谷和明(2012)「ボローニャ・プロセス下での「小専攻」としての Japanologie の動向—ドイツ大学における日本語・日本文化教育事情調査報告—」国際日本研究センター報告会資料

54 本報告書では触れなかったが、日本人学生数を一定数抱えているコースでは、教育実習の内容や論文執筆言語が現地の学生と異なる場合もある。

- 于乃明 (2012) 「台湾における日本研究の現状と展望－政治大学を中心に－」『国際日本学の構築に向けて－国際シンポジウム報告書』東京外国語大学国際日本研究センター
- 尹鎬淑 (2014) 「韓国における日本関連大学院の現況及び展望」『日本語・日本学研究』第4号、東京外国語大学国際日本研究センター

参考ウェブサイト

- 谷口龍子 (2010) 「フランスの高等教育機関における日本語教育」(出張報告) <http://www.tufs.ac.jp/common/icjs/doc/11033100.pdf>
- _____ (2011) 「カナダにおける日本語教育」(事前の聞き取り調査ならびに出張報告) <http://www.tufs.ac.jp/common/icjs/doc/11033103.pdf>
- 谷口龍子・坂本恵 (2013) 「「国内外の高等教育機関における日本語教育事情調査」データベース中間報告Ⅰ－欧米型(日本研究から日本語教育へ)とアジア型(日本語教育から日本研究へ)－」『日本語・日本学研究』第3号、東京外国語大学国際日本研究センター
- 山口裕之 (2011) 「チューリッヒ大学出張報告書」<http://www.tufs.ac.jp/common/icjs/doc/12030103.pdf>

Japanese Language Education in Institutes of Higher Education in Japan and Overseas, Mid-term Database Report 2: Japanese Studies in Overseas Graduate School Education

Ryuko TANIGUCHI (Tokyo University of Foreign Studies)

Keiko MOCHIZUKI (Tokyo University of Foreign Studies)

【Keywords】 Japanese Studies, graduate schools, course work,
Relationship between multiple graduate schools, career path

This paper aims to organize the information on trends in Japanese Language and Japanese Studies courses and majors available in overseas graduate schools collected under the “Japanese Language Education in Institutes of Higher Education in Japan and Overseas” (ICJS, TUFS) project. Due to structural mergers and abolitions, Japanese Studies in history, culture, and literature, etc. in overseas graduate schools such as in Germany and Austria are shrinking in scale. On the other hand, in France, China, Taiwan, and South Korea practical courses such as translation and interpretation, international trade have increased, leading to a rise in student enrolment and an increased demand for Japanese Language education.

Recently, exchanges among graduate students in different countries, such as joint research presentations by multiple graduate schools are becoming more common. There are also more students taking a double degree in sub-majors such as economics, besides their major in Japanese Language Studies or Japanese Studies, and a double degree from other universities.

韓国における日本関連大学院の現況及び展望

尹鎬淑(サイバー韓国外国語大学校)

【キーワード】 韓国、大学院、日本関連、学位論文、カリキュラム

1. はじめに

韓国における日本関連の大学校は、1961年韓国外国語大学校に日本語科が最初に開設された後、1973年に日本語が第2外国語として採択されたことをきっかけに、多くの大学で日語日文学科と日語教育科が設置されることとなった。これと同時に、日本関連の大学院も1973年に韓国外国語大学校に修士課程が、1981年に博士課程が最初に設置された。2013年現在、韓国の大学院が88ヶ所の修士課程と、39ヶ所の博士課程が大学で運営されている。そのため、韓国国内における日本関連の学位論文は、これまで多様な分野で飛躍的に伸びつづけてきたといえる。

本稿では、韓国の日本関連大学院の修士・博士課程の現況と展望について概略を見ていくこととする。

2. 韓国における日本語関連大学院の分布

1) 大学院数

大学での日本語教育は、韓国外国語大学校の日本語科(1961年)、国際大学(現在の西京大学校)の日語日文学科(1962年)が設立されたことから始まった。そして、1973年には、祥明大学校外国語教育学科に日語教育専攻が開設された。草創期の日本関連学科に共通して言えることは、「日本語」を掲げたことである。80年代には、全国各地の各大学に日語日文学科が開設され、量的に飛躍的な伸びを見せるが、90年代に入り、日本学科の名称で学科開設を進める大学が出始めた(李2012:120)。2013年現在、全国387校の大学のうち、日本関連学科が開設されている大学は、106校に上る。

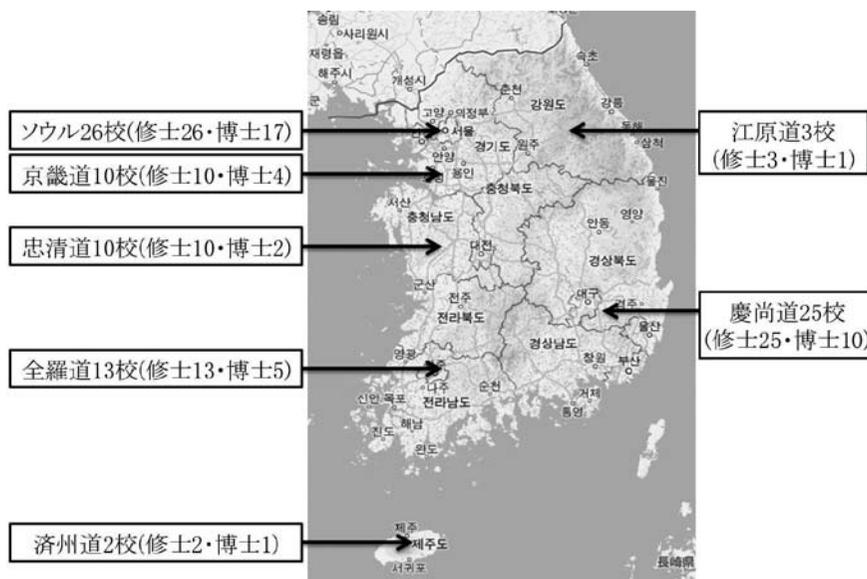
一方、日本関連大学院の場合、韓国外国語大学校において1973年に修士課程が、1981年に博士課程が韓国で初めて開設され、その後、2013年現在に至っては、全国56の大学に、89ヶ所の修士課程と40ヶ所の博士課程が設置されている。これら大学院は一般大学院をはじめ、教育大学院、地域学大学院そして、通翻訳大学院などの特殊大学院に分類されるが、一般大学院は50校、教育大学院は34校、地域大学院は2校、通翻訳の特殊大学院は3校となっている。つまり、大学数に比べ修士課程の数が多いのは、一つの大学に一般大学院、教育大学院、地

域学大学院など複数の大学院が開設されているからである。そして学科別では、日本語・日語日文学科が32、日本語教育・日語教育学科が36、国際地域・日本学科が12、言語文化学科が4、韓日学科が3、その他が2となっている。韓国の日本語関連大学院の地域別、修士・博士課程の分布は以下のとおりである。

区分 地域	大学校数	大学院数	大学院の種類				修士課程	博士課程
			一般	教育	地域	通翻訳		
ソウル	18	26	17	6	1	2	26	17
京畿道	6	10	5	5	0	0	10	4
忠清道	7	10	7	3	0	0	10	2
慶尚道	15	25	12	11	1	1	25	10
全羅道	7	13	7	6	0	0	13	5
江原道	2	3	1	2	0	0	3	1
済州道	1	2	1	1	0	0	2	1
合計	56	89	50	34	2	3	89	40

<表1> 日本語関連大学院の分布

所在地別に見ると、大学は、ソウル18校、京畿道6校、忠清道7校、慶尚道15校、全羅道7校、江原道2校、済州道1校となっている。ソウル・京畿の首都圏と釜山を中心とする嶺南圏に大学全体の約69%が集まっており、李（2012:120）の指摘通り、韓国の日本研究はこの2地域を中心に行われていると言っても過言ではない。日本関連大学院がソウル・京畿の首都圏と嶺南圏に集まっているのは人口に関係しているという指摘もある。



<図1> 所在地別日本語関連大学院の分布図

2) 大学院の専攻学科の名称

日本関連大学の専攻学科の名称は、70年代までは日語科と日語日文学科、日語教育学科という名称が多かったが、80年代に新設された学科の名称は、日語日文学科と日語教育学科以外にも日本学科、観光日語科、観光通訳学科、亜州語科等々である。学科名を大きく見ると、日本語科→日語日文学科→日本学科のような流れが確認できるが、現時点では、四年制大学の場合、日語日文学科、日本語科、日本学科、日本語言語文化学科、日本語教育科、日語日本学科、日本語文学科などが見られ、短期大学の場合、観光日語科、日本語科、日語日文学科、観光通訳科、日本語通訳科、ホテル観光科、産業日本語科、国際通商日語科などのように、日本語と通訳を連携させた学科名が見られるなどの特徴がある(李 2012:120)。

大学院の場合も、以前は日語科、日語日文学科、日語教育科が大部分であったが、1979年に啓明大学校に日本学科が設立されて以来、1990年代に入り地域学専攻学科も多く設置され、研究分野も語学、文学のほか、政治・経済/経営・社会/文化・外交・安保・韓日関係/歴史等多様化した。これは、地域専門家の育成という韓国社会の雰囲気形成されたのと同時期だと考えられる。韓国の日本関連大学における日本研究は、初期には主に語学と文学が中心に行われたが、1990年代以降、韓国内では日本経済と政治、社会文化に関心が高まり、日本地域専門家を育成しなければならないという社会的要求に合わせて、地域(国際)大学院に日本学科が設置されることとなった。しかし、現在大学院の学科と専攻の名称は、日語日文学科、日語教育科、日本語科(日本語学科)、日本学科(国際地域学科、日本地域研究科、地域学科を含む)、日語日本学科、日本語・文化学科等、16種類に上るが、依然として日語日文学科が最も多い。特に教育大学院での日本語教育専攻は、1980年から設置されており(1980年建国大、1981年慶尚大、1982年韓国外大)、2000年に入り年々増加する傾向を見せ、2013年現在、34の大学で運営されている。このような教育大学院日語教育専攻の増加現象は、日本語教師の不足と日本国内における日本語教育の活発化と無関係ではないと考えられる。教育大学院は原則的に各教職機関に従事する人材の再教育ないし高度の教育を実施すること、そしてその研究を目的としているため、夜間に開設される場合が多い。履修学期は5学期制である(金 2007)。

3. 学位論文の研究動向

韓国の大学院の学位論文は、1970年代に韓国国内で初めて、日文学博士が輩出され、年々増加している。これは日本に対する韓国社会の関心が高まり、全般的に社会的な需要が多いという結果だと言える。1970年代以降の学位論文のテーマ別分布傾向を見ると<表2>の通りである。

分類	学位	1970年代	1980年代	1990年代	2000年代以降	合計	
語学	日本語学	修士 / 博士			30/1	185/13	215/14
	日本語文法	修士 / 博士		42/0	12/0	22/2	76/2
	日本語語彙	修士 / 博士		6/0	38/5	133/11	177/16
	音声	修士 / 博士	2	4	15	32	53
	日本語音韻	修士 / 博士		3	7	7	17
	日本語文字	修士 / 博士			1	16	17
	日本語表記	修士 / 博士	1	3	11	58	73
	日本語	修士 / 博士	17/0	204/2	478/24	2060/162	2759/188
	日本語辞書	修士 / 博士			2	1	3
	日語日文学	修士 / 博士		18	1		19
文学	日本文学	修士 / 博士	9/1	37/1	12/3	29/11	87/16
	日本近代文学	修士 / 博士		1/0	2/0	3/5	6/5
	近代小説	修士 / 博士		1	2	11	14
	日本古典文学	修士 / 博士	1			5	6
	日本小説	修士 / 博士		32/0	2/1	21/	55/1
	日本短歌	修士 / 博士		4	7	7	18
	俳句	修士 / 博士			1	7	8
	物語	修士 / 博士				9	9
教育	日本語教育	修士 / 博士	1/0	16/0	68/0	440/15	525/15
	日本語教科書	修士 / 博士	2	7	72	536	617
	日本語教材	修士 / 博士		1/0	5/0	35/1	41/1
	日本語教育課程	修士 / 博士			14/0	193/2	207/2
	日本語教授法	修士 / 博士	1/0	1/0		24/2	26/2
	日本語学習	修士 / 博士		2/0	12/0	116/8	130/8
	日本語学習者	修士 / 博士		1/0	23/1	185/15	209/16
	誤用	修士 / 博士		4	16	71	91
日本学	日本経済	修士 / 博士	3/1	8/1	12/1	28/5	51/8
	日本企業	修士 / 博士	1/0	24/3	40/7	62/11	127/21
	日本文化	修士 / 博士	1/1	6/1	12/2	148/6	167/10
	日本の歴史	修士 / 博士		9/3	3/0	48/1	60/4
	日本の社会	修士 / 博士	1/0	7/1	16/4	46/5	70/10
	法	修士 / 博士			2	7	9
	日本思想	修士 / 博士	1/0	2/1	4/1	4/2	11/4
	日本観光	修士 / 博士		5/1	18/1	33/3	56/5
通翻訳	翻訳	修士 / 博士	1/0	7/0	2/0	13/1	23/1
	通訳	修士 / 博士			1	7	8
その他	韓日関係史	修士 / 博士		1	1	9	11
	韓日関係	修士 / 博士	5	8	20	55	88

<表2> 学位論文のテーマ別分布（韓国国会図書館データベースによる）

<表2>からもわかるように、大学院の論文の実態を見ると、日本語と日本語教育に関する論文数が多いことが窺える。特に2000年代以降、日本語教育に関する論文が飛躍的な増加

を見せているが、これは日本国内の日本語教育の人気の高まりと日本語学習者の増加に合わせて日本語教育大学院数が急増し、日本語教育関連学位も増加したことに起因していると言える。日本学では、韓国内で日本文化が開放され社会的な関心が高まることにより、日本文化に関する論文が大幅に増えていることがわかる。また、韓国における日本研究は、量的な増加だけではなく研究テーマの多様化という面でも驚くべき成果を上げているが、この研究テーマの多様化は論文数の増加によるものと考えられる。このような現象は、韓国社会が発展するに従って研究環境の制度的な改善および韓国研究財団の研究支援事業の充実が押し進められたことに起因し、さらに、日本研究の専門化を牽引するという大きな役割を担っている。但し、日本関連研究が語学と日本語教育及び文学に偏重し、2000年代以降、日本への関心が減少しているにもかかわらず、韓国では語学と文学の博士学位を取得する研究者の数だけが増えているという傾向も見られた(韓 2012:129)。

語学の場合、李(2012:123-124)によると、韓国国内の日本語研究では、2000年代後半に入り、わずかに減少傾向が見られるが、文法研究の比重が最も多く、次に、日本語史と日本語教育分野が高い比率を占めており、この3つの分野が全体の70%となっている。従って、韓国での日本語研究は、文法・日本語史・日本語教育の三分野を中心に行われているといえる。同時に、語彙と社会言語学分野も長期にわたって、一定の研究比率を維持している。しかし、大学院の学位論文の場合、語学研究では日本語学、日本語文法、日本語語彙、日本語表記、音声、文字などの順に比重が高いが、日本語史の論文はそれほど多くなかった。文法分野では、ボイス・モダリティ・テンス・アスペクトなどの構文論(統辞論)研究が活発である。また、近年認知言語学へのアプローチとIT技術の進歩によるマルチメディア関連研究が活発に行われるなど、日本の研究動向の影響を受けていると考えられる。

文学の場合、近現代文学は修士論文65本があり、主題別に「社会」「苦悩」「男女のテーマ」が最も多く、「宗教(久遠)」「家族」のテーマが次に多い。素材の面では「表現」、方法論的には「比較」論が多く、その次に「在日作家/日本語作品論」、「総論」そして「韓国人」と続いている(崔在喆 2012:111)。これに対して、古典文学研究は、近現代文学研究に比べて相対的に論文数が少ない。古典研究の課題として崔官(2012:98-99)は、「テキスト中心の論文作成」、「通史的で共時的な研究領域の開拓」、「比較研究」及び「東アジアの観点からの研究の活性化」、「古典の大衆化の必要」などの要素をあげている。

日本語教育の場合、趙(2007)によると、教育大学院日本語教育専攻の修士学位論文(1389本)の中で、日本語教育学が667本、日本語学339本、日本文学297本、日本学86本の順となっている。教材関連研究では、中・高等学校の日本語教科書の分析が最も多く、高等学校の日本語教科書を分析した論文では、文法(21.1%)、文化(20.2%)、語彙(12.1%)の順となっている。また、言語資料、練習・活動、挿絵、教科書構成、指導法、教材・教具、誤用分析、評価、教育機関及び現況、授業、四技能指導、日本語教育一般の論文も多い。

本調査では数値的に若干のずれが見られるが、日本語教育、日本語教科書、日本語学習、日本語教育課程、日本語学習者の順となっている。特に誤用分析と談話分析に関する論文が多いが、これは日本の研究動向に影響を受けた結果だと言える。年度別に分野別論文数を見ると、日本語学、日本文学、日本学分野は、2003年からほとんど変化が見られない。しかし、日本語教育学分野は、2001年から現在まで急激な増加が見られる。

日本学の場合、尹（2012）によると2000年代初めから10年間、日本経済、経営環境の激変期により、日本経済、経営に問題意識を持ち、これに対する研究も進み論文も多様化した。また、1980年代初めに本格的な日本史研究が始まった。韓国での日本史研究は30年間という短い期間だが、飛躍的な発展を見せている。しかし、韓国内の大学で修士課程を履修し、その後日本の大学で博士課程を履修するため、国内の大学で博士課程を履修する比率は、比較的低い。日本学の場合も、研究者数の増加と研究環境の変化で研究対象と方法が多様化し、日本学の伝統分野である政治史、制度史、思想史、対外関係史関連の論文が多数出されるようになった。韓（2012）は、「韓国は大学に日語日文学科が設立され、日本研究の制度的・人的基盤が語学中心に作られた後、非言語学系の日本地域学、または国際学の関連学科が設立されるとともに別途の領域が形成され、研究分野の幅がとても広い」と指摘し、非言語学論文を政治、経済、歴史、思想、社会文化、教育、地域、社会運動/情報、文化/病理、社会意識、大衆文化、宗教、民俗/伝統、文化論、文化政策/文化交流、芸術/芸能、記憶、社会史、韓日関係などに分類し、この内、在日朝鮮人、社会史、大衆文化、民俗、観光に関する研究が1-5位を占めていると述べている。1990年代の地域学研究の台頭で日本（地域）学科の新設と90年代のグローバル化の流れを背景に、海外地域研究に対する関心と政策支援が、地域研究としての日本研究の成長と制度化に寄与していると言える（韓 2012:129）。

この他、翻訳関連論文も少しずつではあるがみられる。1998年10月に韓国政府による第1次日本文化開放が始まり、2004年1月1日の第4次開放まで段階的に行われた結果、90年代初めに始まった日本文学ブームが2000年代に入りより大きなブームを巻き起こし、村上春樹、村上龍、よしもとばなな、綿屋りさなどの作品が一気にベストセラーとなり、出版文化協会の統計によると2008年には4592種の日本文学が出版された。このような時代の雰囲気により、近年日韓翻訳への関心が高まり、通翻訳大学院を受験する学習者が増加する傾向がみられる。

これと同様に日本文学以外の分野が持続的に増加する流れは、社会的な関心と日本語教育分野の増加及び研究テーマが多様化している近年の景況を反映した結果だと言えよう。

4. 大学院別のカリキュラム

韓国の日本関連大学院のカリキュラムは、<表3>と<表4>のように、学科の特性に従い多様に構成されている。しかし、学校ごとにカリキュラム数の差が大きく、教科課程が異常に多い大学が相当数に上り（一般大学院：最大153 最小8/教育大学院：最大59/最小8）、学科の特性に合わない科目も相当数見受けられ、過度に偏重している場合、または修士と博士課程で開設されている科目が特に差がない場合や同一科目がⅠ/Ⅱ/Ⅲという具合に分けられて開設されている場合（修士課程 日本語学演習1、博士課程 日本語学演習2）などの問題点も非常に多くみられた。これは、カリキュラムが所属教員の専門分野の影響を受け、偏重傾向を見せているためだと考えられるが、今後は、偏重傾向を抑えた共通のカリキュラムを導入する必要がある。

日本語文学専攻の一般大学院の場合、共通して日本語学概論・日本語文法論・日本語語彙

論・日本文学概論、日本文学演習・韓日比較文学特講などの理論科目を中心に、カリキュラムが構成されており、これ以外にも学校によって、日本語比喩表現研究・東アジア比較文学研究のような科目がある。地域大学院の場合もすでに言及したが、専攻分野が相当に広範囲に及んでおり、科目も日本学演習・日本文化論・日本思想史・日本中世史特講等、多様である。

これに比べて教育大学院は、一般大学院及び地域学大学院とは異なり、研究よりも各教職機関に従事する人材の再教育ないし高度の教育を実施することを目的としているため、専攻分野に対する理論と教育現場での科学的教授法を深く学べる実用科目を中心にカリキュラムが編成されている。日本語形態論・日本語統辞論・日本小説研究・韓日比較文学研究などの日本語文学関連科目と、日本語教授法・日本語教材研究・日本語指導論等の教育関連科目などが、全ての日本語関連大学院の教育学科に共通して開講されており、これ以外にも学校によっては、インターネットを活用した日本語教育や映像文化を活用した日本語教育のような科目が開講されている。

ところが、〈表3〉と〈表4〉及び〈大学院カリキュラムの詳細〉でもわかるとおり、各大学院が共通して教科課程に深刻な問題点があることが分かった。一般大学院の場合、語学・文学・日本学・教育・通翻訳まですべての分野の大部分の科目が広範囲にわたって開設されており、大学院本来の趣旨である学問の深化と専門性に大きな問題が生じていると考えられる。

反面、教育大学院は、教科関連科目が日本語文学関連科目に比べ相対的に非常に少なく、教育大学院の特性をうまく活かしきれていないだけでなく、教育目的にも附合していないのが実情である。地域大学院の場合も先述したように、専門分野が広範囲ではあるが、専攻科目が多様ではないため専門家育成という教育目的に符合できていないと言える。これ以外にも、特殊大学院である通翻訳大学院の場合、通翻訳資格試験と通翻訳関連科目があるが、通翻訳のための基礎科目が中心で、教育目的に明示されている経済・政治・法律・科学技術・メディア・芸術・文学などの多分野の専門知識を得ることができる科目が多くないという問題点があげられる。

以上の点から、学生たちが選択できる科目数は多いが、学習深度に疑問を感じる。カリキュラムは旧態としたものではない。時代の要求に合わせてある程度変化すべきである。今後、長期的な観点から、全大学院において教科課程の研究と開発、修正が必須であるといえる。

一般大学院(語学)	一般大学院(文学)	教育大学院	地域大学院	通訳翻訳大学院
日本語構文論	日本文学研究方法論	日本語教育論	国際政治経済と日本	同時通訳入門
日本語彙論	上代文学特講	日本語学指導方法論	近現代韓日関係論	日韓・韓日翻訳
日本語音声学	中世文学研究	日本語会話指導教育	日本文化論	日韓・韓日同時通訳
日本語音韻論	近世文学特講	日本語作文指導教育	日本文化研究	日韓・韓日産業経済翻訳
日本語意味論	近代文学研究	日本語講読指導教育	日本法制史研究	日韓・韓日科学技術翻訳
日本語品詞論	和歌文学研究	日本文化指導教育	日本思想史	日韓・韓日政治法律翻訳
日本語表現構造研究	物語文学研究	日本語漢字指導教育	日本史演習	メディア翻訳
日本語漢字論	俳句文学研究	マルチメディア日本語教育	日本社会研究	専門同時通訳
日本語形態論	韓日比較文学研究	日本語教育評価論	日本外交政策論研究	翻訳PRACTICUM

<表3> 大学院で開設されている主な科目（修士課程）

一般大学院(語学)	一般大学院(文学)	地域大学院	通訳翻訳大学院
日本語発達史	日本作家論	日本学演習	同時通訳入門
日本語意味論	比較文化論	日本文化研究	日韓・韓日翻訳
日本語構文論	日本文学研究方法論	日本社会研究	日韓・韓日同時通訳
日本語彙論	上代文学特講	日本文化論	日韓・韓日産業経済翻訳
日本語音声学	中世文学研究	日本史演習	日韓・韓日科学技術翻訳
日本語音韻論	近世文学特講	日本法制史研究	日韓・韓日政治法律翻訳
日本語意味論	近代文学研究	日本思想史	メディア翻訳
日本語品詞論	和歌文学研究	日本外交政策論研究	専門同時通訳
日本語表現構造研究	物語文学研究	国際政治経済と日本	日本語時事討論
日本語漢字論	俳句文学研究	日本資本主義政治と 日本式企業経営	翻訳PRACTICUM
日本語形態論	韓日比較文学研究	近現代韓日関係論	

<表4> 大学院で開設されている主な科目（博士課程）

<大学院カリキュラムの詳細（カッコ内は大学院数）>

・一般大学院カリキュラム

【語学】

概論（形態論・意味論・表現論・統辞論・文章論）：日本語学（研究・特講・方法論・セミナー）
 (125) / 日本語学概論 (11) / 応用言語学概論 (1) / 一般言語学（演習・研究・特講）(6)
 / 応用言語学（演習・研究）(4) / 日本語形成論研究 (2) / 日本語応用言語学 (1) / 日本語二重言語学研究 (1) / 計量言語学 (1) / 日本語心理言語学特講 (2) / 意味論・系統論・
 形態論：日本語意味論・研究・実践・特講 (34) / 日本語系統論・特講 (6) / 日本語形態
 論・形態研究 (21) / 日本語構造論 (1) / 日本語待遇表現論・研究 (6) / 日本語統辞論
 研究 (9) / 日本の構文論（研究・特講）(18) / 日本語 Gender 研究 (1) / 日本語言語イメー

- ジ研究(1) / 日本語情報学演習(1) / 日本語言語行為論(1)
- 音韻・音声: 日本語(日語)音韻(論・研究)(35) / 韓日音韻対象研究(1) / 日本漢字音研究(10) / 日本語音声学研究・音声学特講(25) / 音声学研究方法論(1) / 日本語音声コミュニケーション教育(1)
- 語彙: 日本語語彙論・語彙研究(33) / 外来語受容史(1) / 日本語数詞学研究(1) / 日本語擬声語研究(3) / 韓日慣用句比較研究(1) / コーパス言語学研究(1) / 日本語連語論研究(1)
- 文法: 日本語文法(文法論・研究・実習・セミナー)(48) / 日本語古典文法(研究・特講・指導)(6) / 日本語品詞(品詞論・研究)(6) / 韓日文法論の比較研究(2) / 日本語文法と語彙(1) / 日本語表現文法研究(1) / 比較対象研究: 韓日対象・比較研究(35) / 日本語談話・モダリティ(文法・分析・研究)(10) / 対象・比較言語学(研究・セミナー)(8) / 韓日対象文法比較研究(2) / 日本語動詞研究・動詞論(4) / 日本語助詞研究・特殊研究(2) / 日本敬語研究・敬語特講(10) / 韓日敬語研究(1)
- 文字: 文字研究・セミナー(8) / 中日漢字比較(1) / 日本漢字表記論(1) / 変体仮名演習(3) / 記号学の理解(1)
- 方言: 日本語(日語)方言研究(6)
- 日本語史: 日本語史(学史・時代別・発達史・文法史・変遷史・音韻史・語彙史・特講・セミナー)(64) / 韓日古代語研究(1) / 日本(日語)古代語研究(2) / 日本中世語研究(1) / 日本近世語研究(1) / 日本近代語研究・方法論(5) / 日本現代語研究(1) / 日本語史料研究(2)
- 表現・文体: 日本語構造・表現構造研究・セミナー(9) / 日本語慣用表現(5) / 日本語表現論・表現研究(4) / 日本語比喩(学)表現研究(3) / 日本文体・文字・文章論・研究・セミナー(11) / 日本語レトリックの理解(1)
- 社会言語学: 社会言語学・日本社会言語学・韓日社会言語学(14) / 日本語コミュニケーション論(1) / 異文化コミュニケーション(2)
- 語用論: 日本語語用論・研究(7) / 言語語用論研究(1)
- 言語文化: 日本の言語文化と文化(研究・比較等)(4) / 中日言語文化(比較)(2) / 東アジア言語文化史論(1) / 言語文化学特講(1)

【文学】

- 概論: 日本文学・日本文学概論(7) / 中日訓話史概論(1) / 日本文学理論研究(1) / 中日背教文学の理論(1) / 作家・作品論研究・演習(15) / 日本文学研究方法論・研究基礎・特講・研究(35) / 日本文学論・演習・研究・特講(19) / 日本劇文学研究(1) / 日本文芸論(1) / 日本文学背景論(1) / 日本文学と文化(1) / 日本文学と歴史(1) / 日本文学と映像(1) / 日本文学序説(1) / 紀行文学演習(1) / 西欧の衝撃と日本文学研究(1) / 日本文学資料演習(1) / 日本口碑文学(1) / 日本漢文学(1) / 日本文学と世界文学(1) / 日本文芸史調査・研究(12) / 日本文芸批評論研究・特講(11) / 日本文芸論研究・方法論・特殊研究・ジャンル論(7) / 日本文芸思潮・文芸思潮の理解(2) / 文芸学原論(1) / 日本文学批評論・研究(7) / 日本韻文文学研究(2) / 日本散文文学研究(3) / 日本文学評論研究(3) / 東アジア文学論研究(1) / 日本文学セミナー(5) / 日本文学評論セ

- ミナー (1) / 日本の文学演習 (2) / 日本語資料講読演習 (1) / 日本作品研究 (1) / 日本女性文学研究演習・特講 (4) / 京都の象徴性と日本文学 (1) / 日本文学と他の文学の比較研究 (1) / 韓日文芸史調査研究 (1) / 韓日文芸批評研究 (1) / 在日僑胞文学研究演習・特講 (4) / 日本小説論・研究・鑑賞・特講 (17) / 日本自然主義小説家研究 (1) / 日本劇文学研究・演習 (9) / 日本小話文学研究 (1) / 日本詩歌論・研究・特講 (11) / 日本漢文研究演習 (4) / 日本戯曲論・研究・演習 (4) / 日本詩演習 (1)
- 古典：日本古典文学論・研究・方法論・演習 (40) / 日本古典詩歌文学研究 (11) / 日本古典劇文学研究 (6) / 日本古典散文文学研究 (3) / 日本古典随筆文学研究 (2) / 平安時代の日記文学研究 (2) / 日本古典小説研究 (1) / 「源氏物語」研究 (1) / 日本古典講読 (1) / 日本古典批評研究 (1) / 上代文学研究・日本上代文学特講 (14) / 万葉集研究 (3) / 上代散文文学研究 (1) / 日本古代・中古文学 (研究・セミナー) (10) / 日本古代散文研究 (2) / 日本中古・古代和歌・詩歌・歌謡研究 (3) / 日本中古物語研究 (1) / 日本中世文学・演習・特講・研究・セミナー (23) / 日本中世劇文学・軍記物・能楽論・研究 (4) / 日本中世散文研究 (2) / 日本中世和歌・詩歌研究 (2) / 日本中世随筆研究 (1) / 日本近世文学 (研究・演習・特講) (28) / 日本近世劇文学研究 (3) / 近世散文文学研究 (2) / 日本近世詩歌研究・日本中近世詩歌論 (2) / 近世『町人物』研究 (1) / 元禄文学演習 (1) / 江戸文学と文化 (1) / 日本近世小説研究 (1) / 日本近世語研究 (1) / 和歌・俳句・短歌文学研究 (12) / 日本歌学論研究 (1) / 古事記・日本書紀研究 (6) / 物語文学研究 (11) / 日本国学演習・特講 (4) / 日本随筆文学論・研究・中古日記・随筆研究 (9) / 日本口伝説話研究・日本説話文学研究 (10) / 日本神話論・神話研究 (9) / 日本中古文学研究・特講 (21) / 日本日記文学研究 (1) / 日本口伝文学集中研究 (1) / 日本上古代文学演習 (1) / 日本書簡文 (1)
- 近現代：日本近代文学研究・セミナー・特講・演習 (45) / 日本近代小説研究 (入門・特講・セミナー) (17) / 日本近代詩論・近代詩研究 (12) / 日本近代文学作家研究・近代歌人・俳人研究 (8) / 日本近代劇文学・戯曲論研究 (5) / 日本近代短歌・俳句研究 (4) / 近代文芸学批評・評論特講 (3) / 日本近代思想史 (1) / 日本近代文学講読 (1) / 日本近代文学と自己形成 (1) / 日本近代文学作品研究 (1) / 日本近現代文学研究・方法論・セミナー・特殊研究 (12) / 日本近現代作家論・研究 (3) / 日本大正文学研究セミナー (3) / 日本近代詩研究 (2) / 日本近現代韻文文学研究 (2) / 日本明治文学研究・演習 (2) / 日本近現代宗教学史 (2) / 日本近代評論・批評研究 (2) / 日本近現代文学作家・作品研究 (2) / 日本近現代文学主題研究 (1) / 近現代日本作家の暮らしと創作 (1) / 日本近代散文文学研究 (1) / 日本現代文学研究・方法論特講・セミナー (29) / 日本現代詩論・研究 (6) / 日本現代小説研究・セミナー・特講 (5) / 日本現代文学作家論・研究・作品論研究 (5) / 日本現代文学の記号論 (1) / 日本明治大正小説研究 (3) / 日本昭和小説研究 (2) / 日本戦後文学演習 (1) / 明治時代文学セミナー (1)
- 比較文学：韓日比較文学研究・演習 (39) / 東アジア文学比較研究 (3) / 比較文学論・文学研究 (3) / 中日文学比較研究 (2) / 日本古典・近代文学比較研究 (3) / 日本近代文学とアジア (1) / 近代朝鮮日本語文学論 (1)
- 文学史：日本文学史・時代別日本文学史・研究・調査・方法論・特講 (16) / 日本近代文学

史・研究・調査(3)/日本現代文学史研究(3)/日本近現代文学史研究(2)/日本古典文学史研究(2)/日本古代文学史(1)/日本語古資料講読演習(2)

【教育学】

教授法(教育学):日本語教授法研究・演習・特講・セミナー(25)/言語習得・第2言語習得(3)/認知言語学・日本語認知言語学(2)/文法教育:日本語教育文法・文法教育(4)/日本語彙教育論(2)/日本語慣用句研究(1)/高級日本語文法(1)/日本文学教育論(2)/教育研究:日本語教育研究・方法論(9)/教育工学:マルチメディア・CALL教育方法(9)/会話・聴解教育:日本語会話指導(5)/日本語発音・聴き取り・聴解(2)/作文・読解教育:日本語作文指導(5)/日本語読解指導(1)/日本語講読(2)/日本語教育論研究・演習・セミナー・特論・特講(25)/日本語音声教育論(1)/日本語教育と情報(1)/日本語学習戦略特講(1)/日本語教育評価理論研究(3)

言語習得:日本語・言語習得研究・誤用(2)

教科・教育課程:日本語教科課程研究(2)

教材研究:日本語教材研究及び指導法(7)

【日本学】

日本学:日本学演習・セミナー・特講・研究方法論(28)/日本学研究成果と課題(2)/日本国学研究(1)/日本学論点(1)

日本文化(民俗・宗教):日本文化論・文化コンテンツ・研究・演習・特講・セミナー(40)/日本大衆文化論・研究(10)/日本文化史研究・特講(5)/日本演劇・劇芸術・舞台芸術(4)/映画とアニメーション・映像文化研究(3)/日本古代・近代・近現代文化研究(3)/日本文化のグローバル化戦略(1)/日本文化産業論研究(1)/日本文化政策論(1)/神話と日本文化(1)/マスコミュニケーションと広告文化(1)/キリスト教と日本文化(1)/漫画と雑誌(1)/沖縄文化集中研究(1)/日本公演文化論(1)/日本文学と文化媒体(1)/日本のブランド文化(1)/韓日大衆文化集中研究(1)/地域振興と地域文化(1)/表層文化と日本(1)/日本伝統文化の理解・文化論・研究・特講(12)/能・狂言・歌舞伎研究(2)/韓日比較文化論・対照研究・セミナー(10)/中日比較文化論・特講・研究(5)/比較文化論・研究(2)/東アジア比較文化研究(2)/韓日神話比較研究(1)/文化間交流学研究(2)/日本民俗研究・意識構造・文化論(14)/天皇制と民主主義(2)/韓日比較民俗論/研究(2)/日本宗教研究・宗教論(4)

経済:日本経済論・演習・研究(9)/日本政治経済研究・特講(3)/日本と東アジア経済統合論(1)/日本ビジネスヒストリー研究(1)/日本社会経済特講(1)/日本市場開拓論(1)/国際政治経済と日本(1)/東アジア経済秩序と日本(1)/日本会計研究(1)/日本企業研究・日本多国籍企業研究(4)/日本経営論・現代日本企業経営論セミナー(2)/日本の産業・地域産業(4)/日本流通産業論(1)/日本観光産業政策論(1)

政治:日本政治論・研究・特講・セミナー(14)/韓日比較政治論・日本政治と韓国(3)/日本政治外交研究・セミナー(2)/戦後日本政治(1)/東アジア政治秩序と日本(1)/日本のリーダーシップ(1)

国際関係:韓日関係論・近現代韓日関係研究・セミナー(8)/韓日関係史・交流史・文化交流史(7)/在日チェジュ人研究(2)/国際関係論研究・外交政策・対外通商戦略論(5)/

中日関係研究・対外交流認識・交流史(3)/東北アジア共同体と日本(1)/東洋学の理解(1)
 社会学：日本社会文化・伝統・システム・構造・調査・地域社会(30)/日本現地・地域研究
 ・演習(6)/国際社会と日本の役割(1)/権威と権力の日本型構造(1)/沖縄社会集中
 研究(1)/日本企業と社会文化セミナー(1)/日本社会と宗教(1)

歴史思想：日本史・日本の歴史・歴史文化・日本史学概論・日本史資料研究・日本文芸史・
 日本産業発達史(38)/日本古中世代の対外関係・日本近代・近世の対外関係(3)/日
 本近現代史の再問題(2)/日本文化史研究(1)/日本法制史研究(1)/日本植民地統
 治集中研究(1)/日本思想史演習・研究・現代日本思想(13)/西欧思想と日本思想(1)
 /江戸時代の思想(1)/日本の平和思想の研究(1)/東アジア思想史(1)/東アジアの
 天下思想研究(1)

【通訳翻訳】

翻訳：日本翻訳指導・翻訳文法研究(3)/日韓・韓日翻訳研究(6)/翻訳研究・入門・翻訳
 論(6)/実務・実用翻訳(2)/一般・専門翻訳(2)/翻訳と文化(1)/映像翻訳セミナー
 (1)/文学翻訳研究・演習・セミナー(9)/中日翻訳文学研究(1)/韓日文学翻訳と脱植
 民主義(1)

通訳：韓日通訳学研究(1)/通訳論特講(1)/通訳実習(1)/日韓・韓日同時通訳(2)/
 一般・専門同時通訳(2)

【その他】

論文研究・論文指導(23)/大学院(博士・修士)セミナー(4)/日本研究・日語日文セミ
 ナー(2)/Independent Study(2)/主題別時事討論・特講(2)/デスクトップ出版(1)/
 文章作成(1)/研究課題(1)/日本語学習と論述指導(1)

・教育大学院カリキュラム

【語学】

概論：日本語(日語)学研究(セミナー・研究方法論・演習・特講・特論・要説・理解等)(22)
 /日本語学概論・日語学概論(13)/現代日本語特講(1)/韓日対象研究・比較研究・対
 象表現・対照言語学(14)/日本社会と言語(1)/日本語構文論(研究)(3)

音韻・音声：日本語音韻(論・研究・研究方法論)(6)/日本語音声学(研究)(6)/韓日
 音声比較(1)

文字：日本語文字研究(1)

語彙・意味論：日本語語彙(論・研究)(7)/日本語意味論研究(5)/日本語構造と意味(1)
 韓日慣用句・ことわざ・表現研究(2)/日本語擬声語研究(1)

文法：日语法研究・日本語文法(研究・セミナー等)(14)/韓・日本語文法比較(2)/日
 本語待遇表現(研究)(2)/日本口語研究(1)/日本動詞研究(1)/日本語敬語研究(1)
 /韓日敬語研究(1)/日本語統辞論研究(1)/日本語形態・統語(論・研究)(5)

表現・文体：韓日語比喩表現研究(1)/日本語表現論・構造研究(3)/日本語文体研究(1)
 日本語史：日本語史(研究)・日本語史料(研究)(8)/日本語(日語)学史研究(5)

【文学】

概論：日本文学概論(12)/日本大衆文学研究(1)/日本文学と女性(1)/日本文学批評論(1)

/日本文学序説(1)/日本文学の叙述構造パラダイム(1)/日本文学の文化論的研究(1)
 /日本文学研究・方法論・理解・特講・演習(15)/韓日比較文学(論・研究・特講)(7)
 /比較文学教育論研究(1)/日本作家・作品論研究(4)/日本文芸批評・調査研究(2)
 /日本近代文芸史調査研究(1)/日本散文文学・研究(2)/物語文学研究(2)/日本随
 筆文学研究(6)/日本語小説(研究・論・セミナー・理解・特論)(6)/日本小説講読(1)
 /日本小説文学(1)/日本韻文学・研究(3)/日本詩歌研究・特講(3)/日本語漢文研究(4)
 /和歌俳句文学研究(2)/日本詩論(1)

古典:日本古典文学(特論・研究・理解等)(11)/日本古典詩歌研究(2)/日本古文書の
 理解(1)/日本古典劇文学研究(1)/日本古典散文文学研究(1)日本中世文学研究(3)
 /中古文学研究(2)日本上代文学研究・研究方法論(4)/日本近世文学研究(3)/草紙
 文学研究(1)/日本説話文学研究(1)/日本古典作家論演習(2)/日本神話研究(1)

近現代:日本近代文学(研究・方法論・特講・セミナー等)(13)/日本近代詩論・研究(3)
 /日本近代文学(研究・理解等)(3)/日本近代詩・詩歌研究(2)/日本近代作品論研究(1)
 /日本近代文学批評(1)/日本前近代史研究(1)/日本近現代劇文学研究(1)/日本現
 代文学(研究・方法論)(7)/日本現代文学作品論研究(1)/日本戦後文学と理論(1)/
 日本近現代小説研究(1)/日本近代作家(研究・作品論)(4)/日本近現代作家研究(1)
 /日本現代作家研究(1)

文学史:日本文学史研究・文学と歴史(特講・流れ等)(11)

【教育学】

教授法・教育理論:日本語教授法・研究・セミナー・研究方法論(13)/日本語教育論・理
 論・研究方法論・セミナー・特講(42)/外国語教育論(2)/日本語授業教育・技法研究
 ・事例研究(3)/教育学概論(1)/日語技能指導方法論(1)/教育心理と方法論(2)/
 教育社会(1)/教育の社会学的基礎(1)/教育学の理解(1)/特殊教育概論(1)/
 日本語教育争点研究(1)/英才教育(1)/創意性教育(1)/文法教育:日本語文法教育
 研究・指導法・特論(17)/日本語語彙教育論・研究・指導等(9)/日本語音韻教育論・
 指導論・発音教育(4)/現代日本語文法教育(2)/日本語表現文型教育指導法(2)/日
 本語敬語指導法(1)/日本語談話分析と活用教育(1)/日本語文型教育(1)/日本語
 誤用分析(1)/日本語類義表現指導法(1)/日本語学史教育論(1)/日本語意味論研
 究(1)/韓日語待遇表現指導教育(1)/韓日言語比較教育(1)/日本語学教育論・指導
 教育論・方法論(5)/音声教育:日本語音声教育論・方法論・研究・指導法(10)/聴解:
 日本語聞く・聴解教育・聴き取り教育・指導法(7)/読解教育:日本語読解・読み教育・
 方法論・指導法(6)/日本語講読・教育方法論・教育研究・指導教育(10)/日本小説論
 指導法(1)/日本漢字指導法・漢字教育研究(5)/会話教育:日本語会話・会話教育・
 指導法・研究・理論と実践・話法教育論(24)/日本語討論教育モデル探求(1)/作文
 教育:日本語作文・書き・指導教育・研究・方法論・特論(25)/日本文字指導法・表記教育
 研究(3)/日本語文章教育研究・作成研究(2)/日本現代文学と作文教育(1)/日本語
 正書法研究(1)/日本語教科論理と論述・論述指導(21)/文学教育:日本文学教育論・
 教授法・指導法(23)/日本古典・中古・近代・近現代・戦後・現代文学指導論(15)/日
 本文学史教育(2)/日本文学研究法・指導(1)/日本文芸論研究指導法(1)/日本散文

学教育 (1) / 日本小説の教育と研究 (1) / 日本韻文文学教育 (1) / 文化教育：日本文化教育論・教育指導 (7) / 映像文化活用日本語教育 (1) / 日本社会論指導法 (1) / 日本伝統劇活用日本語教育 (1) / 韓日比較文化指導法 (1) / 初級日本語 (1) / 中級日本語 (1) 教材研究：日本語教材・教科研究・指導法・教授法・開発論(32) / 小中高国語教科書研究 (1) 教科過程：日本語教科教育論・過程構成法 (10) / 外国語教科教育論 (1) 学校行政：教育奉仕活動(3) / 教育行政の基礎と教育経営・教職実務(3) / 生活指導と相談(2) / 日本語教育現場研究 (1) / 学校現場実習 (1) / 日本語教育課程研究・課程論 (4) 教育史：日本語教育史・研究 (5) / 教育の歴史と哲学 (2) 日本事情教育：時事日本語教育研究・日本事情教育・指導法 (5) / グローバル時代の日本語教育 (1) / 日本の歴史教育・指導法 (4) 教育工学：教育方法と教育工学・マルチメディア教育・インターネット活用・教育媒体製作論・視聴覚教育・コンピューターを使った日本語教育・映像物教育 (15) 評価：日本語教育評価論・方法論・研究・特論 (8) / 日本語評価の再問題 (1) / 教育評価 (1) 【日本学】

日本学：日本学演習・概論・成果と課題・特講 (9) 歴史：日本史 / 日本近現代 / 前近代史料演習・特講再問題・特講・講読・現地探査 (12) / 韓日関係史・文化交流使・研究・特講 (5) 文化：日本文化・現地探査・文化論・文化史・特講・特殊研究・読み (20) / 日本文化の理解・映像文化・特殊文化研究・ドラマ・演劇論・民俗文化研究(6) / 日本民俗文化論・研究(2) 日本事情：日本思想史・研究・特講 (4) 近現代日本政治と外交 (1) / 近現代韓日関係論 (1) / インターネット日本研究 (1) / 日本文学と社会 (1) / 日本人の情緒 (1) / 日本社会現地探査 (1) / 日本社会構造論 (1) / 日本社会と宗教 (1) / 日本事情の理解 (1) / 日本資本主義精神と日本式企業経営 (1)

【通訳翻訳】

通訳翻訳：日本語翻訳研究 (3) / 日本文学翻訳論・翻訳特講 (2) / 韓日本語翻訳研究 (1)

【その他】

論文設計研究・論文研究・論文指導教育論文研究・修士学位論文研究 (14) / 研究・研究報告・研究主題セミナー・研究課題 (4) / 個別研究指導 (1) / セミナー (1)

・地域学大学院 (日本学) カリキュラム

日本学：日本学セミナー・研究入門・特講 (4) 政治・外交：日本の政治発展・政治思想・議会政治・政治史・政治特講 (7) / 日本の政策過程・決定過程・通商政策 (3) / 日本の地方自治・地方自治と分権化 (2) / 日本の戦後改革と民主主義 (1) / 現代日本の国家と政治 (1) / 現代日本政治と外交分析 (1) / 日本外交論・対外政策の理解・国際協力 (3) / 東アジアと現代日本 (1) / 日米関係論 (1) / 日中関係論 (1) / 韓日関係：歴史と展望・韓日関係論 (2) / 韓日比較文学研究 (1) / 韓日コミュニケーション論 (1) / 韓日比較政治と韓日関係 (1) 経済(企業・経営)：日本経済論・セミナー・特講・発展論・経済と社会(6) / 日本政治経済論(2) / グローバル化と日本経済 (1) / 日本の企業と経営・日本の企業経営と文化 (3) / 日本

の産業構造・日本の産業政策(2) / 日本の労使関係(1) / 情報化時代日本の産業政策(1)
 文化: 日本文学研究方法論・文化論・文化政策論・大衆文化・大衆文化特講(6) / 日本文芸
 史調査・批評(2) / 日本現代文学研究・作家特講(2) / 国際文化の理解(1) / 日本文化
 と伝統(1) / 日本伝統芸能論(1)
 社会: 日本社会問題特講・社会文化セミナー・社会の中心と周辺・社会と言語・社会思想・
 社会変動・社会論・社会の内と外(8) / マイノリティ問題特講(1) / 日本の福祉政策(1)
 / 日本の市民運動(1) / 日本の環境問題(1) / 日本地域研究セミナー(1) / 現代日本の
 文化と社会(1)
 歴史: 日本古代史・中世史・近代史・近現代史・現代史・特講(5) / 日本の近代史の諸問題
 ・現代史の諸問題・1868年以前の諸問題(3) / 日本近代文芸論・文学研究・作家特講(3)
 / 明治維新と近代日本の胎動(1) / 日本考古学特講(1) / 日本の近代化と女性(1) / 日
 本の民俗学(1) / 日本の宗教・宗教と民間信仰(2)
 その他: 日本原書講読(1) / 修士学位論文研究(日本学)(1)

・通訳訳大学院

【通訳訳】

通訳: 同時通訳入門(2) / 日⇔韓順次通訳・文章区域・専門順次通訳(11) / 韓日 / 日韓一
 般順次通訳同時通訳・地域社会通訳実習・深化(12)
 翻訳: 日韓科学技術・政治法律・産業経済翻訳(6) / 日本語熟達(3) / 日本語深化(1) /
 翻訳 PRACTICUM(1) / 日韓・韓日メディア翻訳(2) / 韓日・日韓科学記述翻訳・メデイ
 ア翻訳・政治法律翻訳・人文社会翻訳(4) / 韓日・日韓翻訳実習・社会・一般翻訳(4) /
 韓日・日韓文章区域(1) / 韓日通訳訳理論講読(1) / 韓日一般翻訳(1) 弁論・討論・
 論文: 日本語弁論(1) / 日本語時事討論(1) / 日本語テーマ発表(1) / 韓日専門用語討論
 (1) / 韓日テーマ討論(1) / 論文研究(1)

5. 展望

韓国の日本語関連大学院は、草創期には日本語文学中心だったが、近年の社会環境の変化
 と時代的要求により、日本語教育や日本学などに関連した大学院が活性化し、それと同時
 に専攻と研究テーマも多様化した傾向が見られた。しかし、2000年代に入り、日本関連学科の
 開設数が70年代以前の水準に落ち込んでしまっている。これは、日本経済のバブルの崩壊と
 それ以後の景気後退、さらに韓国社会において日本への関心と需要が減少しているためだと
 推測される。

日本文学の場合、日本文学史で知名度が高い作家に対する研究が片寄る傾向があり、問題
 点として指摘されている(崔在喆 2012:108)。その半面、研究テーマの多様性も見られるよ
 うになり、日本語と文化、日本語文学と日本学科教育、文学と歴史を比較、文化と歴史関係
 と同じように語学、文学、日本学、教育学の学際的統合など新しいテーマに挑む研究も多く
 行われており、これは韓国研究財団などから行われている国家レベルの大規模プロジェクト

の助成などによるところが大きいと言えよう。韓国の日本関連大学院は、1970、80年代の胎動期と安定期、そして1990年代の飛躍的な発展期を経て、修士・博士学位取得者の爆発的な増加、2000年代に入ってから「専門領域の多様化」と発展して来た（国際交流基金2012）。しかし、量的な膨張に比べ、研究の質的な発展が損なわれることがないよう、質的な面で今後より一層の多様化と深化が期待される。

なお、社会的な変化と要求に積極的に対応し、教育効果に最も影響をおよぼす要因の一つであるカリキュラムについて、各大学院の特性に合わせた研究と開発及び調整が急務であると考えられる。

参考文献

- 金淑子 (2007) 『한국의 일본어교육』 제이앤씨
- 尹秉南 (2012) 「한국에서의 일본사 연구의 현황과 과제」 『2012 한국일본학의 현황과 과제』
国際交流基金 세종연구소 일본연구센터
- 李康民 (2012) 「한국에서의 일본어 연구의 현황과 과제」 『2012 한국일본학의 현황과 과제』
国際交流基金 세종연구소 일본연구센터
- 李徳奉 (2002) 『日本語教育의 理論과 方法』 시사일본어사
- 趙南星 (2007) 「교육대학원 일본어교육전공 석사학위논문 (2001-2006) 의 주제 분석」 『한국일어일문학회 하계 학술대회 요지집』 韓国日語日文学会
- 崔在喆 (2012) 「한국의 일본근현대문학연구 현황과 과제」 『2012 한국 일본학의 현황과 과제』 国際交流基金 세종연구소 일본연구센터
- 崔 官 (2012) 「한국에서 일본고전문학의 연구동향」 『2012 한국 일본학의 현황과 과제』 国際交流基金 세종연구소 일본연구센터
- 韓英恵 (2012) 「한국에서의 일본 사회문화 분야 연구 동향」 『2012 한국 일본학의 현황과 과제』 国際交流基金 세종연구소 일본연구센터
- 東京外国語大学国際日本研究センター (2010) 「世界の日本語 / 日本学 / 教育研究の現状と課題」 『国際シンポジウム報告書』
- 『韓국의 日本語教育実態—日本語教育機関調査1998~1999年』 (1999) 韓国日語日文学会

‘The Current States and Prospects of Japan-related Graduate Schools in Korea’

Youn Ho Sook

Cyber Hankuk University of Foreign Studies

【keywords】 korea, Japan-related, Graduate Schools, Dissertation, curriculum

Eighty eight graduate courses and thirty nine doctoral courses in Korean universities at the present of 2013 have been administered since the first graduate school for Japan in 1973 and doctoral course in 1981 were established.

The main majors were almost confined to the Department of Japanese, Japanese Language & Literature and Japanese Education. From the 1990s, a lot of the Department of Regional Studies were established and parts of studying were diversified such as literature, politics, economics & management, diplomatic, security and the relationship & history between Korea and Japan. It is considered that the cultivation of regional specialists is caused by the atmosphere of the Korean society.

It is said that master's theses have been rapidly progressing in many different fields. The remarkable results are achieved in the aspects of the diversity of research theme as well as the quantitative expansion, but this plays a crucial role in the specialization of researching on Japan.

The curriculum of graduate school related Japan in Korea is diversely organized according to the characteristic of course. However, there was a huge gap in curriculum number between each school and were considerable number of universities with many types of curriculum, and extremely a lot of problems were also seen. From now on, it can be said, from a long-term of point of view, that its own research, development and modification in all graduate schools' curriculum are essential.

Consequentially, graduate schools related to Japan in Korea, through the beginning and safe periods in the 1970s and 1980s plus exponentially expansion of degree recipients, has been developing as 「the diversity of specialized fields」 since the 2000s. However, compared to quantitative expansion, the diversity and progress in qualitative aspects will have been highly expected. Furthermore, what positively responds to social change and demand, and it is of urgent necessity for the study, development and adjust corresponded to characteristics of all graduate schools on curriculum which is one factor strongly influenced on educational results.

イギリスにおける大学院教育の中の日本研究／日本語教育 ーロンドン大学 SOAS を中心にー

田中和美 (国際基督教大学、元ロンドン大学 SOAS)

【キーワード】 イギリス、ボローニャプロセス、大学院教育、
日本研究、日本語教育、ロンドン大学 SOAS

1. はじめに

ヨーロッパにおける高等教育は、1999年のボローニャ宣言に始まるボローニャプロセスによって大きな変容を遂げた。ボローニャ宣言は、2010年までに高等教育における欧州圏を構築し、世界に通用する高等教育制度を確立させるという目標を掲げたものである。教育内容の透明性、人及び知識などの流動性、教育における協働等を促進することによる質保証を目指した。具体的な施策としては、学部と大学院における3サイクルの学位制度の確立、欧州単位相互認定制度 (ECTS) と Diploma Supplement の運用、National Qualification Frameworks の制定がある。

ボローニャプロセスの中心課題は、学位制度の見直しであった。国／地域によって制度が異なっており、その年数、内容、名称も様々であり、それでは、世界の労働市場において競争力が劣るといふ経済的、政治的危機感が後押しとなり改革へと進んだ。ボローニャプロセスの目標達成年である2010年発表の報告書 (European Commission 2010a) によると、学位制度の実施は概ね以下のようなところに落ち着いてきている。調査対象はボローニャプロセスに参加している47国／地域である。ボローニャプロセスが促進している3サイクル学位は、ECTS を使用して記述しており、1 学歴年を60 ECTS credits としている。

表1：ボローニャプロセス 学位制度

第1サイクル 学士 BA	25国 / 地域で 180 ECTS (3学歴年)	13国 / 地域で 240 ECTS (4学歴年)
第2サイクル 修士 MA	27国 / 地域で 120 ECTS (2学歴年)	90 ECT, 60 ECTS もある
第3サイクル 博士	特に指定はない	

*1 ECTS credit は25～30時間の学習 (授業外学習も含む)

ボローニャプロセスのサイクル制度の導入が参加国のほぼ半数の国／地域で90%に及んでいるという結果である (European Commission 2012)。もっとも多く見られるのは180+120 ECTS credits モデル、すなわち学部3年、修士2年であるが、一律ではない。

ヨーロッパ内の若者対象の調査結果によると、大学生の3分の2は卒業後も学業を続けたいと考えているようだ。この中には、働きながら勉強をするというの也被れている。修士

課程の学生の42%は学業を継続したい、44%が続けないと回答している（European Commission 2010b）。修士課程の学生が増加しているという話をきくが、それはまだ第1、第2サイクルが定着していないからだと考えられる。従来の高等教育は学士号の授与はなく、修士号を修得するものであり、就職するには修士号が有利であるという考えが受け継がれているためだという分析である（European Commission 2012）。

2. 英国の大学院教育

英国は、ボローニャプロセスの学位制度に関しては、あまり影響を受けていない。何世紀にもわたって確立してきた英国の制度をヨーロッパ全体が受け継いだという観点を持っている。英国では、学士号は通常3学歴年（180 ECTS）、修士号は1年（90 ECTS）で修得すると考えられてきており、2年制の修士課程が散見されるようになるなどの変化は見られるが、特にボローニャプロセスによる改革というものはなかった。しかしながら参加国であるため、ECTS、Diploma Supplement などのツールの導入はなされている。

英国における教育全般は中央政府の政策に基く。大学院教育（postgraduate education）は、第1学位を取得し、さらに学業に励むことと捉えられ、修士課程と博士課程以外に高度な専門資格課程を含む。高等教育質保証機構（Quality Assurance Agency QAA）が学習成果と達成度を基準に学位の定義を定めている。2007-8のデータによると、50万人以上の学生が大学院に在籍しており、そのうちの56%が修士課程であった。また、修士課程の学生のうち50%が英国籍以外の学生であった（Higher Education Policy Institute and the British Library 2010）。

3. 英国の大学院における日本研究

英国では、UCAS（Universities and Colleges Admissions Service）という大学入学センターが大学出願手続きを一括して行っており、大学入学希望者は Oxford 大学と Cambridge 大学を除き、個別の大学に出願することはない。UCAS のウェブサイトには、英国の全大学の全学位コースが検索できるようになっている。この検索機能で大学院の学位で次のキーワードを入れてみた結果を記す。〈アクセス日 2013年12月17日〉

表2：UCAS 検索結果

キーワード	該当件数
Japan	63
Japanese Studies	12766
Japanese	72

このうち学位名に Japan もしくは Japanese がついているものを列挙してみたのが表3である。

表3：英国における日本関係の学位

学位	学位名	機関	日本語について
MA	Japanese Cultural Studies / Japanese Creative Industries Studies	Birkbeck College, University of London	日本語学習可能
MA	Japanese Studies	University of Leeds	日本語学習可能
MA	Japanese Business	University of Leeds	日本語学習可能
MA	Japanese Studies	University of Sheffield	日本語学習可能
MA	Japanese Studies	SOAS, University of London	日本語学習可能
MA	Japanese Literature	SOAS, University of London	日本語学習可能
MA	Applied Linguistics and Language Pedagogy (Japanese)	SOAS, University of London	母語話者、超級者対象
MSc	International Management (Japan)	SOAS, University of London	日本語学習可能
MSc	Japanese Society and Culture	University of Edinburgh	
MSt	Japanese Studies	University of Oxford	日本語上級者対象
PhD/MPhil	Japanese	Birkbeck College, University of London	
PhD/MPhil	Japanese	University of Edinburgh	
PhD/MPhil	Japanese Studies	University of Manchester	

その他は、East Asian Studies、Asian Studies、Pacific Studies、International Relations などに日本が含まれるという形となる。

4. School of Oriental and African Studies (SOAS) , University of London

ロンドン大学東洋アフリカ研究学院のケース

1916年に創立されたSOASは、ロンドン大学連合の一員で、ヨーロッパの高等教育機関の中で唯一、アジア・アフリカ・中近東研究を専門としている。学生数は約5,000人、そのうち50%が世界120カ国以上からの留学生で、多文化共生社会の見本であると言え、非常にユニークな大学である。SOASでの日本語教育は1945年に始まっている。当初は、軍事教練の一部であり、6か月の集中教育の後、戦地に送られたのである。この集中日本語教育を基に語学教授法が発展したと言われている。

学部課程、修士課程、研究課程で幅広いコースを開講しており、これらのコースで授与される学位はロンドン大学のものである。教員対学生の比率が1:12と、英国でも屈指の少人数教育を行っている。3つの学部に分かれており、それぞれの構成は以下のようである。

表4：SOASの学部構成

法学・社会科学部	法学科、経済学科、政治学科、開発研究学科、経営・財務学科
人文・芸術学部	歴史学科、人類・社会学科、宗教研究学科、音楽学科、美術学科、美術史・考古学科
言語・文化学部	アフリカ学科、中国・内部アジア学科、日本・韓国学科、中近東学科、南アジア学科、東南アジア学科、言語学科

SOAS の大学院教育を見ると115以上のプログラムが提供されている。ホームページから大学院学位プログラムの検索で Japan というキーワードを入れてみると66件検出される。その中で、学位に Japan, Japanese が含まれているものには前項で述べた4学位がある。さらに、ほぼすべての学科で日本について学ぶ選択肢がある。次の表は、日本を対象とした修士課程プログラムである。〈アクセス日 2013年12月19日〉

表5：SOAS の日本関係の修士課程

学位	修士号のタイトル	内容紹介における日本、日本語に関する記述 (抜粋)
MA	Pacific Asian Studies	The courses chosen must cover three of the four regions of China and Taiwan, Japan, Korea, Southeast Asia.
MA	<ul style="list-style-type: none"> ・ History of Art and Archaeology ・ Religious Arts of Asia ・ Contemporary Art of Asia and Africa 	The regions covered include China, Japan, Korea, the Islamic world, the Indian subcontinent, Southeast Asia, and Africa (including the African Diaspora) . While knowledge of a relevant Asian or African language is not a requirement, for some courses it is an advantage for admission (see individual course descriptions for details) . It is possible to include an element of language training within the MA programme by taking an Asian or African language as one of the two 'minor' courses.
MA	Theory and Practice of Translation (Asian and African Languages)	Arabic, Chinese, Japanese, Korean, Persian, Swahili. Applicants should provide evidence of their proficiency in their chosen language at a level acceptable to the School
MA	Taiwan Studies	
MA	Traditions of Yoga and Meditation	meditational techniques and doctrines of India, Tibet, China and Japan
MA	Comparative Literature (Asia/Africa)	A prior knowledge of an African or Asian language is not a requirement for admission to this degree. Texts include both original English language literatures of Africa and Asia and literature written in African and Asian languages presented through English translations.
MA	Critical Media and Cultural Studies	contemporary issues discussed in Asian and African media
MA	Cultural Studies	cross-cultural contexts of Africa, Asia and the Middle East
MA	Religions of Asia and Africa	Buddhism in nearly all its doctrinal and regional varieties, Asian and African Christianities, Hinduism, Islam, Jainism, Judaism, Shinto, Taoism, Zoroastrianism as well as the local religious cultures of Asia and Africa.
MA	Global Cinema and the Transcultural	regional cinemas on offer in the School: Japanese, Chinese (mainland, Hong Kong & Taiwanese) , mainland and maritime South East Asian, Indian, Iranian, Middle Eastern and African. It also enables students to combine specialist film studies knowledge with a minor course in an Asian or African language
MA	Anthropology of Media	detailed introduction to the study of media in Asia, Africa, the Middle East and their diasporas.
MA	Anthropology of Travel, Tourism, and Pilgrimage	including evidence from the Muslim, Hindu, Jewish, Japanese, and Christian worlds;
MA	History: East Asia	
MA	Gender Studies	specificities of Asia, Africa and the Middle East
MSc	Asian Politics	
MSc	Development Studies	
MSc	International Politics	
MSc	State, Society and Development	economic take-off in East Asia

5. SOASのMA in Applied Linguistics and Language Pedagogy (Japanese) プログラム概要

ヨーロッパで唯一の日本語応用言語学、日本語教授法を学べる修士課程として1996年にMA in Applied Japanese Linguisticsという形で始まった。教員免許を授与するわけではなく、実学よりディシプリンとしての応用言語学の学問を中心とすることを目標としている。高い評価を得、さらに他言語でも同様のプログラムを提供することにし、2008年より上記学位名となり、現在は 中国語、日本語、韓国語、チベット語の4言語から選ぶことができる。9月末に入学し、翌年の9月15日に修士論文を提出する1年間の90ECTSのサイクルとなる。授業は10月から4月まで、10週x2の2学期間で、5月は試験期間となる。その後、夏に修士論文を書く。

日本語でのこのプログラムを履修する学生は、日本語母語話者で現職の日本語教師及び日本語教師を目指している人が多いが、非母語話者も毎年いる。講義、授業、レポート、修論はすべて英語で行われるので、英語能力が一定以上でなければ入学できない。履修人数は、毎年1~10名程度である。卒業生は、翻訳や英語教育に携わる者もいるが、大学レベルや学校外教育で日本語教師となっている者が多数いる。

プログラムの必須科目は“Language Pedagogy”という各言語に特化された言語教授法であり、必須選択科目には第2言語習得論、構文論、言語構造論などがある。このプログラムの最大の特徴は、理論と実践を合わせていることであり、この方式は他に例をみない。

日本語に特化された科目は、“Japanese Language Teaching and Learning”で、週2コマの理論面についての講義、講読、ディスカッション、さらに、週1コマの実践面のクラスが加わる。評価は理論面の学年末試験60%と小論文10% x2回、そして実践面20%である。日本語教育を専門とする教師1名が担当する実践面では、次の3点をカバーする。

1) 授業観察

担当教師が受け持つ週3コマの選択科目の「初級日本語1」をコース開始日から最終日までの授業を観察する。それにより、日本語教育における様々な教授項目の教授法や習得時の躓きなどを学ぶだけではなく、授業運営、授業内でのインターアクションとその効果、クラス内のグループダイナミクス、学生の言語習得の軌跡など多くの面を直接観察し、体験できる。

「初級日本語1」は、日本語専攻の学生ではない学部生、大学院生が選択科目として履修する。1クラス20名ほどで、『みんなの日本語1』の1~22課までを約60時間で学習する。漢字を170ほど導入するが、非漢字圏の学生を対象に文字学習のために1コマ補講を設ける場合もある。授業は基本的に日本語で行うが、時間や効率性を考慮し英語を媒介語としている。コースの初めに、修士課程の学生が授業観察をすることと2学期目には実習をすることを述べ、了承を得る。授業参観をする修士課程の学生は、教室の後ろに座り主に教師を見ていることになるが、担当教師の指示で、「初級日本語1」の学生の近くに来て書いていることや言っていることを観察する。クラス内のアクティビティーに参加することはないし、教師のアシスタントをすることもない。これは、授業は教師一人で行うものであることを徹底するためである。

2) 講義、ディスカッション

1学期目の週1コマは担当教師との授業で、授業観察、言語技能、学習項目、教材分析などについての講義やディスカッションを行う。最初のころは観察する課題、例えば文字の誤りの傾向、母語の影響、習得速度の差などを与えられる。また、理論面の講義との関連で、観察することを指示されることもある。20週間のコースの授業観察ということは非常に貴重な経験であり、それぞれがあるテーマを持って観察することを奨励している。担当教師との授業では、テーマを設け、観察したことに基き疑問点を出し合い、議論を行う。1学期後半には、教育実習を念頭に教材分析も入念に行っていく。

3) 教育実習

2学期目には教育実習を行う。修士課程の履修人数によるが、二人で1週3コマ（1単元）を担当し、それを2回する。実習のため、授業で使用する例文や指示の言葉、板書することなどの詳細を書いたシナリオとなる教案（細案）を書く。それを元に担当教員と数度話し合い、検討する。その後修士課程のクラスで模擬授業を行い、さらに教案を練り、本番を迎える。本番ではビデオ収録する。本番後は、クラス全員で講評をし、実習担当者はビデオを視聴後、振り返りのレポートを書く。実習担当者以外は、後ろに座り実習のコメントを記入し、授業の中に入ることはない。

「初級日本語1」は単位が授与される正規の科目であり、履修している学生たちは良い成績を収めようと勉学に励んでいる。実習生が教えたから成績が悪くなったということはあってはならないので、実習準備は綿密に行われる。ただ1学期間、授業観察をしているので、次の利点がある。

- ①実習生は対象である「初級日本語1」の学生をよく知っている。また、「初級日本語1」の学生も修士課程の学生を知っており、信頼関係ができています。教案を考えるときに、どの学生をどのような順番で指名するかも想定できる。導入する際の文脈や例文作成も学生の背景を熟知しているので、妥当なものとなる。また、既習語彙、文型のコントロールができています。
- ②担当教師の授業のやり方を観察してきているため、そこから大きく外れるような授業はしない。実習となっても、基本的な授業の進め方や使用する用語は変わらず、宿題、クイズは従来どおりであり、「初級日本語1」の学生の混乱を招くことはない。

この修士プログラムが15年以上続いていることは、この方法がそれなりの効果があり、評価を得ている証拠だと言えのではないだろうか。

6. おわりに

ヨーロッパにおけるボローニャプロセスの状況を把握しながら、英国の大学院教育における日本研究の現状を概観した。さらに、ロンドン大学 SOAS を取り上げ、詳細にみてきた。英国におけるボローニャプロセスの影響としては、従来の1年（90ETCS）の上に、2年（120ETCS）の修士課程が少なからず増えていることであろう。ヨーロッパにおいては、

日本語教育は日本研究の基盤であるという考えは、今も今後も変わらないであろうと思う。大学院教育において、日本語を習得せずに日本研究が可能であることが見られた。

また、SOAS で見る限り、日本研究としては 経営学、経済学などビジネス領域でのプログラムが勢いを得ている。日本語のみならず語学教育を組み合わせることによって、特色を打ち出そうとしている。一方で、英語母語話者でない学生にとっては、自らの出身地域のことを英語で学習することにより、英語力の上達となり、就職に有利ということで留学生の獲得にもつながっている。日本語教育の面では、最近開講された学部でのプログラムであるが、BA International Management (Japan) (Year Abroad) は、3年次に1年間日本留学する。従来は日本語学科が日本語と日本留学に関するプログラムを立ち上げてきたのであるが、他部署が日本留学を盛り込んだ学位を授与する初めてのケースである。今後は、日本でのインターンシップの可能性なども含め、実学に結びついた日本語教育が求められるだろう。

参考資料

- European Commission (2010a) Focus on Higher Education in Europe : The Impact of the Bologna Process http://eacea.ec.europa.eu/education/eurydice/documents/thematic_reports/122EN.pdf
- European Commission (2010b) Flash Eurobarometer: Students and Higher Education Reform: Survey among students in higher education institutions in the EU Member States, Croatia, Iceland, Norway and Turkey (March 2009) http://ec.europa.eu/public_opinion/flash/fl_260_en.pdf
- European Commission (2012) The European Higher Education Area in 2012: Bologna Process Implementation Report [http://www.ehea.info/Uploads/ \(1\) /Bologna%20Process%20Implementation%20Report.pdf](http://www.ehea.info/Uploads/(1)/Bologna%20Process%20Implementation%20Report.pdf)
- Higher Education Policy Institute and the British Library (2010) Postgraduate Education in the United Kingdom. http://www.bl.uk/aboutus/highered/helibs/postgraduate_education.pdf
- SOAS Postgraduate Degree Finder <http://www.soas.ac.uk/admissions/search/index.php?more=postgraduate&q=Japanese+Studies&btnSearch=Search>
- SOAS , Department of Linguistics MA Programmes 2012-2013 <http://www.soas.ac.uk/linguistics/programmes/maling/file77925.pdf>
- UCAS Post Graduate Courses <http://ukpass.prospects.ac.uk/pgsearch/UKPASSCourse>

Japanese Language and Japanese Studies in Postgraduate Education in the UK

— The case of SOAS, University of London —

Kazumi Tanaka

International Christian University (Formerly at SOAS, University of London)

【keywords】 the UK, Bologna Process, postgraduate education, Japanese Studies,
Japanese language education, SOAS, University of London

The Bologna Process, which aimed at constructing the “European Area of Higher Education”, has had a major impact in European higher education system. By the end of the campaign in 2010, there were 47 signatory countries/regions and the three cycle system of degrees and qualifications were implemented in many countries, along with European Credit Transfer System (ECTS), Diploma Supplement, and National Qualifications Frameworks. Since the UK had long before established the three cycle educational system the Bologna Process had little effect, the exception being that more two academic year MA courses instead of traditional one calendar year course are now emerging.

Searching the Japanese Language and Japanese Studies in postgraduate education in the UK through UCAS (Universities and Colleges Admissions Service) website, there were 13 degree programmes with Japan or Japanese in their titles.

School of Oriental and African Studies (SOAS) was founded in 1916 and is the only higher education institution in Europe specialising in the study of Asia, Africa and the Near and Middle East. The Japanese language education at SOAS began in 1945 to cater for the military services. There are 22 MA/MSc degree programmes that are closely related to Japan at SOAS.

MA in Applied Linguistics and Language Pedagogy (Japanese) which started in 1996 is one of the MA programmes offered at SOAS. It is unique as it concentrates on Japanese Applied Linguistics and combines actual teaching practicum. The compulsory “Japanese Language Teaching and Learning” course requires students to 1) observe an elective course called “Basic Japanese 1” taken by undergraduates and postgraduates who are not Japanese majors from day 1 until the end of the course, three periods a week for 21 weeks, 2) attend lectures and discussion led by the instructor of “Basic Japanese 1”, 3) conduct the teaching practicum in this “Basic Japanese 1” course in the second term with detailed preparation and mock teaching.

ウクライナの高等教育機関における日本語教育・ 日本語教員養成課程のコースデザインの改善への提案 ー タラス・シェフチェンコ記念キエフ国立大学の場合 ー

ASADCHIH Oksana (タラス・シェフチェンコ記念キエフ国立大学)

【キーワード】 大学生、JF 日本語教育スタンダード、JLC 日本語スタンダードズ、コミュニケーション能力、アカデミックな日本語力

1 ウクライナの高等教育機関の日本語学習環境現状

本章では、まず、ウクライナにおける高等教育レベルの外国語教育とその中での日本語教育の現状について述べる。そして、次に、筆者が所属するタラス・シェフチェンコ記念キエフ国立大学（以下キエフ大）の日本語教育の現状について述べたい。

1.1 背景

現在、ウクライナにおいて外国語教育の重要性がますます高まりつつある。日本語もその外国語の中のひとつであるが、ウクライナでは外国語といえば、一般に西洋言語のことを指す。そのため、現状として高等教育機関における外国語教育・外国語教員養成課程のコースデザインは西洋言語を基にして作成されている。これは日本語教育の場合も例外ではない。しかし、西洋言語と東洋言語は統語論や意味論、語彙論など多くの領域で非常に異なったものであり、その学習時間数や学習過程と方法も異なったものが求められる。現在、ウクライナの教育、科学、若者及びスポーツ省（以下ウクライナの教育省）は東洋言語教育の発展の取り組みに大変努力しており、東洋言語教育関連のコースの設立を模索している。

1.2 高等教育機関の日本語教育を取り巻く環境

CIS 諸国の中でウクライナでの日本語学習者数はロシアに次いで二番目である。その背景にはウクライナ社会の政治的、経済的な変化や国際化があると思われる。ウクライナでは、長期滞在している日本人及び日系企業がまだ少ないが、10年前と比べると、かなり増えたと言える。日本語を使って就職できる学習者は比較的少ないが、日本の留学が出来るチャンスは増えた。福島・イヴァノヴァ（2006）は、ウズベキスタンの日本語学習環境について、地域内に日本語コミュニティがなく、旅行、留学などで日本に行くことも稀で、教室外で日本語の接触の少ない「孤立環境」と定義している。また、荒川・和栗（2007）は、カザフスタンでは、日本の文化的プレゼンスが希薄で、日本語の実際的な需要が希少な状況で、学習者は、日本語の教室外では、日本や日本語に接触する機会が皆無に等しいという。ウクライナでは、特にキエフ大の場合、教室以外にインターネットや天理大学、龍谷大学、筑波大学、大阪経済法科大学、青山学院大学との交流事業への参加を通して、日本語と接触し、実際に日本語でコミュニケーションが出来る機会が増えてきた。つまり、ウクライナにおける日本

語学習環境は、ウズベキスタンとカザフスタンに比べて孤立程度が低いという予測が立てられる。そのため、コースデザインの改善の提案を考えることにあたって、学習者が実際に行っている、または行う可能性のあるコミュニケーションのための能力の養成に取り込むことが必要であると考えようになった。

1.3 ウクライナの高等教育機関における外国語教育事情

ウクライナでは初・中等教育は決まったナショナル外国語教育スタンダードがあるが、高等教育のスタンダードはまだない。そのため、西洋言語学習が行われている大学では、外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠 (Common European Framework of Languages) (以下 CEFR) を参考にして外国語学習のカリキュラムなどが作成されている。また、日本語教育コースの設置基準やカリキュラムもまったくなく、各学校・大学のガイドラインもロシアの大学の講座内容を参考にしたり、英語等の外国語のガイドラインに準じて日本語コースをデザインしているようであり、ウクライナの日本語コースの設置に関しては準備が整ったとは言い難い状況である。しかし、筆者は、ウクライナの高等教育機関における日本語教育・日本語教員養成課程のコースデザインの改善を行なうことは、ウクライナの日本語教育の質をよりよい形に発展させるのに不可欠だと考えている。

1.4 キエフ大における日本語教育の現状

ウクライナの高等教育機関において日本語教育が盛んに行われている大学は、筆者が所属するキエフ大とキエフ国立言語大学である。以下はキエフ大について述べる。

キエフ大の場合、キエフ大附属言語学院の中国語・韓国語・日本語学科で日本語教育が行われている。まず、キエフ大の教育制度を説明する。キエフ大では、学士課程 (Bachelor) は4年間、修士課程 (Magister) いわゆる教員養成課程は2年間である。学士課程を卒業すれば、日本語通訳者 / 翻訳者や英語通訳者 / 翻訳者になれる資格が得られる。修士課程、つまり教員養成課程まで進めば、日本語教師、英語教師、更に言語・文学研究者になれる資格が得られる。その上の大学院は3年間で、卒業すれば Ph.D. が取得できる。更に、Ph.D. より高い学位を取得したい場合、日本の教育制度に相当できない3年間の課程があり、それは Doctorantura という。なお、ウクライナでは一番高い科学学位はアカデミー (学士院、芸術院) 会員である。

さて、キエフ大の言語学院では、卒業者にアカデミックな知識、つまり主専攻以外にかなり幅広い分野での知識を身につけさせることを目的としてカリキュラムを作成している。教育方針は、以上にも記述したとおり、学士課程と教員養成課程の卒業証書の専攻は五つの分野の専攻になっている。そのため、カリキュラムには主専攻に関する必修科目以外に、教養一般科目が41パーセントを占めている。また、ウクライナの教育制度の場合、特別な基準があり、教育省は必修科目を決定し、残りの選択科目はそれぞれの教育機関が定める形を取る。

次に、設備に関しては、他の教育機関に比べ、キエフ大は恵まれている状態にあると言える。三菱商事株式会社とキエフ大学間の学術・教育振興のための国際協同プログラムにより、日本側とそれ以外に韓国側の援助でコンピュータ教室、リンガーフォン教室などが整備され、テープレコーダーやテレビ何台もあり、OHP などのような設備も十分ある。

それから、キエフ大での日本語教師の人数は15名で、その中は日本人教師が3名である。15名の中6名が博士学位を習得している。その詳細は日本語学博士号は4名、その4名の中の1名は日本人で、日本文学博士号は1名と日本語教育博士号は1名である。

1.4.1 キエフ大の学習者のレディネス

学士課程の1年生は一般的に17-18歳で、ウクライナ語が母語で、ロシア語も話せる人である。初学校の一年生の時から多くの場合大体90%は英語、残りの10%はドイツ語、フランス語、スペイン語を勉強してきた学習者であり、外国語の学習経験があり、ほぼ中級程度のレベルで外国語が出来ていると言える。

日本語の学習動機は日本語でアニメを見たい、日本文化・文学を学びたい、日本企業で就職したい、日本に留学したいなどである。

修士課程の1年生は一般的に21-22歳で、日本での留学の経験のある学生とない学生が混ざっている。日本語能力レベルから言えば、中級前半から中級後半の間のレベルの学習者が多い。しかし、上級の下レベルの学習者もいる。

1.4.2 大学の卒業生の進路

ウクライナでの日本語を専攻していた大学卒業生の日本語を生かしての進路は、傾向として大きく三つに分けられる。一番目は就職せず日本の大学や大学院に進む者である。その割合は20%に近い。二番目は日本語教師や研究者になる。以上にも記述したとおり、修士課程を修了すれば、日本語・日本文学の教師の資格が得られるため、高等教育機関のみならず、日本語教育が行われている初・中等教育機関の教師になる卒業生がいる。その割合は12%に達している。なお、現在、日本語教育の発展に伴い、大学院レベルでの日本語研究も促進され、語彙学、文法学、音声学、辞書学、民俗学、日本文学について、ウクライナ語との対照研究が盛んである。そのため、研究者になる卒業生が10-15%に達する。三番目の就職先は日系企業やウクライナ日本センターである。その卒業生の割合は4-5%である。

日本語を生かしての進路以外の卒業生の就職先は英語を生かす職場に勤めることである。また、ダブルディグリーを取得し、他の分野での仕事を探すこともある。

1.4.3 キエフ大の日本語学習環境の問題点

学習環境で一番問題になっているのは日本語の学習時間が時間数が少ないことである。具体的には学士課程では1049時間と教員養成課程では158時間の学習時間しかない。また、ウクライナには学習者が接することが出来る日本人が少ないこと、教材不足、日本語教師養成の問題、就職先の不足などの問題がまだ少なくない。さらに、学習者のニーズが大切にされない。キエフ大の学長は、学習者のニーズを大切にしよう指示をするが、諸般の事情で縮小せざるを得ない科目を担当している教員の仕事確保のために、日本語教育に関係の薄い科目をカリキュラムに組み込んでいる。しかし、コースデザインの改善を考える際、時間数と科目数は変えられる状況にあると言える。

1.5 キエフ大の現在の日本語コースの問題点とその解決法の提案

キエフ大の学習者は実際にインターネットや日本の大学の交流事業の中で、日本語でコミュニケーションを行っているが、そのコミュニケーション内容と場面や話題には特性がある。日本語コースで使用されている教材は日本国内学習者向けに開発された教材で、日本事情が入っているため、日本のことについてある程度コミュニケーションが出来る。しかし、ウクライナのことについてまったくコミュニケーションが出来ないとも言える。それは学習者自身もそう思っているが、筆者ももともと日本語学習者であったため、同じような意見を持っている。そのため、学習者は日本語を使い、1) 日本についての知識や理解を深めながら、ウクライナと日本文化の総理解のコミュニケーション能力や2) 異文化適応能力(松尾、濱田2006)の養成を目指す。また、大学の卒業生は日本語の教師や研究者になる人も少なくないため、3) アカデミックな日本語力の養成も目指す。したがって、提案するコースの目的は、下記のように整理できる。

- 1) コミュニケーション能力を養成する。
- 2) アカデミックな日本語力を養成する。
- 3) 異文化適応能力を養成する。

2. 研究課題

今回はウクライナにおける日本語教育の質をよりよい形に発展させることを目的とし、大学レベルで主専攻として日本語を勉強している学生対象の日本語教育・日本語教員養成課程のコースデザインの改善の提案を開発することが全体の研究課題となる。その中では、コミュニケーション能力、異文化適応能力の養成とアカデミックな日本語力の養成を目指し、JF日本語教育スタンダード(以下JFスタンダード)とJLC日本語スタンダード(以下JLCスタンダード)を参考にし、所属機関の学習者向けの実践日本語コースとアカデミック・ジャーナリズムのコースの到達目標を設定することが必要である。

3. 先行研究

上記の研究課題を進めるために、コースデザイン、シラバス、カリキュラム開発に関わる先行研究、大学の学生を対象とした日本語のコース改善の実践研究、JFスタンダードとJLCスタンダードを参考にした。

Richards(2001:97)は、大学の場合、二つのやり方があると述べている。一つは、大学では教材が決まっており、教師はその決まった教材を必ず使用し、授業を行うことである。もう一つは、到達目標は大学のガイドラインで定めており、教材はさまざまで、大学のガイドラインに従い、目標の達成まで勉強させるために、それぞれの教師が独自の教材や、教師自身が選択した教材を使用しながら、授業を行うということである。ウクライナの高等教育機関における日本語教育に関しては、コースの設置基準やカリキュラムはなく、各大学のガ

イドラインもロシアの大学の講座内容を参考にしたり、英語等の外国語のガイドラインに準じて日本語コースをデザインしているようであり、ウクライナの日本語コースの設置に関しては準備が整ったとは言い難い状況である。そのため、日本語教育が行われているウクライナの高等教育機関で一般的に使われている教材を使用しながら、研究課題となっている目的、つまり、日本についての知識や理解を深めながら、ウクライナと日本文化の総合理解のコミュニケーション能力の養成と、アカデミックな日本語力の養成の達成のため、教材開発を考え、日本語教育・日本語教員養成課程のコースデザインを作成し、実践日本語コースとアカデミック・ジャパニーズコースの到達目標を設定する。

西洋言語学習が行われているウクライナの大学では、CEFRを参考にして外国語学習のカリキュラムなどが作成されている例が少なくない。しかし、柴原(2007:119)によると、CEFRは異文化理解という枠では捉えにくいという。しかし、筆者は毎日の生活の中で直接触れにくい異文化に学習者を意識的に接触・体験させる場となりうること、つまり異文化適応能力を考えながら、コースデザインの改善の提案を作成した。同じく柴原(2007:118)はCEFRは複言語・複文化主義の立場をとり、母語プラス二言語の学習が奨励されるという。また、CEFRはある外国語がぺらぺらになることを目指すのではなく、学習した複数の言語とその文化を駆使してコミュニケーションを取れるような能力養成が目標となるとも言いが、ウクライナにおける日本語学習状況にふさわしくない。更に、松尾、濱田(2006:162)のいう文字能力の記述は、CEFRを非ヨーロッパ言語に应用する際に最も問題となる点である。ひらがな、カタカナ、漢字といった表記体系に配慮していないため、どのような文字で書かれた文を、どの文字で書くことが求められるのかが、明らかでない。そのため、日本語コースの到達目標を設定する際、JFスタンダードとJLCスタンダードを参考にした。

プーリク(2010)は、ロシアのノボシビルスクのシベリア・北海道文化センターでの日本語学習者のコミュニケーションの内容と場面の特性は「ロシア国内」であり、話題は「日本・ロシア」についての、いわゆる「情報交換」が多いという。キエフ大を初めとし、ウクライナにおける日本語学習環境ではその部分が足りないため、話題を設定する際、それを参考にしたい。

本研究は、松尾、濱田(2006)のいう「何を教えるか」を中心に記述されてきたこれまでのガイドラインと異なり、学習者が「どこまで到達すべきか」を中心にすえた「アウトプット志向」である点も大きな特徴であるとも言える。

4. 研究課題 日本語教育・日本語教員養成課程のコースデザインの提案

研究課題は、大学レベルで主専攻として日本語を勉強している学生対象の日本語教育・日本語教員養成課程のコースデザインの改善の提案を開発することである。

久保田(2012:47)は、コース全体のデザインを考えると、幅広い範囲、つまり「学習者」、「教師」、「教える内容」、「コース目標やスケジュール」、「教材、教具」、「教え方」などの問題を一つ一つ分析し、常に考えておくことが必要であると述べている。社団法人日本語教育学会の報告書(1989)によると、コースデザインにはボトム・アップとトップ・ダウンの二

つのモデルがあるという。ボトム・アップタイプは、コミュニケーションを構成する要素の一覧表を作り、そこから学習者のニーズに従い、それに適切した教授法などを選び、コースをデザインするという。トップ・ダウンのタイプは学習者のニーズを元にコースデザインを考えるという。筆者はウクライナにおける高等教育機関の事情を踏まえ、日本語教育が行われているウクライナの高等教育機関で一般的に使われている教材を使用しながら、「何を教えるか」を中心ではなく、「どこまで到達すべきか」を中心にコミュニケーションを構成する要素の一覧表を作り、それに適切した教授法などを選びながら、ボトム・アップのタイプを元に学生対象の日本語教育・日本語教員養成課程のコースデザインを作成することにした。

筆者が提案するコースデザインはウクライナのエデュケーション省の基準も踏まえ、A,B,Cの要素から成り立っている。Aは「誰に」、Bは「何を」、Cは「評価」、になっている。

Aの「誰に」、つまり対象者に関しては、ウクライナのエデュケーション省で日本語教育を専攻にしている学習者と設定した。具体的には、4年間の学士課程（日本語教育課程）と、2年間の修士課程（日本語教員養成課程）に分けた。

Bの「何を」を二つに分けた。一つ目は、日本語、言い換えれば、学習者自身の日本語能力の向上を目指し、「どこまで」という到達目標のところには、実践日本語コースとアカデミック・ジャパニーズコースの実際の到達目標を設定したが、本研究の研究課題となっているため、後ほど詳しく触れる。そして、運用能力養成のシラバス開発は今後の課題となっているため、本研究では詳しくは触れない。シラバス開発に当たっては1)トピックの設定、2) Can-doの作成、3) 言語事項、日本事情、方略項目の採用の手順で行うことを考えることにする。なお、運用能力養成のカリキュラムも、シラバスと同じく今後の課題となっているため、詳しく触れないことにする。二つ目は、学習方法・理論、つまり、学習者が先生として教えるための技術的・理論的な知識や、日本語特有の教授法/西洋言語教授法の具体的なスキル・メソッド/アプローチ/評価の習得を目指す。ここでは、代表的な外国語教授法とその他の独立系の外国語教授法をまとめ、修了試験練習問題を作成した。更に、日本語学の分野では必要とされる知識をまとめた。具体的には、日本語を分析する力を養う/日本語を体系的に整理する、つまり、学習者が先生として教えるための基本的な知識（日本語学と日本文学（日本文学・日本事情・日本文化））の知識である。

Cは「評価」で、学年テスト・修了テストと評価基準を作成し、そして、ポートフォリオ評価導入も試みる。更に、それも今後の課題となっている。

5. 研究課題 実践日本語コースとアカデミック・ジャパニーズコースの到達目標の設定

今回の研究課題は、コミュニケーション能力、異文化適応能力の養成とアカデミックな日本語力の養成を目指し、JFスタンダードとJLCスタンダーズを参考にし、所属機関の学習者向けの実践日本語コースとアカデミック・ジャパニーズコースの到達目標を設定することである。

JFスタンダードとJLCスタンダーズを参考にした理由は以下のようにまとめられる。

1) CEFRの言語教育政策の考え方の影響を受けたJFスタンダードは2010年に公開された。

これは、日本国内の留学や仕事をしている外国人だけではなく、海外の日本語学習者も含めた、幅広い日本語教育の概念である。なお、「相互理解のための日本語」の教育を提唱しているため、研究課題となっている異文化適応能力の養成も含めたコミュニケーション能力の養成に相当相応しい。更に、JFスタンダードの言語活動を使うと、目標とするコミュニケーション能力の養成に最も相応しいと考える。

2) 2011年に公開されたJLCスタンダードとは、日本の高等教育機関で勉学・研究するために日本語を学んでいる留学生を対象とし、「アカデミック・ジャパニーズ」の教育をより効果的かつ効率的に行うために「聞く」、「話す」、「聞く・話す」、「読む」、「書く」の五つの技能を「初級前半」「初級後半」「中級前半」「中級後半」「上級」に分け、それぞれの段階における行動目標を記したものである。JLCスタンダードはアカデミック・ジャパニーズに特化しているので、大学での勉強に必要な日本語力を付けるために、どのように段階を追って何を学習していくかについて、簡潔に示したものであるが、研究課題となっているアカデミックな日本語力の養成を行うための基準を考える際、十分に使えると考えたためである。

まず、JFスタンダードとJLCスタンダードの利用の使い分けについてである。学士課程の4年間の実践日本語コースの到達目標を設定した際、JFスタンダードを参考にした。学士課程の3年生の時点で、アカデミック・ジャパニーズという科目がカリキュラムに入っているため、学士課程の3年生と教員養成課程の1年生のアカデミック・ジャパニーズのコースの到達目標を設定した際、JLCスタンダードを参考にした。教員養成課程の2年生になると、修了論文や他の理論科目がカリキュラムに入るため、日本語の授業がない。

6. まとめと今後の課題

本研究では、大学生を対象とした日本語教育・日本語教員養成課程のコースデザインの改善を目指し、第1段階として、ウクライナの高等教育機関の日本語教育を取り巻く環境、キエフ大における日本語教育の現状、学習者のレディネス、日本語学習環境の問題点や現在の日本語コースの問題点を明らかにした上で、コースデザインの目的を考えた。更に、研究課題となっている日本語教育・日本語教員養成課程のコースデザインの改善の提案を考え、更に、コミュニケーション能力、異文化適応能力の養成とアカデミックな日本語力の養成を目指し、JFスタンダードとJLCスタンダードを参考にし、所属機関の学習者向けの実践日本語コースとアカデミック・ジャパニーズコースの到達目標を設定した。

今後の課題として、運用能力養成のシラバスやカリキュラムを作成し、それに沿った教室活動を考え、実験授業を実施することである。なお、作成したコースデザインに関する学習者・教師の意見及び感想の調査を行い、その調査結果を分析した上で、授業の枠組みの設計を検討したい。更に、シラバスを実際にコースに取り入れるために、評価の方法の検討を行い、継続的なコース改善を図っていきたい。

今回の研修で奨学金を下された博報財団をはじめとして、多くの方々にご協力をいただきました。また、ご指導を下された坂本恵先生や、東京外国語大学国際日本研究センターの方々、東京外国語大学の文野峯子先生、国際交流基金日本語国際センターの久保田美子先生、木田真理先生、木谷直之先生、政策研究大学院大学の近藤彩先生と今野雅裕先生には大変お世話になりました。厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 荒川友幸・和栗夏海 (2007) 「カザフスタンにおける日本語初級カリキュラム—日本人材開発センターの新しい試み—」『国際交流基金日本語教育紀要』第3号、国際交流基金、123-134.
- 久保田美子 (2012) 「日本語教師の役割 / コースデザイン」『国際交流基金日本語教授法シリーズ1』ひつじ書房.
- 国際交流基金 (2010) 『JF 日本語教育スタンダード2010—利用者ガイドブック—』国際交流基金.
- 国際交流基金日本語国際センター 「JF 日本語教育スタンダード」
< <http://www.jfstandard.jp> > 2013年2月5日参照
- 柴原智代 (2007) 「各国のスタンダード作成の意義と日本の問題—ヨーロッパ、米国、オーストラリア及び中国、韓国の比較・分析—」『国際交流基金日本語教育紀要』第3号、国際交流基金、113-122.
- 社団法人日本語教育学会 (1989) 『日本語教育機関におけるコースデザインの方法とコース運営上の教師集団の役割の分担に関する調査研究—報告書—』社団法人日本語教育学会.
- 東京外国語大学留学生日本語教育センター (2011) 『世界的基準となる日本語スタンダードの構築報告書』東京外国語大学留学生日本語教育センター.
- 東京外国語大学留学生日本語教育センター (2011) 『JLC 日本語教育スタンダード』東京外国語大学留学生日本語教育センター.
- 松尾馨・濱田朱美 (2006) 「外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠 (CEF) の日本語教育における活用—ドイル・ベルリン州の中等教育日本語ガイドラインの例—」『世界の日本語教育』第16号、国際交流基金、155-168.
- 福島青史・イヴァノヴァ、マリーナ (2006) 「孤立環境における日本語教育の社会分脈化の試み—ウズベキスタン・日本人材開発センターを例として—」『国際交流基金日本語教育紀要』第2号、国際交流基金、49-64.
- プーリク、イリーナ (2010) 「一般成人向けの日本語コースデザインの改善—ノボシビルスク市立「シベリア・北海道センター」の場合—」『日本言語文化研究会論集』2010年第6号、国際交流基金日本語国際センター・政策研究大学院大学、73-100.
- Richards, Jack.C. (2001) Curriculum development in language teaching. Cambridge University Press.

Suggestions for the Improvement the Course Design of Japanese Language and Japanese Teacher Language Education in Higher Educational Establishments in Ukraine

In case of Taras Shevchenko National university of Kyiv

ASADCHIH Oksana (Taras Shevchenko National university of Kyiv)

【keywords】 university students, JF Standard for the Japanese-Language Education, JLC Japanese Standards Skill Chart, communication competence, Academic Japanese ability.

The paper reports the suggestions for the improvement the course design of Japanese language and Japanese language teacher education for the university students who study Japanese language as the main one.

Present conditions of Japanese language studying in higher educational establishments in Ukraine and the problems of the Japanese language course in the university which the author belongs were analyzed. Based on the results of the analysis, refer to the JF Standard for the Japanese-Language Education and JLC Japanese Standards Skill Chart, the goals of the Japanese language learning course and the Academic Japanese language learning course were set.

Furthermore, the syllabus, the curriculum and the possible classroom activities will be created. The experimental teaching, the questionnaire research and analysis of learner and teacher comments also will be done. Finally, the evaluation method will be created.

e-Japanology における情報発信プラットフォームの試み

辻澤隆彦 (東京農工大学 総合情報メディアセンター)

【キーワード】 e-Japanology、Web 検索技術、クローラエンジン、インデックス化

1. はじめに

WWW (World Wide Web) の登場により種々の情報が加速度的に発信されるようになり、これらの情報を効率よく検索するための Web 検索技術が進展してきた [1]、[2]。Web 検索技術はクローラエンジン、ページリポジトリ、インデックス化モジュール、クエリーモジュール、ページランク付けモジュールなどから構成されることが一般的である。クローラエンジンは Web 上の文書を収集するソフトウェアであり、ロボットあるいはスパイダーなどと呼ばれている。このクローラが収集してきた文章を一旦ページリポジトリに蓄積し、インデックス化モジュールによりインデックス化して検索データベースとする。Web 検索では情報量が膨大であることから、一般にページランク付けモジュールを使って表示する順序などを決定している。一方、オフィス情報システムに目を移すと、企業内における情報の分散化が進展し、種々の部門において Web サーバやファイルサーバに種々の情報が蓄積されてきている。これらの分散化した情報への到達手法として、クローラエンジンの適用可能性が注目され、企業内システムへの取り組みも報告されている [3]。

e-Japanology の構想は多言語アクセスに対応した日本学のコミュニティ基盤の構築と多摩地区の日本学研究教育組織および外国人留学生コミュニティを活用した日本学知識の構築・蓄積、さらには多言語アクセス及び知識資源の継続的な累加のシステムの実現を目標とした構想である。現在、東京外国語大学、東京学芸大学、東京農工大学が共同でプロジェクトとして取り組んでおり、多摩地区の日本学研究教育組織の持てる知識資源を恒久的に集約・更新でき、且つグローバルに日本学知へのアクセスビリティを強化した仕組みを構築することで、日本学教育研究での価値創造を支援することを最終的な目標としている。

著者は、上述した Web 検索技術として活用されているクローラエンジンによるデータベース構築技術を活用し、拡充を図っていくことが e-Japanology 構想を実現する一つの方法であると考え、テストベッド構築の検討を進めてきた。ここでは、第一段階として進めた、Web 図書館コンテンツをインデックス化したテストベッドシステムについて報告する。検索対象とした Web および Web 図書館は近代デジタルライブラリ (<http://kindai.ndl.go.jp/>)・デジタルライブラリ (古典籍) (<http://del.ndl.go.jp/>)・国際日本研究センター Web (<http://www.tufs.ac.jp/common/icjs/jp/index.html>)・京都国際マンガミュージアム (<http://mmsearch.kyotomm.jp/index.html>)・えむえむブログ (<http://d.hatena.ne.jp/kyotomm/>)・Japanese American National Mu-

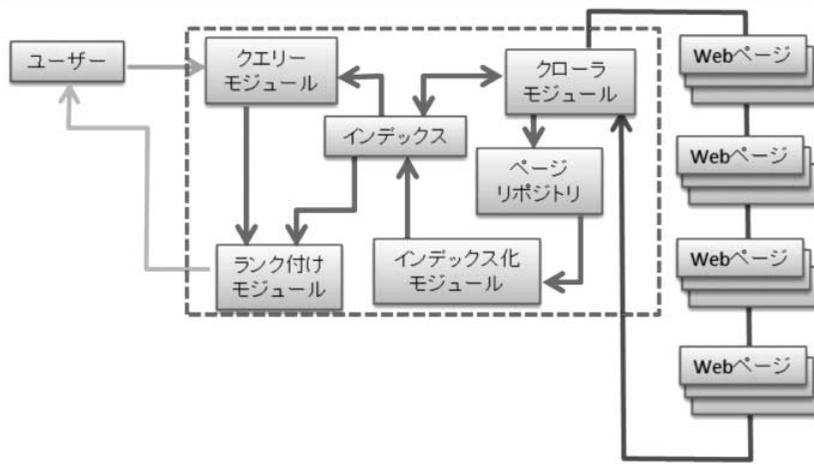
seum (<http://www.janm.org/collections/>) である。テストベッドでは個々の Web 図書館検索ページでの検索に比べ、一つの検索窓から複数の Web 図書館情報を検索できることが確認でき、e-Japanology 構想を実現するプラットフォームとしての可能性を示すことができた。オフィス情報システムがそうであるように、クローラエンジン技術とインデックス化によるデータベース構築だけでは依然不十分ではある。今後、研究者の連携情報や、サブカルチャー情報から日本語研究情報までの幅広い日本語研究情報を扱うための階層化表示機能など、プラットフォームが持つべき機能についての検討とテストベッドへの実装を通じた評価実験を進めていく予定である。

以下、2. では Web 検索エンジンの概要について、3. ではテストベッドの詳細について述べる。

2. Web 検索エンジンの概要

図1は Web 検索技術の概要を示した図である。以下簡単に各モジュールの機能について説明する。

図1 Web 検索エンジンの概要



2.1 クローラモジュール

広く分散する Web ページについてどのページをどのようにとってくるかが記載されているプログラムであり、同時に、どのような頻度で Web ページをクロールするかも含まれる。一般に Web ページの情報を取得する場合、http get というプロトコルが使われる。Web ページによっては、特定のページやディレクトリをクロールさせたくない場合があるが、この場合はクローラをブロックすることや検索結果を表示させないように制御することが Web ページ側で可能である。

2.2 ページリポジトリ

クローラにより収集された新しい Web ページを一時的に蓄えるのがページリポジトリで

ある。その後、インデックス化モジュールに Web ページが送られるまで、ページリポジトリに蓄積された情報は残される。

2.3 インデックス化モジュール

ページリポジトリから送られた Web ページを基に、必須記述子を抽出する機能を持つ。ここで抽出された記述子などはインデックスとして出力され、インデックス内に格納される。

2.4 インデックス

インデックスには Web ページのキーワード、題名、鍵となる文章の内容、画像インデックス、PDF インデックスなどが格納される。

2.5 ランク付けモジュール

Web ページをある基準に従ってランク付けする機能をもつ。Google が採用しているリンクポピュラリティに基づく PageRank はその例である。リンクポピュラリティは Web ページ間のリンクを一種の人気投票とみなし、多くの質の高いリンクを集める Web ページは高い支持を受けているとして Web ページのランク付けを行う手法である。

2.6 クエリーモジュール

ユーザからの自然言語による質問に回答する機能を持つ。インデックスにアクセスし、対応する Web ページをランク付けモジュールの結果と関係づけてユーザに回答する。

3. e-Japanology 情報発信用テストベッド

2. では Web 検索エンジンの概要について述べた。e-Japanology 情報発信用テストベッドでは、図1に示した Web 検索エンジンの中のランク付けモジュールを除いた機能により、システムの構築を行った。Web ページ検索と異なる点は、Web クローラで収集できない対象(例えば対象 Web ページが検索ページである場合など)では対象に特化したプログラムを埋め込むなどのカスタマイズ化が必要となったことである。テストベッドの構築ではクアantum テクノロジー社が開発をした N-gram 方式に基づく検索エンジン A-trek を使った。

3.1 A-Trek の特徴

A-Trek が持つクローラには、Web 検索エンジンで使われている Web クローラの他に、Web クローラでは収集できない Web ページに対応するためのカスタムクローラ、Windows などの共有フォルダ上のファイルを収集する共有ファイルクローラ、リレーショナルデータベース中の情報を取り出すためのデータベースクローラなど各種ローラーが用意されているが、テストベッドの構築では Web クローラと検索 Web ページを対象としたカスタムプログラムを使ったカスタムクローラを用いた。

3.2 クローリング対象サイトとカスタムクローラ

テストベッドにおいてクローリングの対象とした Web サイトは以下6 サイトとした。

- 近代デジタルライブラリ (<http://kindai.ndl.go.jp/>)
- デジタルライブラリ (古典籍) (<http://del.ndl.go.jp/>)
- 国際日本研究センター (<http://www.tufs.ac.jp/common/icjs/jp/index.html>)
- 京都国際マンガミュージアム (<http://mmsearch.kyotomm.jp/index.html>)
- えむえむブログ (<http://d.hatena.ne.jp/kyotomm/>)
- Japanese American National Museum (<http://www.janm.org/collections/>)

以下、各サイトのクローリングに対応したカスタマイズについて具体的に記述する。

3.2.1 近代デジタルライブラリとデジタルライブラリ (古典籍)

これらのサイトは、サイト自体が検索システムとして提供されている。検索システムとして提供されたサイトは、検索条件を与えなければならないため、汎用の Web クローラでは、情報を収集できない。ここでは、検索条件を工夫し、全件のデータを表示させるためのプログラムが必要であった。これらのサイトは、検索結果の最大数が1,000 件であるという縛りがあり、結果が1,000件以下になるよう検索条件を調整しなければならなかったが、NDC 番号と出版年を組み合わせることで検索結果を表示させその内容をクローリングすることで実現した。ただし、「デジタルライブラリ (古典籍)」では、絞り込みに指定する条件がすべてのデータには存在していなかったため、全件を取得することはできなかった。図2は近代デジタルライブラリのトップページを、図3は近代デジタルライブラリ NDC 番号を示した図である。図2からわかるように、近代デジタルライブラリのトップページには検索システムが用意されている。図4には NDC 番号と年代から検索した近代デジタルライブラリの検索結果を示した。

図2 近代デジタルライブラリトップページ

近代デジタルライブラリ

The screenshot shows the homepage of the 'Kindai Digital Library' (近代デジタルライブラリ). At the top, there is a navigation bar with the site name and a search bar. Below this, there is a large search box with a '検索' (Search) button. To the right of the search box, there are two tabs: 'テーマ検索' (Theme Search) and '詳細検索' (Detailed Search). Below the search box, there is a section titled '資料あれこれ' (Various Materials) with a list of featured items. On the right side, there is a sidebar with a section titled '他のデジタル化資料' (Other Digitalized Materials) containing links to various categories like '古典籍資料' (Classical Materials), '歴史的書道' (Historical Calligraphy), '新聞・雑誌の複製' (Reproduction of Newspapers and Magazines), '書籍' (Books), '博士論文' (Doctoral Theses), '書札資料' (Letter Materials), and '口承口伝関係資料' (Oral Tradition Related Materials). At the bottom, there is a section titled 'お知らせ' (Notice) with several announcements.

図7 テストベッドを使った国際日本研究センターページにおける



3.2.3 京都国際マンガミュージアム

このWeb ページも検索機能を用いたWeb ページで、汎用的なWeb クローラでは収集できないWeb ページになっている。近代デジタルライブラリにおいて行ったと同様に年度を検索条件に指定して検索を行い、その結果をクロールするカスタマイズを行った。このWeb ページでは、最終的な情報（検索結果からリンクされているページ）が一意的URLになっていないため、情報を収集しテストベッド側で検索するシステムを作成した。しかしながら、検索結果からオリジナルソースにリンクできないという問題が発生した。テストベッドでキャッシュしているデータへはリンクできるが、著作権などの問題を考慮してNOT FOUND を表示するようにした。

3.2.4 えむえむブログ

ブログでは一般に、投稿をいろいろな方法で表示できる。トップページには最新の何件かを表示したり、カレンダーを選択することで特定の日の投稿を表示したり、カテゴリづけにより特定のカテゴリの投稿だけを表示したりできる。また、これらのページは同じURLであっても動的に変化するものが一般的である。ブログが持つこのような性質のため、汎用のWeb クローラを使ってブログを収集すると全てのページを取得してしまい同じ投稿が複数のページに含まれることとなる。さらに、動的に変化するURL の場合ではクロールした時刻との関係で目的のHTML が表示されないことや存在しない可能性もある。このため、一投稿ごとに一意のURL を持ったページだけを収集する必要があり、ブログ専用のカスタマイズが必要であった。ここでは、ブログに含まれる最初の画像をサムネイルとして収集する機能も取り込んでいる。

3.2.5 Japanese American National Museum

このWeb ページでは、特定のURL からリンクされる全情報を取得することで必要な情報を得られるが、各ページのサムネイルを取得するためにカスタマイズを行った。図8はJapanese American National Museum のサイトのClara Breed によるコレクション（第2次大戦

中米国における日本の子供たちからの手紙など)の一部を示したものである。図9は JPEG イメージをサムネイルとして蓄積したテストベッドにおいて、検索結果を示したものである。

図8 Japanese American National Museum のサイトの Clara Breed によるコレクション例

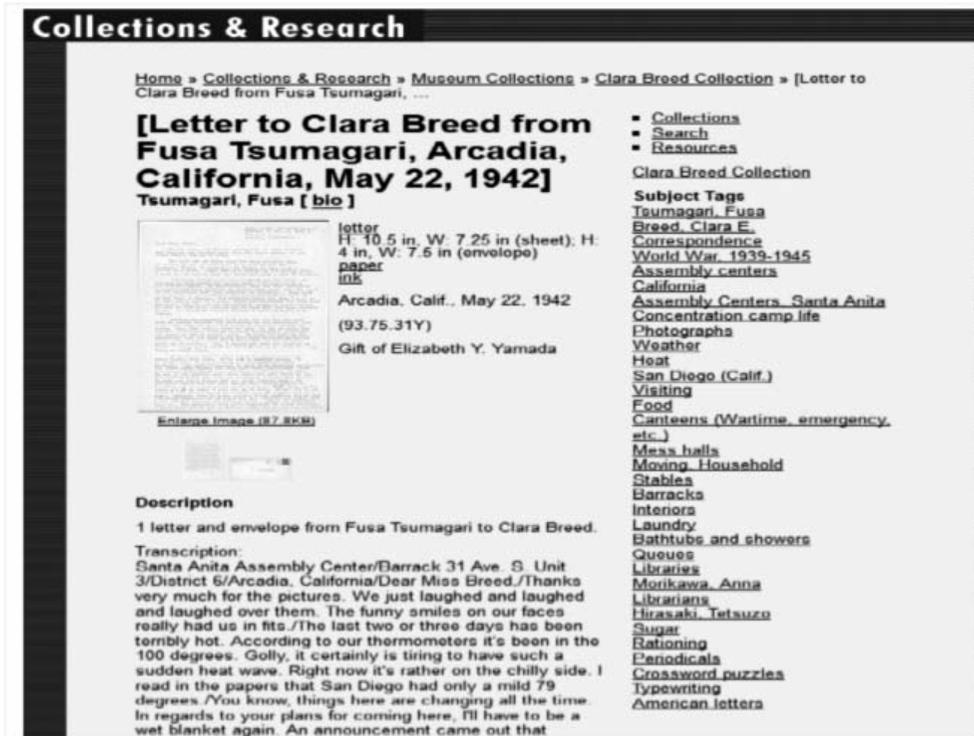


図9 テストベッドを使った検索結果

4. e-Japanology における情報発信基盤として - 今後の進め方 -

3. では情報発信テストベッドとして構築したシステムの概要について説明した。ここでは、既存の Web ページあるいは Web サイトを対象に情報のハーベスティングを行い、PDF ファイルを含む情報のクローリングと検索のためのデータベース（インデックス化）を作成した。既に述べたように、Web サイトあるいは Web ページのクローリングでは種々のカスタマイズが必要であった。今後、情報発信基盤として e-Japanology に関する種々の情

報をクローリングしていく上では既存の Web サイトへの対応と同時に、これから Web ページなどを構築していく場合への対応について検討していく必要がある。

4.1 既存の Web ページあるいは Web サイトへの対応

検索 Web サイトなどへの対応は今後もクローラのカスタマイズが必要になる。このため、計画的な対応を検討していく必要がある。カスタマイズにおいては、クローリングの対象や範囲についての検討をしながら進めていくことが必要となる。

4.2 新規に Web サイトや Web ページを構築する場合の対応

ここでは、以下の2つの方針について述べたい。

4.2.1 ブログ形式による Web ページ構築

ブログは一度装飾を決めることで、その後、情報を記述するだけでページが作成されるという特徴を持つ。このため、どの投稿も統一感のあるデザインになるだけでなく、自由なカテゴリによる分類や時系列による管理、また、画像添付ファイルの付加や他者によるコメント追加などが可能であり、表現の自由度が高い。

このことから、同一のブログシステムにより情報蓄積を進めることも情報発信基盤を整備していく上では必要であると考えられる。このことで、クローラの準備が容易になるという利点もある。商用のブログソフトによっても、e-Japanology に興味を持つメンバーによる情報発信も可能となる。

4.2.2 LMS の活用による共通的な情報発信基盤構築

e-Japanology プロジェクトでは日本語教材活用の可能性を検証する目的で LMS 「Sakai」を利用した e-Japanology Gate Way を開設してきた。ここでは、ビデオ教材を含め種々の教材をアップロードすることができる。この e-Japanology Gate way を使った情報蓄積が新たな Web サイト構築とそのためのクローラのカスタマイズよりも効率的な情報発信プラットフォームを構築できるものと考えられる。この Gate Way をクローリング対象とすることで、情報の蓄積とインデックス化を効果的に進めることができる。LMS の活用は利用者の認証が可能となることも利点の一つとなる。

5. むすび

e-Japanology の構想は多言語アクセスに対応した日本学のコミュニティ基盤の構築と多摩地区の日本学研究教育組織および外国人留学生コミュニティを活用した日本学知識の構築・蓄積、さらには多言語アクセス及び知識資源の継続的な累加のシステムの実現を目標とした構想で、東京外国語大学、東京学芸大学、東京農工大学が共同でプロジェクトとして取り組んできている。本稿では Web 検索技術として活用されているクローラエンジンによるデータベース構築技術に着目し、この技術が e-Japanology 構想を実現するための情報プラッ

トフォーム構築の一つの方法であると考え、進めてきた評価用テストベッド、具体的には、Web 図書館コンテンツをインデックス化した検索システムについて述べたものである。検索対象とした Web および Web 図書館は近代デジタルライブラリ (<http://kindai.ndl.go.jp/>)・デジタルライブラリ (古典籍) (<http://del.ndl.go.jp/>)・国際日本研究センター Web (<http://www.tufs.ac.jp/common/icjs/jp/index.html>)・京都国際マンガミュージアム (<http://mmsearch.kyotomm.jp/index.html>)・えむえむブログ (<http://d.hatena.ne.jp/kyotomm/>)・Japanese American National Museum (<http://www.janm.org/collections/>) である。テストベッドでは個々の Web ページ図書館検索ページでの検索に比べ、一つの検索窓から複数の Web 図書館情報を検索できることが確認でき、e-Japanology 構想を実現するプラットフォームとしての可能性を示すことができた。しかしながら、既存の Web ページコンテンツを対象とすると、Web ページによってはクローラをカスタマイズする必要があり、すべての既存ページコンテンツを対象とすることの困難さも明らかになった。このため、既存のページと今後新規に構築する場合についての対応を検討する必要性についても述べた。その中で、新規に Web ページ構築を行う場合の基本的な考え方について示した。

オフィス情報システムがそうであるように、クローラエンジン技術とインデックス化によるデータベース構築だけでは依然不十分ではある。今後、研究者の連携情報やサブカルチャー情報から日本語研究情報までの幅広い日本語研究情報を扱うための階層化表示機能など、プラットフォームが持つべき機能についての検討とテストベッドへの実装を通じた評価実験が必要になる。

参考文献

- [1] A. N. Langville, C. D. Meyer (著)、岩野、黒川利明、黒川洋 (訳)、「Google Page Rank の数理」、共立出版、2009
- [2] C. D. Manning, P. Raghavan, H. Schütze (著)、岩野、黒川、濱田、村上 (訳)、「情報検索の基礎」、共立出版、2012
- [3] 安藤、志賀、岩倉、岡本、「企業内情報検索の高度化手法の提案と評価」、情報処理学会研究報告、DD [デジタル・ドキュメント] 2010-DD-76 (3)、pp. 1-6、2010

Setting a Platform for Transmitting Information in e-Japanology

TUJISAWA, Takahiko

Tokyo University of Agriculture and Technology

【keywords】 e-Japanology, web retrieval technology, crawler engine,
indexing

A concept of e-Japanology is an initiative with the goal to achieve the community for Japanology studies accessible by multi-language. Tokyo University of Foreign Studies, Tokyo Gakugei University, and Tokyo University of Agriculture and Technology are working as a project jointly. The World Wide Web has become the largest information source in recent years and search engines are indispensable tools for finding needed information from the Web. We considered that the search engine technology, especially the crawler engine, will become one of the platforms for the community of Japanology studies, and tried to develop the test bed system using the crawler engine that has indexed the web content library.

In this paper, the test bed system which harvests the Japanology content accumulated in the web content library and makes indexed database is introduced. Several digital library, such as the digital library by National Diet library, the web site of International center for Japanese studies of Tokyo University of Foreign Studies etc., are object for data harvesting. Using the test bed system, it is understood that the needed information can be retrieved from several web sites by one search window.

2013年夏季セミナー 院生発表会要旨

■国際日本研究の息吹——日・中・韓・台の大学院生ワークショップ 野本京子

国際日本研究センターでは、2013年7月31日から8月2日までの3日間、第2回目の夏季公開セミナー、2013「言語・文学・歴史—国際日本研究の試み」を開催し、その一部として、海外の大学院生と本学の大学院生らによるワークショップを開催しました。

このワークショップは4つのセッションに分かれ、2会場で19報告が行われました。いずれのセッションにも多くの聴衆の参加をいただき、活発な質疑応答が行われました。院生の皆さんがフロアからの質問や厳しい指摘に応えつつ、日に日にたくましくなっていく姿は、頼もしいものでした。3日間のワークショップや懇親会での対話を通じ、日本研究を志す韓国・中国・台湾・日本の大学院生の間には、強い交流の絆が生まれたようです。

内容的にも、世界の視点から日本をとらえようとする国際日本研究への若い息吹の感じられる発表が並びました。驚かされるのは、韓国・中国・台湾の大学で学ぶ皆さんの研究水準、そして高い日本語能力です。日本研究の共通の磁場が形成されていることが実感されました。

■「言語」第一セッション

- 1 片山晴一（東京外国語大学大学院博士後期課程）
「日本語における移動手段の表現——中国語との対照から」
- 2 張志凌 [Zhang Zhiling]（東京外国語大学大学院博士後期課程）
「複合動詞「～こむ」の副詞的意味について」
- 3 朱炫姝 [Ju Hyunju]（筑波大学大学院博士後期課程）
「日本語授受表現と韓国語授与動詞の体系に関する一考察」
- 4 孫 斐 [Sun Fei]（北京大学大学院博士後期課程）
「日本語のテクレルと中国語の「让你」——説明文における無情物が主語の場合を中心に」
- 5 孟会君 [Meng Hui Jun]（北京外国語大学日本学研究センター博士コース）
「日本語におけるサ変複合動詞二重ヲ格構文について」

コメント 谷口龍子

「言語」セッションでは、日本語学1名、中国語、または韓国語の対照研究4名、計5名の発表が行われました。

片山さんは、日本語と中国語の移動表現について比較対照し、日本語の移動手段は、「自転車で行く」のように「テ格」が使われるが、中国語では、「自転車に乗って公園へ行った」のように二つの動詞の組み合わせが成り立つために、中国語を母語とする日本語学習者は「*自転車で乗って行く」のような誤用が生まれやすいことに言及しました。

同じく張志凌さんは、複合動詞の後項動詞に使われる「～こむ」の副詞的意味についてプラス・マイナス評価、移動、状態変化などの観点から分類しました。

朱炫姝さんは、日本語の授受表現と韓国語の授与動詞の体系を比較し、「～てもらう/いただく」は韓国語では補助動詞として直訳できず、本動詞として使われる点などが観察されました。

孫斐さんは、女性雑誌のデータをもとに、日本語の「～てくれる」が中国語の“让你”に訳されることが多く、「～てくれる」と“让你”のいずれも読み手の立場に立ち、前景化されている点を指摘しました。

孟会君さんは、「指導を徹底をしたい」のような日本語のサ変複合動詞の二重ヲ格構文が、政治や文学など特定分野で多く見られる点を指摘し、その理由として丁寧さや重々しさなどの表現効果が考えられることを指摘しました。

このように中国語教育ならびに日本語教育に有用な対照研究が多く、有意義な会となりました。

発表概要 1

日本語における移動手段の表現 —中国語との対照から—

The Expression for Means of Transportation in Japanese —Comparative with Chinese

片山 晴一

東京外国語大学大学院博士後期課程

【キーワード】 移動表現、移動手段、時系列の原則、デ格、連動文、日本語教育、対照研究
motion expression, means of transportation, The Principle of Temporal Sequence, DE-case, verb sequence, Japanese pedagogy, contrastive studies

日本語の移動表現では、移動手段は「自転車で行く」のようにデ格で標示される。一方、対応する中国語では<我骑自行车去了公园>(自転車に乗って公園へ行った)のようにV1が移動手段(騎/坐等)を表す動詞、V2が<来/去>等の方向動詞の組み合わせからなる連動文が用いられる。

日本語では移動手段に対して行う動作(乗る、座る、またがる、など)を、動詞を用いて表現せず、デ格による標示が可能である一方で、中国語ではその移動手段への働きかけの具体的な動作によって、<开>「運転する」、<坐><乗>「(乗り物に)乗る」、<騎>「(自転車・馬など)に乗る」、<蹬>「こぐ」などの動詞を使い分けている。中国語から見ると、時系列に沿ってまず「運転する」などの「①移動手段への働きかけ」を、その後実際の移動である「②位置変化」を言語化しており、移動手段の表現にはこれら二つの事象が存在している。

このことから移動手段の表現では中国語には“The Principle of Temporal Sequence(時系列の原則)”(Tai:1985)が強く働いていることが認められ、反対に日本語ではこの原則が作用していないことがわかる。さらに“話者の視点”から見ると、中国語は「①移動手段への働きかけ」「②位置変化」という二つの事象をそれぞれ動詞で言語化しており、時系列に沿って“動画的(時間的な広がり比較的広い)”に事象を捉えている一方で、日本語では「②位置変化」のみを動詞で言語化しており、“静止画的(時間的な広がり比較的狭い)”に事象を捉えていると考えられる。

このような移動事象の捉え方の違いが、中国語を母語とする日本語学習者への誤用に影響を与えているとすれば(例:伝統的鉄道で乗って、山の頂上までいけますよ。(東京外国語大学GCOE「日本語学習者言語コーパス」より))、母語の特徴と関連付けて当該表現を教えることで、誤用を避けられる可能性がある。

複合動詞「～こむ」の副詞的意味について

張志凌

東京外国語大学大学院博士後期課程

【キーワード】 複合動詞、「～こむ」、副詞的意味、評価
Compound verb, “~komu”, Adverbial meaning,
Evaluation

複合動詞「～こむ」の用法は多岐にわたるが、本発表では、「入り込む/信じ込む」のような、V1が項構造を決定し、V2「～こむ」が副詞的意味をもつ用法（左側主要部型「～こむ」）に焦点をあてて、その意味構造を考察する。

分析にあたり、樋口（2001）が提示した「資格付け的评价」と「価値づけ的评价」という枠組みを用い、V2「～こむ」の副詞的意味成分を分析する。先行研究を踏まえて分析した結果として、「資格付け的评价」には「深部移動」と「固定感」、「多量性」、「密集感」、「目的性」があり、悪いという評価を表す「価値づけ的评价」には「異質性」がある。また、評価的意味の有無により、「～こむ」を下記のように四分類できる。

① 内部移動/状態変化

「投げ込む」：＜移動の手段+内部移動＞

② 資格づけ的评价+内部移動/状態変化

「冷え込む」：＜資格づけ的评价：激しい+状態変化＞

③ 価値づけ的评价+内部移動/状態変化

野良猫が庭に入り込んだ。＜価値づけ的评价：マイナス+内部移動＞

④ 価値づけ的评价+程度副詞+資格づけ的评价+内部移動/状態変化

「信じ込む」：＜価値づけ的评价：マイナス+程度副詞：かなり+資格づけ的评价：深い+状態変化＞

さらに、中国語と対照すると、中国語では資格づけ的评价を表現することができるが、価値づけ的评价を表現するのは難しいため、中国語を母語とする日本語学習者にとって、価値づけ的评价を含意する「～こむ」の習得が困難であることが予測できる。

発表概要 3

日本語授受表現と韓国語授与動詞の体系に関する一考察

朱炫姝

筑波大学大学院博士後期課程

【キーワード】 授受表現、「てやる・あげる」、「てくれる・くださる」、「てもらう・いただく」、韓国語の授与動詞、「어/아 주다 (eo/a juda)」、視点
giving - receiving expressions in Japanese, -te yaru · ageru, -te kureru · kudasaru, -te morau · itadaku, giving-receiving verbs in Korean, -eo/a juda, viewpoint

本研究は日本語授受表現が「話し手の立場や視点」によって「てやる・あげる・さしあげる」「てくれる・くださる」「てもらう・いただく」表現に分かれるのに対して、韓国語では同様な点が作用しないことに注目し、両言語の体系について、『韓日並列コーパス』の例文を中心に考察したものである。

その結果、『韓日並列コーパス』から合計1171例の授受表現が収集できた。「てやる」「てあげる」「てくれる」を「어/아 주다 (eo/a juda) [てあげる・くれる]」で表現する場合と、授受の意が入っていない本動詞のみで訳されている例文が多く見られた。「てやる」と「てくれる」を「-해 놓다 (he notta) [ておく]・-해 버리다 (he beorida) [てしまう]」に替えて表現する例文もあった。「てもらう」「ていただく」の場合、韓国語では直訳で示せないため、どのように言い表すかが注目されるが、本動詞のみで表現される場合と、本動詞が省略されて授与動詞「받다 (batta) [もらう]」を本動詞として表現される場合があるなど両言語授受表現の特徴を指摘できよう。

日韓両言語の授受表現の体系について、『韓日並列コーパス』の例文を用いて分析を行った。コーパスを用いることで、客観的に表現の異なりを観察できた。両言語の体系を一般化させていく中では幅広い範囲でのデータ収集が必要となると思う。これについては今後の課題としたい。

日本語のテクレルと中国語の「让你」
——説明文における無情物が主語の場合を中心に

Japanese テクレル and Chinese 让你：
by Focusing on the Sentences of Inanimate Subject

孫斐

北京大学大学院博士後期課程

【キーワード】 テクレル文、美容ページ、前景化、間テキスト性、テクレル
beauty magazine pages, *-te kureru* sentence, foregrounding, intertextuality

先行研究では無情物が主語のテクレル文はテクレル文のより周辺的な用法だと考えられる。筆者の調査ではこのような構文は女性誌の美容ページではよく使われるようだ、同じような意味を言い表したいときは、日本語はテクレルが多用されるのに対して、中国語では「让你」がよく使われているようだ。

では、日本語のテクレルと中国語の「让你」はそれぞれどのように使われているのか、どのような意味を表しているのか、本研究で明らかにしたい。そして、中国語の例文と対照しながら「無情物が/は+意志動詞+テクレル」構文の機能を分析してみた。結果として次の3点が明らかになったと言えるだろう。

- ①読み手の立場を前景化する機能。テクレルと「让你」の両方は読み手を前景化する機能がある。しかし、方法が異なる。日本語のテクレルは話し手が読み手と同一化する過程がある。中国語は話し手が終始一貫として読み手と異なった立場に立っている。
- ②間テキスト性を引き出す機能。テクレルがより対話的な表現だと考えられる。中国語の「让你」は対話体より独話体に使われるようだ。それゆえに、説明文において、テクレルは間テキスト性を有しているが、「让你」に有していないようだ。
- ③日本語と中国語の対訳。本研究の調査により、説明文に限っては、「無情物が/は+意志動詞+テクレル」構文はほとんど「中国語の語彙的マーカー+你」と翻訳できると考えられる。

発表概要 5

日本語におけるサ変複合動詞二重ヲ格構文について

The Sahen-verbs Constructions of Double Accusative in Japanese

孟会君

北京外国語大学・日本学研究センター博士後期課程

【キーワード】 サ変複合動詞、二重ヲ格構文、単文異格、使用実態、統語構造

the Sahen-verbs, Constructions of Double Accusative, Different Cases per Sentence, the current situation, Syntactic construction

日本語において、「単文異格の原則」のため、二重ヲ格構文が原則的には許されないが、それが確かに存在するのも事実である。発表者は「現代日本語書き言葉均衡コーパス」により、そのうちの述語がサ変複合動詞であるものを検索し、政治などの特定の分野において、サ変複合動詞二重ヲ格構文がまれではないということが分かった。本発表は、コーパス調査により当該構文の使用実態を把握する上で、その統語構造や表現効果、存在原因などについて検討したものである。主な考察結果は以下のようである。

- [1] サ変複合動詞二重ヲ格が規範的ではない言語事象とされているが、それは統語的には文法的で、ただもともとゼロ化すべきなVNのヲ格標示をそのままそこに挿入しているので、二つのヲ格の隣接を招き、表層上の二重ヲ格制約に抵触しただけである。
- [2] サ変複合動詞二重ヲ格が「用法のゆれ」と見なされていながらも、時々表面化したのは、①特定の分野において特定の表現効果を求めるか、②最初の「ヲ」の後に「間」を意識して話し続けるのかなどのためである。
- [3] 統語的には、サ変複合動詞二重ヲ格はサ変動詞が、①意志的な他動詞、②移動性を含む非能格自動詞、③非対格自動詞の使役形、④自他両用動詞の意志的な他動詞用法などの場合に、それぞれ異なる類型で発生可能である。
- [4] サ変複合動詞二重ヲ格構文への考察を通じ、ヲ格の重複現象や従来関心を集めて論じられてきた二重ヲ格制約への認識を深化させた。発表者の考察によると、二重ヲ格制約には統語的なものもあるし、表層的なものもある。それに、その適用領域はVP内に限定すべきで、VP内のヲ格のほか、同一の「文」の中にたまたま他の意味役割のヲ格が存在したら、二重ヲ格構文が発生するようになる。これが二重ヲ格構文発生メカニズムである。

■ 「言語2」 第三セッション

- 1 ツォイ・エカテリーナ（東京外国語大学大学院博士後期課程）
「現代の茶席の会話におけるポライトネス研究」
- 2 崔英才 [Cui Yingcai]
（東京外国語大学大学院研究生、千葉大学大学院博士前期課程修了）
「電話問い合わせの談話の展開——全体構造と情報部の談話進行」
- 3 申鉉珍 [Shin Hyunjin]（韓国外国語大学大学院博士課程）
「副詞マサカの意味用法——使用場面を中心に」
- 4 李国玲 [Li Guoling]（筑波大学大学院博士後期課程）
「日中「不満表明行為」に関する対照研究——「行動の仕方」を形づくる諸要素について」

コメント 坂本恵

第3セッション「言語2」では、前日の文法、語彙中心の言語研究とは異なり、語用論、社会言語学関係の発表が中心でした。

本学大学院生のウズベキスタン出身のツォイさんの発表は現代の茶席という普通の日本人も余り参加しないような場面で行われている会話を分析、考察したのですが、実際には形式的な会話だけでなく、雑談もあり、その違いをディスコース・ポライトネス理論で分析したものです。

本学の崔さんの発表は電話での問い合わせの談話が日本人と中国人ではどのように違うのかを分析するために、まず、中国人日本語学習者が日本語で問い合わせ、日本語母語話者がそれに答えるという談話を分析したものです。

韓国外大からの申さんの発表は「マサカ」という副詞を、どんな場面で使用されるかという観点から分析したものです。

筑波大の李さんの発表は、寮の隣の部屋がうるさい時にどのように苦情を言うのかについて、日本人と中国人の違いを分析したものです。日中にかなり大きな違いが見られるようです。

日本語の研究と言っても、最近では文法など、ことばそのものの研究だけではなく、このような、どのように話すか、どのような特徴があるかについての研究が盛んになっています。非日本語母語話者による4本の研究発表に、会場を埋めた40名ほどの聴衆は熱心に聞き入り、発表後の質疑応答も活発でした。どの発表者も流暢な日本語で、日本語の使い方に関する研究の成果を自信を持って披露する姿に、聴衆は感銘を受けたようです。聴衆の中には大学院生、他大学の研究者に加え、一般の方もいらっしゃいました。相手の発言を「マサカ」と言って否定するような使い方は自分はしない、以前にはなかったという一般の方からの指摘は新鮮で貴重なものでした。今回のような開かれた研究会ならではの一面だったと思います。休憩時間、その後の懇親会でも活発な意見交換が行われました。

現代の茶席の会話におけるポライトネス研究 —ディスコース・ポライトネス理論及び「わきまえ」 という捉え方による形式的・非形式的な行動の分析—

ツオイ・エカテリーナ

東京外国語大学大学院博士後期課程

【キーワード】 ディスコース・ポライトネス、自然会話、ポライトネス・ストラテジー、「わきまえ」
discourse politeness, natural conversation, politeness strategies, 'discernment'

本発表は、茶席の自然会話データにおけるポライトネスを宇佐美（2001,2008）によるディスコース・ポライトネス理論の観点から分析したものである。

筆者は、茶席の会話の形式的発話と非形式発話を取りあげ、談話レベルで個人の意志によるポライトネス・ストラテジー（Brown and Levinson,1987）と社会規範に従う「わきまえ」（Ide,1989）という捉え方を検討した。

データとして茶席の会話を用いた理由は、日常的な雑談の会話より、茶席の会話のほうが言語行動の形式が明確であるからである。

まずは、発話を「形式的な発話」、「慣習的な発話」、「形式から逸脱した発話」、「雑談」、「作法の指導に関する発話」に分類し、集計した。一番多かったのは「慣習的な発話」（51.80%）である。予想外の結果として、非形式的な行動とされる「雑談」（30.23%）が「形式的な発話」（10.72%）より多かったことである。

質的分析では、茶席の会話の「典型的な談話展開パターン」をディスコース・ポライトネス理論における「基本状態」とした上で、「有標行動」としての「形式的な発話」の回避や言い直しを、「わきまえ」とポライトネス・ストラテジーから解釈を試みた。また、「形式的な発話」や「慣習的な発話」、「雑談」をより長い談話レベルで分析した。

結論として、「形式的な発話」は「わきまえ」として捉えられるが、「形式的な発話」の言い直しや回避が生じることを、「わきまえ」の観点からは説明することが困難である。ポライトネス理論の観点からは、「形式的な発話」の言い直しや回避はポジティブ・ポライトネスとして捉えられる。また、「形式的な発話」は、「控えめに言う、決めつけない」というネガティブ・ポライトネス、「慣習的な発話」は、「無難な話題を選ぶ」というポジティブ・ポライトネスとして捉えられる。そして「雑談」は、話者の個人的な経験を共有することにより、相手との距離を縮めるポジティブ・ポライトネスの機能を果たしてと考えられる。

参考文献

Brown,P., Levinson,S. 1987 Politeness: Some universals in language usage . Cambridge [Cambridgeshire]; New York: Cambridge University Press.

Ide,S. 1989 Formal forms and discernment: two neglected aspects of universals of linguistic politeness. *Multilingua* 8 (2-3) , 223-248.

宇佐美まゆみ (2001) 「談話のポライトネス - ポライトネスの談話理論構想 -」『談話のポライトネス』(第7回国立国語研究所国際シンポジウム報告書)、国立国語研究所、9-58.

_____ (2008) 「ポライトネス理論研究のフロンティアーポライトネス理論研究の課題とディスコース・ポライトネス理論」『社会言語科学』11 (1) (特集「敬語研究のフロンティア」)、社会言語科学会：4-22. 19頁

電話の問い合わせの談話構造と情報部の進行

The discourse structure of telephone inquiries and the progress of the information section

崔英才

東京外国語大学大学院研究生
(千葉大学大学院博士前期課程修了)

【キーワード】 電話の問い合わせ、談話構造、話段、主導権
telephone inquiry, discourse structure, story unit, initiative

本研究は、中国人日本語話者と日本人母語話者の接触場面における電話の問い合わせの談話構造の解明を目的としたものである。電話の問い合わせの談話研究はまだほとんどされておらず、本研究はその基礎研究として位置付けられる。

調査は実在する某問い合わせ先の調査協力を得て行われ、13例の自然会話データを収集した。中国人日本語話者が質問者役となり、該問い合わせ先に実際に電話をかけ、日本人母語話者が調査に応じた。

分析において話段という概念を援用した。

研究課題は以下2つである。

- (1) 問い合わせの談話を構成する話段の種類を認定し、話段の展開から談話の全体構造を捉える。
- (2) 質問者の情報求めの仕方に注目し、それが案内者の情報案内及び談話進行にどのような影響を与えるかを考察する。

分析の結果、以下のことが明らかになった。

- (1) 電話の問い合わせの談話を構成する話段に3種類の話段、情報求めの話段、情報案内の話段、相互確認と終了の話段が認定された。話段の展開により問い合わせの談話は「用件提示部」と「情報部」の二部構造を持つ談話であることが判明した。
- (2) 質問者の会話における「主導権」の保持の仕方により「受身型・情報求めスタイル」と「能動型・情報求めスタイル」があることが判明し、それにより談話進行に差異がみられた。質問者と案内者の会話における「主導権」の最適なバランスは、プロの案内者が持つ情報をよりよく活用でき、コミュニケーションがスムーズになる要素の一つであることが示唆された。

発表概要 3

副詞マサカの意味用法

- 「使用場面」を中心に -

申鉉珍

韓国外国語大学校大学院博士課程

【キーワード】 使用場面、否定、否定的想定、反意、肯定

現代日本語の副詞マサカについて、これまで多様な研究がされてきたが、主に述語形式との共起制限に基づいており、話し手が伝達レベルにおいてどのような場面で、どのような文にマサカを用いるのかに注目した研究はあまり見られない。そこで、本研究では先行研究の分類にこだわらず、使用場면을視野に入れ、文のタイプによる分類を行い、また、その文の中で共起する文末形式との意味的関連性を考察することで、その意味用法を明らかにすることを目的に事例調査をすすめた。その結果、マサカが独立語文で現れる場合が多いこと、文法的肯定疑問文にも現れること、すべてがマイナス状況を表すのではないことが新たに分かった。また、意味用法は以下のように分類することができた。(小説、ドラマ、映画シナリオから収集した245例から事例調査を行う)

1 「否定（さらに、「婉曲的な否定」と「情意的ニュアンスの否定）」

婉曲的な否定：相手の発話内容に対して話し手が思考や論拠を拠りどころに婉曲的に否定を表す場合である。

情意的ニュアンスの否定：発話時点で予想外の事態に対して意外・驚きといった情意的ニュアンスを込めて否定を表す場合である。

2 「否定的想定」

発話時における状況及び前節で述べた情報に対して、話し手がマサカを用いて否定的な想定を行う場合である。

3 「反意」：話し手が発話時における状況及び前節で述べた情報に対して同感できないため、相手に反する意図を表し、相手の発言の真意を確認しようとする場合である。

4 「肯定」：相手の想定に対して、話し手が相手の思考や想像に対して、その通りです、という意味でマサカを用いて肯定を表す場合である。

日中「不満表明行為」に関する対照研究

—「行動の仕方」を形づくる諸要素について—

A Comparative Study of Complaining between Japanese and Chinese:

Focusing on the elements which form the way of the action

李国玲

筑波大学大学院博士後期課程

【キーワード】 不満表明発話、機能的要素、ポライトネス、異文化間語用論、対人関係

complaint, functional elements, politeness, cross-cultural pragmatics, interpersonal relationships

本研究では、談話完成テストにより収集した不満表明発話を「切り出し部」「用件内容部」（さらに、「主要行為部」と「補助部」に分けた）「終了部」という3段階にわけて、各部分の構成要素の出現率と具体的内容を分析し、ポライトネスの観点から日中それぞれの語用論的特徴を考察した。その結果、以下のことが明らかになった。

「切り出し部」：日本人は「すみません」などの表現を多用し、なるべく“相手と呼ばないようにして呼ぶ”。領域侵犯を避けようとする敬避的な遠隔化である。一方、中国人は親近感を示す呼称名詞や挨拶表現を多用し、積極的に社会的距離を縮小させ、親密かつ好感を示すポジティブ・ポライトネス心理による言語行動と認識でき、相手と触れ合うことによる共感的な近接化である。

「用件内容部」：「主要行為部」で用いられる＜改善要求＞の出現率は、両者ともいずれの場面において7割以上に達している。「主要行為部」を補助するために、日本人は、あまり親しくない近所の人に＜不利益告知＞を多用しているのに対して、親しい友達に不利益をもたらした相手の行為を指摘する＜他者行為指摘＞を多用している。中国人は、近所の人に対して＜不利益告知＞と＜他者行為指摘＞の使用率が低い。その代わりに、自分の意見を正当化する根拠を取り上げたり、自分の不満表明の理由となる事情を説明して、相手に理解してもらいたいという気持ちを表す＜理由提示＞を多用している。

「終了部」：日本人は謝罪系で、中国人は感謝系のものを多用する。改善してほしいという意思を伝えた後に、ネガティブ・ポライトネス心理からの「(お手数をお掛けして、)すみません」とポジティブ・ポライトネス心理からの「(協力してくれれば、)有難いんです/ありがとうございます」との使い分けは「不満表明行為」における話し手の心的態度の在り方の違いを描き出している。

■「文学」セッション

- 1 藤井嘉章(東京外国語大学大学院博士前期課程)
「本居宣長の注釈における俗言」
- 2 李智賢 [Lee Gee Hyun] (韓国外国語大学校大学院修士)
「『源氏物語』における「梅」のイメージ」
- 3 徐廷璋 [Xu Tingwei] (国立台湾大学大学院博士前期課程)
「『国姓爺合戦』『国姓爺後日合戦』に見る近松の父親像」
- 4 張芸 [Zhang Yi] (東京外国語大学大学院博士前期課程)
「文学作品解説における権威への挑戦——夏日漱石と意識共同体」
- 5 陳璐 [Chen Lu] (東京外国語大学大学院博士前期課程)
「北村透谷試論——琴と自然をめぐって」
- 6 南徽貞 [Nam Hee Jung] (東京外国語大学大学院博士後期課程)
「1970年代の日韓文学の諸相——大江健三郎と李清俊」

コメント 友常勉

「文学」のセッションは多彩な報告タイトル通りに、さまざまな文学研究の対象・方法・視点が交差しました。「日本研究」を一つの糸にして、時系列に従った報告順を考えてみましたが、発表の多彩さ故にそれはかないませんでした。しかし、ほとんどの報告者は制限時間をきちんと守り、厳しい質問・意見にも真摯に答えようとしていた点で好感がもてるものでした。

分厚い先行研究の咀嚼と手堅い方法論を必須とする本居宣長、国姓爺合戦、源氏物語などの古典の大きなテーマを扱った報告は、いずれも聞きごたえのあるものでした。

一方、漱石、透谷、大江健三郎、李清俊といった近現代文学の巨大な山脈への挑戦は、常に新たな方法論が飛び交う領域であり、さらに現代という時間を相対化する必要があることから、挑戦的なテーマといえるでしょう。議論が白熱したのはこれらの分野の発表でした。

なじみ深いテーマも、新たな分野への開拓も、相互に刺激になったと思います。急ぐことはありませんが、この経験を糧にして、さっそく次の準備にとりかかってほしいと願っています。

本居宣長の注釈における俗言 The method of Slang in Motoori Norinaga's commentary

藤井嘉章

東京外国語大学大学院総合国際学研究科博士前期課程

【キーワード】 本居宣長 俗言 注釈

Motoori Norinaga, Slang Commentary

一般的に流布しているであろう、狂信的な愛国主義者としての本居宣長像は、彼の古典文献の注釈の著作を紐解くことで一変する。そこでは、実証的な古典注釈者としての本居宣長像が見てとれる。ここに、狂信的主観的側面と実証的客観的側面が宣長の中に並び立っている事態をどのように捉えるべきかについての問題、すなわち「宣長問題」がある。本発表の根本的な動機もこの「宣長問題」に答えることにある。その基礎作業として、今回の発表では宣長の実証的側面としての古典注釈に着目し、特に彼の「俗言」という注釈方法が持つ機能を検討した。古典注釈は契沖の登場によって、その師資伝承的性格を一新した。古典語の解釈を古典語自体に立ち戻って行うという、自立的で実証的な研究方法を、契沖『源註拾遺』における源氏物語帚木の巻中「をさをさ」への注釈を例にして確認した。その上で、同じ「をさをさ」に対して宣長が『源氏物語玉の小櫛』で俗言という方法を用いて注釈を施していることに言及した。俗言とは、宣長の同時代における現代語を指す。宣長自身は、俗言を古今和歌集の俗語訳『古今集遠鏡』で初学者に対する便宜のためと記している。しかし本発表では俗言には宣長が明言した以上の役割があることを示すため、『源氏物語玉の小櫛』や『新古今集美濃の家づと』における俗言による注釈と、古今集中に現れる同一のことばの『古今集遠鏡』における俗語訳が完全に一致していることを、「あさまし」や「いでや」等を例に指摘した。すなわち、宣長には契沖に倣って古典語自体に立ち戻り、帰納法的に古典語の意味を確定していく作業を行いながら、その上で確定された意味を俗言によって現代語訳として固定化していくという特徴がある、と行うことができるのではないか。この意味の固定化は一種の飛躍である。この俗言による注釈という飛躍の中に、「宣長問題」への解答の糸口があるのではないかと考えている。

発表概要 3

『国性爺合戦』『国性爺後日合戦』に見る老一官像
 Speculation about the character of Rōikkan in
 "Kokusenya Kassen" and "Kokusenya Gonichi Kassen"

徐廷璋

国立台湾政治大学大学院博士前期課程

【キーワード】 国性爺合戦 老一官 鄭芝龍 現実的な考え 主君への忠節

Rōikkan, Tei Shiryū, realistic thoughts, the loyalty to the emperor

『国性爺合戦』は正徳五年(1715)近松門左衛門の浄瑠璃の第一の当たり作と言われ、日中混血児の国性爺和藤内が明朝を復興する、異国情緒に満ちる一作である。そして『国性爺後日合戦』はこの大当たりを受けて、二年後上演された後日談である。

従来この二作に関する先行研究の中で、父親の老一官の人物造形を分析対象として扱われることが少ない上、彼に対する評価は主に『国性爺合戦』での表現のみを分析対象にしている。本稿では『後日合戦』をも分析対象に入れて、さらに老一官の原型となる歴史人物の鄭芝龍と比較し、老一官の造形について検討を加える。

まず、『国性爺合戦』三段目は老一官と錦祥女の再会から始まるが、老一官は娘を探しに行くのは、甘輝を味方につけるためである。頼み事があるゆえに長年離れ離れの娘を探しに行くという点からして、老一官の造形には現実的な一面があると言えよう。また、五段目で老一官は一人で敵陣に攻め込み、挙句に人質になったが、彼の遺書から主君に恩を報ずる忠臣の姿がうかがえる。すなわち、老一官の行動基準には、現実的な考え方に加えて、主君に対する忠も含まれている。

『後日合戦』において、老一官は資金を集めるために国法を犯したが、彼は一人で国法を犯すことで軍の財政難を解決できれば、自分を犠牲してもかまわないとの考えを示している。いわば自陣にとって最も有利な手段を用いて、使えるものならその価値を発揮すべきという、極めて現実的な考え方である。

また、老一官の原型となる鄭芝龍は、史実では密貿易商として日本と中国の間を往来し、海賊としての奪略行為も行なった。貿易商、海賊の経歴を経ているため、利益に鋭敏な感覚を持ち、常に自分の利益を優先する考え方をとるといえよう。

近松は鄭芝龍の利益重視の商人特質を老一官の造形に取り入れ、さらに臣下の持つべき忠節という要素を付け加え、二作の三段目の悲劇を構成すると同時に、理想化された歴史を構築していると考えられる。

文学作品解説における権威への挑戦

—— 夏目漱石と意識共同体

張芸

東京外国語大学大学院博士前期課程

【キーワード】 語り手、二重構造、集合的 F、解釈共同体、
共同体意識
Narrator, Dual Structure, Collective F, Interpretive
Community, Community Consciousness

『道草』は、『吾輩は猫である』執筆前後の漱石の実生活が題材とされ、明治36年から明治38年（或いは明治39年）までの出来事および明治42年3月から11月までに、塩原昌之助に金銭を無心された経験が書き込まれている。『道草』と『吾輩は猫である』はほぼ同時期の出来事を描いているが、作品に流れる低音と、基礎的な気分、思想は全く異なる。この小説の語り手の存在は非常に複雑であり、「語り手」による語りと、「映し手」による語りがほぼ同じ比重で交替して現れる。健三をはっきりと批判する「語り手」と、是非を論じないでその判断を読者に委ねる「映し手」が同時に存在する。漱石は『文学論ノート』において、集合的 F、すなわち集合的観念を詳細に説明している。集合的 F は文学の領域における共同体意識の一種であり、スタンリー・フィッシュの「解釈共同体」と同様の方向性を持つ。「文学上の作品は一種の現象としてみらるゝのだから自ら作るときは態度に於いて主観の差が無論ある」と述べた漱石には、作品を誰のために書くか、また、書くことで何ができるかという問題意識があっただろう。自分の作品における解釈の統一性を乱そうとする試みとして、漱石は、意識的に「語り手」による語りと「映し手」による語りという二重構造を『道草』に仕込んだのではないかと考える。

発表概要 5

北村透谷の研究——琴と自然をめぐって

陳璐

東京外国語大学大学院博士前期課程

【キーワード】 琴、琵琶、自然、生命、東洋思想

Koto, biwa, nature, life, oriental thoughts

従来透谷に関する研究では、西洋的文脈から透谷像を捉えたものが多い。テキスト論的に西洋文学との異同を洗いあげることのうちに主眼がおかれていた多くの先行研究は、それらの文学作品との影響関係から透谷を捉えようとする中で、透谷文学を<模倣文学>として性格づけ、そのために透谷の思想の真意を見過ごしてきたように思う。

本発表では、透谷の最初の長詩『蓬莱曲』に着目し、その中に出てくる「琵琶」のイメージと、「弹琴」「弹琴と嬰兒」の二つの短詩とを関連づけ、また「万物の声と詩人」に出てくる「宇宙の中心に無絃の大琴あり」という透谷の神髓を示している重要な言葉への考察から、論を立てる。

『蓬莱曲』成立の時点において、「琴」の旧案を捨て、「琵琶」をモチーフにした透谷の姿を念頭に置き、「琴」と「琵琶」の相違を透谷はどう捉えたかを探求し、琵琶を『蓬莱曲』のモチーフにした理由を捉える。また透谷の神髓を示す「無絃の大琴」という言葉への考察から、琴という楽器に透谷は何を託したかを考える。

情念を込めて鳴らす楽器としての琵琶とは違って、琴にはより公的で倫理的な禁欲精神のニュアンスが含まれる。また、琴には自然の優れた・人為によって消すことのできない部分で作られた楽器という伝統的イメージがある。琴は、「古事記」によると、自然の多様性に由来する「常変・常動・常為」の要素を燃やす行為によって、永遠に残存する「不変・不動・無為」の要素から作られた楽器である。透谷はそのような「琴」を「無絃の大琴」に進化させつつ、生命の問題・詩人の役割・不変の法の問題を「琴」をめぐる文章で追求した。

「無絃の大琴」によって「均し」くなった「万物の心」は、また「無絃の大琴」の沈黙の響きに触れることでもう一度再建され、「百種千態」という多様な生命に変貌していくと透谷は語っている。そのような「生命」を再造する行為が琴を通じてどう語られたかを探求する。それらの探求によって透谷の思想の一面を窺いたい。

1970年代の日韓文学の諸相
 ——大江健三郎と李清俊（イ・チョンジュン）

Kenzaburo Oe and Lee Chung Jun:
 Aspects of Japanese and Korean literature in the 1970s

南徽貞

東京外国語大学大学院博士後期課程

【キーワード】 大江健三郎、李清俊、1970年代、道化

Kenzaburo Oe, Lee Chung Jun, 1970s, Harlequin

本発表では、同時代の作家・大江健三郎と李清俊の1970年代作品群をめぐる政治的背景や社会の有様を踏まえながら、両者の文学的営為について検討した。小説家としての出発は李が大江より7年遅れているが、両者は、大学在学中に学生作家としてデビューし、作家として成熟期を迎えた70年代に入ってから当時の時代状況を反映する作品を次々と発表した。

韓国の詩人金芝河は1974年大統領緊急措置により死刑判決を受けた。この経験について大江は、長編小説『人生の親戚』（1989の）なかで書いているが、この小説の主なテーマ性は「障害児の自殺」をめぐる「魂の救済」にあり、政治的な背景が大きな比重を占めていないことがわかる。「危険の感覚」というキーワードから小説を書く行為の有効性を捉え、「政治的な殉教者」より「作家とは道化だ」という姿勢を、社会批判的な眼差しと道化的なものとを結びつけることによって示しているといえよう。

李の文学世界においても「道化」への志向がみられるが、この点については作品を読み直す必要があるだろう。ただ、李の小説がトーマス・マンの「道化的なもの」に関する思想から大きな影響を受けていることは確かであろう。両者はそれぞれの国における戦後民主主義の政治が孕んでいる矛盾を小説のなかで鋭く追及してきた作家であるが、それぞれの作品は戦後民主主義の矛盾を主なテーマとして取り上げながらも、ただ個別の事件を鋭く告発した小説ではなく、各国内の政治問題にとどまらず、優れた独自の寓意表現を通して個性（特殊性）と全体性（普遍性）が巧みに表されていると考えられる。

1970年代は、日韓両国において行き先不透明で不安な時代であった。両者は挫折感、無力感を感じながらも、文学の表現者として時代を映す数多くの作品を残し、「異常な事件だらけのこの二十世紀後半」を超え、21世紀の現代社会にも多くの示唆を与えている。

■「歴史・社会」セッション

- 1 白井直也(東京外国語大学大学院博士後期課程)
「海外における日本アニメ受容の通時的分析の基礎研究——大藤信郎作品が近年のアニメ人気に与えた影響に関する一考察」
- 2 簡孝阡 [Jian Xiaoqian] (台湾国立政治大学大学院修士課程)
「日本アニメにみる理想の家族像——『サザエさん』を例に」
- 3 許文英 [Xu Wenying] (東京外国語大学大学院博士前期課程)
「徳島藩蜂須賀重喜の隠居政治——公家との姻戚関係を通して」
- 4 飯倉江里衣(東京外国語大学大学院博士後期課程)
「日本の植民地支配下における朝鮮人の軍事的敵対関係——「満洲」抗日パルチザン／満洲国軍の朝鮮人を中心に」

コメント 前田達朗

「歴史・社会」セッションの報告のうちの2つは、いまの「日本」への興味、ひいては日本研究の趨勢を投影して、サブカルチャー・ポップカルチャーからの報告でした。白井報告は日本アニメ映画の草分け・大藤信郎についての貴重な報告。そこからの知見を、日本語教育にも役立てていこうというのが、報告者の狙いです。簡報告はマンガ「サザエさん」を対象とした研究。「サザエさん」が戦後日本を分析するための好個の対象であることが改めて示されました。

許報告はお家騒動の事例を通じ、公家-武家の政治文化を解明しようとした発表でした。活発な質疑があり、それを通して問題の所在が明確になっていきました。それはワークショップならでは、とても知的な共同作業だったように思います。

飯倉さんの植民地研究の報告は、きわめて丁寧な文献調査と現地のフィールドワークで構成されたもので、すぐれたものでした(なお、飯倉さんの報告は時間の関係で「文学セッション」の場で行われました)。

院生の皆さんの研究には、発展途上だからこそその情熱が感じられました。制限された時間の中での報告という挑戦で、どれだけの議論を巻き起こせるのかは、研究に対する真摯さと情熱にかかっています。皆さんの今後の発展を期待しています。

海外における日本アニメ受容の通時的分析の基礎研究 —大藤信郎作品が近年のアニメ人気に与えた影響に関する一考察—

A Basic Study of Diachronic Analysis on Anime Reception in Foreign Countries
: Focusing on Impact of Films of Noburo Ofuji on Global Popularity of Anime

臼井直也

東京外国語大学大学院博士後期課程

【キーワード】 アニメ・アニメ受容・通時的分析・大藤信郎

anime, anime reception, diachronic analysis, Noburo Ofuji

アニメの海外における人気は2000年代から日本国内でも数多く報じられており、アニメ文化外交など官民を問わずアニメ活用の動きが高まっている。海外におけるアニメ受容は1910年代から始まり、50年代以降積極化しているが、先行研究では70年代以降の東映動画のテレビアニメが大量受容された時期に本格化したと述べているものが多く、70年代以前の受容を含め通時的視点からまとめたものは見当たらない。そこで、本研究では、1910年代からのアニメ受容を通時的に分析し、さらにその中で1950年代に焦点を当て、日本で初めて国際的評価を得た作家、大藤信郎を対象に、大藤作品が近年の海外におけるアニメ人気に与えた影響についての分析を試みた。

本研究では、1910年代以降の受容を4つの時期、アニメ受容の最初期で個人作品が一部の国で受容された〔①1910～20年代〕、大藤信郎作品を中心に受容が積極化した〔②1950年代〕、東映動画の劇場作品が受容された〔③1960年代〕、そして東映動画のテレビアニメが中心となり多くのアニメ制作会社の作品が海外で受容された〔④1970年代以降〕に分けそれぞれの時期の特徴や受容作品、受容地域などを概観した。次に、受容が積極化した②の時期に焦点を当て、大藤信郎作品の受容について一次資料を基に分析した。その結果、大藤作品はカンヌ、ヴェネツィア映画祭など6か国8つの映画祭へ出品され、アメリカからは作品の配給希望、フランスからはテレビ放映希望がそれぞれ届いていること、また、1956年には国際会議において日本のアニメ産業事情や制作会社の情報を報告しており、後に本格的に受容される東映動画についても紹介していることが確認された。

以上の分析から、大藤作品が、海外においてアニメが知られていない1950年代にその存在をいち早く周知させ、その後の本格的なアニメ受容の嚆矢としての役割を果たした可能性が示唆された。今後は海外の現地一次資料をもとに受容の裏付けを行っていきたい。

発表概要 2

日本アニメにみる理想の家族像—『サザエさん』を例に—
Observing the Japan ideal family from animation “Sazae-san”

簡 孝阡

台湾国立政治大学大学院修士課程

【キーワード】 サザエさん、家族、理想

Sazae-san, family, ideal

1969年からテレビ放映されたアニメ『サザエさん』は、三世代の家族が一つ屋根の下で暮らす様子を描いている。サラリーマンである夫たちが家計を支え、主婦である妻たちが家事を担う。子供たちは明るく元気で、悪戯もするが程度を弁え、概して聞き分けがいい。第一世代の父の権威のもと、家族は仲良くまとまり、食卓を囲む様子からは、穏やかな雰囲気漂う。

このような『サザエさん』の家族像は、一見すると古き良き理想の姿として長年描かれ続けてきたように見えるが、実は、少しずつ変化をし、今の人々が求めるイメージに過ぎない。かつての『サザエさん』が描く、現在のそれとは異なる家族像を知れば、このことは明瞭である。

例を挙げると、1980年代までは喫煙をしていた波平とマスオが時代と共に喫煙をしなくなり、ついには食卓の上に置かれていた灰皿までもが無くなった。当時の社会を調べてみると、1970年代に「非喫煙者を守る会」が設立され、公共の場の禁煙推進が行われた。1988年に世界禁煙デーが始まり、これを機にか1990年代から喫煙シーン及び灰皿が消えた。

また、当初『サザエさん』では靴下を履いている者はいなかったが、時代と共に季節関係なく靴下を履くようになった。しかし、2013年夏の『サザエさん』を見てみると、靴下を履いていなかった。そして、外出時の靴が、長年履いていた靴からサンダルへと変わっていた。

これらのことから、『サザエさん』は「古き良き理想の姿」という印象を与えながらも、視聴者のクレームに対応しつつ、実は時代と共に少しずつその時代の人々が「当たり前」だと思っている姿へと変化していることが窺える。

そのため、今も尚高視聴率を維持する『サザエさん』の家族像は国民が求めている姿と言えるかもしれないであろう。

蜂須賀重喜の隠居政治
—公家との姻戚関係を通して—

The retirement politics of Hatisuka Sigeyosi
— Through the marriage with Court noble —

許文英

東京外国語大学大学院博士前期課程

【キーワード】 蜂須賀重喜、隠居、尋問事件、公家、縁組
Hatisuka Sigeyosi, retirement, The examination event,
Court noble, marriage

徳島藩蜂須賀家十代藩主・蜂須賀重喜が、明和六年（一七六九）十月三十日に、幕府に「政事不宜」という理由で隠居を命じられた。それには止まらず、寛政元年（一七八九）に、幕府が再び蜂須賀重喜の「近状」を尋問した。なぜ、隠居に追い込まれ、表の政治舞台に身を退かせた蜂須賀重喜が、十九年後にもう一度幕府の目に止まったのか。この事件に関しての研究が管見の限りではまだ行われていない。そこで、修士論文は寛政元年の尋問事件について検証を行いたい。今回の発表もその一環として、蜂須賀重喜が隠居している間に行われた公家との縁組を検討することによって、寛政元年の事件を考察するものである。要するに、子ども達を公家と頻繁に縁組を結はせることから、蜂須賀重喜が京都に強い執念を持っていたことがわかる。これは、今回の尋問事件と深く関わっていると思われる。

発表概要 4

日本の植民地支配下における朝鮮人の軍事的敵対関係
—「満洲」抗日パルチザン／満洲国軍の朝鮮人を中心に—Military Adversarial Relationship of Korean
under the Colonial Rule of Japan

—Korean of Anti-Japanese Partisan in “Manchuria” / Manchukuo Army—

飯倉江里衣

東京外国語大学大学院博士後期課程

【キーワード】 抗日パルチザン、東北抗日連軍、満洲国軍、
間島特設隊Anti-Japanese Partisan, Northeast Anti-Japanese United
Army, Manchukuo Army, Jiandao Detachment Unit

本報告では、日本の植民地支配下で朝鮮人の軍事経験がどのように培われたかを考察するために、1939~1941年の「満洲」（以下、満洲）における抗日パルチザンと満洲国軍、中でも東北抗日連軍と間島特設隊の朝鮮人の経験について見た。植民地期の朝鮮人が1930年代以降の満洲でなぜ軍事的敵対関係にあったのかを、①なぜ朝鮮人は東北抗日連軍に参入し抗日パルチザン闘争を行ったのか、②なぜ朝鮮人は満洲国軍・間島特設隊に入隊しパルチザン「討伐」を行ったのか、③両軍事組織の敵対関係は日本軍のどのような軍事戦略によってつくられたのか、という三つの問いに答える形で論じた。

1930年代以降の植民地下での朝鮮人による軍事経験は、満洲における中国共産党の抗日軍隊とそれに対抗する関東軍及び満洲国軍の中で培われた。朝鮮人が東北抗日連軍に入ったのは、中国共産党の組織の中で抗日闘争を行わざるを得ない境遇に置かれていたからであり、朝鮮人が間島特設隊に入隊したのは、社会的上昇手段が限られていた植民地下の朝鮮人に、ある種の幻想を抱かせた側面があったからであった。また、彼らは朝鮮人が朝鮮人を「討伐」し、東北抗日連軍の朝鮮人と朝鮮人民衆との関係を断ち切る「匪民分離」政策という、日本の軍事戦略の下で軍事的敵対関係に置かれた。

間島特設隊の朝鮮人指揮官が朝鮮人パルチザンの「討伐」を行った経験は、「匪民分離」政策の成功体験として、また朝鮮人民衆を味方につける政治闘争の勝利の体験として、植民地解放後の韓国軍の中で生かされた。このような満洲国軍出身者が植民地解放後に及ぼした影響を明らかにするためには、日本の植民地支配期の満洲で軍事経験を経た朝鮮人のパルチザン「討伐」経験に注目する必要がある。

東京外国語大学国際日本研究センター『日本語・日本学研究』第4号執筆者一覧

孫斐	北京大学大学院博士後期課程
ツォイ・エカテリーナ	東京外国語大学大学院博士後期課程
Hanan Rafik Mohamed	カイロ大学
葛茜	福州大学
篠原将成	国際基督教大学大学院博士後期課程
鈴木智美	東京外国語大学
花園悟	東京外国語大学
臼井直也	東京外国語大学大学院博士後期課程
谷口龍子	東京外国語大学
望月圭子	東京外国語大学
尹鎬淑	サイバー韓国外国語大学校
田中和美	国際基督教大学
ASADCHIH Oksana	タラス・シェフチェンコ記念キエフ国立大学
辻澤隆彦	東京農工大学

『日本語・日本学研究』国際編集顧問一覧（順不同）

趙華敏	北京大学
徐一平	北京外国語大学
蕭幸君	東海大学（台湾）
尹鎬淑	サイバー韓国外国語大学校
任榮哲	中央大学校（韓国）
于乃明	国立政治大学
金鐘德	韓国外国語大学校
陳明姿	国立台湾大学

編集後記 東京外国語大学国際日本研究センター『日本語・日本学研究』第4号をお届けします。／今号への公募論文の応募総数は14本（言語6、日本語教育3、文学3、歴史研究1、文化1）。うち8本が採用となりました。／また今号では、2013年7月31日から8月2日にかけて開催された夏季セミナー2013「言語・文学・歴史——国際日本学の試み」でおこなわれた院生発表会の要旨を掲載いたしました。国内外の院生の活気ある報告に私たちも大きな刺激を受けました。セミナー開催にあたってご協力いただいたみなさまに心から感謝申し上げます。（友常勉）

東京外国語大学国際日本研究センター
日本語・日本学研究 vol.4
Journal for Japanese Studies

発行：2014年3月31日

編集者・発行者 東京外国語大学国際日本研究センター

代表者 野本京子
〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1 アゴラ・グローバル 2F
Tel/Fax: 042-330-5794

印刷・製本 (有)山猫印刷所
〒116-0014 東京都荒川区東日暮里 5-39-1
Tel: 03-5810-6945

Peer-Reviewed Articles

Characteristic of *-tekureru* Sentence in the Beauty Magazine pages : By Comparing with *rang ni* of Chinese
Fei SUNG

A Study of Politeness in Japanese Tea Ceremony Conversation:

An Analysis of Formal and Informal Linguistic Behavior from the Point of View of Discourse Politeness Theory.
Ekaterina TSOY

Listening Problems of Egyptian Japanese Learners: With Special Emphasis on the Issue of the Moraic Nasal before a Vowel

Hanan Rafik MOHAMED

The View of Language Education from Teachers for Japanese Major in Chinese Universities: A Survey Based on the Interview and Investigation of Teachers from Four Universities

Qian GE

The Politics of *Jiri-itchi*

Masanari SHINOHARA

[Research note] "Verb1+Verb2" Types of Compound Nouns Lacking Corresponding Verbs in Modern Japanese: The Wordlisting of Based on Dictionaries

Tomomi SUZUKI

[Research note] An Essay on Developing Okinawan Textbook Adapting the Methodology of Japanese Pedagogy

Satoru HANAZONO

[Research note] A Study on the Role of Noburo Ofuji in the Early Transmissions of Japanese Animation to Foreign Countries: An Analysis Based on the Letters from Overseas in the 1950s and 1960s

Naoya USUI

Articles

Japanese Language Education in Institutes of Higher Education in Japan and Overseas, Mid-term Database Report 2:

Japanese Studies in Overseas Graduate School Education

Ryuko TANIGUCHI, Keiko MOCHIZUKI

The Current States and Prospects of Japan-related Graduate Schools in Korea

Ho Sook YOUN

Japanese Language and Japanese Studies in Postgraduate Education in the UK:

The case of SOAS, University of London

Kazumi TANAKA

Suggestions for the Improvement the Course Design of Japanese Language and Japanese Teacher Language Education in Higher Educational Establishments in Ukraine:

In case of Taras Shevchenko National University of Kyiv

Oksana ASADCHIH

Setting a Platform for Transmitting Information in e-Japanology

Takahiko TUJISAWA

Abstracts of the Graduate Students' Session in Summer Seminar 2013

Contributors

International Editorial Committee Members

Postscript